佐賀県文化財調査報告書第144集

西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（1）

堂の前・井ゲタ遺跡

2000年3月

佐賀県教育委員会

遺跡周辺地形

唐津平野の宇木川・半田川流域には著名な遺跡が多く分布する。堂の前・井ゲタ遺跡は鏡山の南麓裾部に立地する。

遺跡近景

遺跡は標高約８ｍ～13ｍの
方向に下がる緩斜面に立地す
弥生中期の集落と墳墓、低地
縄文の包含層を検出した。

掘立柱建物群

掘立柱建物が多数群集する。その中でもSB18･19は大型で柱根が遺存していた。また円形の掘立柱建物も確認できた。

甕棺群

18基の甕棺を調査した。大きく５群からなりどの群も少数の甕棺墓群である。SJ07には玉類が副葬されていた。

縄文土器

縄文前期から後期の土器が出土しているが主体は阿高式系土器である。

玉類

井ゲタ遺跡 SJ07 には勾玉 1 、管玉 42 が副葬されていた。すべて小形品であり、多数の玉類副葬は唐津平野の特徴でもある。

磨製石器

弥生前期末から中期の磨製石器が多量に出土した。特に堂の前遺跡では磨製武器の比率が高い。

西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（1）

堂の前・井ゲタ遺跡

2000年3月

佐賀県教育委員会

序

この報告書は佐賀県教育委員会が唐津市教育委員会の協力をえて建設省九州地方建設局佐賀国道工事事務所の委託により平成７・８年度に実施した西九州自動車道唐津道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告であります。

今回の報告は唐津市所在の堂の前遺跡・井ゲタ遺跡に関するものです。唐津は玄界灘を隔てて半島に接するため、古来よりいち早く大陸や半島の文化を受け入れた地域であり重要な遺跡が分布しております。堂の前・井ゲタ遺跡では弥生時代中期の掘立柱建物を中心とする集落や玉類を副葬した甕棺墓が出土しました。

本書が今後の学術文化向上に少しでも役立てば幸いに存じます。発刊にあたり多難な調査作業に従事していただいた地元の皆様並びに埋蔵文化財の保護に御理解頂きました佐賀国道工事事務所に対し、心より厚くお礼申しあげます。

平成１２年３月３１日

佐賀県教育委員会

教育長　川久保 善 明

例　　言

1．本書は西九州自動車道唐津道路建設に伴い平成７・８年度に実施した唐津市半田所在の堂の前遺跡・井ゲタ遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は建設省九州地方建設局佐賀国道工事事務所の委託を受け、佐賀県教育委員会が主体となり唐津市教育委員会の協力を得て実施した。

3．佐賀国道工事事務所の野上幸義、深町政勝、乾晃義、中村芳也、宮本順、生田茂、山口隆、福崎昌博、宮末哲哉、堀康孝の各氏には発掘調査並びに報告書作成にあたって御協力いただいた。

4．本書の作成にあたって調査担当者である森田孝志氏（現県立名護屋博物館）・家田淳一氏（現県立九州陶磁文化館）から貴重な調査所見を伺った。また、発掘調査に際して立命館大学高橋学教授から指導助言を得た。

5．本書の執筆分担は目次に記す。

6．報告書作成にあたっての整理作業分担は次ぎのとおりである。

遺物復元整理・・・・・・土井マサコ・新井久美

遺物実測・製図・・・・・蒲原淑子・末吉由紀子・若杉あずさ・小松譲・美浦雄二・辻村美代子

遺物写真撮影・・・・・・小松譲・美浦雄二・辻村美代子

写真現像焼付・・・・・・木塚優子・奥智恵子

7．遺構実測は（有）埋蔵文化財サポートシステムに、空中写真撮影は（有）空中写真企画に委託した。

8．発掘調査に従事した作業員は下記のとおりである。（順不同）

石倉美智子、鶴田九一、山下登記子、菊池馨、菊池楽、藤竹千枝子、真名子カチ子、渡辺津留子、青木淳一、市丸和子、市丸久美子、杉山澄江、八田君子、脇山ツタ子、片峰節子、片峰秋子、山下眞知子、藤田ハルコ、市丸節子、米倉アヤ子、脇山輝代、藤田五美、太田一枝、中村静江、中村敦子、山崎ミヨ子

9．本書を作成するうえで立石泰久、井上倫生、前田美帆、渡辺直美、小畑恵美子をはじめとして中原文化財調査事務所の調査員・整理作業員の協力を得た。

10．本書の編集は草場誠司と協議のうえ小松譲が担当した。

凡　　例

1．遺跡の略号は次ぎのとおりである。

堂の前遺跡　DOM　　井ゲタ遺跡　IGE

2．遺構の分類記号は次ぎのとおり標記する。

ＳＢ：掘立柱建物跡，ＳＨ：竪穴住居跡，ＳＫ：土坑，ＳＤ：溝状遺構・溝跡，ＳＪ：甕棺墓，ＳＰ：土壙墓・木棺墓，ＳＸ：不明遺構

3．各遺構番号は（分類記号－番号）で遺構番号は連番とし、発掘調査時の遺構番号をそのまま用いた。ただし、掘立柱建物跡の柱穴番号は変更し新たに付け直した。

4．遺構図に用いた方位は全て座標北である。

5．遺物実測図番号は各遺跡ごとに土器や石器の種別に関係なく一連番号とし、また図版の遺物番号と共通する。

6．遺物および実測図の検索・照合のため、実測遺物すべてに遺物実測番号を付け表に付記した。

目　　次

Ⅰ. 調 査 の 経 過 …… 1
1. 調査に至る経過（小松） …… 1
2. 調 査 組 織（小松） …… 3
3. 調 査 の 経 過（草場） …… 6
4. 調 査 日 誌（草場） …… 7

Ⅱ. 位 置 と 環 境（小松） …… 8
1. 地 理 的 環 境 …… 8
2. 歴 史 的 環 境 …… 9

Ⅲ. 遺 跡 各 説 …… 12
1. 遺 跡 の 概 要（小松） …… 12

堂 の 前 遺 跡 …… 17
1. 概　　要（小松） …… 17
2. 層位と文化層（草場） …… 17
3. 遺　　構 …… 21
(1) 甕　棺　墓（草場） …… 21
(2) 土　坑　墓（小松） …… 25
(3) 掘立柱建物跡・竪穴住居跡（小松） …… 26
(4) 土　　坑（小松） …… 26
(5) 溝 状 遺 構（小松） …… 30
4. 遺　　物 …… 30
(1) 土　　器（小松） …… 30
① 甕　　棺 …… 30
② 弥 生 土 器 …… 34
③ 土　師　器 …… 41
④ 須　恵　器 …… 43
⑤ 中世・近世の土器類 …… 45
(2) 石　　器（辻村） …… 46

井 ゲ タ 遺 跡 …… 54
1. 概　　要（小松） …… 54
2. 層位と文化層（草場） …… 54
3. 遺　　構 …… 58
(1) 掘立柱建物跡（小松） …… 58
(2) 土　　坑（土壙墓）（小松） …… 70
(3) 溝 状 遺 構（小松） …… 73
(4) 甕　棺　墓（草場） …… 73

4．遺　　物 …… 76
(1) 弥 生 土 器 （小松） …… 76
① 掘立柱建物跡柱穴内出土土器 …… 76
② 土坑出土土器 …… 78
③ 溝跡出土土器 …… 83
④ 包含層出土土器 …… 83
⑤ 甕　　棺 …… 89
(2) 石　　器 （辻村） …… 92
(3) 玉　　類 （小松） …… 106
(4) 木 製 品 （小松） …… 107
(5) 土 師 器 （小松） …… 114
(6) 縄 文 土 器 （美浦） …… 115

Ⅳ．考　　察 …… 128
1．弥生時代の掘立柱建物を主とする集落について （小松） …… 128
2．井ゲタ遺跡から出土した木柱・建築部材の樹種同定 （パリノ・サーヴエイ株式会社） …… 144

挿　図　目　次

Fig. 1　路線図（確認調査・本調査位置図）（1/30000）…… 2
Fig. 2　周辺遺跡分布図（1/70000）…… 10
Fig. 3　遺跡位置図（1/3000）…… 13
Fig. 4　グリッド配置図（1/800）…… 14
Fig. 5　遺構配置図（1/400）…… 15

堂の前遺跡

Fig. 6　土層図（1/80）…… 18
Fig. 7　遺構配置図（1/200）…… 19
Fig. 8　ＳＪ24・25・26・27甕棺墓（1/20）…… 22
Fig. 9　ＳＪ28・29・30・40甕棺墓（1/20）…… 23
Fig. 10　ＳＪ41・42・43・04甕棺墓（1/20）…… 24
Fig. 11　ＳＰ18土壙墓（1/40）…… 25
Fig. 12　ＳＢ45・46掘立柱建物跡，ＳＨ47竪穴住居跡（1/80）…… 27
Fig. 13　ＳＢ45・46掘立柱建物出土土器（1/4）…… 27
Fig. 14　ＳＫ02・05Ａ・05Ｂ・06・09・10・11・19・23・37土坑（1/60）…… 29
Fig. 15　ＳＤ15・35溝状遺構（1/40）…… 30
Fig. 16　ＳＪ24・25・26・27甕棺実測図（1/8）…… 31
Fig. 17　ＳＪ28・29・30・40・41甕棺実測図（1/8）…… 32
Fig. 18　ＳＪ42・43・04甕棺実測図（1/8）…… 33
Fig. 19　甕口縁部・底部分類図…… 34
Fig. 20　遺構出土弥生土器（1/4）…… 36
Fig. 21　包含層出土弥生土器（1/4）…… 37
Fig. 22　遺構、包含層出土弥生土器口縁部・底部（1/4）…… 38
Fig. 23　包含層出土土師器，須恵器（1/4）…… 42
Fig. 24　包含層出土須恵器，陶磁器（1/4）…… 43
Fig. 25　磨製石器，1（2/3）…… 49
Fig. 26　磨製石器，2（2/3）…… 50
Fig. 27　磨製石器，3（2/3）…… 51
Fig. 28　打製石器，1（2/3）…… 52
Fig. 29　打製石器，2（2/3）…… 53

井ゲタ遺跡

Fig. 30　土層図（1/80）…… 55
Fig. 31　遺構配置図（1/250）…… 56
Fig. 32　ＳＢ17掘立柱建物跡（1/80）…… 58
Fig. 33　ＳＢ18・19掘立柱建物跡（1/80）…… 64
Fig. 34　ＳＢ30・40・41・42・43・44掘立柱建物跡（1/80）…… 65
Fig. 35　ＳＢ45・46・47・48・49・50掘立柱建物跡（1/80）…… 66
Fig. 36　ＳＢ51・52・53・54・55掘立柱建物跡（1/80）…… 67
Fig. 37　ＳＢ56・57・58・59・60・61掘立柱建物跡（1/80）…… 68
Fig. 38　ＳＢ62・63・64・65・66・67掘立柱建物跡（1/80）…… 69
Fig. 39　ＳＫ01・02・04・05・06・11・14・15・20・21・22土坑（1/60）…… 71
Fig. 40　ＳＫ23・24・25・35土坑，ＳＤ28・29溝状遺構（1/60）…… 72
Fig. 41　ＳＪ07・08・09・10・13・68甕棺墓（1/20）…… 74
Fig. 42　掘立柱建物跡柱穴内出土土器１（1/4）…… 77
Fig. 43　掘立柱建物跡柱穴内出土土器２（1/4）…… 78

Fig. 44　土坑出土土器1（1/4）…… 79
Fig. 45　土坑出土土器2（1/4）…… 80
Fig. 46　土坑・溝状遺構出土土器（1/4）…… 81
Fig. 47　包含層出土土器1（1/4）…… 82
Fig. 48　包含層出土土器2（1/4）…… 83
Fig. 49　ＳＪ07・08・09・10甕棺実測図（1/8）…… 90
Fig. 50　ＳＪ13・68甕棺実測図（1/8）…… 91
Fig. 51　磨製石器．1（2/3）…… 97
Fig. 52　磨製石器．2（2/3）…… 98
Fig. 53　磨製石器．3（2/3）…… 99
Fig. 54　磨製石器．4（2/3）…… 100
Fig. 55　打製石器．1（2/3）…… 101
Fig. 56　打製石器．2（2/3）…… 102
Fig. 57　打製石器．3（2/3）…… 103
Fig. 58　打製石器．4（2/3）…… 104
Fig. 59　打製石器．5（2/3）…… 105
Fig. 60　剥　　片 …… 105
Fig. 61　玉　　類（2/3）…… 106
Fig. 62　唐津湾沿岸地域出土管玉計測図 …… 106
Fig. 63　ＳＪ07出土管玉計測図 …… 106
Fig. 64　包含層出土儀器（1/3）…… 108
Fig. 65　ＳＢ18・19掘立柱建物柱根（1/6）…… 109
Fig. 66　ＳＢ17・19掘立柱建物建築部材（1/6）・（1/4）…… 110
Fig. 67　ＳＢ18掘立柱建物建築部材（1）（1/4）…… 111
Fig. 68　ＳＢ18掘立柱建物建築部材（2）（1/4）…… 112
Fig. 69　土 師 器（1/4）…… 114
Fig. 70　縄文土器出土分布図（1/70）…… 119
Fig. 71　第1群～第4群土器（1/3）…… 120
Fig. 72　第4群土器～第6群土器（1/3）…… 121
Fig. 73　第6群土器1（1/3）…… 122
Fig. 74　第6群土器2（1/3）…… 123
Fig. 75　第7群土器、土器底部、土製品（1/3）…… 124
Fig. 76　時期別掘立柱建物棟数図 …… 130
Fig. 77　時期別掘立柱建物規模比率 …… 130
Fig. 78　川寄吉原・井ゲタ遺跡遺構配置図（1/500）…… 132
Fig. 79　牟田寄遺跡15区遺構配置図（1/500）…… 134
Fig. 80　吉野ヶ里遺跡遺構配置図（1/800）…… 135
Fig. 81　天建寺南島・平林遺跡1区遺構配置図（1/500）…… 136
Fig. 82　掘立柱建物単一集落分布図 …… 137
Fig. 83　集落別掘立柱建物規模比率 …… 139

表　目　次

Tab.　1　調査経過一覧表 …… 1
Tab.　2　堂の前・井ゲタ遺跡遺構数一覧表 …… 12
Tab.　3　堂の前遺跡甕棺一覧表（1）…… 33
Tab.　4　堂の前遺跡甕棺一覧表（2）…… 34
Tab.　5　堂の前遺跡弥生土器一覧表（1）…… 39

Tab. 6 堂の前遺跡弥生土器一覧表（2） …… 40
Tab. 7 堂の前遺跡弥生土器一覧表（3） …… 41
Tab. 8 堂の前遺跡土師器・須恵器一覧表 …… 44
Tab. 9 堂の前遺跡中世・近世土器一覧表 …… 45
Tab. 10 堂の前遺跡石器一覧表 …… 48
Tab. 11 井ゲタ遺跡掘立柱建物跡一覧表 …… 63
Tab. 12 井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（1） …… 84
Tab. 13 井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（2） …… 85
Tab. 14 井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（3） …… 86
Tab. 15 井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（4） …… 87
Tab. 16 井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（5） …… 88
Tab. 17 井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（6） …… 89
Tab. 18 井ゲタ遺跡甕棺一覧表 …… 91
Tab. 19 井ゲタ遺跡石核一覧表 …… 94
Tab. 20 井ゲタ遺跡石器一覧表（1） …… 95
Tab. 21 井ゲタ遺跡石器一覧表（2） …… 96
Tab. 22 井ゲタ遺跡玉類一覧表 …… 107
Tab. 23 井ゲタ遺跡木製品一覧表 …… 113
Tab. 24 井ゲタ遺跡土師器一覧表 …… 114
Tab. 25 井ゲタ遺跡縄文土器一覧表（1） …… 125
Tab. 26 井ゲタ遺跡縄文土器一覧表（2） …… 126
Tab. 27 井ゲタ遺跡縄文土器一覧表（3） …… 127

図 版 目 次

堂の前遺跡

PL. 1 1, 2 遺跡全景空中写真
PL. 2 1, 2, SB45 掘立柱建物、3, SB45, P4, 4, SB45, P5, 5, 6, SB46 掘立柱建物、7, SB46, P7
PL. 3 1, 2, SB47 竪穴住居、3, SD35 溝状遺構、4, SK02 土坑、5, 6, SJ04 甕棺墓、7, SK18 土壙墓
PL. 4 1, 甕棺墓周辺作業風景、2, SJ24～29 甕棺墓
PL. 5 1, SJ26 甕棺墓、2, SJ28 甕棺墓、3, SJ29 甕棺墓、4, SJ30 甕棺墓、5, SJ40・41 甕棺墓、6, SJ40 甕棺墓、7, SJ41 甕棺墓、8, SJ42・43 甕棺墓

井ゲタ遺跡

PL. 6 1, 2 遺跡全景空中写真
PL. 7 1, SB18 掘立柱建物、2, 3, SB18, P6 柱根，横木、4, 5, SB18, P3 柱根，横木、6, 7, SB18, P4 根固石，礎石，横木
PL. 8 1, SB19 掘立柱建物、2, SB19, P3、3, SB19, P2、4, SB19, P1、5, SB19, P6、6, SB19, P5 横木、7, SB47, P3、8, SB47, P4 横木
PL. 9 1, SB17・56 掘立柱建物、2, SB30 掘立柱建物、3, SB53 掘立柱建物、4, SB55 掘立柱建物、5, SB60 掘立柱建物、6, SB61 掘立柱建物、7, SB64 掘立柱建物、8, SB66 掘立柱建物
PL. 10 1, SJ7・8・9・10 甕棺墓、2, SJ8・9 甕棺墓、3, SJ07 甕棺墓、4, SJ07 管玉出土状況、5, SJ13 甕棺墓、6, SJ68 甕棺墓、7, SK02 土坑、8, SK04 土坑
PL. 11 1, SK05 土坑、2, SK06 土坑、3, SK11土坑、4, Ⅲ区全景、5, Ⅲ区近景、6, Ⅲ区遺物出土状況、7, 木製品出土状況、8, 剥片出土状況
PL. 12 堂の前遺跡、甕棺
PL. 13 堂の前遺跡、甕棺、弥生土器
PL. 14 堂の前遺跡、弥生土器、土師器、須恵器、中近世陶磁器類

PL.15　堂の前遺跡、石器
PL.16　井ゲタ遺跡、遺構出土弥生土器
PL.17　井ゲタ遺跡、遺構、包含層出土弥生土器
PL.18　井ゲタ遺跡、甕棺
PL.19　井ゲタ遺跡、石器
PL.20　井ゲタ遺跡、建築部材、土師器
PL.21　井ゲタ遺跡、縄文土器

報告書抄録

ふりがな	どうのまえ・いげた遺跡
副書名	堂の前・井ゲタ遺跡
書名	西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書
巻次	1
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第144集
編著者名	小松譲・草場誠司・美浦雄二・辻村美代子
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840-8570　佐賀市城内1丁目1番59号　TEL(0952)25-7232
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東径	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
どうのまえ 堂の前遺跡	からつし 唐津市 はだあざどうのまえ 半田字堂の前	412023	2097, 3112	33° 24' 53" 0327	130° 01' 40" 4549	平成7年9月17日～平成8年3月29日	1315	西九州自動車道建設事業
いゲタ 井ゲタ遺跡	からつし 唐津市 はだあざいげた 半田字井ゲタ	412023	2098, 3113	33° 24' 52" 6990	130° 01' 39" 2973	平成8年7月2日～平成9年3月28日	1800	西九州自動車道建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂の前遺跡	墳墓 集落	弥生	掘立柱建物 2棟 竪穴住居 1軒 土坑 18基 溝状遺構 5条 甕棺墓 12基 土壙墓 1基	弥生土器、甕棺、磨製石鏃、打製石鏃、石剣、石包丁、石斧、紡錘車	平面円形の掘立柱建物2棟
		古墳	包含層	須恵器、土師器	
井ゲタ遺跡	集落 墳墓	縄文	包含層	縄文土器、スクレイパー、石匙	前期～後期の遺物包含層。阿高式系が主。
		弥生	掘立柱建物 32棟 土坑 24基 溝状遺構 4条 畦畔状遺構 2条 甕棺墓 6基	弥生土器、甕棺勾玉、管玉、石包丁、石剣、偏平片刃石斧、伐採斧、柱根、儀器	掘立柱建物単一の集落1基の甕棺より勾玉1，碧玉製管玉42点出土。
		古墳	包含層	土師器	

Ⅰ．調　査　の　経　過

1．調査に至る経過

西九州自動車道は福岡県前原市から佐賀県唐津市、伊万里市、さらに長崎県松浦市を経由して佐世保市にいたる路線であり建設省九州地方建設局の事業である。本文化財調査はこのうちの唐津道路である浜玉インターチェンジと唐津インターチェンジ区間6.6㎞を対象としている。

佐賀県教育委員会文化財課は佐賀国道工事事務所から道路建設事業の照会を受け、平成６年度から路線予定地の踏査および確認調査を実施した。文化財調査体制にあたっては開発事業が広域かつ大規模であることから調査主体は佐賀県教育委員会文化財課とし、調査地の当該教育委員会からの職員派遣を受けることで協議が進んだ。平成７年度から唐津市教育委員会より職員１名、浜玉町教育委員会からは平成８年度から各年６ケ月、職員１名の派遣を受け、佐賀県文化財課は総括１名、担当１名、嘱託２名の体制で調査に臨んだ。なお、嘱託のうち１名は整理担当である。

平成６年度は唐津市半田地区NO405～NO470の確認調査を実施し、その結果堂の前遺跡を確認した。

平成７年度は唐津市堂の前遺跡の本調査と唐津市半田地区・浜玉町東山田地区NO315～NO405の確認調査を実施した。堂の前遺跡の本調査は唐津市教育委員会からの職員の派遣をうけ、10月から調査を開始した。確認調査では唐津市半田で末広遺跡、浜玉町東山田で赤野遺跡を確認した。

平成８年度は唐津市井ゲタ遺跡、末広遺跡の本調査を実施し終了した。また浜玉町赤野遺跡も調査に着手したが職員派遣に関して浜玉町教育委員会との協議がまとまらず、調査は一時休止することになった。確認調査は唐津市原地区・中原地区NO475～NO530を実施し、その結果梅白遺跡、中原遺跡を確認した。

平成９年度は唐津市梅白遺跡、浜玉町赤野遺跡の本調査と浜玉町東山田地区NO310～NO320、浜玉町大江前地区NO195～NO210、浜玉町横田上地区NO235～NO245の確認調査を実施した。本年度の７月から12月までの６ヶ月間は浜玉町教育委員会から職員の派遣を受け浜玉町赤野遺跡の調査を再開し、終了した。確認調査の結果、浜玉町東山田地区において岩根遺跡を同町大江前地区において大江前遺跡を確認した。また、同町東山田地区の袈裟丸城は踏査の結果、城跡であるが確認できたため本調査を実施するよう協議を行った。

平成10年度は昨年度からの継続調査である梅白遺跡と浜玉町東山田地区の岩根遺跡・袈裟丸城跡の本調査を実施した。確認調査は浜玉町横田上地区NO215～NO250を行い、目貫古墳群を確認した。

平成11年度は継続調査である梅白遺跡と中原遺跡、浜玉町大江前遺跡、目貫古墳群の本調査を行った。

今後は唐津道路区間では唐津市中原遺跡の調査を継続し、唐津、伊万里道路区間の踏査、確認調査を実施していく予定である。

本報告書は平成７年度、８年度に本調査を実施した堂の前遺跡、井ゲタ遺跡の調査報告書であり、平成９年度、10年度、11年度にかけて整理・報告書作成を行ったものである。

Tab.1　調査経過一覧表

年　度	本調査・唐津市	本調査・浜玉町	確　認　調　査
平成６年度			唐津市半田地区
平成７年度	堂の前遺跡		唐津市半田地区・浜玉町東山田地区
平成８年度	井ゲタ遺跡・末広遺跡		唐津市原地区・中原地区
平成９年度	梅白遺跡	赤野遺跡	浜玉町東山田地区・大江前地区・横田上地区
平成10年度	梅白遺跡	岩根遺跡・袈裟丸城跡	浜玉町横田上地区
平成11年度	梅白遺跡・中原遺跡	大江前遺跡	

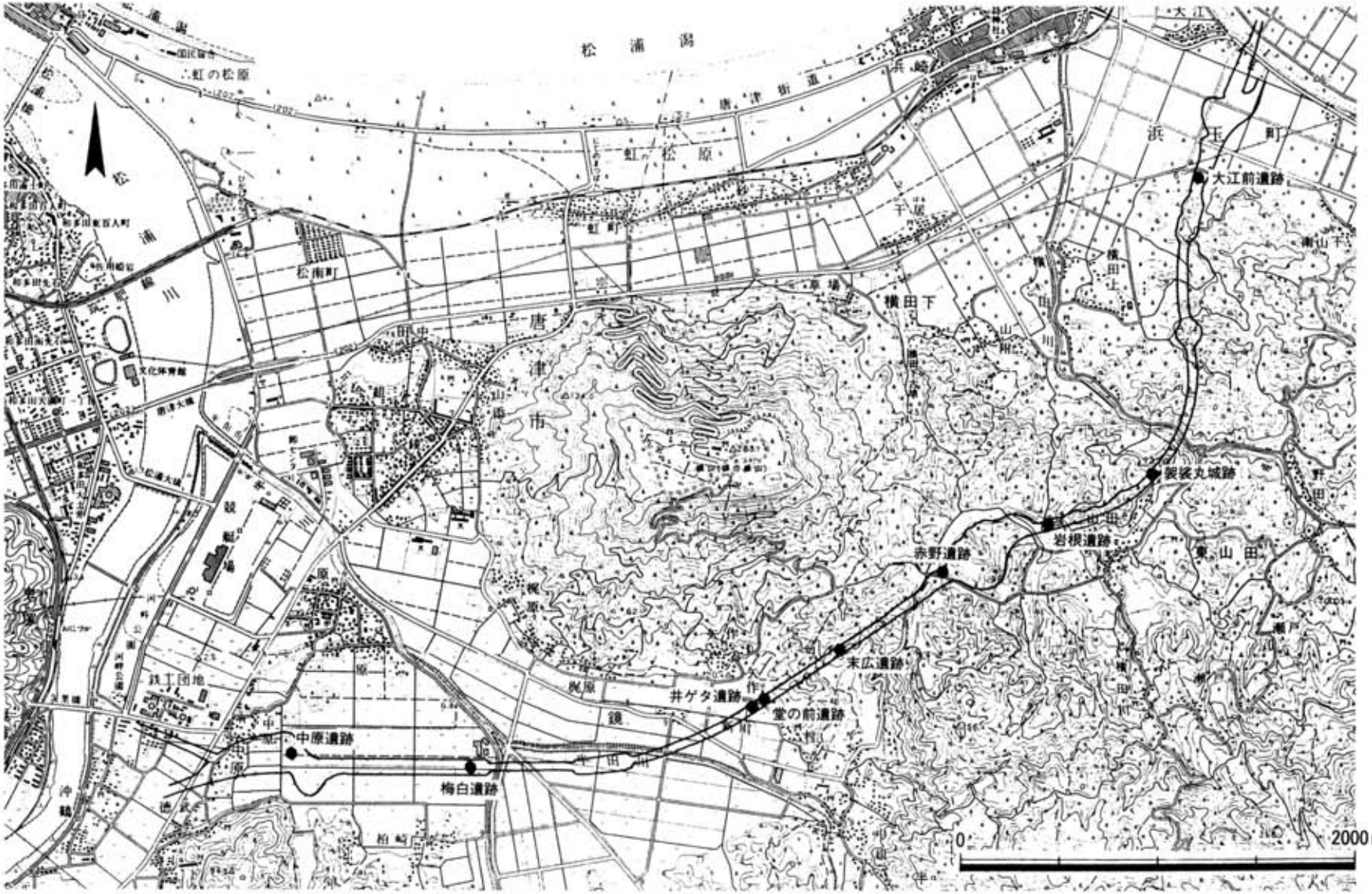


Fig. 1 路 線 図 (1/30000)

2．調査組織

調査主体　佐賀県教育委員会

調査協力　唐津市教育委員会（平成７年度～）・浜玉町教育委員会（平成９年度～）

平成６年度

［総括］

教育長　林田重人

教育次長　土居　正

［調査主体］

総括

文化財課長　高島忠平

参事　木下　巧

課長補佐　瀬戸明廣

〃　田平徳栄

調査担当

調査係長　天本洋一

主査　立石泰久

［事務局］

総括

文化課長　市丸利幸

課長補佐　小川久人

庶務

係長　岩瀬茂生

主査　古屋きよみ

〃　鷲崎義彦

〃　池田　学

平成７年度

［総括］

教育長　林田重人

教育次長　月岡英人

［調査主体］

総括

文化財課長　高島忠平

参事　木下　巧

課長補佐　深町昌司

〃　田平徳栄

調査担当

調査班

企画調整主査　立石泰久

主査　森田孝志

［事務局］

総括

文化課長　内田泰智

課長補佐　福山正廣

庶務

係長　岩瀬茂生

主査　久保信行

〃　鷲崎義彦

主事　富窪道代

［唐津市教育委員会］

教育長　河児哲司

文化財課長　平田高徳（～10月）

文化課長　牧山泰介（10月～）

文化財係長　田島龍太（10月～）

調査員　草場誠司

平成８年度

［総括］

教育長　川久保善明

教育次長　月岡英人

［調査主体］

総括

文化財課長　高島忠平

参事　木下　巧

課長補佐　深町昌司

〃　田平徳栄

調査担当

調査班

企画調整主査　立石泰久

主査　家田淳一

［事務局］

総括

文化課長　内田泰智

課長補佐　福山正廣

庶務

係長　岩瀬茂生

主査　久保信行

主事　吉村俊也

〃　富窪道代

［唐津市教育委員会］

教育長　河児哲司

教育部長　手島三郎

文化課長　牧山泰介

文化財係長　田島龍太

調査員　草場誠司

平成９年度

［総括］

教育長　川久保善明

教育次長　月岡秀人

〃　高島忠平

［調査主体］

総括

文化財課長　佛坂勝男

課長補佐　深町昌司

〃　田平徳栄

調査担当

調査班

企画調整主査　立石泰久

指導主事　小松　譲

嘱託　美浦雄二

〃　百崎正子

（整理担当）

［事務局］

総括

文化課長　内田泰智

課長補佐　横田榮士

庶務

係長　岩瀬茂生

主査　久保信行

主事　吉村俊也

〃　富窪道代

［唐津市教育委員会］

教育長　河児哲司

教育部長　手島三郎

文化課長　牧山泰介

文化財係長　田島龍太

調査員　草場誠司

［浜玉町教育委員会］

教育長　今村英木

社会教育課長　吉原賢一

〃　係長　林田清三

調査員　中尾修二

〃　米倉美和子

（嘱託）

平成10年度

［総括］

教育長　川久保善明
副教育長　高島忠平
〃　須田秀志

［調査主体］

総括
文化財課長　佛坂勝男
副課長　園田義孝
〃　大橋康二

調査担当
調査班
企画調整主査　立石泰久
指導主事　小松　譲
嘱託　坂井清春
〃　百崎正子
（整理担当）

［事務局］

総括
文化課長　西野文夫
副課長　横田榮士

庶務
係長　津野建夫
主査　相川ミエ子
〃　久保信行
主事　吉村俊也

［唐津市教育委員会］

教育長　村井文三
部長　手島三郎
文化課長　牧山泰介
文化財係長　田島龍太
調査員　草場誠司
（整理担当）
〃　美浦雄二

［浜玉町教育委員会］

教育長　今村英木
社会教育課長　吉原賢一
〃　係長　林田清三
調査員　中尾修二
〃　永田　淳

平成11年度

［総括］

教育長　川久保善明
副教育長　須田秀志

［調査主体］

総括
文化財課長　佛坂勝男
副課長　園田義孝
〃　大橋康二

調査担当
調査班
企画調整主査　立石泰久
指導主事　小松　譲
〃　井上倫生
嘱託　辻村美代子
〃　齋藤潤花
（整理担当）

［事務局］

総括
文化課長　西野文夫
副課長　山口康郎

庶務
専門員　津野建夫
主査　相川ミエ子
主事　毎熊　近
〃　陶山　優

［唐津市教育委員会］

教育長　村井文三
教育部長　手島三郎
文化課長　牧山泰介
（～7月）
〃　牛草　泉
（7月～）
文化財係長　田島龍太
調査員　草場誠司
（整理担当）
〃　美浦雄二

［浜玉町教育委員会］

教育長　今村英木
社会教育課長　吉原賢一
〃　係長　川添聖一
調査員　中尾修二
〃　永田　淳

3．調査の経過

堂の前遺跡の調査は平成７年９月に開始し、平成８年３月に終了した。井ゲタ遺跡は平成８年７月に開始し平成９年３月に終了した。以下各遺跡ごとに調査の経過を記す。

堂ノ前遺跡

堂ノ前遺跡の調査では調査区が道路建設予定地であるため、北東－南西方向に細長くなおかつ、前面を道路、背後を丘陵部に挟まれており、両脇も果樹栽培のビニールハウスおよび民家に挟まれているため、排土の置場に苦慮した。このため、調査区を北東－南西方向で２分割し、さらにその北半部の北西部分に調査事務所（プレハブ）を設置したため、都合３回に分けて表土剥ぎを行った。調査は、まず北半部の調査から始め、北半部の調査終了後、甕棺墓が集中する地点を除き埋戻しを行い、次いで南半部の調査を行った。さらに南半部の調査がある程度終了した時点で、調査事務所を調査区南西部に移動し、北西部の調査を行った。調査区北東側２／３の部分は、地山が粘性の強い花崗岩の風化土壌であり、斜面地でもあるため少量の雨でも足場が不安定になり、調査が遅延する原因となった。また、斜面部分の遺構検出面は、凹凸が多くかつ、埋土と地山の区別が判然としないため、遺構の検出にも時間を要した。北半部の調査では、当初上甕を飛ばされた６基の甕棺墓を検出。このため周囲を慎重に検出した結果、全部で９基の甕棺墓を確認した。甕棺墓集中地点は、周囲よりも高く、おそらく後世の造成工事の際に甕棺が出土したため、それ以上の削平を免れたものと思われる。南半部の調査では北東部端で円形に巡る柱穴を持つ掘立柱建物跡を検出した。また、南半部中央では上甕が削平された小児用甕棺２基も検出した。

井ゲタ遺跡

井ゲタ遺跡の調査では、調査区が２区南側と３区西側の北半部で水田と接しており、水田の水漏れを防ぐために、11月上旬まで２区の南側部分と３区の調査を行わなかった。また、１区は南側でビニールハウスと接しており、これによる水の流入が激しく、ビニールハウスへの影響を考慮して、１区南半部の調査は、途中一時中断し建設省による保全工事終了後に再開した。調査は、当初１区北半部より開始した。１区北側は削平が激しく、遺構の残存状況も悪かった。１区北半部の表土剥ぎ終了後、２区北部の表土剥ぎを行った。２区では、遺構検出面上面付近に、ビニール製の暗渠排水のための管が縦横に設置されており、特に南側の水田との関係を考慮して、暗渠排水の管の後処理を行いながら、２区を３分割し、順次北側より表土剥ぎを行った。２区の北部では、上甕を削平された甕棺墓４基を検出した。次いで２区中央部の表土剥ぎを行い、２区南側の稲刈り終了後２区南部の表土剥ぎを行った。２区中央部と南部の境付近で、径20cmを超える柱根を持つ柱穴を検出したため、数回に分けて周囲の検出作業を行い、南北に２棟並ぶいずれも１間×２間の大型の掘立柱建物跡を検出した。これにより、調査区全域で、すでに完掘したピットが掘立建物跡の柱穴である可能性が出てきたため、再度精査、検討を行った。この結果１、２区で合計32基の掘立柱建物跡を確認した。しかし、柱根が残存する柱穴はごくわずかで、加えて、遺構検出面である青灰色土は、北側の丘陵から幾度にも渡って流れ込んだ土砂が堆積した層であるため、遺構検出が非常に困難であり、この作業は時間を要した。この作業と平行して３区の調査も開始した。本調査開始以前の確認調査では、２区と川を挟んで隣接する３区は、植物遺体層であるいわゆるコモ層を確認しており、遺構は広がらないものと考えていたが、２区の遺構検出状況より３区にも遺構が広がる可能性が出てきたため、３区にトレンチを設定し掘下げを行った。この結果、３区でコモ層が堆積する箇所は南半部のみであることを確認し、なおかつ、３区の北側で縄文時代中期の土器が出土したため、３区の北側部分を重点的に、人力にて掘下げを行った。

4．調査日誌

堂ノ前遺跡

平成７年

９月19日　調査区内草刈り

10月２日　機材搬入

３日　重機による調査区北半部の表土剥ぎ開始

５日　調査区北半部遺構検出開始

９日　甕棺墓検出

12日　調査区北半部遺構掘下げ開始

13日　調査区北半部平板実測（遺構配置図作成）

11月20日　空中写真撮影（１回目）

29日　調査区反転のため排土移動開始

30日　重機による調査区南半部の表土剥ぎ開始

12月５日　調査区南半部遺構検出開始

19日　調査区南半部遺構掘下げ開始

21日　調査区南半部平板実測（遺構配置図作成）

平成８年

２月９日　甕棺墓内掘下げ開始

13日　空中写真撮影（２回目）

26日　調査区北西部掘削のため排土移動開始

29日　調査区北西部表土剥ぎ開始

３月５日　調査区北西部遺構検出開始

８日　調査区北西部遺構掘下げ開始

27日　重機による埋戻し開始

29日　現場作業終了

調査指導風景（高橋学教授）

井ゲタ遺跡

平成８年

７月２日　重機による１区表土剥ぎ開始

４日　１区遺構検出開始

５日　１区遺構掘下げ開始

８日　重機による２区北半部表土剥ぎ開始

12日　１区平板実測（遺構配置図作成）

16日　２区北部遺構掘下げ開始

22日　２区北部平板実測（遺構配置図作成）

30日　２区排土移動開始

８月７日　２区南部の状況確認のためトレンチを設定し、トレンチ掘下げ開始

19日　２区北側で甕棺墓４基検出

20日　甕棺墓掘下げ開始

26日　重機による２区中央部表土剥ぎ開始

11月20日　重機による２区南部の表土剥ぎ開始

21日　２区中央部から南部にかけて遺構内より径20？30cmの柱痕を検出

12月６日　３区に状況確認のためトレンチを設定し、トレンチ掘下げ開始

９日　３区人力による掘下げ開始

平成９年

１月16日　立命館大学、高橋先生調査指導

２月27,28日　立命館大学、高橋先生調査指導

３月８日　立命館大学、高橋先生調査指導

11日　福岡大学、武末先生来訪

19日　佐賀大学、五十嵐先生来訪

21日　空中写真撮影

28日　現場作業終了

Ⅱ. 位 置 と 環 境

1．地理的環境

堂の前遺跡は佐賀県唐津市半田字堂の前に、井ゲタ遺跡は唐津市半田字井ゲタに所在する。字名が異なるため周知の包蔵地としての遺跡名は字名に因み、堂の前遺跡、井ゲタ遺跡となるが本来は１つの遺跡として捉えられるのだろう。今回調査を行った堂の前遺跡は半田1916-5，1906-1番地で井ゲタ遺跡は半田1893-1，2482-1，2483-1，2484，2485番地にあたる。

唐津市は現在の市役所で北緯33度27分、東経129度58分にあたり、平成10年度の統計によれば面積127.48㎢で人口79,652人、世帯数は26,507戸である。唐津市は九州の北端で佐賀県の北西部にあたり、東は東松浦郡浜玉町、南は同郡相知町・北波多村、西は同郡鎮西町・玄海町・肥前町に接する。北は唐津湾および玄海灘に接し朝鮮半島へと連なる。このように半島に最も近いという地理的環境のため古代より我が国でいち早く半島や大陸の文化を受容した地域である。

唐津市およびその周辺の地形は大きく①東松浦熔岩台地域②松浦杵島丘陵地域③脊振山地西部域④唐津平野の４つの地形区からなる。①東松浦熔岩台地は東松浦半島の大半を占め、第三系や花崗岩類の基盤のうえに第三紀末紀～第四紀初頭にかけて噴出した松浦玄武岩が覆う熔岩台地である。通称上場台地と呼ばれ標高150～200mである。②松浦杵島丘陵地は南北に流下する佐志川およびその延長線を境に東側の丘陵性山地であり、松浦川左岸まで続く。その地質は第三系や花崗岩類からなり標高200m内外である。③脊振山地西部域は松浦川および唐津平野の東南部にあたる。地質は風化の進んだ花崗岩類からなり唐津平野の基盤の大部分もこの花崗岩類にあたり、不整合面を介して沖積層が堆積する。④唐津平野は東松浦熔岩台地や松浦杵島丘陵地や脊振山地に囲まれ、北は唐津湾および玄界灘に接する低地を総称して呼ぶ。この唐津平野に弥生時代以降の遺跡が立地する。

唐津平野の地形発達は海岸線の変化と密接に関わる。最終氷期最盛時における最低位海面について井関（1975）は日本各地の沖積層基底礫層の深さからそれが堆積した当時の河川の浸食基準面、すなはち海面の高さを求めたところ現海面下140m付近にあったと考えている。また、１万年前頃も低温期であり海面は約50m低位にあったことが判っている。その後、後氷期の温暖化に伴う海進現象は約6000B．Pに高頂期をむかえ縄文海進と呼称されるがこれは現在の唐津湾に対して奥唐津湾と呼ばれる。これは久里小学校建設時の試錐資料により高頂期のころ同小学校あたりは－6m内外の水深をもつ海湾の状態にあったことが伺われる。縄文海進に伴う海域の拡大は半田川・宇木川流域では梶原～柏崎を結ぶ線のあたりまで海の進入があったと思われ、今日の唐津市街地あたりはすべて海域であったものと推測される。海進時の奥唐津湾はその後の海面低下に伴う河川の堆積によって今日の唐津平野の概形がつくられ、その過程で旧砂丘列や新砂丘列が形成され海岸線も現在のものになる。

旧砂丘列には松浦川右岸地域の鏡山西麓の鏡集落から原集落、中原集落を経て徳武集落にいたる標高５～７mの微高地と松浦川左岸地域では唐津市街地南部にのびる標高４～５mの砂丘列や唐津市民グランド、大土井集落にいたる砂丘列がある。この旧砂丘列の形成は後背湿地を生みだし、湿地性植物遺体の形成を促し初期稲作の適地を提供することになる。

新砂丘列として虹の松原砂丘や松浦川左岸地域では鏡神社がのる砂丘があり後者は旧砂丘列に接する。この新砂丘列形成時期の決定的資料は得られていないが４，５世紀頃の海面の再上昇に因果をもとめる考えがある。

参考文献
井関弘太郎　1975　「沖積層基底礫層について」　『地学雑誌』84-5
井関弘太郎　1982　「末盧の地形と地質」　末盧国
川添　一　　1962　「自然環境と集落景観」　唐津市史

2．歴史的環境

唐津地方は前項で述べたとおりの地理的条件のため原始・古代より半島・大陸文化受容の地であった。遺跡の多くは唐津平野に立地するため遺跡の変遷は唐津平野の地形発達とも関連する。ここでは旧石器時代から古墳時代までを中心として記す。

旧石器時代・縄文時代の遺跡の多くは東松浦熔岩台地、通称上場台地上に立地する。旧石器時代の著名な遺跡としてナイフ形石器文化の肥前町磯道遺跡(1)や生石遺跡(2)、細石器文化の唐津市原遺跡(3)などがある。縄文時代では押型文土器・石鏃を出土した牟田辻遺跡や住居跡、組織痕文土器を出土した女山遺跡(4)、晩期の貯蔵穴状土壙を検出した唐ノ川高峰遺跡(5)や梨川内村前遺跡(6)があり、晩期前半から上場台地では遺跡数が増大することが指摘されている。平野部においても菜畑遺跡、西唐津海底遺跡では前期の土器が出土しており、徳蔵谷遺跡(7)では中期の土器が出土している。

晩期後半になると旧砂丘列の背後の低湿地が初期稲作の適地となり菜畑遺跡(8)や宇木汲田遺跡(9)が形成されが、菜畑遺跡では我が国最古の水田跡を検出している。晩期後半以後、唐津平野において多くの著名な遺跡が出現し、河川流域ごとの遺跡分布を示す。

唐津平野の中で調査事例も多く研究史的にも重要な遺跡が多いのは宇木川・半田川流域である。宇木汲田貝塚では1965年の日仏合同調査により縄文晩期の夜臼式期より炭化米や土器底部の籾圧痕が発見され稲作の存在を示した。貝塚より200～300m南の宇木汲田遺跡では昭和初期には銅剣、銅矛が発見されており、1957年の東亜考古学会、1965、1966年の日仏合同調査により甕棺墓群から多鈕細文鏡、細形銅剣、銅矛、銅戈、銅釧、玉類など多数の副葬品が出土した。

柏崎貝塚も昭和初期の耕地整理によって発見されその後、数回の学術調査が実施され弥生前期後半の短期間に形成されたものであることが判った。柏崎遺跡(10)では明治末に触角式銅剣、銅矛が発見され、柏崎田島遺跡の甕棺墓群では日光鏡が柏崎大深田遺跡からは広形銅矛の鋳型が出土している。

また、唐津平野は西北九州に特徴的に分布する支石墓がみられる。葉山尻支石墓(11)では1952、1953年の調査で支石墓と甕棺墓を検出しており、この他瀬戸口支石墓(12)、森田支石墓(13)や玉島川流域では五反田支石墓(14)などが調査された。

本報告書掲載の井ゲタ・堂の前遺跡も宇木川・半田川流域にあたり、平成９年から調査を実施した梅白遺跡では弥生前期後半の水田跡と集落跡や古墳時代中期前半の水田と集落跡がみつかっている。同流域における古墳時代の遺跡としては垂飾付耳飾、三累環頭を出土した半田宮の上古墳や竪穴系横口式石室のほか土壙墓、箱式石棺墓などが検出された迫頭古墳群、同じく竪穴系横口式石室をもつ長崎山古墳群、石障系石室をもつ樋の口古墳など古墳時代中期の墳墓が目立つ。後期では銅椀や金銅製冠などが出土した島田塚前方後円墳がある。

松浦川流域でも弥生墳墓からの青銅器、鉄器の出土がみられる。久里大牟田遺跡(15)では鉛製の矛や銅矛、銅戈などが甕棺、土壙墓から出土している。山本中尾遺跡(16)からは細形銅剣と勾玉、管玉が千々賀庚申山遺跡(17)からは細形双耳銅矛や銅戈が千々賀宇ノ木遺跡からはイモ貝縦切銅釧が、中原遺跡(18)からは中期後半の甕棺墓から鉄矛、鉄戈、玉類が出土し、地域首長の成長をみることができる。同

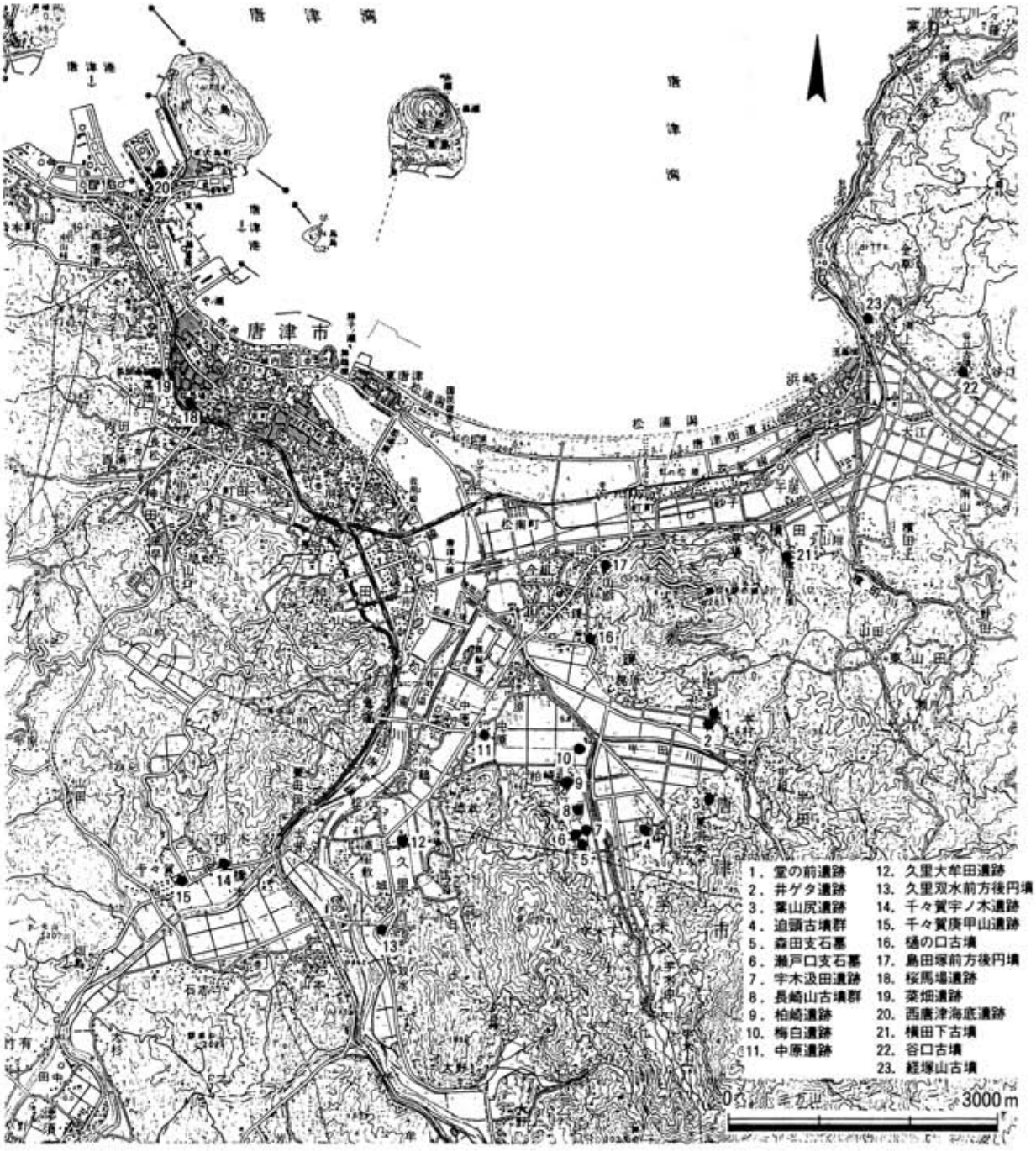


Fig. 2　周辺遺跡分布図（1/70000）

流域における古墳時代の首長墓として全長108mの久里双水前方後円墳や双水柴山２号前方後円墳(19)のほか、近年松浦川の支流である徳須恵川中流域にて前方後円墳２基が確認されている。この他弥生時代後期の首長墓として著名な遺跡として町田川流域の桜馬場遺跡がある。甕棺から方格規矩鏡、巴形銅器、有鉤銅釧などが出土しており、墳墓群の詳細は不明なものの副葬品などから首長の存在を推定できる。

このように宇木川・半田川流域や松浦川流域では稲作受容後の弥生～古墳時代の地域首長の出現や地域社会の発達が副葬品を埋葬した墳墓などからわかる。それに対して玉島川流域は古墳時代以降に卓越した首長墓が突如出現する地域である。墳長77mの谷口古墳(20)の内部主体は初期の横口式石室で鏡、

石釧、玉類などの副葬品が出土しており、松浦地方でも屈指の規模である。これに前後する古墳として経塚山古墳(21)や横田下古墳(22)があるが、玉島川流域では弥生時代の卓越した副葬品を埋葬した墳墓が発見されていないのは宇木川・半田川流域や松浦川流域と対照的である。

参考文献

1．堀川義英　1981　『田尾遺跡群磯道遺跡』　肥前町教育委員会
2．堀川義英　1978　『生石・森の下遺跡』　佐賀県教育委員会
3．松岡史・富岡憲次　1960　「佐賀県東松浦郡鎮西町字原出土の細石器」　九州考古学10
　杉原荘介・戸沢充則　1971　「佐賀県原遺跡における細石器文化の様相」　考古学集刊4-4
4．日本考古学協会西北九州総合調査　1960　「島原半島（原山、山ノ寺、礫石原）および唐津市（女山）の考古学的調査」『九州考古学』10
5．田島龍太　1996　『唐ノ川高峰遺跡』(3)　唐津市教育委員会
6．内田孔明　1996　『梨川内村前遺跡』(2)　唐津市教育委員会
7．田島龍太　1995　『徳蔵谷遺跡』(2)　唐津市教育委員会
　田島龍太　1996　『徳蔵谷遺跡』(3)　唐津市教育委員会
8．中島直幸・田島龍太　1982　『菜畑遺跡』　唐津市教育委員会
9．岡崎敬ほか　1982　「宇木汲田遺跡」『末盧國』　六興出版
10．中島直幸　1982　「柏崎遺跡群」『末盧國』　六興出版
11．渡辺正気　1982　「葉山尻支石墓」『末盧國』　六興出版
12．渡辺正気　1982　「瀬戸口支石墓」『末盧國』　六興出版
13．伊藤奎二・高倉洋彰　1982　「森田支石墓群」『末盧國』　六興出版
14．渡辺正気　1982　「五反田支石墓」『末盧國』　六興出版
15．中島直幸　1980　『久里大牟田遺跡』　唐津市教育委員会
16．岡崎敬　1982　「山本遺跡」『末盧國』　六興出版
17．岡崎敬・木下尚子　1982　「千々賀遺跡」『末盧國』　六興出版
18．橋口達也　1982　「中原遺跡」『末盧國』　六興出版
19．中島直幸　1987　『双水柴山遺跡』　唐津市教育委員会
20．家田淳一　1991　『史跡谷口古墳保存修理事業報告書』　浜玉町教育委員会
21．田平徳栄　1980　『経塚山古墳』　浜玉町教育委員会
22．小田富士雄　1982　「横田下古墳」『末盧國』　六興出版

Ⅲ. 遺　跡　各　説

1．遺跡の概要

堂の前遺跡、井ゲタ遺跡は字名が異なるため周知の包蔵地としての遺跡名がつくが、地形的にも遺跡の内容的にも本来はひとつの遺跡として捉えられるのであろう。本報告書では調査年度や調査担当者が異なるためそれぞれで報告した。しかしこの章では堂の前遺跡、井ゲタ遺跡をひとつの遺跡としてとらえその概要を記す。両遺跡全体の遺構配置図をFig. 5に示す。調査にあたっては両遺跡全体を国土座標にあわせ5 m × 5 mのグリッドを設定した。南北方向をA～T、東西方向を1から26とした。Fig. 4にグリッド配置図を示す。

遺跡の位置をFig. 3に示す。遺跡は鏡山南麓の裾部にあたり、遺跡のさらに南側には宇木川、半田川によって形成された唐津平野が広がる。遺跡の立地は現況水田であったが、古地形的には鏡山南麓裾部で南西方向にのびる尾根の末端部にあたる。調査指導を受けた立命館大学高橋学教授からは土石流扇状地との指摘を受けた。標高は7.8 m～13.6 mで、遺跡は南西方向に下がる緩斜面に立地する。さらに南側の低地にはアシなどの植物遺体層である通称コモ層の堆積が予想され、井ゲタ遺跡のⅢ区ではコモ層が確認された。

遺跡は弥生時代中期を中心とした集落と墓地と畦畔状遺構および縄文時代前期～後期の遺物包含層と古墳時代中期の遺物包含層を確認した。

弥生時代の集落として最も特徴的な点は掘立柱建物を中心とした集落ということである。1間×1間が26棟、1間×2間が6棟の計32棟の建物が調査面積1200㎡の中で確認された。これらの掘立柱建物群は調査区でも標高8 m～9 mと低い限られた場所を占地している。この建物群の床面積は約4 ㎡～14㎡であり極端な大形の建物はなく規模的には等質的である。しかしSB18とSB19は径25㎝～30㎝の柱根が遺存し、それぞれ柱穴の基礎構造に横木や礎板、礎石、根固め石などを用いた入念なものであった。これらの掘立柱建物群は高床倉庫と考えられ余剰生産物の集中管理がなされていたと考えたい。この他の建物として堂の前遺跡では平面円形の掘立柱建物2棟と円形の竪穴住居1軒が確認された。これらは掘立柱建物群より高い場所に占地しており、この2棟以外にも調査区中央に円形に並ぶ柱穴群が1ヶ所ある。円形の掘立柱建物の機能は類例を知らず定かでないが、中国の漢時代に円形の倉があるという。居住施設としては井ゲタ遺跡の円形住居1軒のみである。この他に集落を構成する遺構として土坑や溝状遺構があり、井戸が無いのは、居住空間ではなかったことを傍証している。集落の時期は中期前半を中心とする。

墳墓は堂の前・井ゲタ遺跡内で計18基の甕棺墓を調査した。これらの甕棺墓は大きく5つの群に分かれるが、どの群も少数の甕棺墓からなる。中期前半を中心として形成され、井ゲタ遺跡ではやや時期の下がるものもみられる。

堂の前遺跡内の調査区東側には9基からなる群がありこれはさらに3つの小群に分かれるがこれが5つの群の中で最も甕棺が多い。調査区中央にはSJ42, SJ43の2基からなる群があり、調査区東側にはSJ04が1基のみつくられる。SJ04は明確な墓壙も確認できず甕棺かどうかは疑わしい。

井ゲタ遺跡のⅡ区北側にはSJ07, 08, 09, 10の4基と4 m離れてSJ13の計5基からなる群がある。

Tab. 2　堂の前・井ゲタ遺跡遺構数一覧表

	堂の前遺跡	井ゲタ遺跡	計
掘立柱建物	2	32	34
竪穴住居	1	0	1
土坑	18	24	42
溝状遺構	5	4	9
畦畔	0	2	2
甕棺墓	12	6	18
土壙墓	1		1

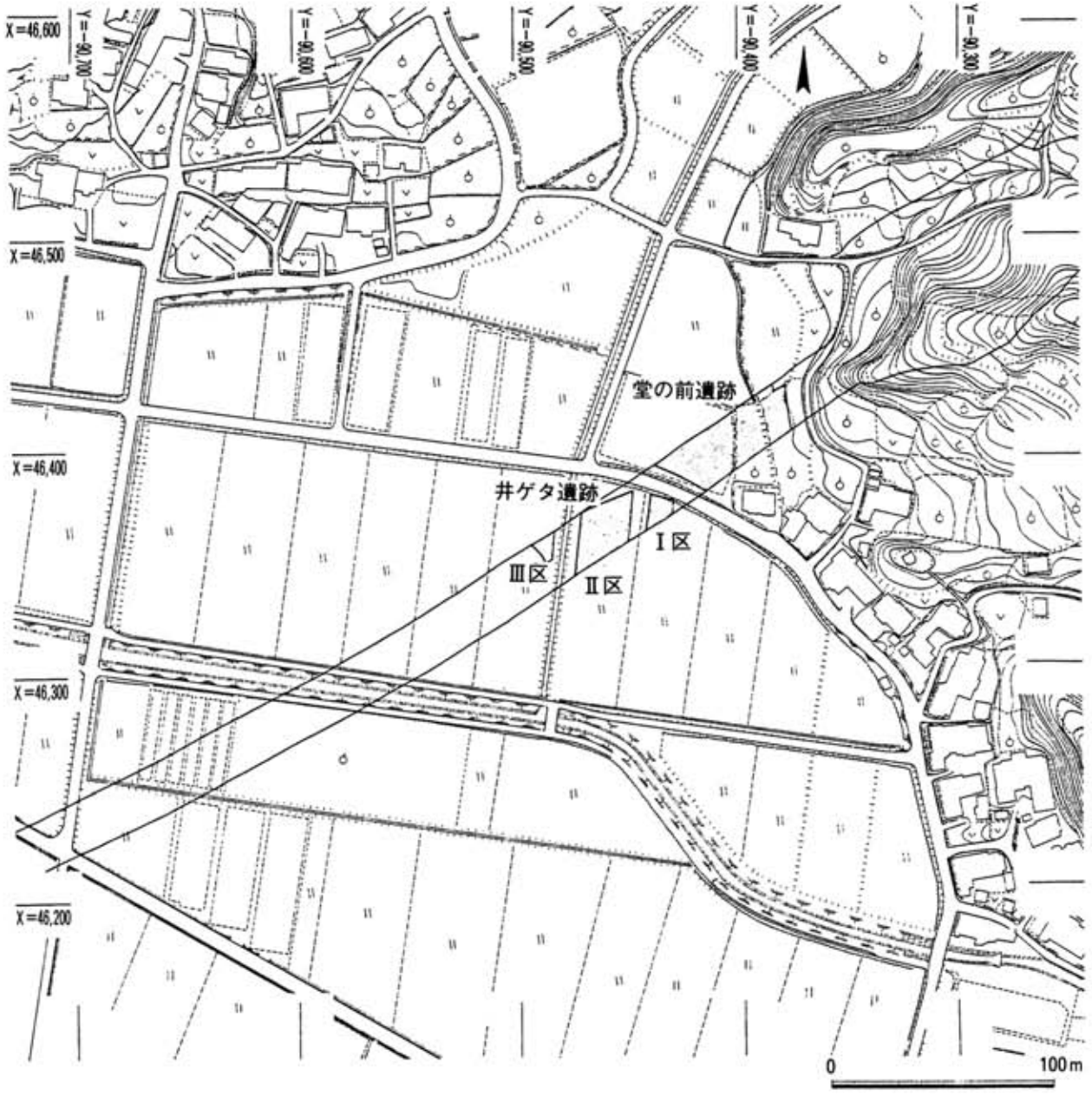


Fig. 3　遺跡位置図（1/3000）

この群の中のSJ07には勾玉１点、碧玉製管玉42点が副葬されていた。唐津平野の弥生時代甕棺墓の碧玉製管玉を中心とした玉類の副葬例の多さは宇木汲田遺跡、中原遺跡、久里大牟田遺跡、山本遺跡などの出土例から注目されており、SJ07の43点はひとつの甕棺墓の副葬数としては宇木汲田遺跡45号甕棺墓の83個、38号甕棺墓の45個につづくものである。

これらの甕棺墓群は少数からなる群であり、これが単位集団を示していると考えてよいだろう。甕棺墓は少数の群集であるのに対して貯蔵施設である高床倉庫は多数群集している点が特徴的であり、本遺跡の性格を考える上で重要である。

井ゲタ遺跡Ⅱ区の南側は調査区内でも最も低く標高7.8mを測る。等高線に併行してSF70とSF71の２

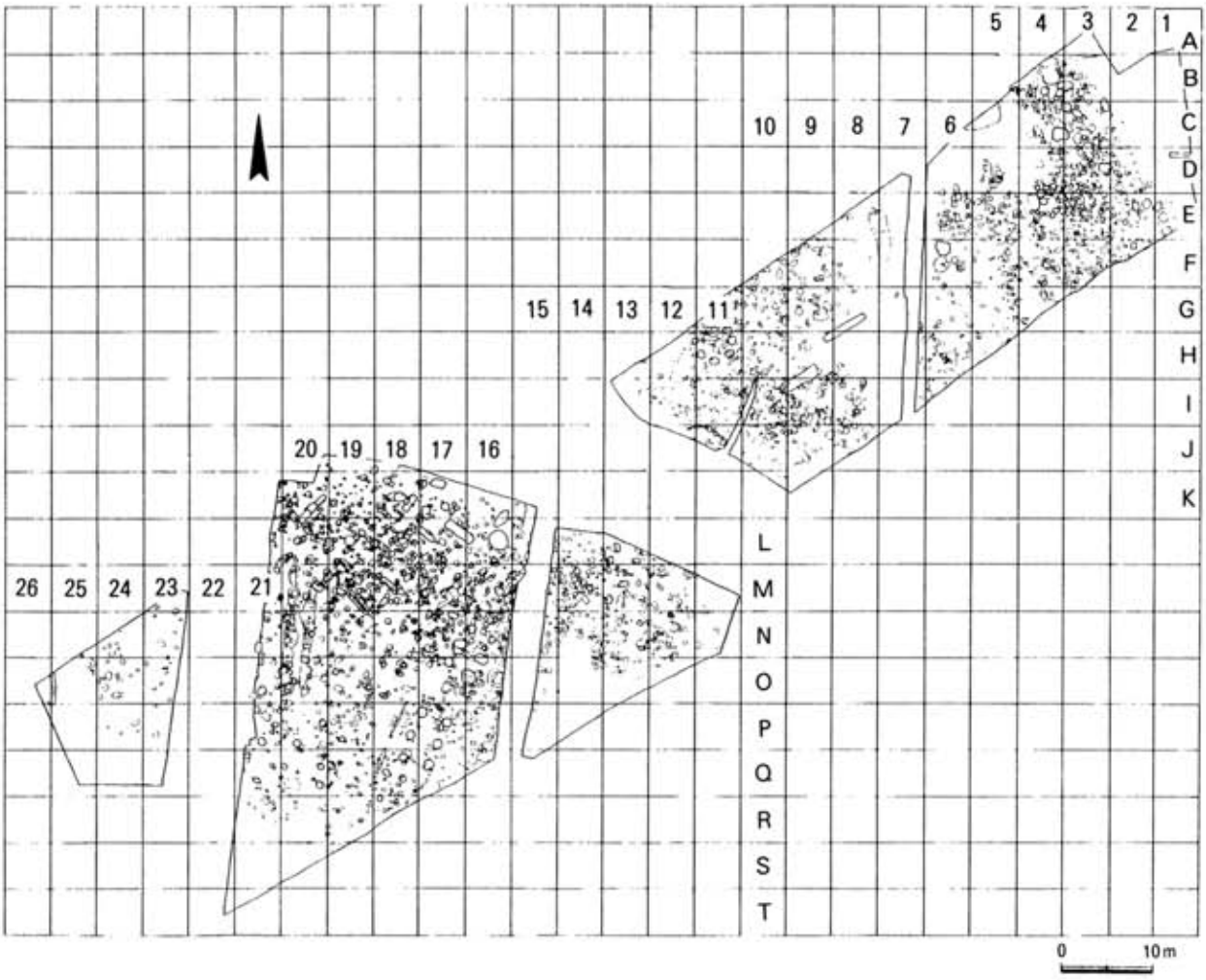
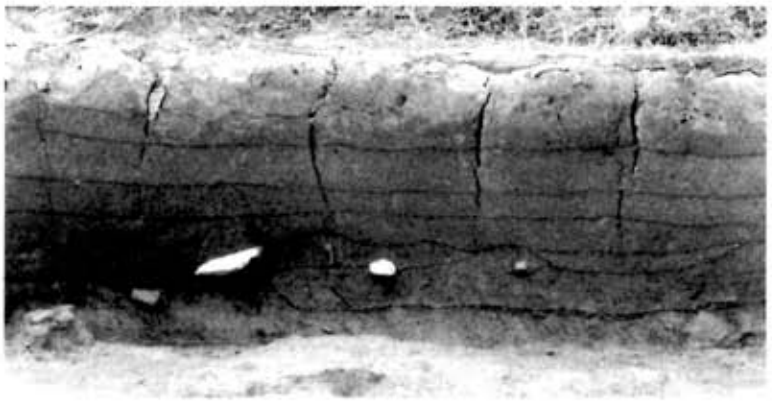


Fig. 4　グリッド配置図（1/800）

条の畦畔状遺構を検出した。SF70とSF71は幅約60cm、高さ10～15cmで二条の畦畔は併行して走り畦畔内には礫が埋められていた。畦畔の時期はSF70が弥生時代、SF71が古墳時代中期である。Fig30, Fig31の土層図と遺構配置図にSF70, SF71を示す。また、SF70の南方1.5ｍにはモモ？の種10個前後が埋納してあった。出土状況から箱などに入れて埋納していた可能性がある。

また、井ゲタ遺跡Ⅲ区では縄文時代前期～後期の遺物包含層を確認した。土器群の主体は阿高式系土器でその中でも坂の下式土器の半精製土器が多い。同時期の遺構は検出できなかったがいままで知られなかった宇木川・半田川流域の縄文時代の様相が明らかになってきた意義は大きい。



井ゲタ遺跡　畦畔状遺構

種子出土状況

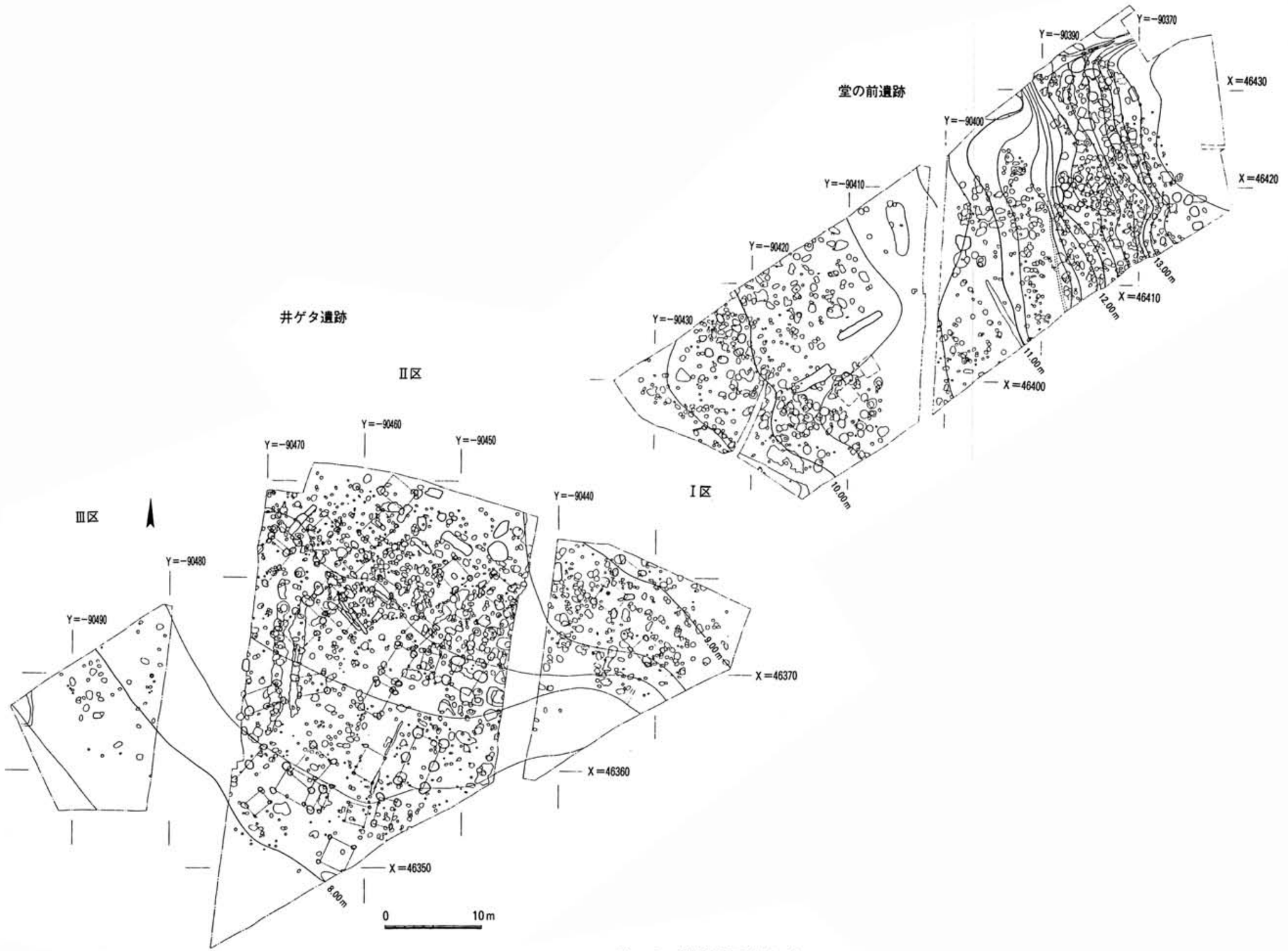


Fig. 5　遺構配置図 (1/400)

堂の前遺跡

1．概　要

遺跡は南西方向にのびる尾根の末端部にあたり、標高は9.8m～13.6mを測る緩斜面に立地する。道路を挟んでさらに下方には井ゲタ遺跡がある。遺跡は弥生時代中期を中心とした集落と甕棺墓、古墳時代中期の遺物包含層を検出した。おもな検出遺構として掘立柱建物2棟、竪穴住居１棟、土坑18基、溝状遺構５条、甕棺墓12基、土壙墓１基がある。

掘立柱建物2棟は調査区の東西両端にある。２棟とも柱穴が平面円形に並び、建物の平面形としては円形になる類例のないものである。ともに直径は約4.8mを測るもので、柱穴内の柱根の遺存状態などから掘立柱建物と認定した。SB45は調査区の東南部にあたり、やや南西部に突出した地形につくられる。時期はSB46柱穴内出土遺物や周辺遺構などから中期前半と考えられる。竪穴住居は調査区西端に平面円形のSH47がある。

溝状遺構のうち本報告書には掲載していないが調査区の中央にはSD39が南北方向に走り、その西側に平行して柱穴が一直線に６基並ぶ。SD39は幅約50cm、深さ５cmを測る。ともに弥生時代の遺構で区画溝と柵列の可能性があるが、何を区画したかは不明である。

甕棺墓は12基あり、群は大小３つのグループに分かれる。これをＡ群～Ｃ群とすると調査区の東側中央部のＡ群は９基からなる最大の群で、緩斜面でも南西方向にやや突出した地形に立地する。Ａ群はさらに３つの小群に分かれる。Ｂ群は２基からなり、Ｃ群は１基のみである。このうちSJ30、41は直立して埋置した倒置棺に近いものであった。SJ41は壺の胴部片の内側を上にして置き、その上に壺の胴部（上半部打ち欠き）で覆う。SJ30の上甕は口縁部を下にした倒置であり、下甕の底部片のみ遺存しており、複式棺とした。

2．層位と文化層

調査区南半部南壁の土層図（Ａ-Ｄ）をFig６に掲載する。現地形は、北東-南西方向に細長い調査区の、北東側から約1/3の箇所で、２ｍほどの落差の段差がつき、さらに約2/3の箇所で90cmほどの落差の段差がつく。これに対し旧地形は、土層観察より、北東方向から南西方向に向かって下だる緩斜面になるものと思われる。層位は、土層上位より１～７層に分け、さらに色調および土の締まりの違いから１Ａ、１Ｂというようにアルファベットで細分した。また、用水路より西側では地山を含めて層位が異なるため、用水路より東側の層を基本土層とし、それに対応する層を４'、５'層とした。１層は表土。調査区北東部分の１段目では、１ｍほどの厚さをもつが、２、３段目では20～40cmの厚さとなる。１Ａ、１Ｂ、１Ｃは色調の違いによるもの。２層はごく少量の土器片を含む暗灰黄色土層。２Ｂは２Ａより締まりが弱く、土器片を少量含む。２Ｃは２Ｂより色調がやや暗い。造成土か。３層は弥生土器、須恵器、輸入陶磁器を包含する灰黒色土層。２層造成以前の旧表土か。４層は弥生土器、須恵器を包含する灰褐色土層。凹凸の多い５層を覆い、上面がフラットになる層。古墳時代以前のプライマリーな遺物包含層か。４'層は弥生土器を包含する黒褐色土。４"Ａ層と４"Ｂ層も同じく弥生土器を包含する黒褐色土層。壁面では須恵器は確認できなかったが、上下の層との関係よりいずれも４層に対応する層と判断。４'、４"Ａ、４"Ｂ層は色調の違いでわけたもので、４"Ａ層が一番明るく、次いで４"Ｂ、４'層の順となる。５層は弥生土器のみを包含する褐色土層。地山である７層を覆う層。弥生時代以前の遺物包含層か。５'層は弥生土器を包含する灰黒色土層。６層は溝の埋土で暗青灰色土。粘質が強い。７層は赤褐色土の地山。７'層は青灰色土の粗い砂質の地山。井ゲタ遺跡の９層に近似する。

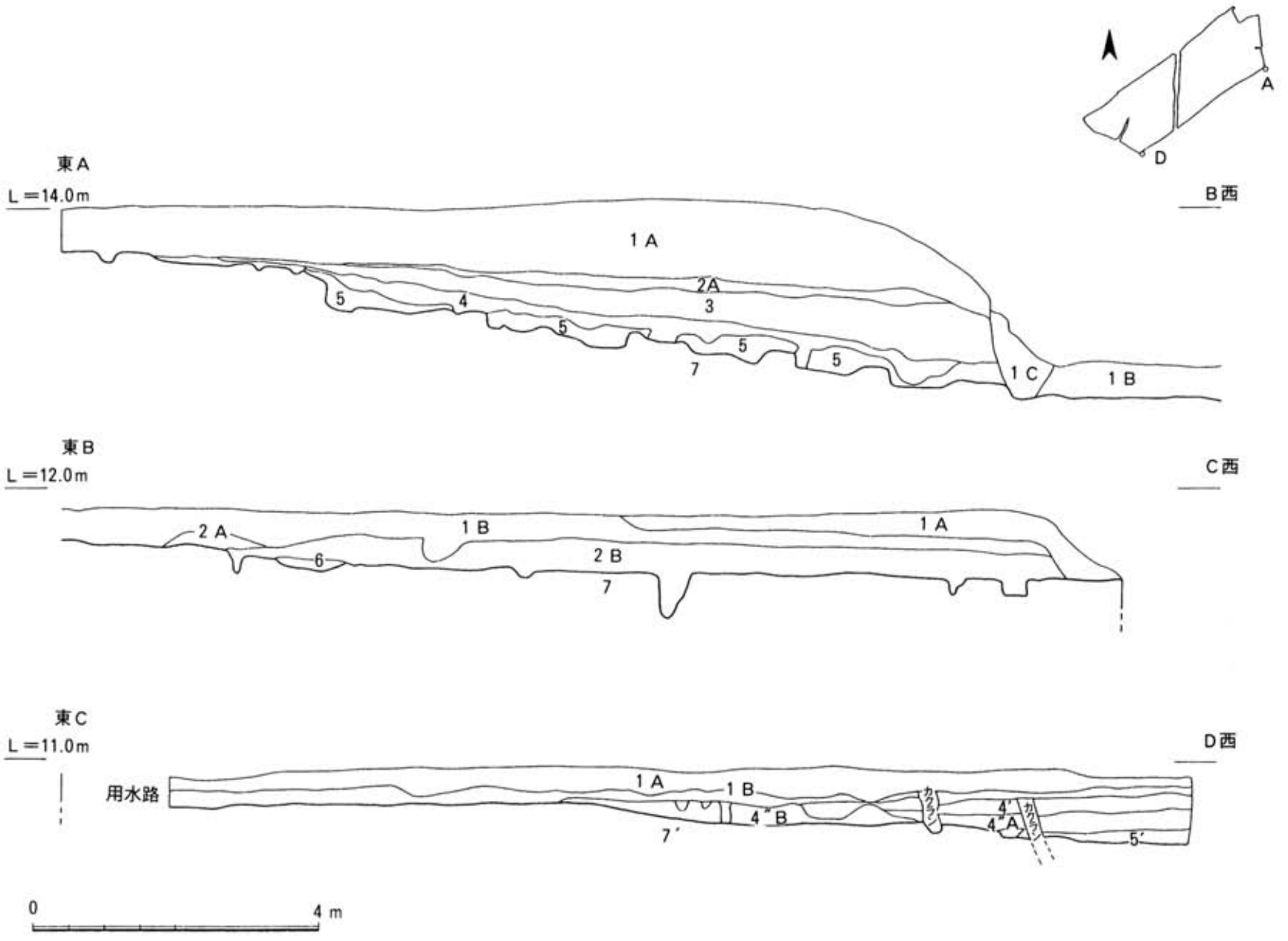

A
D
東A
L＝14.0m
B西
1A
2A
3
4
5
5
5
5
7
1C
1B
東B
L＝12.0m
C西
2A
1B
1A
6
2B
7
東C
L＝11.0m
D西
用水路
1A
1B
4″B
7′
カクラン
4′
4″A
カクラン
5′
0
4 m

Fig. 6　土層図（1/80）

Fig. 7 遺 構 配 置 図 (1/200)

3．遺　構

(1) 甕　棺　墓

12基の甕棺墓を調査した。このうちのSJ04は明確な墓壙も検出できなかったが時期は下るもののほぼ完形の土器が出土したことなどから甕棺墓とした。甕棺墓群は大小３つのグループに分かれる。仮にこれをA～C群とすると調査区の東側中央部にA群がある。A群は９基からなり、さらにA-1群、A-2群、A-3群の３つの小群に分かれる。そのうち最大はA-1群でSJ24，25，26，27，28，29の６基からなり、その南西１ｍにA-2群のSJ30が、その東1.5ｍにA-3群のSJ40，41の２基がある。B群はA群の南西18ｍにあたりSJ42，43の２基からなる。C群はA群の北東６ｍにあたりSJ04１基である。C群は周辺の土壙墓群とともに墓域を形成する可能性がある。この甕棺墓群の時期はA，B群がKⅡ式期で、C群はKⅣ式期である。

SJ24

調査区上段部のほぼ中央部に集中するA-1群の中でも中央に位置する。東側にSJ29甕棺墓、北側にSJ25甕棺墓、西側にSJ27甕棺墓がそれぞれ埋置される。北壁をSJ25甕棺墓と切り合う。平面プランは、直径約65cmの不整な円形で、遺構上半部を削平のため消失する。埋置角度は58.0°。平面プランの観察により、SJ25甕棺墓より新しいか。甕（上）＋ 壷（下）の複式棺。

SJ25

調査区上段部のほぼ中央部に集中するA-1群の中でも中央北部に位置する。南側にSJ24、27甕棺墓、東側にSJ29甕棺墓、西側にSJ26甕棺墓がそれぞれ埋置される。西壁をSJ26甕棺墓と切り合う。平面プランは、直径60～66cmの不整な円形で、遺構上半部を削平のため消失する。埋置角度は77.0°。SJ26甕棺墓との新旧関係は不明。壷（上）＋ 甕（下）の複式棺か。

SJ26

調査区上段部のほぼ中央部に集中するA-1群の中でも北西部に位置する。東側にSJ25甕棺墓、南側にSJ27甕棺墓がそれぞれ埋置される。東壁をSJ25甕棺墓と切り合う。平面プランは不明瞭で遺構上半部を削平のために消失する。埋置角度は61.0°。甕（上）＋ 甕（下）の複式棺で、下甕の口縁部を打ち欠く。

SJ27

調査区上段部のほぼ中央部に集中するA-1群の中でも西側中央部に位置する。東側にSJ24甕棺墓、北側にSJ25・26甕棺墓、南側にSJ28甕棺墓がそれぞれ埋置される。平面プランは長径約90cm、短径約80cmの楕円形で、遺構上半部を削平のため消失する。埋置角度は69.5°。甕（上）＋ 甕（下）の複式棺で、上・下甕ともに口縁部を打ち欠く。

SJ28

調査区上段部のほぼ中央部に集中するA-1群の中でも南西部に位置する。北側にSJ24・27甕棺墓が埋置される。遺構下位に段を有し、上段部分の平面プランは長径約83cm、短径約70cmの不整な楕円形で、下段部分は約70cmの不整な隅丸方形をなす。遺構上部1/3以上を削平のため消失する。埋置角度は、74.5°。甕（上）＋ 壺（下）の複式棺。

SJ29

調査区上段部のほぼ中央部に集中するA-1群の中でも東側に位置する。西側にSJ24・25甕棺墓が埋置される。平面プランは、遺構北西部分に撹乱を受けるため不明瞭であるが、長さ約80～83cmの不整な隅丸方形で、遺構上半部を削平のために消失する。埋置角度は、67.0°。甕（上）＋ 甕（下）の複式棺で、下甕のみ口縁部を打ち欠く。

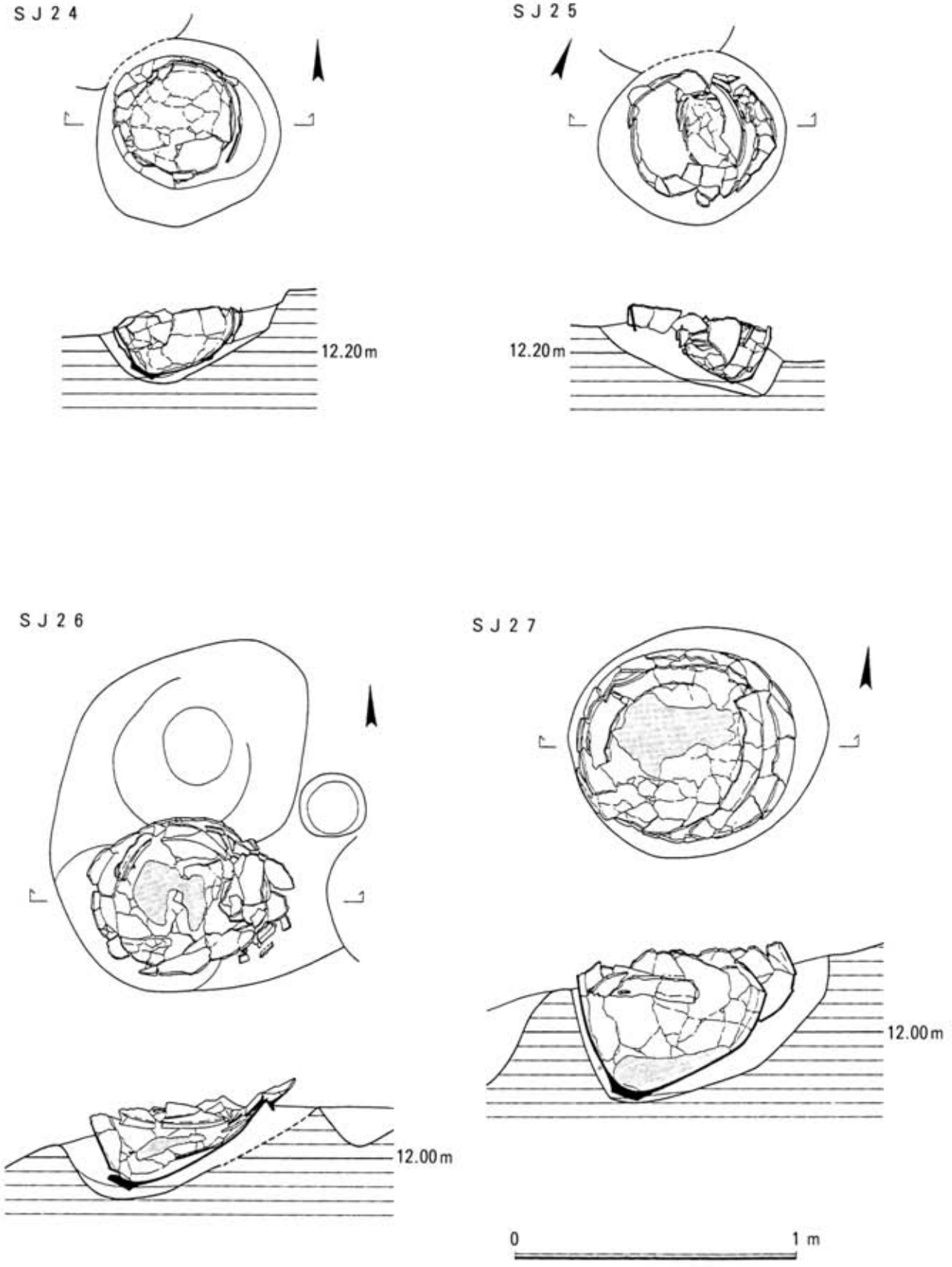


Fig. 8　SJ24・25・26・27甕棺墓（1/20）

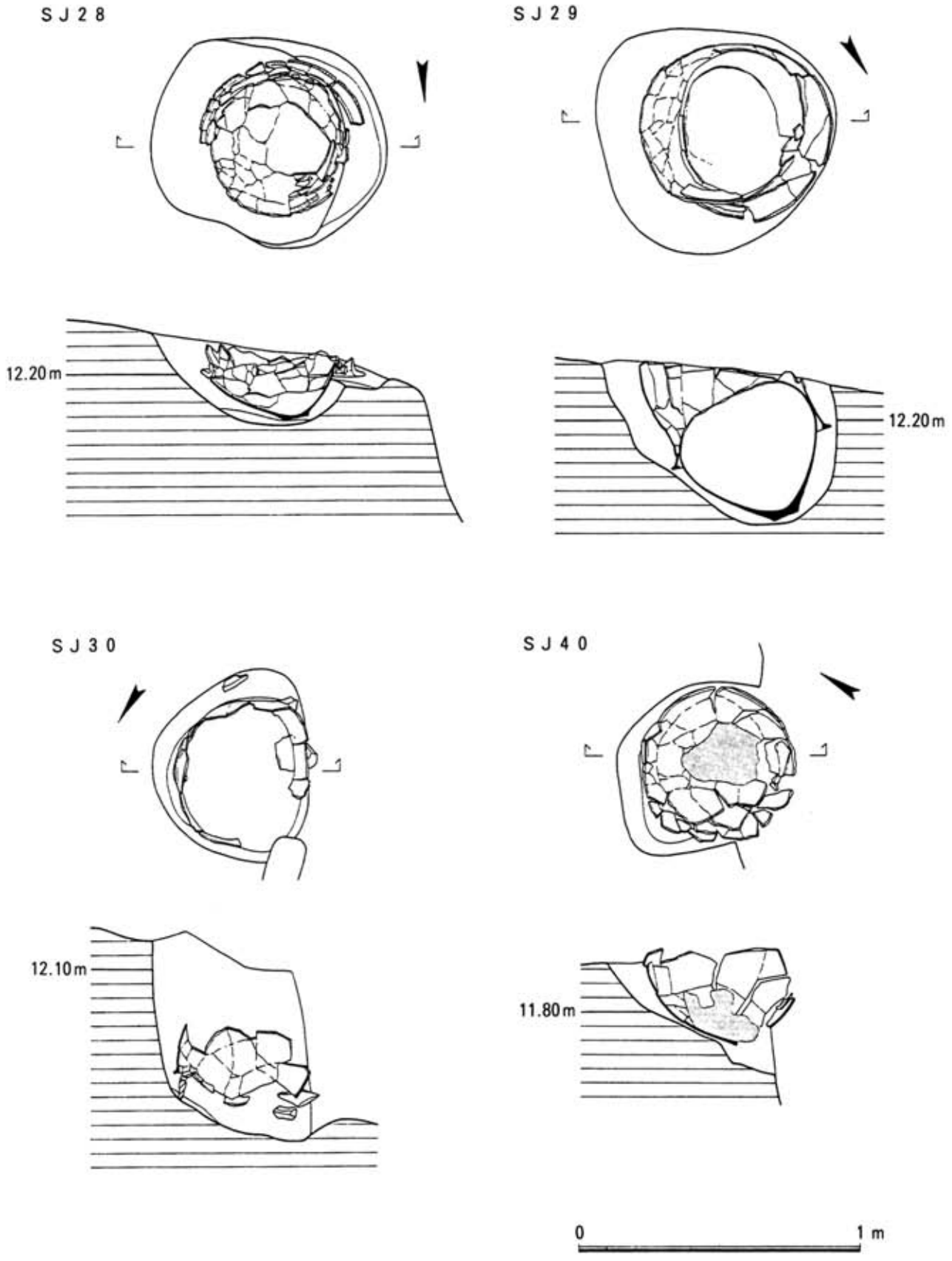


Fig. 9　SJ28・29・30・40甕棺墓（1/20）

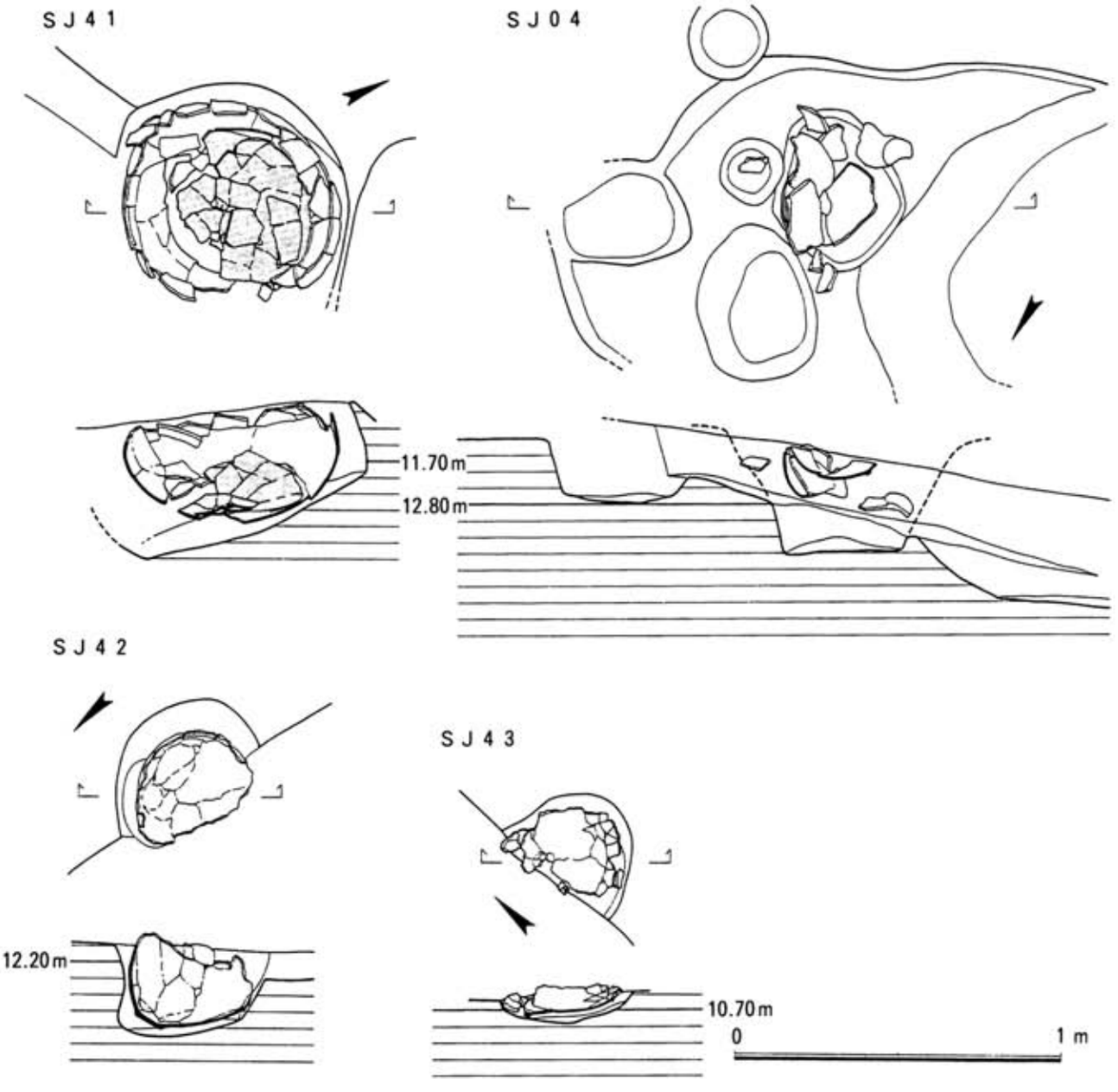


Fig. 10　SJ41・42・43・04甕棺墓（1/20）

SJ30

調査区上段部のほぼ中央部に集中するA群でも西部に位置するA-2群で北東１ｍにA-1群がある。西側を大きく削平されており、甕棺自体もほとんど残存しない。そのため平面プランは、その残存部分の状況から長さ80cm程度の隅丸の長方形ないし方形をなすものと推測するに留まる。埋置角度は不明。甕（上）＋甕（下）の複式棺。

SJ40

調査区上段部のほぼ中央部に集中するA群でも南部に位置するA-3群である。北方１ｍにA-1群が西方1.5ｍにA-2群であるSJ30甕棺墓がある。SJ40・41甕棺墓は、北東－南西方向を軸に近接しており、ともに南東部分を削平のため破壊される。残存部分の状況より、平面プランは、長さ約70cm、幅約60cmの隅丸長方形をなすものと推測される。埋置角度は不明。下甕のみが残存する。

SJ41

SJ40甕棺墓と同様に南東部分を削平のため破壊されており、平面プランは長さ約60cmの隅丸方形をなすものと推測に留まる。埋置角度は不明。壷（上）＋ 壷（下）の複式棺か。

SJ42

調査区中央部のやや南側に位置するB群でSJ43甕棺墓と近接して埋置される。上半部は削平を受け西側半分を現代の溝により破壊される。このため平面プランは不明瞭。埋置角度は59.0°。下甕のみが残存する。

SJ43

調査区中央部のやや南側に位置するB群で北側にSJ42甕棺墓が埋置される。SJ42甕棺墓同様、上半部および西側半分が破壊される。このため平面プランおよび埋置角度は不明瞭。壷（上）＋ 甕（下）の複式棺。上壷の口縁部を打ち欠く。

SJ04

ほかの甕棺墓とは墓域を異にする。当初は土坑として取り上げていたが、完形の弥生時代後期の中型甕（18）に復元できたこと、出土した甕の下部に平面が円形で断面逆台形状の掘りこみがあること等から甕棺墓として分類しておく。埋土内より磨製石斧が出土した。この甕棺墓の北側には土坑が集中しているが、それらが土壙墓の可能性もあり、その墓域のなかに含まれる1基とみることができそうである。

(2) 土 壙 墓

SP18土壙墓

調査区の北東部に位置する。平面隅丸長方形で、長軸の方位は西へ27.0° ふれる。斜面上に位置するために、西側を多少削平されている。断面形態は逆台形状である。この調査区において墓壙が隅丸長方形を呈すものはこの1基のみである。しかし、土坑が土壙墓であった可能性もあり、その墓域のなかの1基と考えられる。

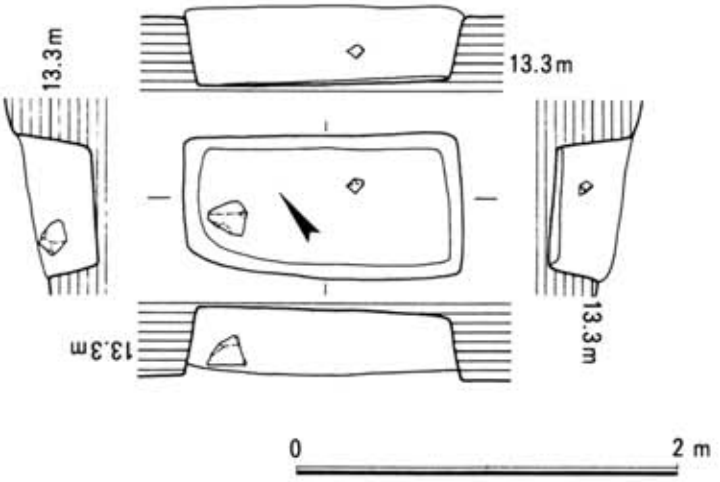


Fig. 11 SP18土壙墓（1/40）

(3) 掘立柱建物跡・竪穴住居跡

堂の前遺跡では平面円形の掘立柱建物跡が2棟と平面円形の竪穴住居跡1軒を確認した。柱穴が平面円形に回る掘立柱建物の例はなく、貴重な事例となった。この遺構について平面円形の竪穴住居の可能性も考えたが、周辺遺構の削平状況がさほどないことや、直立して柱根が出土したことなどから平面円形の掘立柱建物と判断した。柱穴番号は調査時の番号と報告書のそれとでは異なり、新たに番号を付けた。

① 掘立柱建物跡

SB45

調査区の南東端に位置し、西方約7mには甕棺墓群がある。柱穴の一部は調査区外にのび建物としては完掘できていない。今回調査の堂の前・井ゲタ遺跡の中では最も高い場所に立地し標高は18.5mを測る。柱穴はP1からP7の7基を確認したがこれらの柱穴群は円形に回る。とくにP3からP7は同形態の柱穴が30cm～50cmの等間隔に並ぶ。この平面円形の径は4.8mを測る。

これらの柱穴のうちP4, P5, P7では径約20cmの柱根が直立して遺存していた。P1は平面楕円形で長径85cm、深さ約30cm。P2は不整形で径67cm、深さ約50cm。P3は隅丸長方形で長径97cm、深さ70cm。P4は隅丸方形で長径1m、深さ60cm。P5は不整楕円形で長径1.14m、深さ40cm。P6は隅丸長方形で長径1.1m、深さ40cm。P7は隅丸長方形で長さ1.06m、深さ40cmで坑底は二段掘りとなる。

P1から器台(2)、袋状口縁壺片(1)が出土している。

SB46

調査区の西端に位置し、南方約7mにはSH47がある。標高は10mを測る。柱穴はP1からP7の円形に回る7基を確認した。柱穴の配列はP1とP7の間が1.9mあき、その他は50cm～90cmの間隔で並ぶ。柱穴の規模はSB45のそれよりひとまわり小さい。平面円形の径は4.85mを測る。P7には礎石が置かれていた。

P1は平面楕円形で長径1.03m、深さ約80cm、坑底は二段掘りとなる。P2は不整形で長径85cm、深さ約20cm。P3は平面不整楕円形で長径1.06m、深さ約40cm。P4は楕円形で長径1.04m、深さ40cm。P5は隅丸長方形で長径10.06m、深さ約45cm。P6は平面不整形で長径1.18m、深さ約45cm。P7は平面不整形で長径80cm、深さ45cm、坑底には礎石があった。

P1から甕口縁部C-1類(4)、P5から甕口縁部(3,4)、底部(8)、P6から袋状口縁壺(6)、P7から甕底部片(7)が出土した。

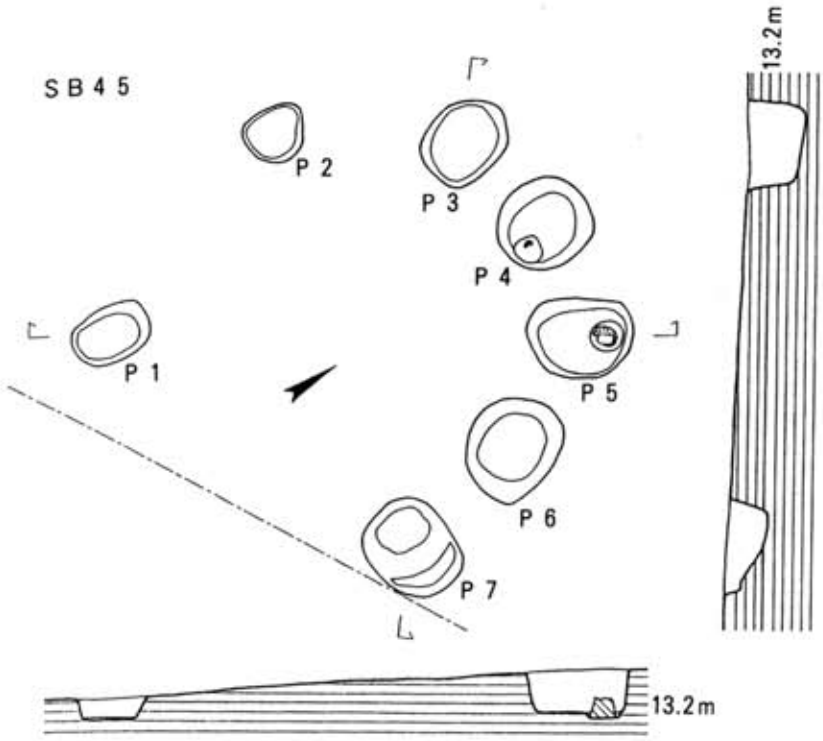
② 竪穴住居跡

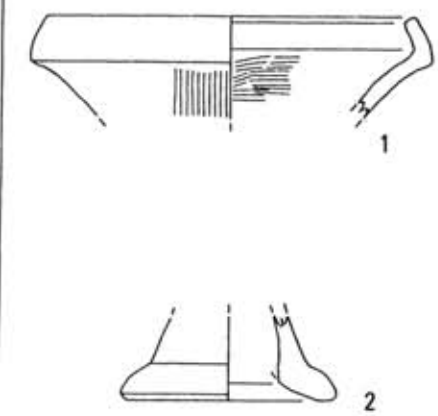
SH47

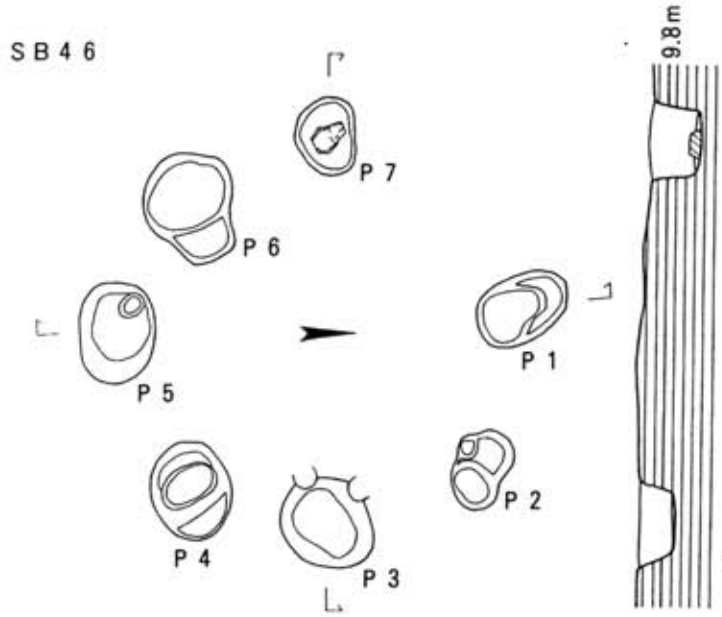
調査区の西端に位置し、北方約7mにはSB46がある。調査区内としては最も低い位置にあたり標高9.8mを測る。住居の南半部は調査区にかかり完掘はできていない。周壁は削平されて遺存しないが柱穴の配列やそれをつなぐ溝から円形の竪穴住居と考えた。柱穴はP1からP5の5基が円形に並び、幅10cm、深さ5cmの溝がこれらの柱穴をつなぐ。柱穴の平面形態は不整円形で径50cm～80cm、深さ14cm～35cmを測る。

(4) 土　坑

全部で18基の土坑を確認した。このうちの残存状態のよい10基について報告する。土坑のほとんどは調査区の北東部に集中している。形態分類はできそうにないが、SK02は坑底に小穴があることから貯蔵穴の可能性もある。また、これらの土坑が集中する南側にSJ04甕棺墓があることから、この







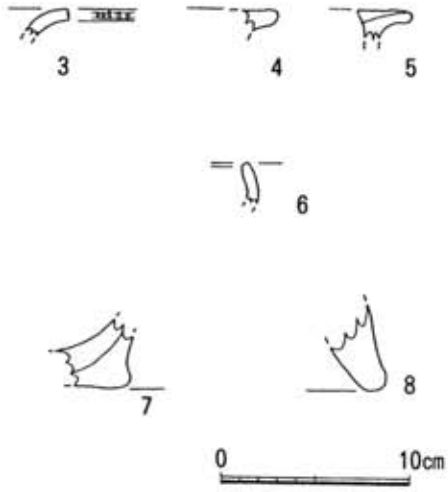


Fig. 13　SB45・46掘立柱建物出土土器（1/4）

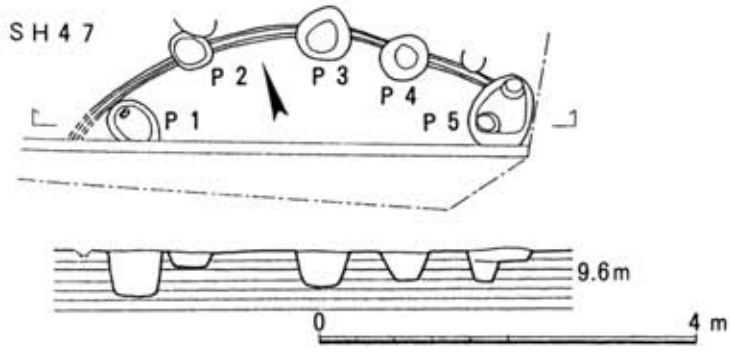


Fig. 12　SB45・46掘立柱建物跡、SH47竪穴住居跡(1/80)

土坑群は甕棺墓群とは墓域を異にする墓壙群の可能性も考えられる。

SK02

北東－南西方向にのびる調査区の北東側に8基の土坑が集中するうちの1基。北側をSD12に切られる。東西幅約1.8ｍ、深さ約10～20㎝。平面プランは円形で、坑底はほぼ平坦である。埋土中より、弥生時代中期の甕の底部（75・77）・甕の口縁部（31）、弥生時代中期後半の袋状口縁壺の口縁部（97）、および弥生時代中期の支脚（101）が出土した。

SK05－A

北東－南西方向にのびる調査区の北東側に8基の土坑が集中するうちの1基。平面プランは直径約1.1～0.9ｍの不整な円形で、深さは20㎝程度である。坑底には10㎝程度の深さで、不整な隅丸方形が二段掘り状に掘り込まれる。埋土中より土師器の甕（105）および鉢（113）が出土した。

SK05－B

北東－南西方向にのびる調査区の北東側に8基の土坑が集中するうちの1基。SK05－Aの南東側に近接する。平面プランは不整形で、深さは約20㎝である。坑底は南東方向に緩やかに下る。埋土中より、弥生時代中期後半・中期前半の甕の口縁部（23・24）、中期前半の壺の底部（72）が出土した。

SK06

北東－南西方向にのびる調査区の北東側に8基の土坑が集中するうちの1基。南西側を小穴に切られる。平面プランは不整形で深さ約30㎝である。坑底は平坦であるが西側に坑底から深さ約20㎝の小穴がある。埋土中より弥生時代中期後半の甕の口縁部（32・33）が出土した。

SK09

北東－南西方向にのびる調査区の北東側に8基の土坑が集中するうちの1基。坑底の上部約10㎝程度が残存するのみである。平面プランは不整形で坑底には楕円形の掘り込みがある。埋土中より弥生時代中期後半の甕の口縁部（34～36）・壺の底部（78）、および土師器の甕（106）が出土した。

SK10

北東－南西方向にのびる調査区の北東側に8基の土坑が集中するうちの1基。平面プランは不整な隅丸長方形で、長さ約1.8ｍ、幅約1.1～1.4ｍ、深さ約25㎝程度である。坑底には深さ約10㎝の楕円形の小穴がある。埋土中より弥生時代中期後半の器台（103）、黒曜石製の抉り入り石器（179）が出土した。

SK11

北東－南西方向にのびる調査区の北東側に8基の土坑が集中するうちの1基。平面プランは、直径約1.0ｍの不整な円形である。坑底は西方向に緩やかに下る。埋土中より弥生時代中期前半の甕の口縁部（21・22）、石核（189）が出土した。

SK19

北東－南西方向にのびる調査区の北東側に8基の土坑が集中するうちの1基。土坑の南側をSD12に切られ、かつ北西側は調査区外である。平面プランは隅丸長方形、または楕円形と思われる。床面に小穴あり。埋土中より弥生時代中期前半の甕の口縁部（25～29）・底部（73・74・76）が出土した。

SK23

北東側の8基の土坑から南側に6ｍ程はずれて位置する。北東側1/2程度を残して削平を受け、深さは約60㎝である。坑底は平坦であるが、東壁面側に坑底から深さ約20㎝の楕円形の小穴がある。出土遺物は袋状口縁壺片がある。

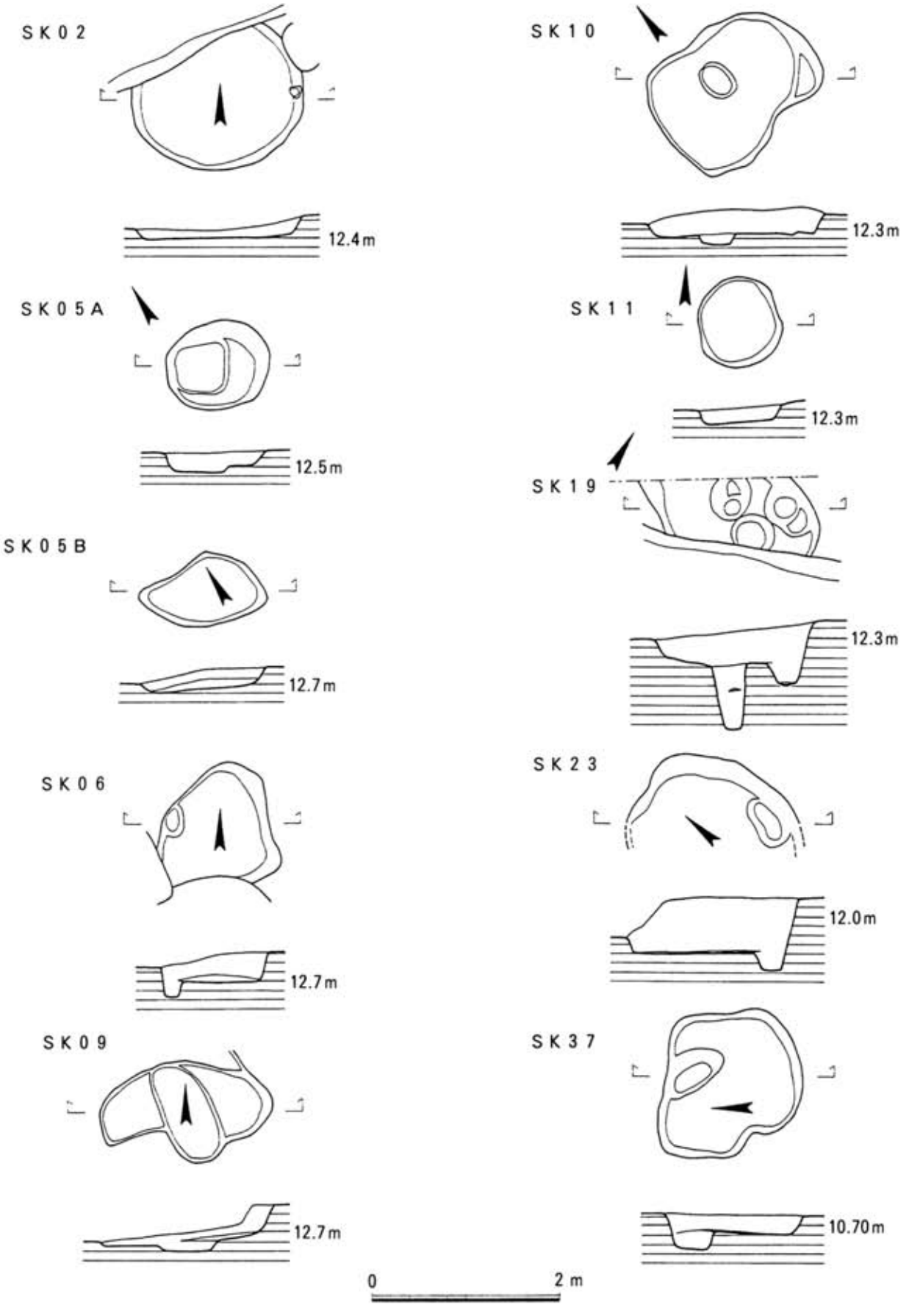


Fig. 14　SK02・05A・05B・06・09・10・11・19・23・37土坑（1/60）

SK37

調査区のほぼ中央に位置する。平面プランは不整形をなし、北側に坑底から深さ約20cmの楕円形の小穴がある。埋土中より弥生時代中期後半の袋状口縁壺の口縁部（96）が出土した。

(5) 溝状遺構

調査区から5条の溝状遺構を確認した。そのうちの2条について報告する。SD15・SD35は、規模から考えると流路とは認識できず、区画状の溝とするにも不十分である。

SD15

調査区の中央よりやや南西側に位置し、長さ約5.3ｍ、幅約0.6～0.9ｍ、深さ約0.3ｍの北東－南西方向にのびる溝状遺構である。断面形態は逆台形状で、床面はほぼ平坦である。埋土中より石錘(165)および砂岩製の石剣（149）が出土した。

SD35

SD15より南西側に位置し、SD15と同方向（北東－南西方向）にのびる。長さ約4.6ｍ、幅約1.0～1.2mである。断面形態は逆台形状で、北東側に向かって浅くなる。床面に二つの小穴がある。埋土中より珪質層灰岩製の石剣（150）が出土した。

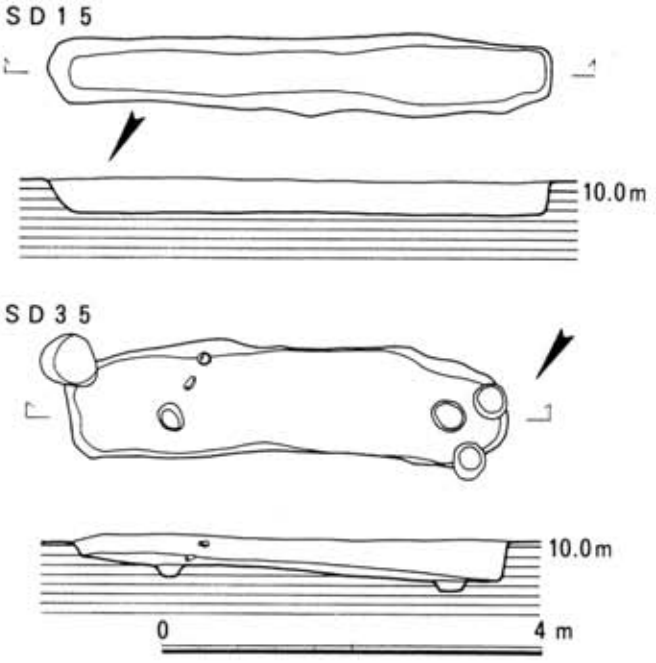


Fig. 15　SD15・35溝状遺構（1/80）

4．遺　物

(1) 土　器

① 甕　棺

Fig16～18の1～18は甕棺の実測図である。橋口編年（1979）のKⅡb式～KⅢa式における丸味を帯びた甕棺の一系列にあたる甕棺が多くみられる。これらには大形土器と中形土器があり、大形には7,8,11,14が中形には1,4,16がある。成人用大形棺には5,6,9,12,13,17がある。広口壺には2,3,10,15がありこれらは上半部や口縁部を打ち欠いている。

1はSJ24の上甕。胴部最大径および断面三角突帯は中央よりやや上位にあり、肩部は丸味をもつ。肩部に半孤を描いた線刻が2ヶ所にみられる。2はSJ24の下甕に用いた壺。胴部最大径は中位にあり、それよりやや上方に断面三角突帯を張り付ける。

3はSJ25の上甕に用いた壺。口縁部は打ち欠く。胴部最大径は中位にあり、断面三角突帯を張り付ける。4はSJ25の下甕に用いた壺？。胴部最大径は中位にあり、その上に断面三角突帯を張り付ける。

5はSJ26の上甕。胴部中央に断面三角突帯を張り付ける。最大径は上位にあり、口縁部にかけて内傾する。口縁上端面も内傾する。6はSJ26の下甕。上半部を欠損する成人棺である。外面タテハケ。

7はSJ27の下甕。成人用の大形棺である。胴部最大径は上位よりにあり、肩部は丸味をもつ。

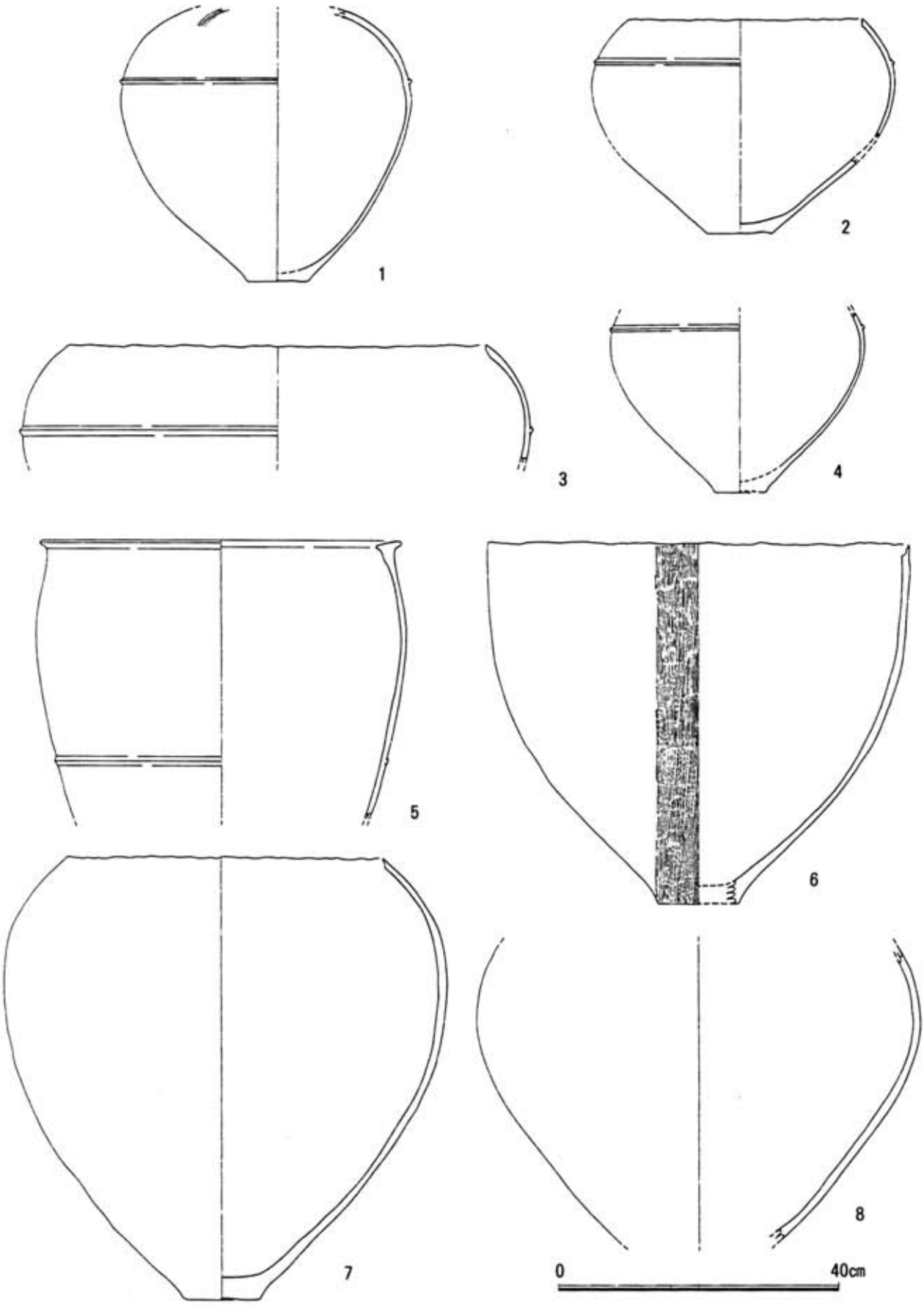


Fig. 16　SJ24・25・26・27甕棺実測図（1/8）

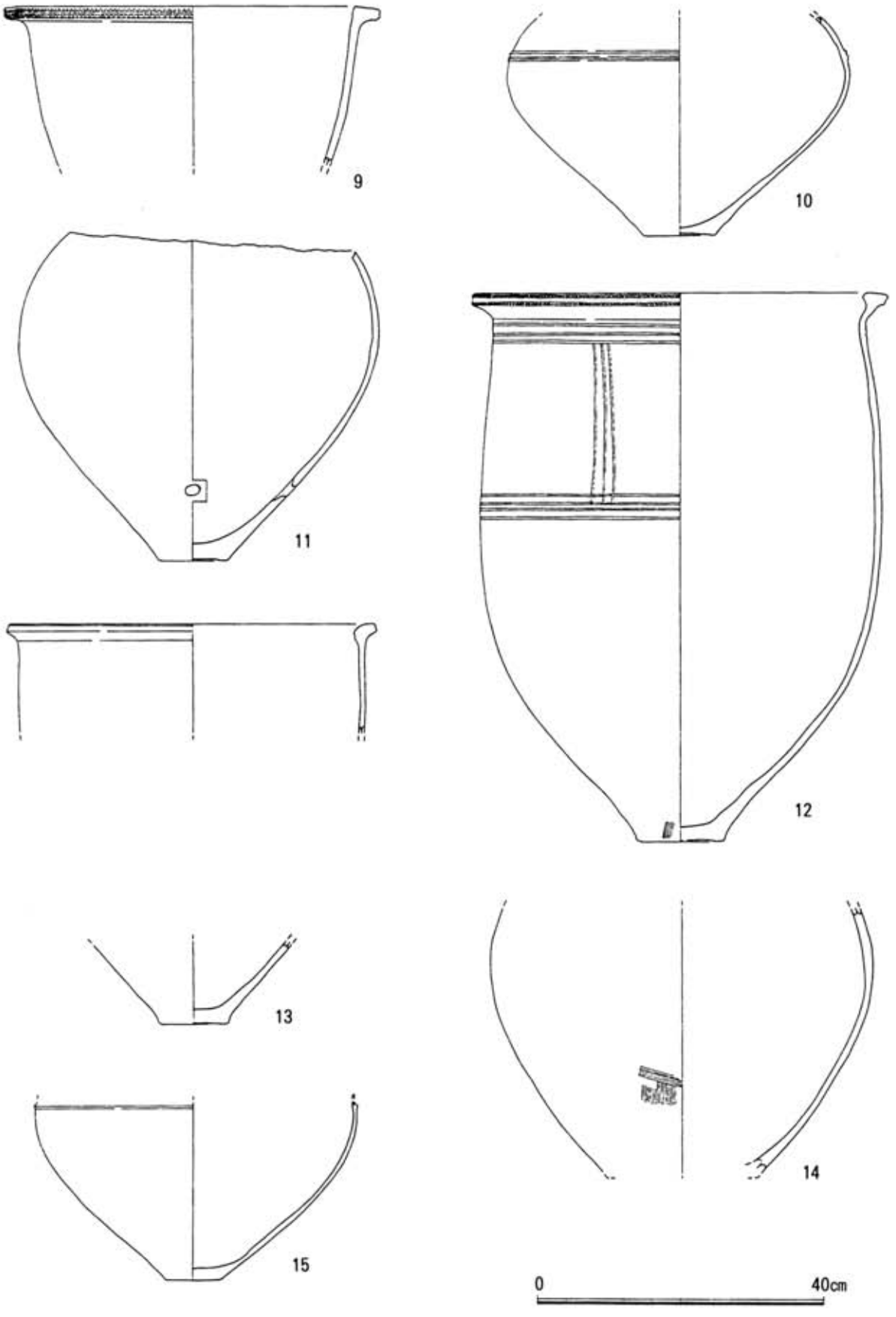


Fig. 17　SJ28・29・30・40・41甕棺実測図（1/8）

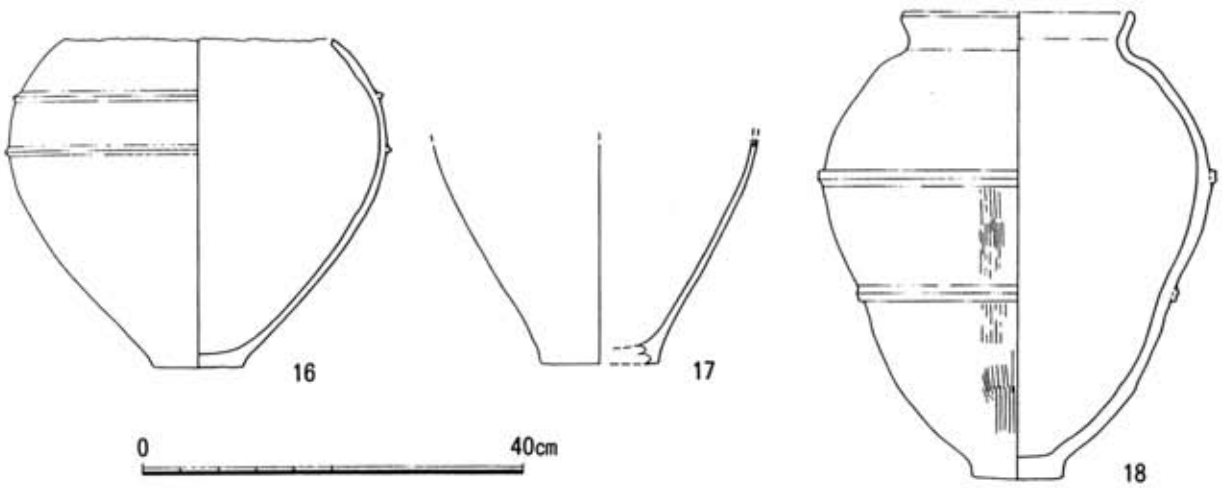


Fig. 18　SJ42・43・04甕棺実測図（1/8）

8はSJ27の上甕。胴部最大径は中位にある。

9はSJ28の上甕。口縁部内側は打ち欠く。口縁端部は連続のヘラ刻目を施す。10はSJ28の下甕に用いた壺。胴部最大径は中位にあり、そのやや上位に二条の断面三角突帯を張り付ける。

11はSJ29の下甕。胴部最大径は上位よりにあり、肩部より上部は打ち欠く。下半部に焼成後穿孔あり。12はSJ29の上甕。成人用の大形棺である。口縁端部に連続のヘラ刻目、体部上半部にタテとヨコ方向の3～4条の沈線を施す。口縁部内側は打ち欠く。

13はSJ30の甕。口縁部は逆L字形に近く、口縁部内側は打ち欠く。

14はSJ40の甕。胴部最大径は中位にある。

15はSJ41の壺。体部上半部はほぼ水平に欠損し打ち欠きか。胴部最大径は中位にあり、その位置に断面三角突帯を張り付ける。

16はSJ42。胴部最大径は上位よりにあり、その上下に断面三角突帯を張り付ける。肩部は水平に欠損しており打ち欠きか。

17はSJ43の甕。底部片のみ残る。

18はSJ04の甕。胴部最大径は上位にあり胴部に断面M字形の突帯を二条張り付ける。口縁部はくの字形である。

Tab. 3　堂の前遺跡甕棺一覧表（1）　※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
16－1（962526）	SJ24上	甕（甕棺）	底径　8.7	胴部中央よりやや上位に断面三角突帯を貼付ける。肩部に、半弧の線刻あり。	中粒～大粒砂粒混入	内外面橙色
16－2（962582）	SJ24下	壺（甕棺）	底径　9.4	胴部中央よりやや上位に断面三角突帯を貼付ける。	大粒砂粒混入	内外面赤橙色
16－3（962527）	SJ25上	壺（甕棺）	――	口縁部は打ち欠く。最大径の位置に断面三角突帯を貼付ける。	中粒～大粒砂粒混入	内外面褐色
16－4（961848）	SJ25下	甕（甕棺）	底径　7.2	胴部中央よりやや上位に断面三角突帯を貼付ける。	中粒～大粒砂粒混入	内外面橙色
16－5（961849）	SJ26上	甕（甕棺）	口径（51.4）	胴部中央に断面三角の突帯を貼付ける。口縁部にかけて、内傾し、口縁上端面も内に傾く。	中粒～大粒砂粒混入	内外面橙色
16－6（961850）	SJ26下	甕（甕棺）	底径　11.7	上半部を欠失する。底部内外面黒斑。外面タテハケ。	中粒～大粒砂粒混入	内外面橙色
16－7（962530）	SJ27下	甕（甕棺）	底径　10.5	肩部から口縁部にかけて欠失する。胴部中央よりやや上位に最大径あり。	大粒砂粒混入	内外面橙色
16－8（962533）	SJ27上	甕（甕棺）	――	最大径は中位にある。外面黒斑あり。	中粒～大粒砂粒混入	内外面褐色

Tab. 4　堂の前遺跡甕棺一覧表（2）　　※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
17－9（961844）	SJ28上	甕（甕棺）	口径　52.2	胴部中央より下半部は欠失。口縁部内側は打ち欠き。端部は連続ヘラ刻目あり。	中粒～大粒砂粒混入	内外面橙色
17－10（961842）	SJ28下	壺（甕棺）	底径　9.9	最大径は中位にあり、そのやや上位に、二条の三角突帯を貼付ける。	中粒砂粒混入	内外面橙色
17－11（961843）	SJ29下	甕（甕棺）	底径　9.5	最大径は上位にあり、下半部に穿孔あり。上半部打ち欠き。	大粒砂粒多量混入	内外面橙色
17－12（961846）	SJ29上	甕（甕棺）	口径　57.8 器高(76.5)	口縁端部は連続刻目あり。体部上半部に、タテとヨコの沈線あり。	中粒～大粒砂粒混入	内外面橙色
17－13（961847）	SJ30	甕（甕棺）	口径(51.5)	口縁部は逆L字形に近く、内側は打ち欠く。	大粒砂粒混入	内外面橙色
17－14（962534）	SJ40	甕（甕棺）	――	上半部は欠失する。胴部中央から底部にかけて、内湾する。	中粒～大粒砂粒混入	内外面橙色
17－15（961845）	SJ41	壺（甕棺）	底径（7.5）	胴部中央に断面三角の突帯を貼付ける。突帯より上半部を欠失する。	中粒～大粒砂粒混入	内外面橙色
18－16（962528）	SJ42	甕（甕棺）	底径　9.4	胴部中央と肩部の二列に断面三角突帯を貼付ける。	中粒～大粒砂粒混入	内外面橙色
18－17（962531）	SJ43	甕（甕棺）	底径(12.0)	平底の底部のみ遺存。	中粒～大粒砂粒混入	内外面褐色
18－18（962529）	SJ04	甕（甕棺）	口径(24.4) 器高(48.5)	最大径は、上位にあり、胴部に断面M字形突帯を貼付ける。口縁部はくの字形。	中粒～大粒砂粒混入	内外面黒褐色

② 弥生土器

堂の前遺跡、井ゲタ遺跡とも集落跡であるが土器の一括出土遺構はなく、土器も完形のものはなくその大部分は口縁部、底部片である。そのため、土器による遺構の時期決定のためには出土量の最も多い甕の口縁部、底部などの分類を行い、型式学的検討を行う必要がある。これは出土遺物の乏しい各遺構の時期決定のために有効な方法である。筆者はかって弥生時代中期の集落跡である佐賀県上峰町坊所三本松遺跡出土の土器を検討するに際して甕の口縁部、底部分類を行ったが、堂の前遺跡、井ゲタ遺跡でもそれを基にした分類を行ってみた。Fig19に分類図を掲載する。

堂の前遺跡出土の弥生土器の器種には甕、広口壺、袋状口縁壺、器台、鉢などがあり、一覧表をTab5～8に掲載する。Fig20は遺構出土の甕口縁部。Fig21は包含層出土の甕口縁部。Fig22は包含層出土の甕口縁部、底部とその他の器種である。以下、遺物番号順、分類順に土器の説明を記述する。

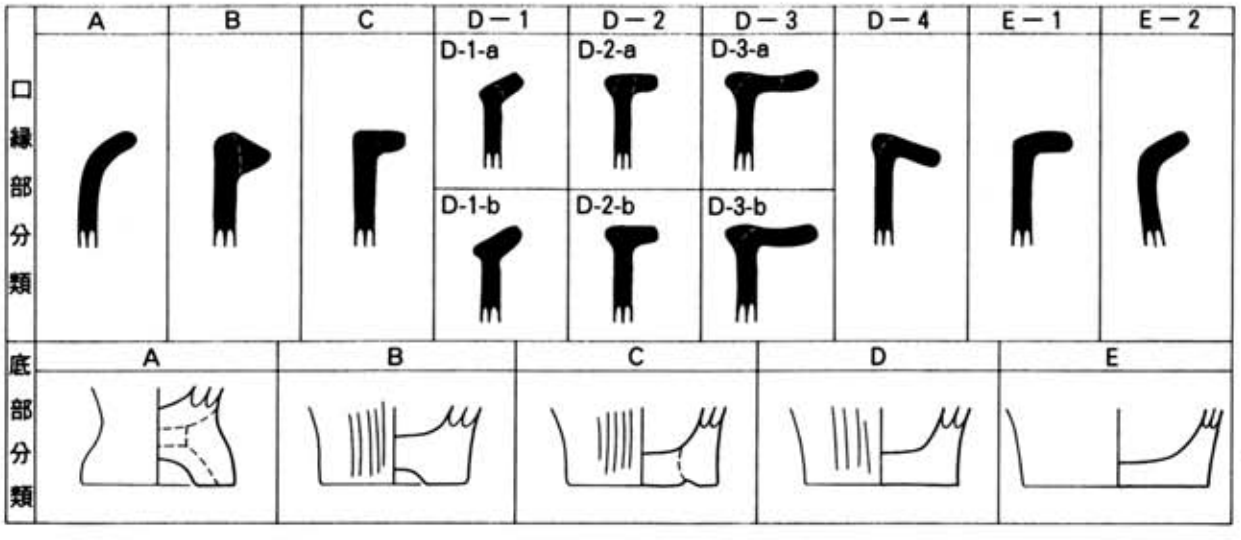


Fig. 19　甕口縁部・底部分類図

19,20はSK16出土の甕口縁部。19はD-2類-a、20はC類である。20は口縁部下端面にナデによる稜がつく。21,22はSK11出土の甕口縁部。21はD-2類、22はD-3-b類である。23,24はSK05出土の甕口縁部。23はD-4類、24はD-2-b類である。23は口縁部内側上方に粘土帯を張り付けることによって突出する。25～30はSK19出土の甕口縁部。25はD-2-b類、26はD-2類、27,28,29はE-1類、30はE-2類である。28は口縁直下外面に三角突帯を張り付ける。27は口縁直下外面にナデによりかすかな稜がつく。31はSK02出土の甕口縁部。D-2-b類。SK02からは図示していないがこの他にE-1類が1点、E-2類が3点出土している。32,33はSK06出土の甕口縁部。ともにE-2類である。33は口縁部内側の稜がやや明瞭につく。34,35,36はSK09出土の甕口縁部。すべてE-2類である。図示していないがこの他にC類が1点、D-2類が1点出土している。37～71は甕口縁部。39がSK23出土で、それ以外すべて包含層出土である。37,38,39はA類。3点とも口縁端部全面にヘラ状工具による連続した刻みをつける。図示していないが口縁端部下端面にヘラ刻みがあり、口縁下に段をもつ口縁部破片が1点出土している。40,41,42はB類。胴部から口縁部にかけて内傾し断面三角形の粘土帯を張り付けて口縁部とする。40,41の口縁上端面は平坦に近く、42は肥厚した断面三角形となる。43,44,45,46,47,48,49,53,54,57,60,61,62,63,64,65,66はD-2-b類。44は端部をやや肥厚する。54は口縁部上端面が湾曲する。60,66は口縁部直下に断面三角形の突帯を張り付ける。50,51はD-1-b類。51は内側に口縁部下端面がやや湾曲する。52,55,56はD-4類である。58,67はE-1類である。67は口縁部内側の稜が比較的明瞭につく。68,69,71はE-2類。69は口縁部内側の稜が明瞭につく。71は外面タテハケ。59,70は中型甕棺の口縁部片。70は口縁直下に断面台形の突帯を張り付ける。

72～90は甕、壺の底部。胴部にかけて大きく開くものを壺と認識したが中には判断に迷うものもある。A類はなくB類，C類，D類，E類がある。72はSK05、73,74,76はSK19、77はSK02、78はSK09出土で他は包含層出土である。

79は甕の底部。断面は台形で平底である。堂の前遺跡出土の土器の中では古く位置づけられる。

73,74,75,77,85,86,90は甕底部E類である。底径7～9cm、底部の厚さ0.5cm～1.7cmである。底部の厚さでいえば75が厚さ0.5cmで他は1cm前後に分類できる。76は甕底部D類である。底径7.0cm、厚さ1cmで外面タテハケである。80は甕底部B類である。底径6.5cmで、底部中央が窪む。外面タテハケ。81,82,83,84,は甕底部C類である。底径6～7cmで、底部の厚さ0.7cm～1.2cmである。底面には粘土帯接合のための円形の窪みがつく。

72,78,87,88,89は壺の底部である。91,92,93,94は広口壺の口縁部片。すべて包含層出土。4点とも鋤先口縁であり、型式的には92→93→94→91の変化が考えられる。95は鉢か。口縁部はT字形に近く口縁部内側に突出する。96,97,98は袋状口縁壺の口縁部片。96,97は袋状に内湾する。98の器壁は厚く口縁部外面に明瞭な稜がつき、内湾気味に折り返す。端部は面取りされる。

99,100,102,103は器台。103はSK10出土で他は包含層出土。99の裾端部は垂直に下がり、下端面は尖る。100の裾部は外反気味に開く。102の器壁は厚く裾部にかけて外反気味に開く。端部は面とりされる。103の器壁は薄く裾部にかけて外反気味に開く。101は支脚、SK02出土。完形で断面形は円形で、上端面から棒で中位まで孔をあける。

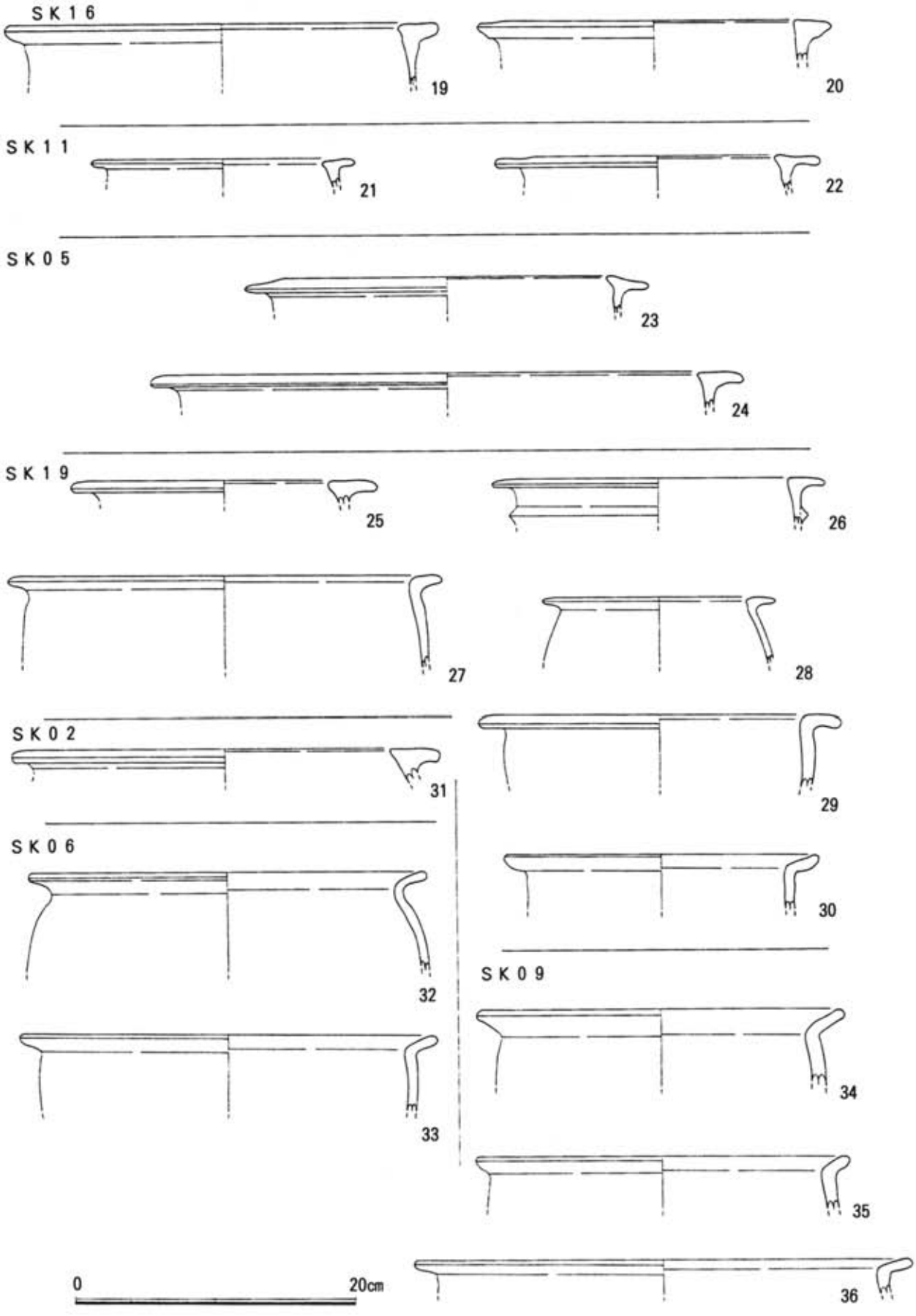


Fig. 20　遺構出土弥生土器（1/4）

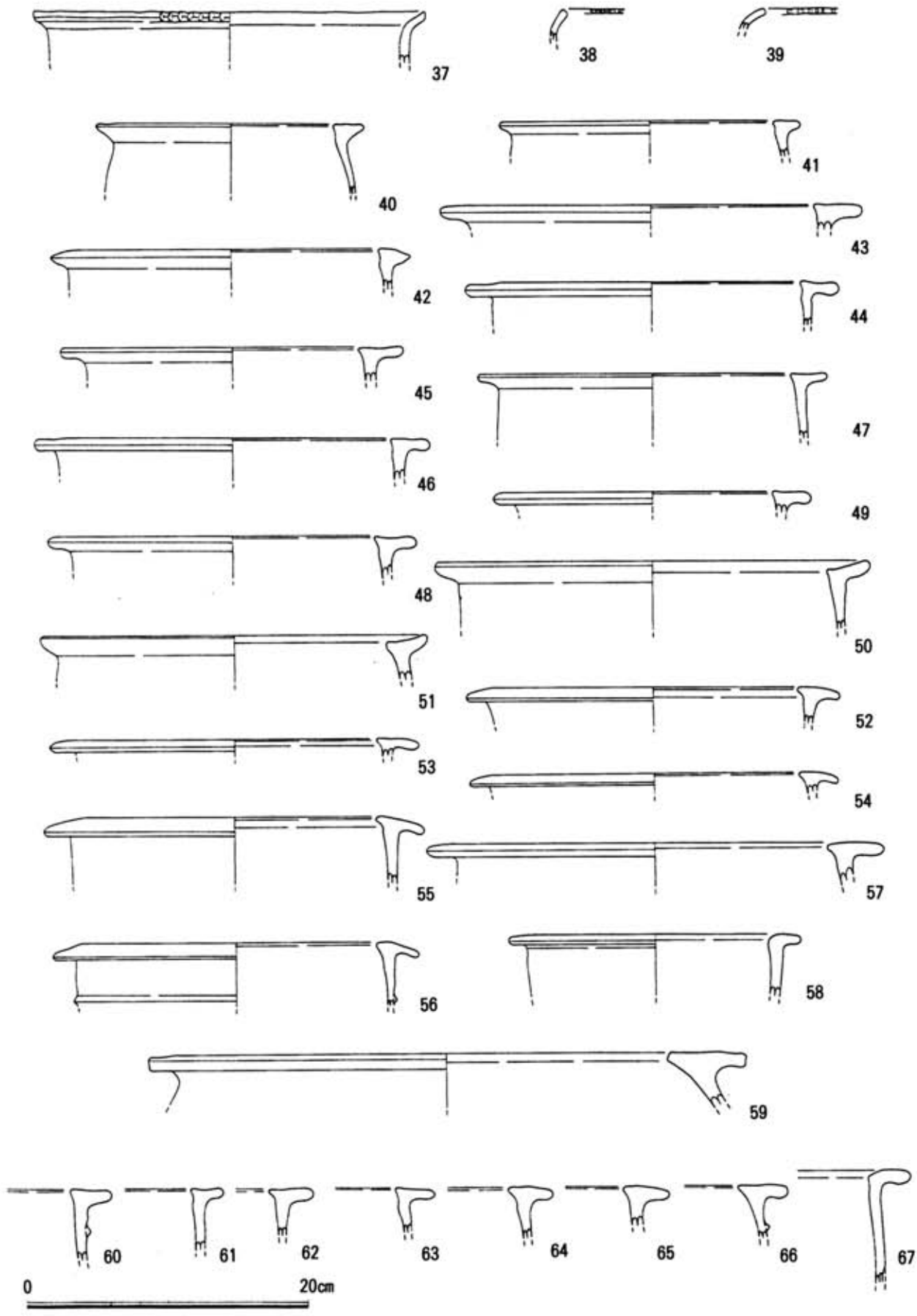


Fig. 21　包含層出土弥生土器（1/4）

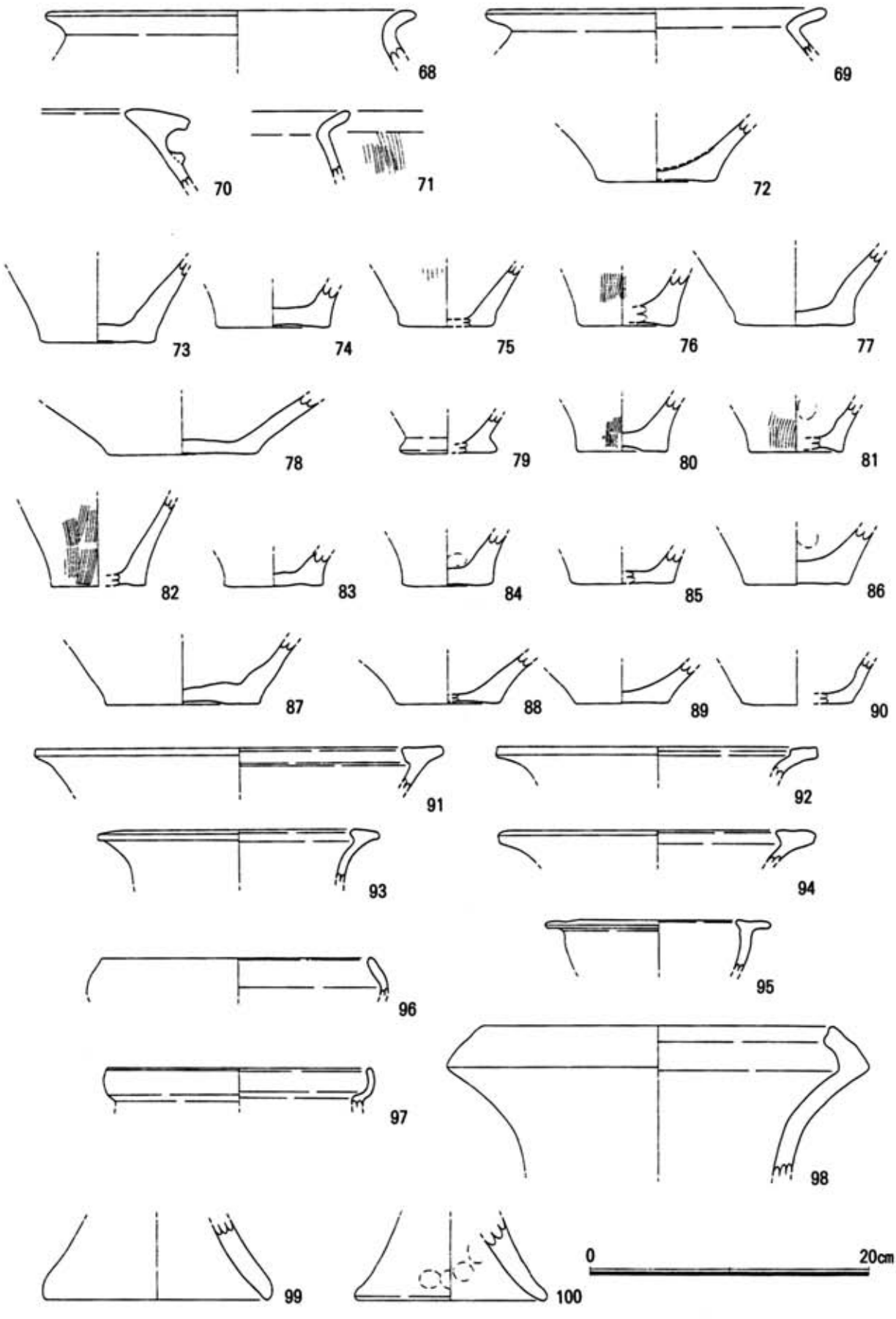


Fig. 22　遺構、包含層出土弥生土器口縁部・底部(1/4)

Tab. 5　堂の前遺跡弥生土器一覧表（1）

※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
20－19（962566）	SK16	甕（弥生土器）	口径（31.2）	口縁部は、逆L字形で、上端面はわずかに窪む。	中粒砂粒多量混入	内外面橙色
20－20（962567）	SK16	甕（弥生土器）	口径（25.4）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦で、下端面はナデにより稜線がつく。	中粒砂粒混入	外面　橙色 内面　褐色
20－21（962573）	SK11	甕（弥生土器）	口径（18.9）	口縁部は短い逆L字形。	大粒砂粒混入	内外面茶褐色
20－22（962572）	SK11	甕（弥生土器）	口径（23.3）	口縁部は逆L字形で、上端面は若干窪み、端部は肥厚する。	大粒砂粒混入	内外面橙色
20－23（962553）	SK05B	甕（弥生土器）	口径（28.9）	口縁部は丁字形に近く、端部にかけて下がる。	大粒砂粒混入	内外面黄褐色
20－24（962554）	SK05B	甕（弥生土器）	口径（42.4）	口縁部は逆L字形で上端面は平坦である。	大粒砂粒混入	内外面橙色
20－25（963303）	SK19	甕（弥生土器）	口径（22.0）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	大粒砂粒混入	内外面橙色
20－26（963307）	SK19	甕（弥生土器）	口径（23.8）	口縁部は逆L字形で、口縁下に三角突帯を貼付ける。	中粒砂粒混入	内外面赤褐色
20－27（963309）	SK19	甕（弥生土器）	口径（31.1）	口縁部は折り返しによる逆L字形で、口縁直下外面にナデによる稜がつく。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面赤褐色
20－28（963311）	SK19	甕（弥生土器）	口径（16.8）	口縁部は短い逆L字形。	大粒砂粒混入	内外面黄褐色
20－29（963301）	SK19	甕（弥生土器）	口径（26.0）	口縁部は逆L字形で上端面は平坦である。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面赤褐色
20－30（963308）	SK19	甕（弥生土器）	口径（22.6）	口縁部はくの字形に折る。口縁外面はやや内湾する。	大粒砂粒混入	内外面褐色
20－31（962562）	SK02	甕（弥生土器）	口径（30.7）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
20－32（962546）	SK06	甕（弥生土器）	口径（28.6）	口縁部はくの字形に折り返す。	大粒砂粒混入	外面　橙色 内面明褐色
20－33（962545）	SK06	甕（弥生土器）	口径（29.8）	口縁部はくの字形に折り返し、内面には稜線がつく。	大粒砂粒混入	内外面褐色
20－34（962541）	SK09	甕（弥生土器）	口径（26.4）	口縁部はくの字形に折り返し、内面には稜線がつく。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
20－35（962542）	SK09	甕（弥生土器）	口径（26.7）	口縁部は短く、くの字形に折り返す。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
20－36（962543）	SK09	甕（弥生土器）	口径（35.7）	口縁部はくの字形に折り返し、内面には不明瞭な稜線がつく。	大粒砂粒混入	内外面黒褐色
21－37（963317）	包含層	甕（弥生土器）	口径（28.0）	口縁部は外反に開き、口唇部にヘラ状工具による刻目あり。	中粒砂粒多量混入	外面　褐色 内面　橙色
21－38（970192）	E-3包含層	甕（弥生土器）	――	口縁部は外反に開き、口唇部にヘラ状工具による刻目あり。	細砂粒混入	内外面明褐色
21－39（962568）	SK23	甕（弥生土器）	――	口縁部は外反に開き、口唇部にヘラ状工具による刻目あり。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
21－40（970818）	包含層	甕（弥生土器）	口径（19.2）	口縁部は短い逆L字形で、上端面は平坦である。	大粒砂粒混入	外面　橙色 内面明褐色
21－41（970798）	I-11包含層	甕（弥生土器）	口径（21.6）	口縁部は短い逆L字形で、上端面は平坦気味である。	大粒砂粒少量混入	内外面明褐色
21－42（970810）	I-13包含層	甕（弥生土器）	口径（25.6）	口縁部は短い逆L字形で端部にかけて下がる。	大粒砂粒多量混入	内外面明褐色
21－43（970790）	包含層	甕（弥生土器）	口径（30.0）	口縁部は逆L字形で上端面は平坦である。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
21－44（970835）	包含層	甕（弥生土器）	口径（26.6）	口縁部は逆L形で、上端面は平坦、端部は丸味をもって肥厚する。	中粒砂粒混入	内外面褐色
21－45（970785）	包含層	甕（弥生土器）	口径（24.4）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	大粒砂粒混入	内外面橙色
21－46（970215）	E-2包含層	甕（弥生土器）	口径（28.4）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面橙色
21－47（970228）	E-5包含層	甕（弥生土器）	口径（25.0）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面明褐色
21－48（970796）	G,H-10包含層	甕（弥生土器）	口径（26.3）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦で内側にやや突出する。	細砂粒混入	内外面明褐色
21－49（970811）	I-13包含層	甕（弥生土器）	口径（22.8）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦気味。端部は丸味をもって肥厚する。	中粒、大粒砂粒混入	内外面明褐色
21－50（970782）	包含層	甕（弥生土器）	口径（31.2）	口縁部は逆L字形で、内側にかけて傾く。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
21－51（970229）	E-5包含層	甕（弥生土器）	口径（27.7）	口縁部は逆L字形で、上端部は窪む。下端面は内湾する。	中粒砂粒少量混入	内外面明褐色
21－52（970231）	E-5包含層	甕（弥生土器）	口径（26.8）	口縁部は逆L字形で、内側に突出する。上端面は湾曲する。	金雲母少量混入 中粒砂粒混入	内外面明褐色

Tab. 6　堂の前遺跡弥生土器一覧表（2）

※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
21－53（970878）	H-11包含層	壺（弥生土器）	口径（26.4）	口縁部は逆L字形で、端部は肥厚する。	金雲母少量混入 細砂粒混入	内外面明褐色
21－54（970816）	包含層	壺（弥生土器）	口径（26.4）	口縁部は逆L字形、根上端面は内湾し、端部にかけて下がる。	大粒砂粒少量混入	内外面明橙色
21－55（970868）	I,J-8包含層	壺（弥生土器）	口径（27.2）	口縁部はT字形に近く、端部にかけて下がる。	金雲母少量混入 細砂粒混入	内外面明褐色
21－56（970814）	包含層	壺（弥生土器）	口径（26.2）	口縁部は逆L字形で、端部にかけて下がる。口縁下に三角突帯を貼付ける。	大粒砂粒混入	内外面橙色
21－57（970797）	I-11包含層	壺（弥生土器）	口径（32.6）	口縁部は逆L字形で、上端面はわずかに内湾する。	中粒砂粒少量混入	内外面明褐色
21－58（970819）	包含層	壺（弥生土器）	口径（21.0）	口縁部は逆L字形に折り返す。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面黒褐色
21－59（970847）	B,C,D-3包含層	壺（弥生土器）	口径（42.7）	口縁部上端面は平坦で、端部は面とりされる。	大粒砂粒多量混入	内外面橙色
21－60（970809）	I-13包含層	壺（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦で、口縁直下に三角突帯を貼付ける。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	内外面橙色
21－61（970855）	F-2包含層	壺（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は窪む。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面明褐色
21－62（970227）	E-5包含層	壺（弥生土器）	――	口縁部は短い逆L字形で、上端面は平坦である。	中粒、大粒砂粒混入	内外面橙色
21－63（970817）	包含層	壺（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面橙色
21－64（970806）	I-12包含層	壺（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側に突出する。	中粒、大粒砂粒混入	内外面明褐色
21－65（970800）	I-11包含層	壺（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側に突出する。	大粒砂粒混入	内外面橙色
21－66（970815）	包含層	壺（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。口縁下に三角突帯を貼付ける。	大粒砂粒混入	内外面橙色
21－67（970873）	包含層	壺（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形に折り返す。	大粒砂粒多量混入	内外面褐色
22－68（970235）	E-5包含層	壺（弥生土器）	口径（26.5）	口縁部はくの字形に外反し、内面に稜はつかない。	中粒砂粒混入	内外面橙色
22－69（970867）	I,J-8包含層	壺（弥生土器）	口径（24.4）	口縁部はくの字形に外反し、端部はわずかに肥厚し、内面に稜がつく。	細砂粒混入	内外面明褐色
22－70（970857）	F-3包含層	壺（弥生土器）	――	口縁部上端面は平坦で端部は面とりされ、口縁部直下に台形の突帯を貼付ける。	中粒～大粒砂粒混入	内外面明褐色
22－71（970874）	包含層	壺（弥生土器）	――	口縁部はくの字形に折り返し、内面に不明瞭な稜がつく。外面タテハケ。	中粒砂粒少量混入	内外面橙色
22－72（962551）	SK05B	壺（弥生土器）	底径（8.6）	平底で胴部にかけて外反して大きく開く。	中粒～大粒砂粒混入	外面　橙色 内面明褐色
22－73（963306）	SK19	壺（弥生土器）	底径（8.2）	平底で胴部にかけて直線的に開く。	中粒砂粒混入	外面　橙色 内面　褐色
22－74（963302）	SK19	壺（弥生土器）	底径（8.2）	平底で胴部外面タテハケ。	大粒砂粒混入	外面　橙色 内面　褐色
22－75（962557）	SK02	壺（弥生土器）	底径（6.8）	平底で、底部は薄く、胴部にかけて開く。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
22－76（963304）	SK19	壺（弥生土器）	底径（7.0）	平底で中央部にかけてやや窪む。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	外面　橙色 内面黒褐色
22－77（962555）	SK02	壺（弥生土器）	底径（8.5）	平底で胴部にかけて開く。	大粒砂粒多量混入	内外面明褐色
22－78（962535）	SK09	壺（弥生土器）	底径（10.8）	平底で胴部にかけて大きく開く。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
22－79（970854）	F-2包含層	壺（弥生土器）	底径（7.0）	平底で底部断面形は台形を呈す。	中粒砂粒混入	内外面茶褐色
22－80（970787）	包含層	壺（弥生土器）	底径　6.5	底部中央は径3cmほど窪む。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	外面　橙色 内面明褐色
22－81（970802）	I-11包含層	壺（弥生土器）	底径（6.8）	底部は上げ底で、外面タテハケ。	中粒砂粒少量混入	内外面明褐色
22－82（970865）	I,J-8包含層	壺（弥生土器）	底径（6.8）	底部に粘土帯接合痕あり。外面タテハケ。	中粒砂粒少量混入	外面　橙色 内面　褐色
22－83（970872）	P-55	壺（弥生土器）	底径（7.2）	底部に粘土帯接合痕あり。	金雲母少量混入 中粒砂粒混入	外面　橙色 内面明褐色
22－84（970825）	包含層	壺（弥生土器）	底径（6.6）	底部はわずかに上げ底になり、側面は垂直のち外反気味に開く。	中粒砂粒混入	外面　橙色 内面明褐色
22－85（970233）	E-5包含層	壺（弥生土器）	底径（7.5）	平底で胴部にかけて直線気味に開く。	中粒～大粒砂粒混入	外面赤褐色 内面黒褐色
22－86（970834）	包含層	壺（弥生土器）	底径（7.6）	平底で胴部にかけて外反気味に開く。	大粒砂粒混入	内外面明褐色

Tab. 7　堂の前遺跡弥生土器一覧表（3）　　※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
22－87（970863）	I,J-8包含層	壺（弥生土器）	底径　11.0	平底で胴部にかけて大きく開く。	中粒～大粒砂粒混入	内外面橙色
22－88（970822）	包含層	壺（弥生土器）	底径（7.6）	平底で胴部にかけて外反しながら大きく開く。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
22－89（970880）	H-11包含層	壺（弥生土器）	底径（6.8）	平底で胴部にかけて大きく開く。	細砂粒混入	内外面橙色
22－90（970823）	包含層	甕（弥生土器）	底径（8.0）	平底で胴部にかけて内湾気味にたちあがる。	中粒砂粒混入	外面明褐色 内面黒褐色
22－91（970850）	D-3包含層	広口壺（弥生土器）	口径（29.2）	口縁部上端面は平坦で、内側は断面三角形に突出する。	中粒砂粒混入	内外面橙色
22－92（970232）	E-5包含層	広口壺（弥生土器）	口径（22.9）	口縁部上端面は平坦で、端部は面とりされ、頸部は外反する。	中粒砂粒混入	内外面橙色
22－93（970230）	E-5包含層	広口壺（弥生土器）	口径（20.0）	口縁部上端面は平坦で、内側は断面三角形に突出する。	細砂粒混入	内外面明褐色
22－94（970870）	P264上面	広口壺（弥生土器）	口径（22.8）	口縁部上端面は平坦で内側は断面三角形に突出する。黒斑あり。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
22－95（970804）	I-12包含層	鉢（弥生土器）	口径（16.2）	口縁部はT字形に近く、胴部にかけて内湾する。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
22－96（962571）	SK37	袋状口縁壺（弥生土器）	口径（19.4）	口縁部は袋状に内湾する。	大粒砂粒少量混入	外面　橙色 内面明褐色
22－97（962565）	SK02	袋状口縁壺（弥生土器）	口径（19.0）	口縁部は袋状に内湾する。	大粒砂粒混入	内外面橙色
22－98（970214）	E-2包含層	袋状口縁壺（弥生土器）	口径（25.1）	口縁部外面に稜がつき、内湾気味に内側に折り返す。内面ヨコナデ。	中粒砂粒混入	内外面橙色
22－99（970877）	H-11包含層	器台（弥生土器）	底径（16.0）	下外方に開き、下端面は尖る。	大粒～中粒砂粒混入	内外面橙色
22－100（970836）	包含層	器台（弥生土器）	底径（13.8）	下外方に開き、下端面は尖る。指頭圧痕あり。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面橙色
23－101（962556）	SK02	支脚（弥生土器）	器高　13.5 底径（9.3）	断面は円形で、下半部は中実。上端面から円形の孔をあける。	大粒砂粒多量混入	内外面橙色
23－102（970218）	E-2包含層	器台（弥生土器）	底径　9.3	器壁は厚く、中空で、裾端部にかけて開く。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面橙色
23－103（962574）	SK10	器台（弥生土器）	底径　10.5	裾部にかけ、外反気味に開く。	大粒砂粒混入	内外面橙色

③　土師器

古墳時代中期の土師器を主体とし、奈良時代の土師器も若干出土している。これらのほとんどは包含層出土であり、遺構出土としては104,105,106,113があるが器種の組み合わせがわかるような一括資料はない。包含層出土としては須恵器とともにE-3グリッド出土が目立つ。古墳時代中期の土師器は104～121で甕、鉢、高坏、壺がある。同じく包含層から出土している須恵器なども考慮するとその時期は5世紀前半～中頃に相当すると思われる。以下、器種別に説明する。

104～110は甕である。104をのぞいてすべて口縁部破片であり、口径も反転復元径である。口縁部形態では大きくⅠ類－直線的に外方にひらくもの、Ⅱ類－外反するものに分類できる。さらに口縁部と体部内面の稜線の有無や口縁端部面とりなどの属性で細分が可能かと思われる。Ⅰ類からⅡ類へ、稜線の有りから無し、端部面取りの有りから無しの型式変化が考えられる。甕の中では104、108が直線的にたちあがり、内面の稜線が明確につき、端部が面とりされるなど図中の甕の中では古式の属性をもつ。それに対して107は口縁部が外反し、器壁も厚くなるなどより新式の属性をもつ。

111～116は鉢、119,120は手ずくねの小形鉢である。鉢もほとんどが破片であり完形品はない。復元口径は11cm～16cmである。形態はすべて体部に丸味をもつもののの口縁部の形態で型式分類ができる。Ⅰ類－体部から口縁部にかけてやや開き気味のもの、Ⅱ類－口縁部が内湾するもの、Ⅲ類－体部は丸味をもちながらも口縁端部で外反するものなどがある。Ⅰ類は117、Ⅱ類は111,112,113、Ⅲ類は114,115,116である。この他に図示していないが図化した鉢にⅠ類1点、Ⅱ類2点、Ⅲ類3

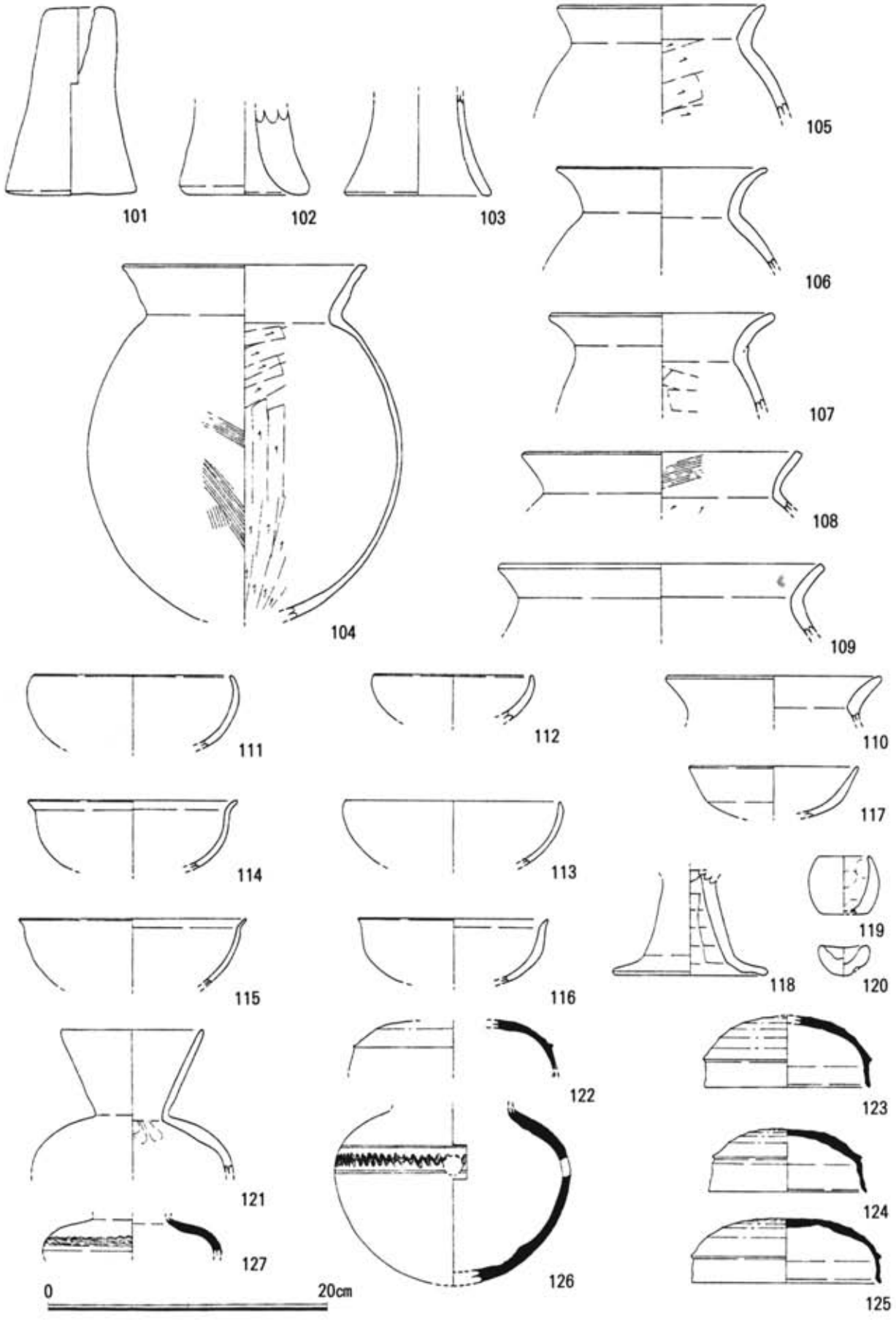


Fig. 23　包含層出土土師器、須恵器（1/4）

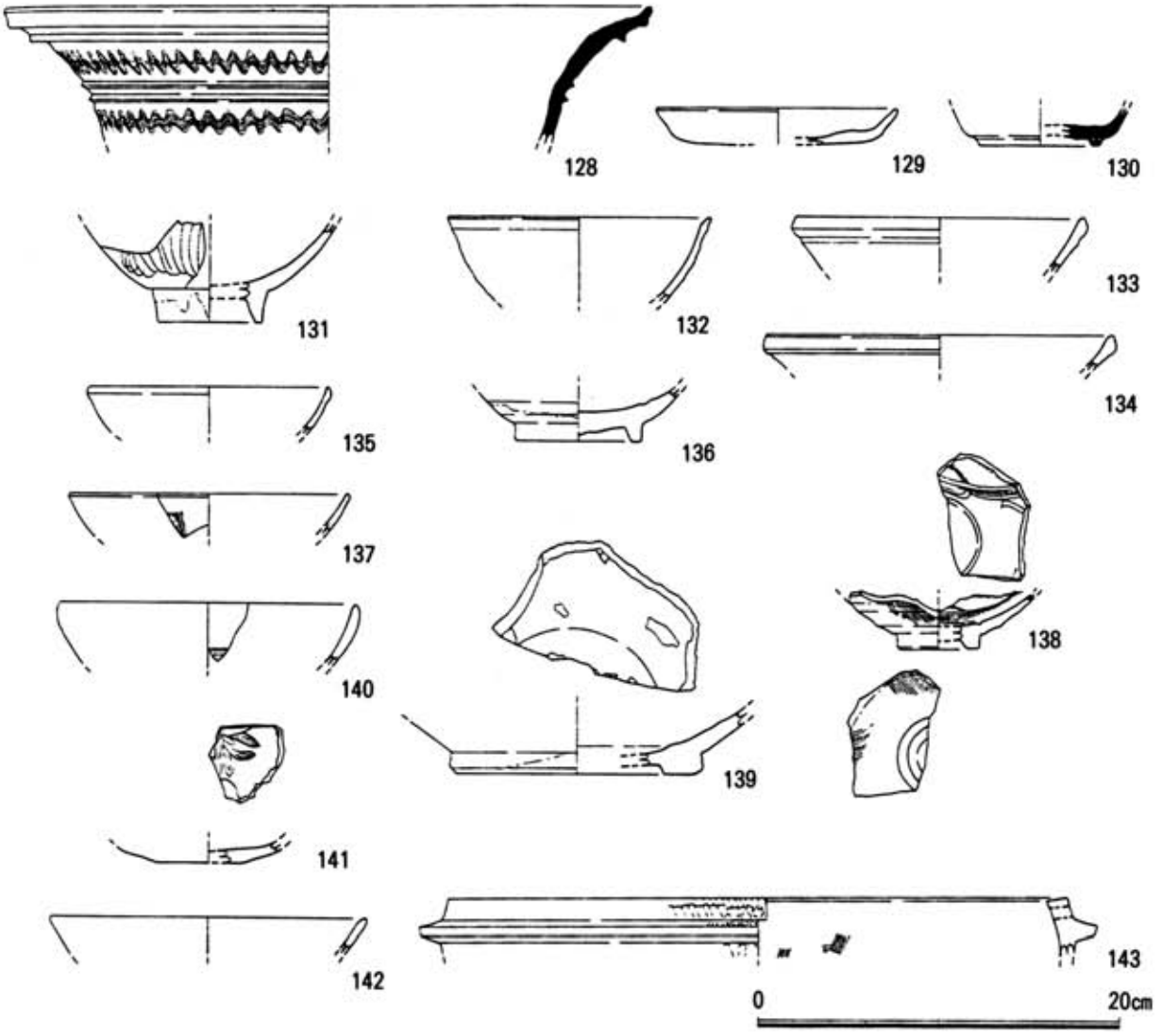


Fig. 24　包含層出土須恵器、陶磁器（1/4）

点があり、合わせるとⅠ類2点、Ⅱ類5点、Ⅲ類6点となる。この型式変化はⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類であろう。

奈良時代の土師器として1点のみ図示している。129は皿である。復元口径13.2cm、器高2.0cmを測る。調整不明瞭である。

④　須恵器

ほとんどが古墳時代中期の須恵器で奈良時代の須恵器を1点図示している。すべてが包含層出土であり土師器とほぼ同時期と考えて差し支えないと思われる。とくにE-3グリッドの出土が目立つ。古墳時代の須恵器はTK23型式段階と思われる。

古墳時代中期の須恵器として122～128がある。122～125は杯蓋で、完形品はない。いずれも天井部と口縁部の境に比較的鋭い稜をもち、口唇部内面に沈線あるいは段をもつ。また、天井部の約3/4をヘラケズリするなどの共通した特徴をもつ。123,124の天井部はやや丸味をもつが125は平坦な天井部である。122の外面の断面三角形の稜はナデることによってつくりだす。ナデによる稜線もつく。天井部にヘラ記号らしき線刻の一部がある。123は器高5.1cmと比較的高い。口縁部中位で若干外反気味である。124は器高4.4cmで口唇部内面は段をつくる。125は口径13.5cm、器高4.6cmで

口唇部内面に段をつくる。126～127は瓶である。126は体部約1/3残存。127は肩部約1/3残存。ともに肩部の二条沈線の間に連続した規則ある櫛描波状文を施す。126は体部の上位に最大径がある。底部内面は凹凸を残し、それ以外はナデにより丁寧に仕上げる。破片の一部に円形の孔の痕跡がある。外からの穿孔である。127は肩部のみの残存で二条の沈線は不明瞭で部分的に残る。体部の穿孔は残存破片に認められなかったが器形から瓶とした。

128は甕の口縁部破片で約1/8残存する。口縁部は外反し、端部は断面三角形で上方につまみあげたように仕上げる。口縁部直下に断面三角形の突帯を一条、その下に櫛描波状文を施し、さらにその下に二条の三角突帯をおいて櫛描波状文を施す。

奈良時代の須恵器として1点図示した。130は高台付杯身である。底部外面にヘラ削り痕が一部残存する。

Tab. 8　堂の前遺跡土師器・須恵器一覧表　　※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
23－104（963321）	P193	甕 土師器	口径（16.5）	胴部最大径は中位。口縁部は直線気味に広がる。胴部内面ナナメ方向ヘラケズリ。	大粒砂粒多量混入	内外面灰白色
23－105（962548）	SK05A	甕 土師器	口径（14.5）	口縁部は外反。内面稜線までヘラケズリ。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
23－106（962544）	SK09	甕 土師器	口径（15.0）	口縁部は大きく外反。内面稜線までヘラケズリ。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
23－107（970856）	包含層 F-2	甕 土師器	口径（15.7）	口縁部は外反。内面稜線までヘラケズリ。外面ナナメ方向ハケ目。	大粒砂粒多量混入	内外面橙色
23－108（970204）	包含層 E-3	甕 土師器	口径（19.2）	口縁部は、くの字に屈曲する。口縁端部面とり、体部内面ヘラケズリ。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
23－109（970205）	包含層 E-3	甕 土師器	口径（22.9）	口縁部はやや外反気味。	大粒砂粒混入	外面明褐色 内面灰白色
23－110（970859）	包含層 F-5	甕 土師器	口径（15.2）	口縁部は外反する。	中粒砂粒多量混入	外面赤褐色 内面　橙色
23－111（970199）	包含層 E-3	鉢 土師器	口径（14.0）	体部中位から口縁端部にかけて内湾する。	金雲母混入 砂粒混入	外面　橙色 内面灰白色
23－112（970200）	包含層 E-3	鉢 土師器	口径（11.2）	体部中位から口縁端部にかけて内湾する。	金雲母混入 砂粒混入	内外面明褐色
23－113（962550）	SK05A	鉢 土師器	口径（15.4）	体部は丸味をもち、口縁端部は、内湾する。調整不明瞭。	中粒砂粒混入	内外面灰白色
23－114（970198）	包含層 E-3	鉢 土師器	口径（14.7）	体部は丸味をもち、口縁端部は、外反する。調整不明瞭。	緻密	内外面橙色
23－115（970221）	包含層 E-2	鉢 土師器	口径（16.1）	体部は丸味をもち、口縁端部は、短く外反する。体部タテハケ。口縁部ヨコハケ。	緻密	内外面橙色
23－116（970195）	包含層 E-3	鉢 土師器	口径（13.4）	体部中位で屈曲し、口縁端部は、わずかに外反する。調整不明瞭。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
23－117（970197）	包含層 E-3	鉢 土師器	口径（12.0）	体部中位で、ゆるやかに屈曲し、口縁端部は、直線的にたちあがる。	小粒砂粒少量混入	内外面橙色
23－118（963316）	SJ30	高杯 土師器	底径（11.1）	脚裾部は屈曲し、外方に大きく開く。脚部内面ヘラケズリ。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
23－119（970794）	包含層 G,H-10	手づくね鉢 土師器	口径（3.6） 器高　4.1	底部は平坦。体部は、丸味をもつ。	中粒砂粒混入	内外面橙色
23－120（970829）	包含層	手づくね鉢 土師器	口径（3.3） 器高（2.1）	指で成形。粗雑なつくりである。	大粒砂粒混入	内外面灰黒色
23－121（970838）	包含層	壺 土師器	口径（10.0）	口頸部はラッパ状に開く。肩部内面に指頭圧痕あり。	緻密	内外面橙色
23－122（970208）	包含層 E-3	杯蓋 須恵器	――	天井部3/4ヘラケズリ。	砂粒混入	内外面灰色
23－123（970206）	包含層 E-3	杯蓋 須恵器	口径（11.7） 器高（5.1）	口唇部内面沈線あり。天井部3/4ヘラケズリ。	緻密	外面　灰色 内面灰褐色
23－124（970869）	包含層 I,J-8	杯蓋 須恵器	口径（11.1） 器高　4.4	口唇部内面有段。天井部3/4ヘラケズリ。	緻密	内外面灰色
23－125（970207）	包含層 E-3	杯蓋 須恵器	口径（13.5） 器高（4.6）	口唇部内面有段。天井部3/4ヘラケズリ。	緻密	内外面灰色
23－126（970841）	包含層	瓶 須恵器	胴径（16.9）	胴部上位に最大径あり。肩部、二条沈線の間に櫛描波状文を施す。	砂粒少量混入	内外面灰色
23－127（970209）	包含層 E-3	瓶 須恵器	――	肩部に櫛描波状文施文。	緻密	内外面灰白色
24－128（970839）	包含層	甕 須恵器	口径（35.6）	口縁端部は断面三角形にしあげる。断面三角形突帯が三条あり、櫛描波状文施文。	緻密	外面　灰色 内面灰白色
24－129（970837）	包含層	皿 土師器	口径（13.2） 器高　2.0	口縁部は外上方に開く。調整不明瞭。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面灰白色
24－130（970812）	包含層 I-13	高台付杯 須恵器	底径（6.7）	底部外面ヘラケズリのちナデ。	緻密	内外面灰色

⑤ 中世・近世の土器類

中世、近世の土器として陶磁器、瓦器椀、石鍋がある。131～143であるがすべて遺構検出時に出土したもので包含層出土としている。

131～136は白磁椀である。131は高台付き椀の底部片である。体部から高台部の境付近まで施釉される。高台は断面逆台形で細く高く直立する。体部外面に連続した縦方向の細線を施す。132～135は白磁椀口縁部破片である。口縁端部形態は玉縁状を呈するものとそうでないものがある。132の口縁端部は玉縁状をなさない。体部は丸味をもち、口唇部内面は尖り気味に仕上げる。口縁部外面に細い一条の稜線がつく。133～135は玉縁状の口縁である。133は若干厚めに施釉される。134は口縁端部外面直下に稜線がつく。135は133,134に比べ小ぶりの椀であり玉縁も小さい。136は高台付き椀の底部片である。体部下半まで施釉される。見込みの部分を強く押さえ窪ませて段をつくる。

137～138は同安窯系青磁椀である。ともに色調、胎土は類似しており同一個体の可能性もある。137は口縁部破片であり体部から口縁部にかけて内湾気味にたちあがる。外面に縦方向の細線を施す。138は高台付き椀の底部片である。体部のやや下半気味まで施釉され、体部外面下半は露胎でヘラ削り痕が残る。高台部は削り出しによりつくる。体部外面に細線、内面に片彫りの文様を施す。見込みに段をもつ。

139は関西系陶器である。高台付き鉢で、見込みに窯道具釉着痕が二箇所に残る。体部から高台部の境まで施釉する。

140は朝鮮産の粉青沙器椀の口縁部片。内面に二条の象眼による白線が入る。

141は白磁皿である。見込みに蓮華文を施す。底部は露胎。

142は瓦器椀の口縁部片である。摩耗のため調整不明瞭である。

143は滑石製石鍋の口縁部である。約1/8残存。外面に台形状の鍔がめぐる。鍔の下半から体部にかけて煤が付着する。口縁部に円形の孔を内側から穿孔する。

Tab. 9　堂の前遺跡中世・近世土器一覧表　　※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
24－131（970211）	包含層 E-3	椀 白磁	底径（5.9）	高台は直立し、高台外面から内面は露胎。体部外面に縦方向の細線を施す。	緻密	内外面灰白色
24－132（970831）	包含層	椀 白磁	口径（14.3）	体部は丸味をもち、口唇部内面は外反する。	緻密	内外面灰白色
24－133（970781）	包含層	椀 白磁	口径（15.8）	口縁部は玉縁状を呈する。	緻密	内外面灰白色
24－134（970210）	包含層 E-3	椀 白磁	口径（19.1）	口縁部は玉縁状を呈する。	緻密	内外面灰白色
24－135（970842）	包含層	椀 白磁	口径（13.1）	口縁部は小さめの玉縁状を呈する。	緻密	内外面灰白色
24－136（970212）	包含層 E-3	椀 白磁	底径　7.0	外面の体部下半から底部にかけて露胎。見込みに円形に沈線がまわる。	緻密	内外面灰白色
24－137（970813）	包含層 I-13	椀 青磁	口径（15.3）	外面に縦方向の細線を施す。	緻密	オリーブ黄
24－138（970844）	包含層	椀 青磁	底径（4.6）	体部下半から底部外面露胎。体部内外面に細線を施す。	緻密	オリーブ黄
24－139（970788）	包含層	台付鉢 陶器	底径（13.9）	高台部露胎。見込みに窯道具釉着痕２箇所あり。	緻密	オリーブ黄
24－140（970884）	包含層 J-11	椀 粉青沙器	口径（16.2）	口縁端部はやや内湾する。内外面貫入。内面に二条の白色の象眼あり。	緻密	オリーブ灰
24－141（970236）	包含層 E-5	白磁 皿	――	底部・露胎・見込みに蓮花文を施す。	緻密	灰白色
24－142（970830）	包含層	瓦器椀	口径（17.4）	口縁部のみ残存。調整不明瞭。	緻密	内外面黒色
24－143（970846）	包含層	石鍋	口径（64.0）	口縁部に円形の孔を内側からあける。	滑石製	内外面灰色

(2) 石　器

磨製石器25点、定形の打製石器17点、剥片70点、石核６点、礫石器では錘２点、砥石６点、磨石２点・敲石２点が出土し、総計130点出土した。包含層出土のものの時期は弥生時代中期前半～後半に属する。

磨製石器は加工斧が１点のみと割合的に少ないことを除けば、ほぼ全ての器種がまんべんなく出土している。打製石器は器種が限られ、中でも打製石鏃が11点と最も多い。

磨製石鏃（144～148）　磨製石鏃は５点出土し、基部が残存していないものも含めすべて茎がついていたと思われる。144には基部にのみ粗めの研磨痕が横方向に走る。147は関部付近から茎先端にかけて面取りし、茎の断面が潰れた六角形になるように仕上げる。148は切先部分と茎先端が欠損する。側縁部は刃部を作り出さず幅２㎜程度の面をなしているが、切先部分に向かうにつれ側面部の身幅が狭くなり、欠損している切先部分では刃をなしていたと考えられる。なおほかの磨製石鏃に見られるような明瞭な鏑は見られない。茎部分は面取りするが、稜ははっきりとせず、断面はやや丸みを帯びた六角形となる。

石剣（149～152）　出土した４点のうち３点が砂岩製である。149は側縁部の一部である。SD15より出土した。150は珪質層灰岩製で、刃部を作り出した後に再度両面とも縁辺部のみ砥ぎ直しており、稜が外形線に沿って２本走る形になっている。SD35より出土。152は基部付近の破片である。表面上位には粗調整時のものと思われる剥離面が残る。

石庖丁（153～157）　７点出土し、うち５点掲載した。完形品はない。154は肩部、155は背部、156,157は刃部付近の破片である。154の刃部肩付近には砥ぎ直しの痕跡がある。

石鏃（158）　158は背部と刃部が作り出されており、その形状からみて石鏃であろう。刃部が向かって右下で収束していることより左側に身が伸び、右側には基部が存在したと考えられる。

紡錘車（160）　破片が１点出土した。厚さが均一であり、平面形を復元すると円形になる可能性が高いこと、周縁が面をなすことより紡錘車であると考えられる。

石斧（161・163・164）　７点出土し、うち掲載したのは３点である。加工斧は161の偏平片刃石斧のみで、未掲載分も含め残り６点は伐採斧である。伐採斧の未掲載分に完形品はなく、すべて使用により一部が欠損する。大きさをみると、２グループに大別でき、復元すると全長15㎝以上になるものが163以外に２点、全長10㎝程度になるものが164以外に２点出土している。平面形はそれほど基部が窄まらず、長台形になると予想される。伐採斧６点の石材の内訳は、玄武岩が３点（うち大型品が２点）、砂岩系の石材が３点（うち大型品が１点）である。

161は珪質層灰岩を使った偏平片刃石斧の刃部付近である。刃部先端には砥ぎ直しの痕跡が残る。163は刃部形成のための剥離痕が残り、剥離痕の周囲は使用により磨滅している。

砥石（162）　６点出土し、うち図示したのは１点である。未掲載分の５点はいずれも砂岩製で現存長が４～８㎝前後の破片である。目の粗さから粗砥と細砥に大別すると、粗砥が４点、細砥が２点である。大きさを見ると細砥は粗砥よりもやや小ぶりである。掲載した162は細砥にあたり、細粒砂岩製で長軸方向に砥いだ痕跡が残る。

石錘（159・165）　２点出土した。159は頂部の破片で両面に浅い溝を掘り込んでいる。石材は細粒砂岩である。165は凝灰岩の転石を利用しており、四方に敲打によって抉りをいれる。SD15出土。

打製石鏃（166～175・177）　打製石鏃は計11点で、凹基のものが９点、円基のものが１点、凸基のものが１点出土している。凹基のものは全体的に抉りが緩やかである。石材をみると11点中、１点だけがサヌカイト（173）で残りはすべて黒曜石である。172は珪質の黒曜石で表面はやや風化する。

175は表面にのみ縁辺調整をいれ、裏面には平坦剥離のみ施す。

石錐（176・178）　2点出土した。176は夾雑物を多く含み、表面・裏面ともに主要剥離面を大きく残す。基部付近には両面とも調整を施さず、側縁部は表・裏両面から調整する。特に錐部には表裏両面とも急角度の調整をいれ、断面は潰れた菱形となる。石鏃である可能性もあるが、先端部の身が厚いこと、またその形態より石鏃として機能したには疑問が残り、石錐として使用したものであろう。178は全周にわたり縁辺調整を施しているが、特に錐部の調整は両面とも急角度で、断面が菱形になる。

抉り入り石器（179・180・182）　剥片の縁辺にノッチ状の調整を施したもの。3点出土し、石材はすべて黒曜石である。179は左側縁下方に腹面より階段状の調整を入れる。右側縁には使用痕と思われる微細な剥離痕が観察できる。180は左側縁刃端付近と右側縁中央を腹面から調整し、抉りを入れる。使用痕はない。182は石刃状の縦長剥片を素材とし、左側縁中位より刃端にかけてノッチ状の調整を2箇所に施す。また右側縁下位に急角度の調整を入れる。両側縁の打点側には、使用痕と考えられる微細な剥離痕が残る。

スクレイパー（181）　黒曜石製が1点出土した。181は裏面に平坦剥離を施したあと、下辺と左側縁に縁辺調整を入れる。ここではスクレイパーとして扱ったが、形状や製作技法からみて、石鏃の未製品の可能性もある。

剥片（183～188）　計70点出土し、使用痕とみられる連続した微細な剥離痕を伴うものは5点である。石材は黒曜石が圧倒的に多く、安山岩系はわずか3点のみである。

183・188は石刃状の縦長剥片で、183は右側縁に使用痕が残る。両者とも打面は折り取られる。184・186は左側縁に使用痕が残る。185・187は使用痕・加工痕ともになく、185の右側縁下位の剥離痕は新しいものである。185・188はSJ26より出土。

石核（189）　6点出土し、掲載したのは1点である。石材は黒曜石が5点、安山岩系が1点であった。

技法より、

Ⅰ：打面単設のもの2点、

Ⅱ：打面転移を行ったもの2点、

Ⅲ：礫の周縁から求心的に剥片を剥ぎ取るもの1点、

Ⅳ：一定の打面を設けずにランダムに剥片を剥ぎ取るもの1点

に大別できる。石核の大きさはⅠからⅢではいずれも直径3～5㎝大で、Ⅳではやや大きく全長約7㎝である。また、Ⅰ～Ⅲは黒曜石を用い、Ⅳでは安山岩系の石材を用いている。

Ⅰにおいて打面は2点とも自然面であり、Ⅱにおいて転移前の打面が自然面であるものは1点、調整面であるものは1点である。

189はⅡに相当し、まず上面を左側面側より加撃し打面を設けて剥片を作出した後、左側面を裏面側より加撃し打面とし、90度回転させて裏面より剥片を作出する。SK11より出土。

Tab. 10　堂の前遺跡石器一覧表

（単位：cm）

図番号	登録番号	器　種	遺構名	層位	グリッド	全長	全幅	厚	重量	石　材
fig25-144	98000227	磨製石鏃	包含層	5	E-3	4.55	1.60	0.55	3.0	粘板岩
145	98000228	磨製石鏃	P1		C-3	(4.70)	1.80	0.65	5.7	頁岩
146	98000229	磨製石鏃	包含層	5		(5.20)	1.35	0.60	3.9	細粒砂岩
147	98000230	磨製石鏃	P18		E-5	(4.60)	1.50	0.60	3.6	珪質層灰岩
148	98000231	磨製石鏃	表採			(3.50)	1.20	0.70	3.6	粘板岩
149	98000264	石剣	SD15		G･H-9	(2.50)	(2.60)	0.45	2.4	砂岩
150	98000220	石剣	SD35		H･I-9･10	(4.55)	2.85	0.40	6.1	珪質層灰岩
151	98000221	石剣	包含層	5	I-11	6.25	2.60	0.40	10.5	砂岩
152	98000223	石剣	包含層	5		(6.60)	3.80	0.95	34.6	砂岩
fig26-153	98000213	石庖丁	包含層	5	G-10	4.80	(10.80)	0.40	29.8	砂岩
154	98000215	石庖丁	包含層	5	D-3	4.45	(4.50)	0.40	9.1	頁岩
155	98000216	石庖丁	包含層	5	B-3･4	(3.45)	(2.35)	0.35	4.1	砂岩
156	980000217	石庖丁	P26	5	I-10	(3.45)	(2.25)	0.35	3.2	砂岩
157	98000218	石庖丁	P332		E-5	(2.70)	(4.20)	0.65	5.3	砂岩
158	98000222	石鎌	包含層		D-3	6.80	(3.65)	1.20	38.1	安山岩
159	98000225	石錘	P423		H-11	(395)	(3.20)	2.00	32.1	細粒砂岩
160	98000214	紡錘車	P77		C-4	(2.60)	(2.20)	0.35	3.3	砂岩
161	98000219	偏平片刃石斧	P1	5	C-3	(3.95)	(0.80)	0.25	1.8	珪質層灰岩
162	98000224	砥石	SK10上層		C-4	6.80	1.40	1.50	21.1	細粒砂岩
fig27-163	00000812	石斧	包含層		E-3	14.90	7.90	4.20	752.0	玄武岩
164	00000813	石斧	P522	5	J-12	10.95	5.30	2.80	229.0	
fig28-165	97000249	石錘	SD15		G-8	14.10	10.50	5.00	1020.0	凝灰岩
166	98000234	打製石鏃	包含層	5	H-12	2.75	(1.90)	0.45	1.5	黒曜石
167	98000235	打製石鏃	SJ27		D･E-4	2.10	1.45	0.30	0.7	黒曜石
168	98000236	打製石鏃	包含層	5	H-11	2.85	(2.25)	0.70	2.9	黒曜石
169	98000237	打製石鏃	P194		G-5	(1.65)	(1.70)	0.30	0.7	黒曜石
170	98000238	打製石鏃	包含層	5	不明	3.00	(2.10)	0.65	2.8	黒曜石
171	98000239	打製石鏃	包含層	5	I-9	2.55	(2.70)	0.45	1.5	黒曜石
172	98000240	打製石鏃	包含層	5	F-3	2.80	1.25	0.30	0.9	黒曜石
173	98000241	打製石鏃	包含層	5	H-12	1.85	1.55	0.25	0.6	サヌカイト
174	98000242	打製石鏃	P263		H･I-8	1.75	(1.50)	0.30	0.5	黒曜石
fig29-175	98000232	打製石鏃	表採			2.20	1.50	0.50	1.4	黒曜石
176	98000244	石錐	P108		G-10	3.30	1.40	0.40	1.7	黒曜石
177	98000243	打製石鏃	包含層	5	F-6	3.50	1.50	0.40	1.9	黒曜石
178	98000233	石錐	表採			3.80	1.75	0.95	5.6	サヌカイト
179	98000320	抉り入り石器	SK10		C-4	5.60	3.90	1.40	19.6	黒曜石
180	98000319	抉り入り石器	包含層	5	D-3	5.80	4.30	1.35	16.8	黒曜石
181	98000321	スクレイパー	包含層	5	I-12	2.85	3.70	1.15	9.5	黒曜石
182	98000322	抉り入り石器	P343		H-7	3.85	2.20	0.65	4.8	黒曜石
183	98000259	剥片	廃土中			3.70	1.80	0.40	2.9	黒曜石
184	98000246	剥片	包含層	5	I-12	2.70	2.00	0.50	2.5	黒曜石
185	98000254	剥片	SJ26墓坑内		D-4	3.20	1.70	0.50	2.8	黒曜石
186	98000245	剥片	包含層	5	E-3	3.30	2.60	0.50	4.4	黒曜石
187	98000248	剥片	包含層	5	E-3	4.40	2.40	0.80	7.1	黒曜石
188	98000257	剥片	SJ26墓坑内		D-4	3.55	1.75	0.50	3.1	黒曜石
189	98000226	石核	SK11		B-4	3.80	4.80	2.20	47.6	黒曜石

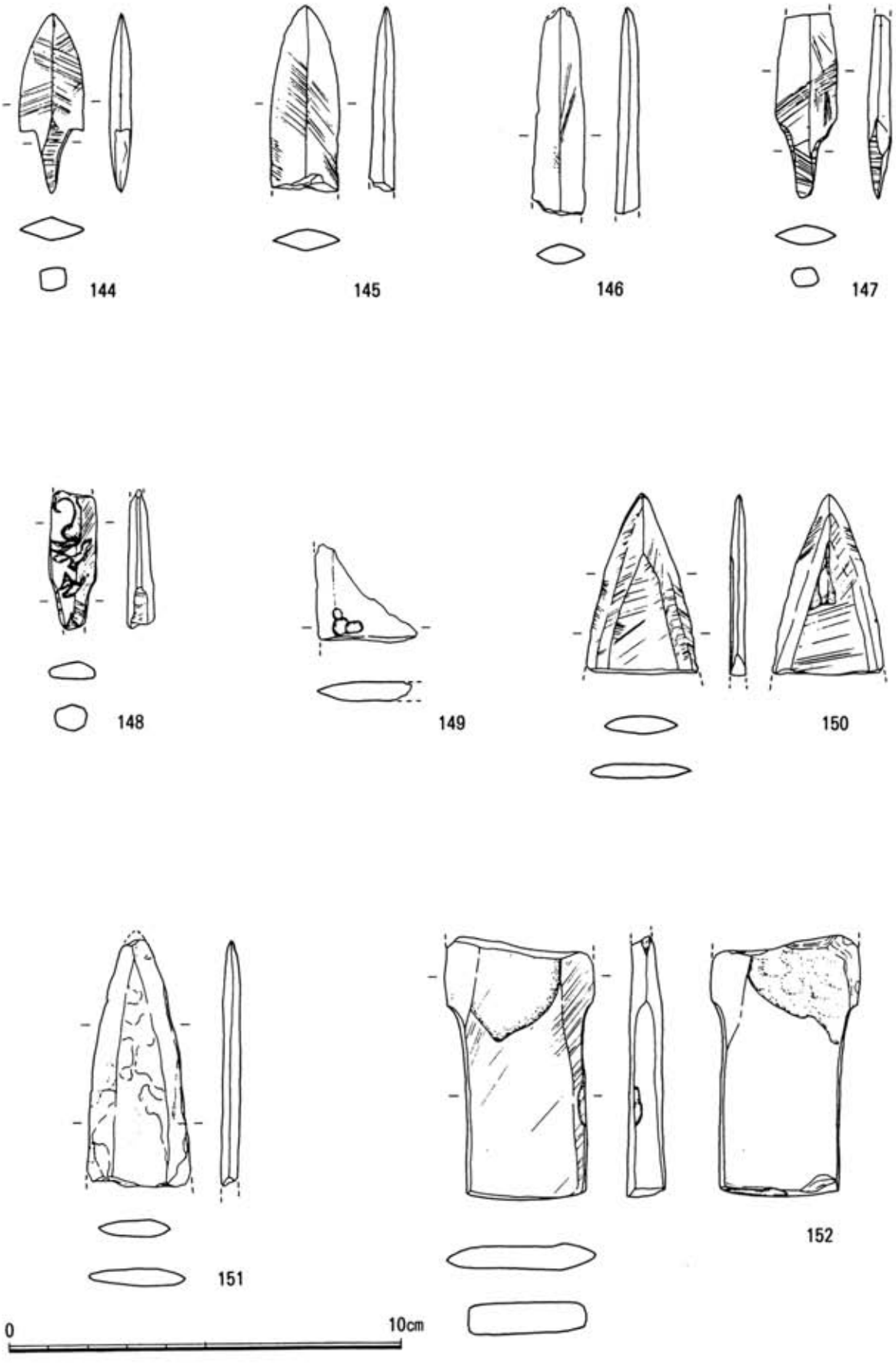


Fig. 25　磨製石器. 1 (2/3)

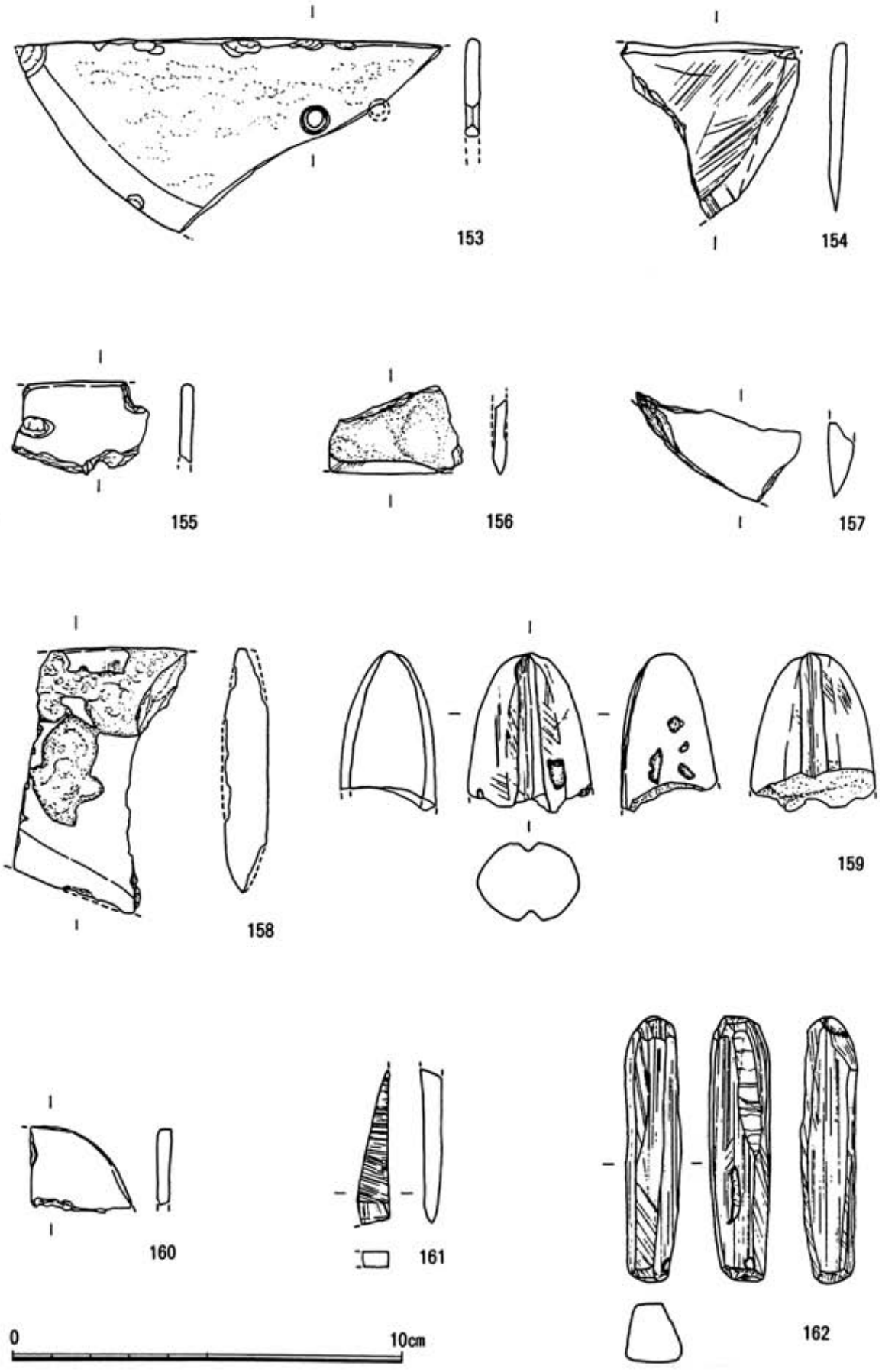


Fig. 26　磨製石器. 2 (2/3)

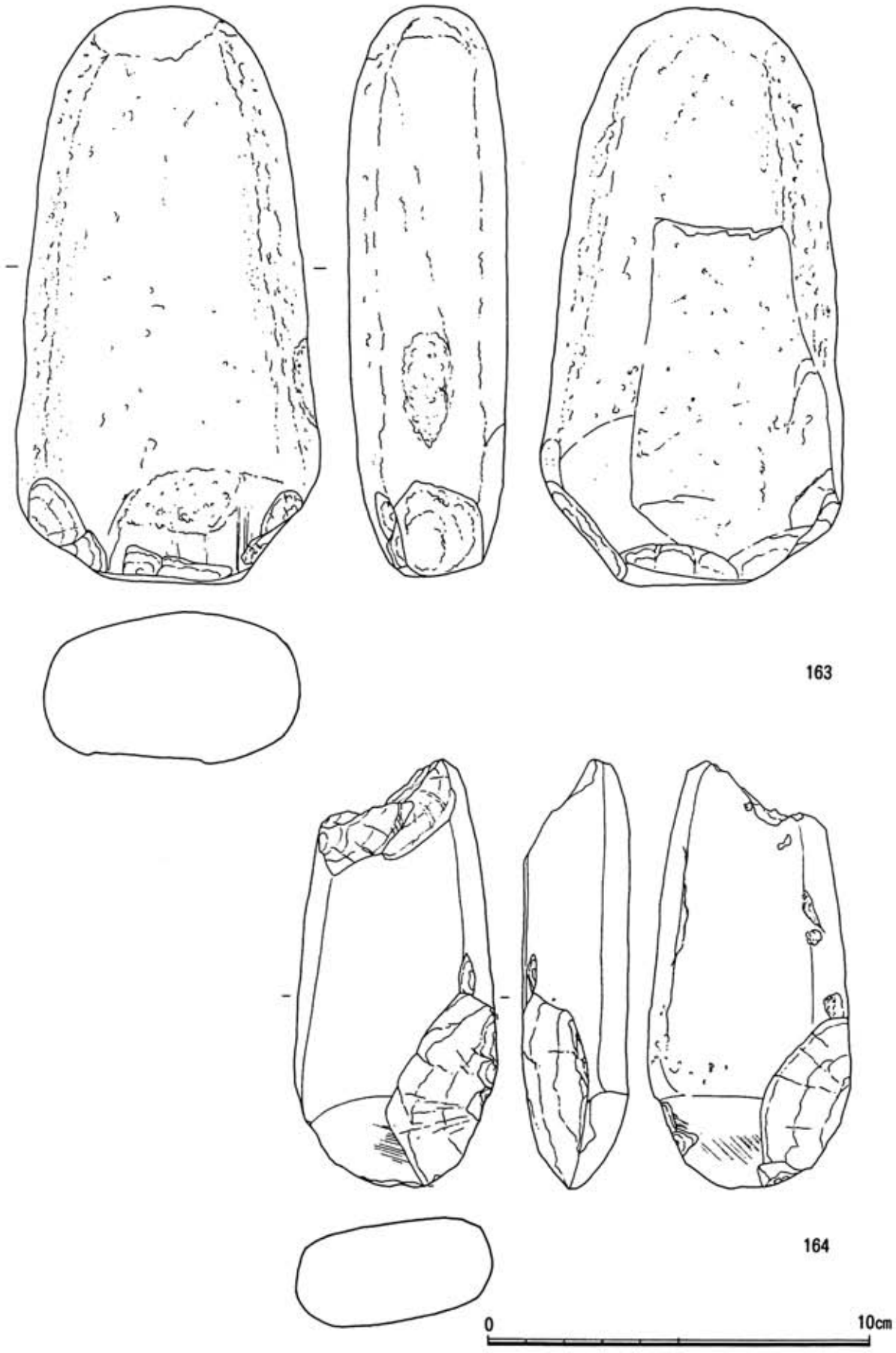


Fig. 27　磨製石器. 3 (2/3)

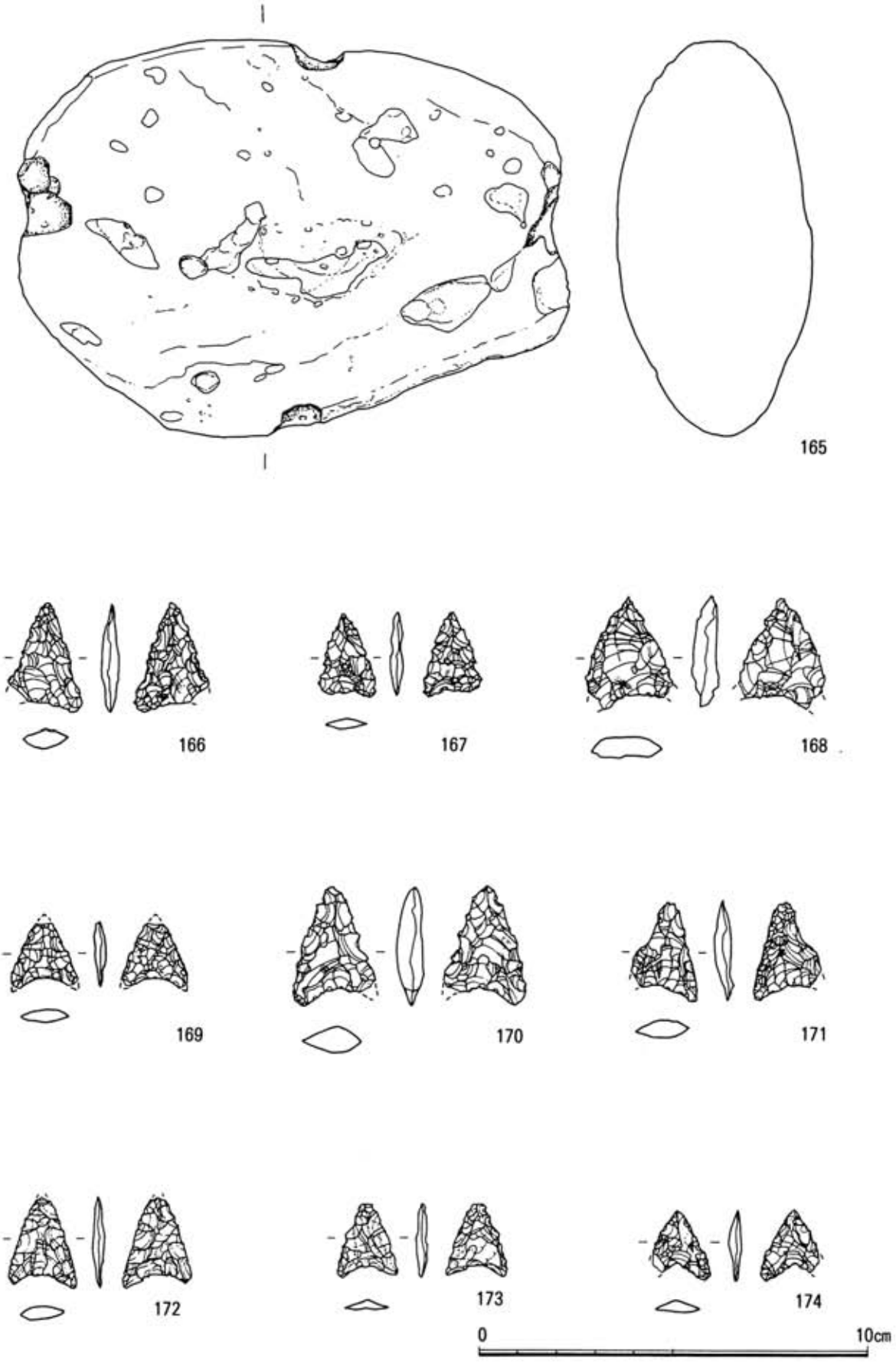


Fig. 28　打製石器. 1 (2/3)

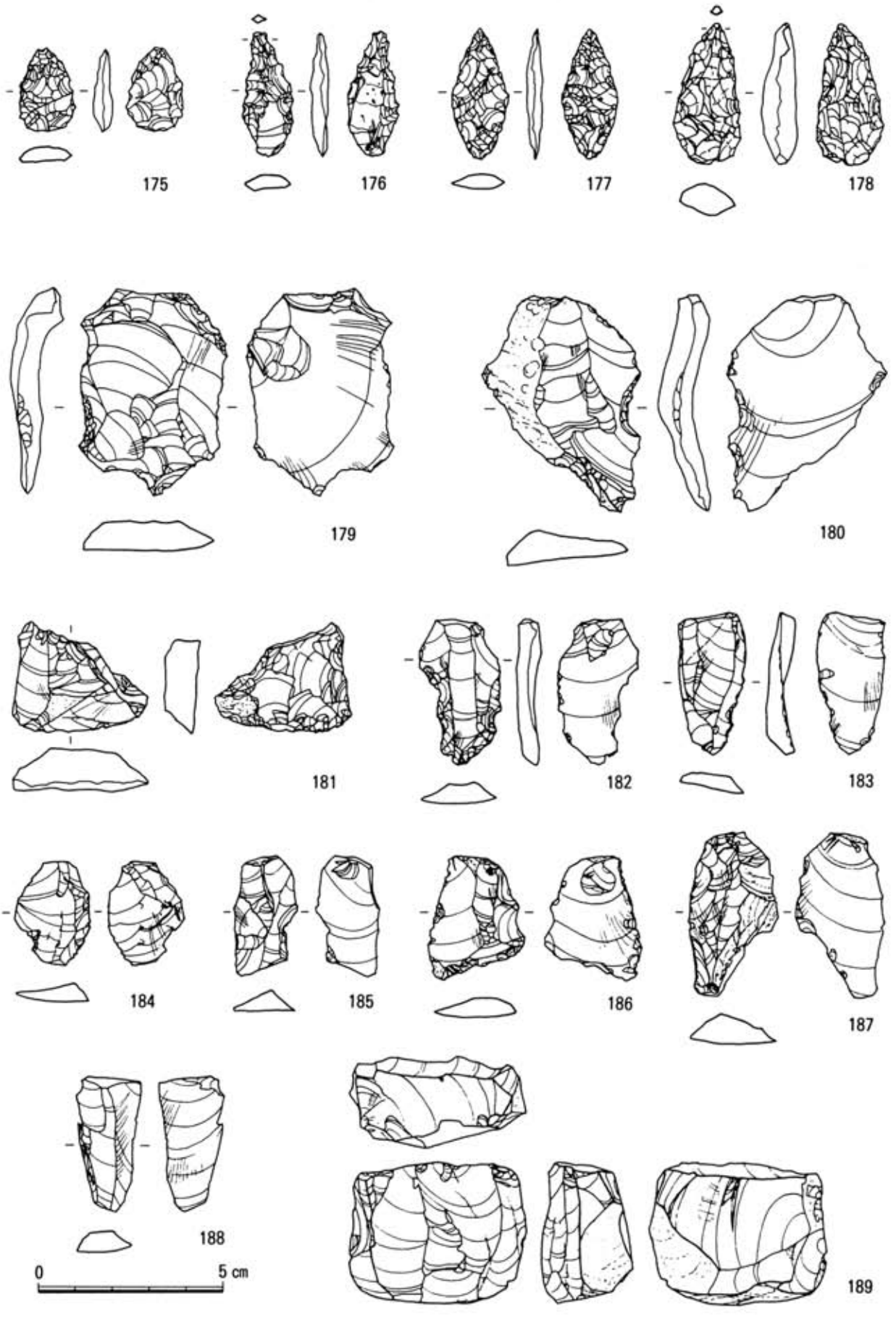


Fig. 29　打製石器. 2 (2/3)

井ゲタ遺跡

1．概　要

遺跡は南西方向にのびる尾根の末端部にあたり、標高は7.8ｍ～9.0ｍを測る緩斜面に立地する。道路を挟んでさらに上方には堂の前遺跡がある。遺跡は弥生時代中期の掘立柱建物からなる集落と甕棺墓、縄文時代前期から後期および古墳時代中期の遺物包含層を検出した。おもな検出遺構として掘立柱建物32棟、土坑24基、溝状遺構４条、畦畔状遺構２条、甕棺墓６基がある。

弥生時代中期の集落は掘立柱建物のみで構成される集落であることに特徴がある。掘立柱建物はⅠ区、Ⅱ区に分布するが、遺跡内でもより低い位置につくられる。掘立柱建物規模の内訳は１間×１間が26棟、１間×２間が６棟であり比率では１間×１間が81％、１間×２間が19％となり圧倒的に１間×１間が多い。建物規模形式でいうとすべて梁間１間型の掘立柱建物になる。梁行の長さは２ｍ前後が最も多く、最大2.8ｍを測る。桁行の長さは梁行の長さに比べて様々であり1間で1.94ｍから最大4.5ｍを測るが、この桁行4.5ｍは突出して長く概略約1.7ｍ～3.7ｍを測る。桁行2間の長さは3.74ｍから最大5.3ｍである。床面積は桁行２間の建物で約10㎡～約14㎡で最大14.31㎡を測る。桁行１間の建物床面積は3.1㎡～12.6㎡で平均6.11㎡を測る。

１間×２間の掘立柱建物のうちSB18とSB19は径25㎝～30㎝の柱根が遺存し、それぞれの柱穴の基礎構造は横木や礎板、礎石、根固石などを用いた入念なものであった。SB18の基礎構造は礎石、根固め石を用いており、横木ではSB19は細長い自然木を用いているのに対してSB18の横木は加工したものや礎板状のものもある。また、SB19は西側桁行きに平行した溝状遺構があり区画溝の可能性がある。建物群の柱穴内出土土器の時期は中期前半から中頃である。建物群の切り合いから２時期から３時期を想定できる。

甕棺墓は４基からなる群と約４ｍ離れて１基、Ⅲ区の中央部に１基がつくられる。４基からなる群のうちSJ07からは勾玉１点、碧玉製管玉42点が出土した。堂の前遺跡の甕棺墓も数基からなる群であり、墳墓は共同墓地を形成していない。その中に玉類を多数副葬したSJ07の被葬者のような農耕祭祀をつかさどる首長がおり、余剰生産物の一括共同管理をおこなったと思われる。その貯蔵施設が高床倉庫群であろう。

また、遺跡内の地形は南西に向かって低くなっており、Ⅱ区の南側には等高線に併行した２条の畦畔状遺構があり、付近にはモモ？の種10個前後が埋納してあった。低地部にあたるⅢ区では縄文時代前期から後期の遺物包含層を確認した。

2．層位と文化層

遺跡は堂ノ前遺跡から続く丘陵の末端、枝状に伸びる土石流扇状地の低い高まりと、その両端の谷部にあたる。１、３区の南端部が谷部、２区が低い高まりの部分にあたる。ここでは、２区の西壁（Ａ－Ｃ）および３区東壁（Ｄ－Ｆ）をもとに説明する。１～４層は表土および近～現代の耕作土。北側では１、２層は消滅し、３、４層も薄くなる。５層は古墳時代の遺物を包含する暗褐色土層。調査区の南部のみに堆積する植物遺体層、いわゆるコモ層に近い様相を呈する層。２区南端では水田の畦畔を覆いフラット面を作り出す。５Ｂ層は、５Ａ層より色調が暗く、砂粒が多く混入する。６、７層はいずれも弥生時代の土器を包含する暗茶褐色土層。６層は３区の南端部のみに堆積する層。７層は２区では地山を覆う層で、３区では３層の上位に堆積する層。２区では７層堆積前後の２時期で水田の畦畔を検出。６層は７層より色調が暗い。８層は縄文時代の遺物を包含する黒褐色土層で、３区のみで確認。９層は青灰色土の地山。北側の丘陵部からの土砂が、幾度にも渡って堆積したと思われる層である。

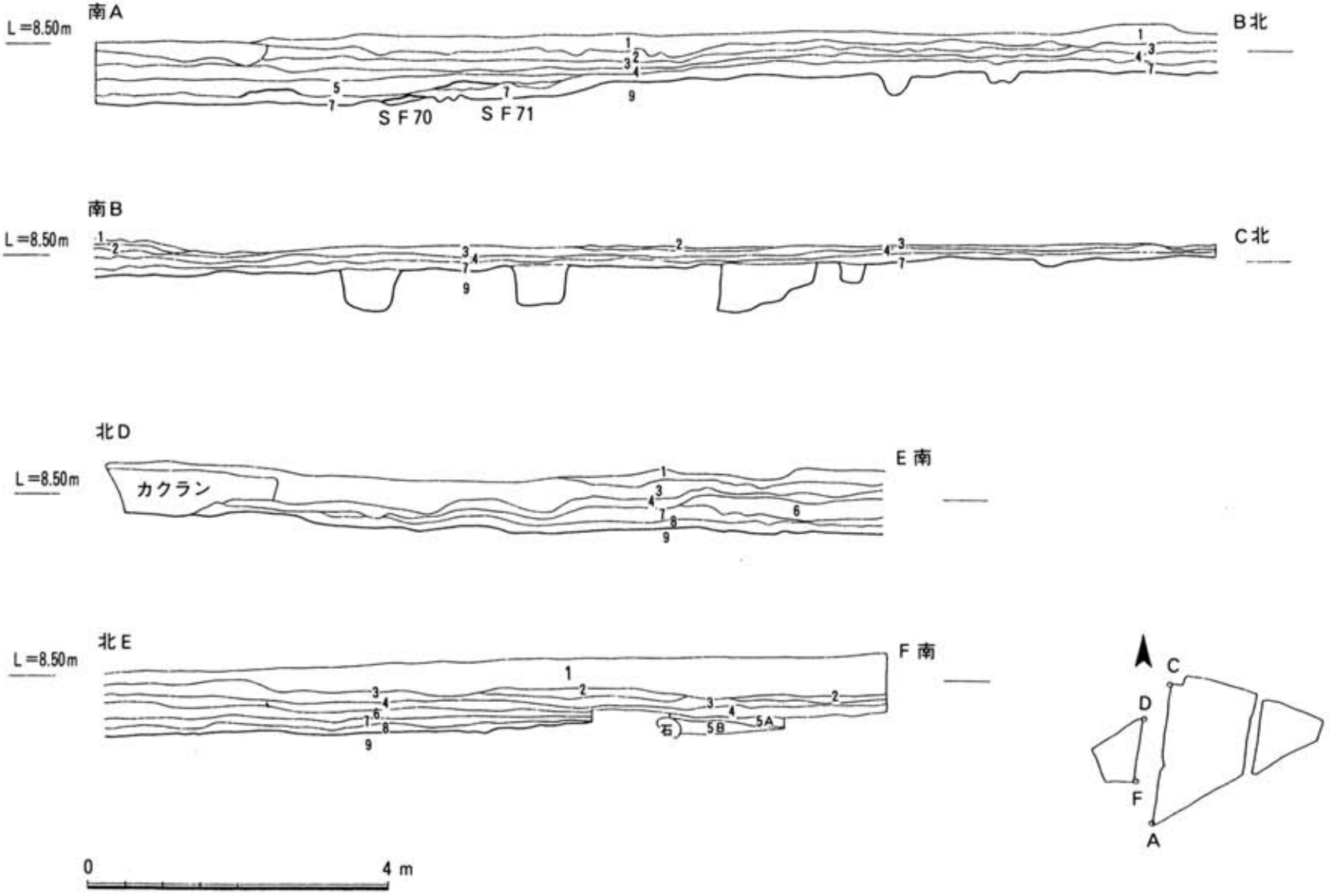


Fig. 30　土層図（1/80）

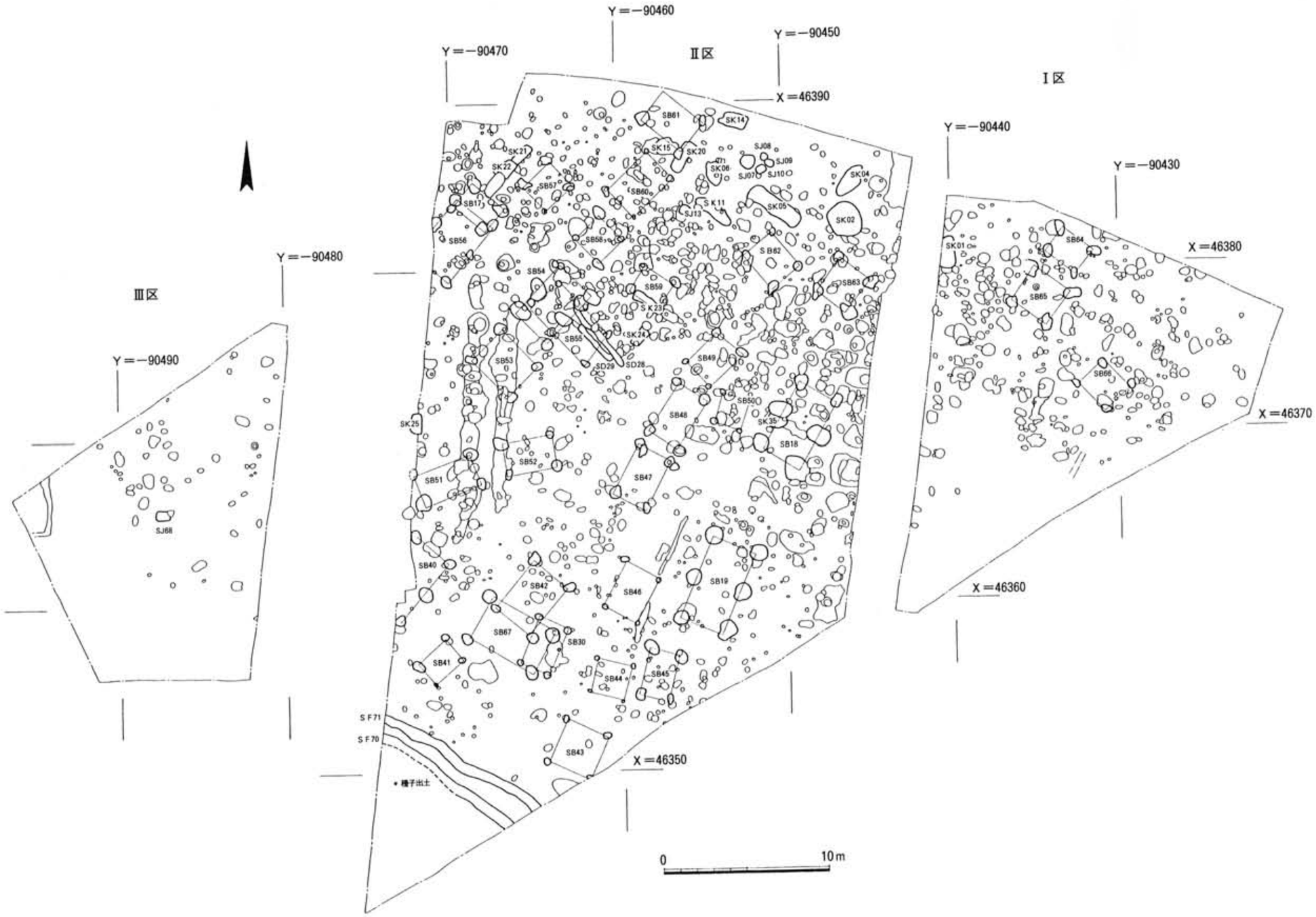


Fig. 31 遺 構 配 置 図 (1/250)

3．遺　構

(1)　掘立柱建物跡

井ゲタ遺跡の集落構成は掘立柱建物のみであるところに最大の特徴がある。その内訳は1間×1間が26棟、2間×1間が6棟の計32棟である。比率では1間×1間が81%で2間×1間が19%となり、圧倒的に1間×1間が数のうえでは勝る。これらの掘立柱建物跡は調査中に検出できたものや調査後に掘立柱建物であることを認定したものがある。後者の場合、調査時の柱穴番号と報告書内での柱穴番号が異なる。

Tab.11に掘立柱建物跡一覧表をしめす。以下、遺構ごとに述べる。

SB17

Ⅱ区の北西隅に位置し、SB56やSK22と切り合う。方位はN41°Eをもつ1間×1間の掘立柱建物である。桁行2.54m、梁行2.00mで床面積5.08㎡である。柱穴の平面形態はP1が不整形、P2～P4が隅丸方形である。柱穴の規模は最大のP2が0.78m×0.76mで最小のP4が0.44m×？である。柱がP2、P4に遺存し、P2の柱の実測図をFig66に掲載する。

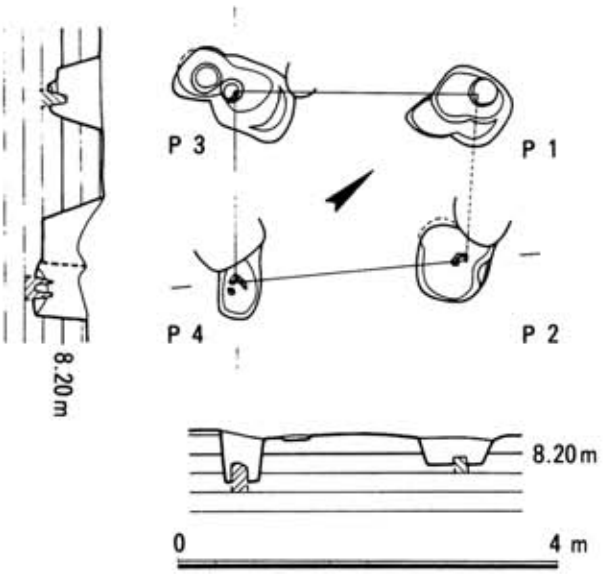


Fig. 32　SB17掘立柱建物跡（1/80）

SB18

Ⅱ区の東側中央部に位置し、西側約2mにはSB50が主軸をやや異にして並ぶ。SB19とともに柱やその基礎構造が良好に遺存していた。方位はN28°Eをもつ2間×1間の掘立柱建物跡である。桁行4.50m、梁行2.55mで床面積11.48㎡である。柱穴の平面形態はP1、P5、P6が不整形でP2、P3が隅丸方形、P4が楕円形である。柱穴の規模は最大のP6が1.58m×1.44mで最小のP2が0.84m×0.64mである。柱がP1～P4、P6に遺存していた。これら柱の径は約25cm～30cmを測るがそのうちP4の柱の実測図をFig65に掲載する。このP4の柱は下部にエツリ穴を施したものである。P1は素掘りの柱穴に直接柱をたてる。P2は数個の板石を礎石にしてその上に直接柱をたてる。P3、P4は柱穴底に横木を数本置いてその上に径20cm～30cmの板石を柱の根石とし、さらに10個前後の根固め石を配する。P4の柱のエツリ穴は建物の内側を向く。また、P3、P4の横木の実測図をFig68に掲載する。P5は数本の横木を並べてその上に径35cm、60cmの板石2石を礎石として配する。P6は柱穴底に径約30cmの板石1石を配しその上に礎板や横木を置いて柱を立てる。

SB19

Ⅱ区の南東部に位置し、西側約2mにはSB46が南側1.5mにはSB45が並ぶ。SB18とともに柱やその基礎構造が良好に遺存していた。方位はN25°Eをもつ2間×1間の掘立柱建物跡である。桁行5.30m、梁行2.70mで床面積は14.31㎡で本遺跡の掘立柱建物跡の中では最大規模である。柱穴の平面形態はP1～P6とも円形または不整円形で類似する。P6は穴底が異なることなどから北側は他の遺構と切り合っていると思われる。柱穴の規模はP1～P4が類似し約1m×約1mで、P6が0.64m×0.55mと最小である。柱がP1～P6すべてに遺存していたがP4、P6の遺存状態は悪い。柱の径は約25cm～30cmを測るが、P2、P3の柱の実測図をFig65,66に掲載する。P2の柱は下部にエツリ穴を施したものである。柱

の基礎構造は礎石を用いることなく横木を用いた柱穴とそのまま柱を立てたものがある。横木を配した柱穴はP1、P4、P5で、横木はSB18のそれに比べて小ぶりで細い。P5の横木実測図をFig66に掲載する。P1の横木は1本、P4は数本、P5は3本の横木を配している。P1～P4の柱穴内の柱の位置は偏っており、P2のエツリ穴は建物の内側を向く。

SB30

Ⅱ区の南側に位置しSB42、SB67と切り合う。方位はN27° Eをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行2.94ｍ、梁行1.82ｍで床面積は5.35㎡である。柱穴は平面形態、規模とも類似する。平面形態はP1、P2、P4が円形でP3が不整円形である。柱穴の規模は最大のP1が0.54ｍ×0.5ｍで最小のP3が0.42ｍ×0.38ｍである。

SB40

Ⅱ区の西側で調査区外に建物跡はのびる。北側1.2ｍにSB51が東側2.2ｍには主軸を同じくしたSB41がある。柱穴規模も大きく床面積もSB19に次いで大きい。方位はN40° Eをもつ2間×1間の掘立柱建物跡である。桁行4.60ｍ、梁行2.64ｍで床面積は12.14㎡である。柱穴は平面形態、規模ともやや類似し、平面形態はP1～P4とも不整円形である。柱穴の規模は最大のP3が0.98ｍ×0.8ｍで最小のP4が0.64ｍ×0.62ｍである。

SB41

Ⅱ区の西側南よりに位置し、北側0.8ｍにはSB67が主軸を直交して西側2.2ｍには主軸を同じくしたSB40がある。方位はN49° Eをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行2.18ｍ、梁行1.60ｍで床面積3.49㎡である。柱穴は平面形態、規模とも様々である。平面形態はP1、P4は円形でP2、P4は長楕円形である。柱穴の規模は最大のP3が0.84ｍ×0.52ｍで最小のP4が0.2ｍ×0.18ｍである。

SB42

Ⅱ区の南西部に位置し建物跡の南側はSB67やSB30と切り合う。方位はN39° Eをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行3.56ｍ、梁行2.74ｍで床面積9.75㎡である。柱穴は規模がやや類似する。平面形態はP1、P2は楕円形でP3、P4は不整円形である。柱穴の規模は最大のP1が0.91ｍ×0.72ｍで最小のP3が0.53ｍ×0.59ｍである。

SB43

Ⅱ区南側中央に位置する。北側2ｍにはSB44がある。方位はN66° Wをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行2.80ｍ、梁行2.70ｍで床面積7.56㎡である。柱穴は平面形態、規模とも類似し、P4は半分が調査区外にのびる。平面形態はP1、P3が不整円形、P2が不整形である。柱穴の規模は最大のP2が0.6ｍ×0.48ｍで最小のP4が0.38ｍ×？である。

SB44

Ⅱ区の南側に位置する。東方0.8ｍにはSB45が主軸を同じにして並び、南方2ｍにはSB43がある。方位はN74° Wをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行2.20ｍ、梁行2.10ｍで床面積4.62㎡である。柱穴は平面形態、規模とも類似する。平面形態はP1、P2、P4が不整円形、P3が楕円形である。柱穴の規模は最大のP1が0.34ｍ×0.31ｍで最小のP4が0.23ｍ×0.20ｍである。

SB45

Ⅱ区の南側に位置する。西方0.8ｍにはSB44が主軸を同じにして並び、北方2ｍにも主軸を同じにしたSB19がある。方位はN10° Eをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行3.10ｍ、梁行1.98ｍで床面積6.14㎡である。柱穴は平面形態、規模とも様々であるが断面形態はすべて2段掘りであるこ

とは共通する。平面形態はP1が円形、P2が不整形、P3、P4が楕円形である。柱穴の規模は最大のP4が1.07ｍ×0.73ｍで最小のP1が0.50ｍ×？である。

SB46

Ⅱ区の中央より南に位置する。東方２ｍにはSB19が並び、南方2.7ｍにはSB44がある。方位はN30°Eをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行3.04ｍ、梁行2.32ｍで床面積7.05㎡である。柱穴は３基の平面形態、規模が類似する。平面形態はP1が楕円形、P2、P4が円形、P3が不整円形である。柱穴の規模は最大のP1が0.60ｍ×0.42ｍで最小のP4が0.34ｍ×0.30ｍである。

SB47

Ⅱ区のほぼ中央に位置する。北方0.9ｍにはSB48が主軸を同じにして並ぶ。方位はN30°Eをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行3.40ｍ、梁行2.11ｍで床面積7.14㎡である。柱穴の規模は類似するが平面形態は様々である。P1、P2に柱が遺存し、P4に細い横木を数本配している。また、P1、P2、P4は小穴と切り合うがこれらの小穴底の標高はほぼ同じであり、建て替えの可能性がある。柱穴の平面形態はP1が不整円形、P2が隅丸長方形、P3、P4が不整形である。柱穴の規模は最大のP4が0.92ｍ×0.62ｍで最小のP1が0.72ｍ×？である。

SB48

Ⅱ区のほぼ中央に位置する。南方0.9ｍにはSB47が主軸を同じにして並ぶ。方位はN30°Eをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行3.52ｍ、梁行2.00ｍで床面積7.04㎡である。柱穴の平面形態、規模はやや類似する。平面形態はP1、P2が不整円形、P3、P4が不整な隅丸長方形である。柱穴の規模は最大のP4が0.83ｍ×0.63ｍで最小のP1が0.63ｍ×0.59ｍである。

SB49

Ⅱ区の中央よりやや北側に位置する。南方１ｍにはSB48が、南方0.8ｍにはSB50がある。方位はN46°Eをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行2.90ｍ、梁行2.12ｍで床面積6.15㎡である。柱穴の平面形態、規模はP1とP2、P3とP4がそれぞれ類似する。平面形態はP1が不整な楕円形、P2が楕円形、P3、P4が不整円形である。柱穴の規模は最大のP2が0.79ｍ×0.57ｍで、P3、P4はほぼ同じで0.4ｍ×0.4ｍである。

SB50

Ⅱ区の中央よりやや東側に位置する。西方0.8ｍにはSB48が北方0.8ｍにはSB49がある。方位はN19°Eをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行1.94ｍ、梁行1.62ｍで床面積3.14㎡である。柱穴の平面形態、規模はやや類似する。平面形態はP1～P4が不整円形である。柱穴の規模は最大のP3が0.48ｍ×0.43ｍで最小のP2が0.28ｍ×0.21ｍである。

SB51

Ⅱ区の西側中央に位置する。東方1.7ｍにはSB52がほぼ主軸を同じくして並び、南方２ｍにはSB40がある。方位はN69°Eをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行3.60ｍ、梁行1.80ｍで床面積6.48㎡である。P3は一部調査区にかかり完掘していない。平面形態はすべて不整形である。柱穴の規模は最大のP4が0.92ｍ×0.88ｍで最小のP2が0.83ｍ×0.56ｍである。

SB52

Ⅱ区の西側中央に位置する。西方1.7ｍにはSB51がほぼ主軸を同じくして並ぶ。方位はN77°Eをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行3.00ｍ、梁行1.82ｍで床面積5.46㎡である。柱穴の規模はやや類似するものの形態は様々である。平面形態はP1が隅丸方形、P2が円形、P3、P4が不整形であ

る。柱穴の規模は最大のP3が1.02ｍ×0.73ｍで最小のP4が0.72ｍ×0.43ｍである。

SB53

Ⅱ区の西側中央に位置する。北東1.2ｍには主軸を直交させたSB54が、北東２ｍにはほぼ主軸を同じくしたSB55が並ぶ。方位はN44°Wをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行2.94ｍ、梁行2.76ｍで床面積8.11㎡である。柱穴の形態、規模は様々である。平面形態はP1が台形気味、P2、P3が隅丸方形でP4が不整形である。柱穴の規模は最大のP4が1.14ｍ×0.7ｍで最小のP3が0.84ｍ×0.48ｍである。

SB54

Ⅱ区の西側で中央よりやや北側に位置する。SB55と切り合い、南西1.2ｍには主軸を直交させたSB53がある。方位はN44°Eをもつ２間×１間の掘立柱建物跡である。桁行3.74ｍ、梁行2.80ｍで床面積10.47㎡である。柱穴の形態、規模は様々である。平面形態はP1、P6が不整円形、P2が隅丸方形、P3が楕円形、P4、P5が不整形である。柱穴の規模は最大のP5が1.38ｍ×0.99ｍで最小のP1が0.48ｍ×0.40ｍである。

SB55

Ⅱ区の西側で中央よりやや北側に位置する。SB54と切り合い、南西２ｍにはほぼ主軸を同じくしたSB53が並ぶ。方位はN43°Wをもつ２間×１間の掘立柱建物跡である。桁行4.62ｍ、梁行2.23ｍで床面積10.30㎡である。柱穴の形態、規模は様々である。平面形態はP1、P2、P5が不整円形、P3が隅丸方形、P4、P6がやや偏った楕円形である。柱穴の規模は最大のP3が0.96ｍ×0.95ｍで最小のP1が0.47ｍ×0.40ｍである。

SB56

Ⅱ区の北西部に位置し、建物跡の１部が調査区外にのびる。SB17と切り合い、北東1.7ｍにはSB60が南東4.2ｍにはSB54がそれぞれ主軸をほぼ同じにして並ぶ。方位はN37°Eをもつ２間×１間の掘立柱建物跡である。桁行4.28ｍ、梁行2.70ｍで床面積11.56㎡である。柱穴の平面形態はP1が方形、P2、P3、P4、P6が不整形である。柱穴の規模は最大のP6が0.9ｍ×0.74ｍで最小のP4が0.63ｍ×0.44ｍである。

SB57

Ⅱ区の北西部に位置する。南西1.7ｍにはSB17が南東2.4ｍにはSB58がある。方位はN48°Eをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行2.12ｍ、梁行2.06ｍで床面積4.37㎡である。柱穴の形態、規模は様々である。平面形態はP1が不整形、P2、P3、P4が楕円形である。柱穴の規模は最大のP1が0.68ｍ×0.54ｍで最小のP3が0.40ｍ×0.33ｍである。

SB58

Ⅱ区の北側中央よりに位置する。北東1.4ｍにはSB60が、南西1.8ｍにはSB54が、北西2.4ｍにはSB57が、南東２ｍにはSB59がある。方位はN42°Wをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行2.0ｍ、梁行2.0ｍで床面積4.00㎡である。柱穴の形態、規模は様々である。平面形態はP1が円形、P2、P3が楕円形、P4が不整形である。柱穴の規模は最大のP4が1.26ｍ×0.8ｍで最小のP1が0.44ｍ×0.44ｍである。

SB59

Ⅱ区の中央よりやや北側に位置する。北西２ｍにはSB58が、南西2.8ｍにはSB55が、南東3.5ｍにはSB49がある。方位はN49°Wをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行2.10ｍ、梁行1.76ｍで床

面積3.70㎡である。柱穴の形態は類似するものの規模は異なる。P3は布掘り状である。平面形態はP1～P3が不整円形である。柱穴の規模は最大のP4が0.75ｍ×0.62ｍで最小のP2が0.5ｍ×0.48ｍである。

SB60

Ⅱ区の北側に位置する。北東1.3ｍにはSB61が、南西1.4ｍにはSB58がある。方位はN47°Eをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行3.26ｍ、梁行2.32ｍで床面積7.56㎡である。柱穴の規模はやや小さめである。平面形態はP1、P2、P4が円形で、P3が不整形である。柱穴の規模は最大のP3が0.64ｍ×0.48ｍで最小のP4が0.25ｍ×0.23ｍである。

SB61

Ⅱ区の北側に位置する。SK15、SK20と切り合い、南西1.3ｍには主軸を直交させたSB60がある。方位はN50°Wをもつ1間×1間の掘立柱建物跡であるが、柱穴は3基しか検出できなかった。桁行3.00ｍ、梁行2.20ｍで床面積6.60㎡である。平面形態はP1が不整形で、P3が隅丸長方形、P4が楕円形である。柱穴の規模は最大のP1が0.92ｍ×0.92ｍで最小のP4が0.68ｍ×0.4ｍである。

SB62

Ⅱ区の北側に位置する。東方2ｍにはSB63がある。方位はN40°Wをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行2.84ｍ、梁行2.44ｍで床面積6.93㎡である。柱穴の形態、規模はやや類似する。平面形態はP1、P2が不整円形で、P3が不整形、P4が円形である。柱穴の規模は最大のP3が0.93ｍ×0.6ｍで最小のP2が0.5ｍ×0.42ｍである。

SB63

Ⅱ区の東側北よりに位置する。西方2ｍにはSB62がある。方位はN52°Wをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行2.42ｍ、梁行2.38ｍで床面積5.76㎡である。柱穴の規模はやや大きく形態は様々である。平面形態はP1～P4が不整形である。柱穴の規模は最大のP4が1.2ｍ×0.9ｍで最小のP1が0.6ｍ×0.58ｍである。

SB64

Ⅰ区の北側に位置する。南方1ｍには主軸を同じくしたSB65がある。方位はN52°Wをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行2.30ｍ、梁行1.70ｍで床面積3.91㎡である。柱穴の形態、規模は様々である。平面形態はP1が不整形、P2、P3、P4が楕円形である。柱穴の規模は最大のP4が1.02ｍ×0.56ｍで最小のP3が0.62ｍ×0.46ｍである。

SB65

Ⅰ区の北側に位置する。北方1ｍには主軸を同じくしたSB64がある。方位はN55°Wをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行2.54ｍ、梁行2.44ｍで床面積6.20㎡である。柱穴の形態は様々であり、規模は大きい。平面形態はP1、P3、P4が不整形でP2が隅丸長方形である。柱穴の規模は最大のP1が0.92ｍ×？で最小のP4が0.66ｍ×0.66ｍである。

SB66

Ⅰ区のほぼ中央に位置する。北西1.54ｍには主軸をほぼ同じくしたSB65がある。方位はN48°Wをもつ1間×1間の掘立柱建物跡である。桁行2.46ｍ、梁行2.00ｍで床面積4.92㎡である。柱穴の規模は1基のみ大きく他の3基は形態、規模とも類似する。平面形態はP1が楕円形でP2、P4が不整円形、P3が不整形である。柱穴の規模は最大のP3が1.3ｍ×0.8ｍで最小のP1が0.54ｍ×0.36ｍである。

SB67

Ⅱ区の南側に位置する。SB30、SB40と切り合い東方3.2ｍにはSB44が、北西3.3ｍにはSB40が、南

西1.1ｍにはSB41がある。方位はN59° Wをもつ１間×１間の掘立柱建物跡である。桁行4.50ｍ、梁行2.80ｍで床面積12.6㎡である。柱穴の形態、規模は類似する。平面形態はP1～P2が不整円形でありP1に柱が遺存する。柱穴の規模は最大のＰ4が0.96m×0.9mで最小のＰ1が0.7m×0.6mである。

Tab. 11　井ゲタ遺跡掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	長軸方位	規　模（桁行×梁行）	桁　行（ｍ）	梁　行（ｍ）	床面積（㎡）	備　　考
ＳＢ１７	N41° E	１×１	２．５４	２．００	５．０８	
ＳＢ１８	N28° E	２×１	４．５０	２．５５	１１．４８	横木，礎板，磁石，根固石
ＳＢ１９	N25° E	２×１	５．３０	２．７０	１４．３１	横木
ＳＢ３０	N27° E	１×１	２．９４	１．８２	５．３５	
ＳＢ４０	N40° E	２×１	４．６０	２．６４	１２．１４	
ＳＢ４１	N49° E	１×１	２．１８	１．６０	３．４９	
ＳＢ４２	N39° E	１×１	３．５６	２．７４	９．７５	
ＳＢ４３	N66° W	１×１	２．８０	２．７０	７．５６	
ＳＢ４４	N74° W	１×１	２．２０	２．１０	４．６２	
ＳＢ４５	N10° E	１×１	３．１０	１．９８	６．１４	
ＳＢ４６	N30° E	１×１	３．０４	２．３２	７．０５	
ＳＢ４７	N30° E	１×１	３．４０	２．１１	７．１４	
ＳＢ４８	N30° E	１×１	３．５２	２．００	７．０４	
ＳＢ４９	N46° E	１×１	２．９０	２．１２	６．１５	
ＳＢ５０	N19° E	１×１	１．９４	１．６２	３．１４	
ＳＢ５１	N69° E	１×１	３．６０	１．８０	６．４８	
ＳＢ５２	N77° E	１×１	３．００	１．８２	５．４６	
ＳＢ５３	N44° W	１×１	２．９４	２．７６	８．１１	
ＳＢ５４	N44° E	２×１	３．７４	２．８０	１０．４７	
ＳＢ５５	N43° W	２×１	４．６２	２．２３	１０．３０	
ＳＢ５６	N37° E	２×１	４．２８	２．７０	１１．５６	
ＳＢ５７	N48° E	１×１	２．１２	２．０６	４．３７	
ＳＢ５８	N42° W	１×１	２．００	２．００	４．００	
ＳＢ５９	N49° W	１×１	２．１０	１．７６	３．７０	
ＳＢ６０	N47° E	１×１	３．２６	２．３２	７．５６	
ＳＢ６１	N50° W	１×１	３．００	２．２０	６．６０	
ＳＢ６２	N40° W	１×１	２．８４	２．４４	６．９３	
ＳＢ６３	N52° W	１×１	２．４２	２．３８	５．７６	
ＳＢ６４	N52° W	１×１	２．３０	１．７０	３．９１	
ＳＢ６５	N55° W	１×１	２．５４	２．４４	６．２０	
ＳＢ６６	N48° W	１×１	２．４６	２．００	４．９２	
ＳＢ６７	N59° W	１×１	４．５０	２．８０	１２．６０	

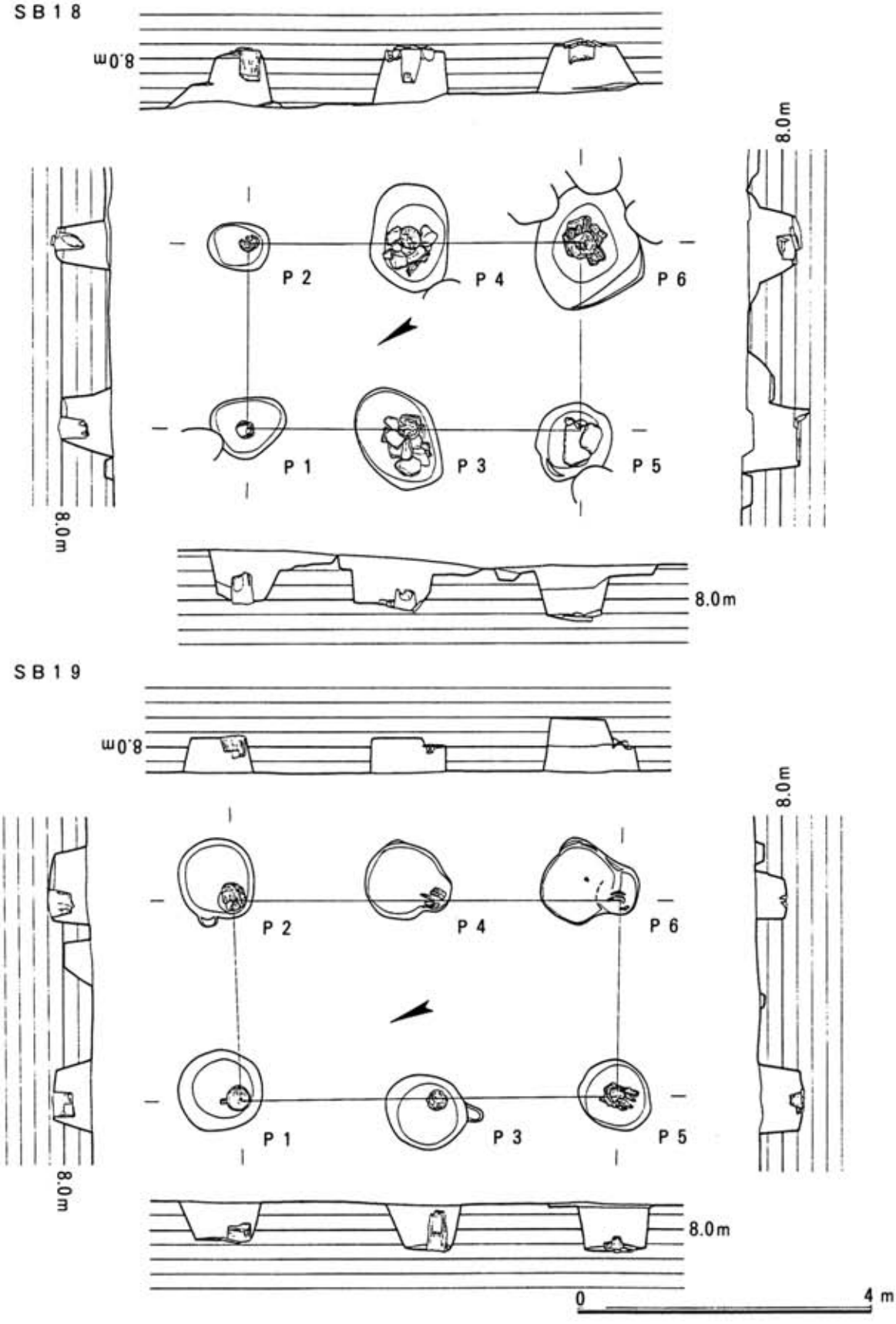


Fig. 33　SB18・19掘立柱建物跡（1/80）

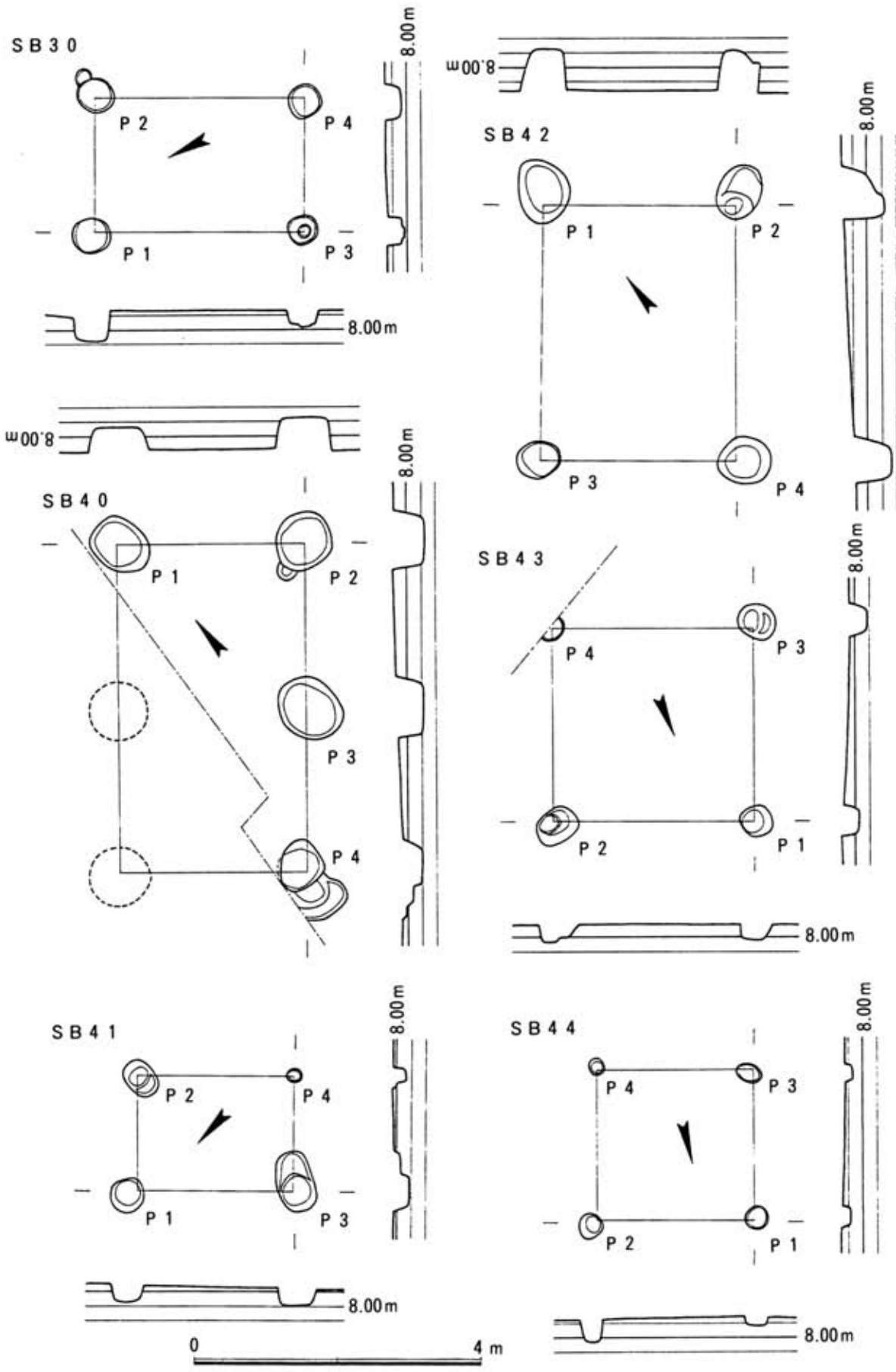


Fig. 34　SB30・40・41・42・43・44掘立柱建物跡（1/80）

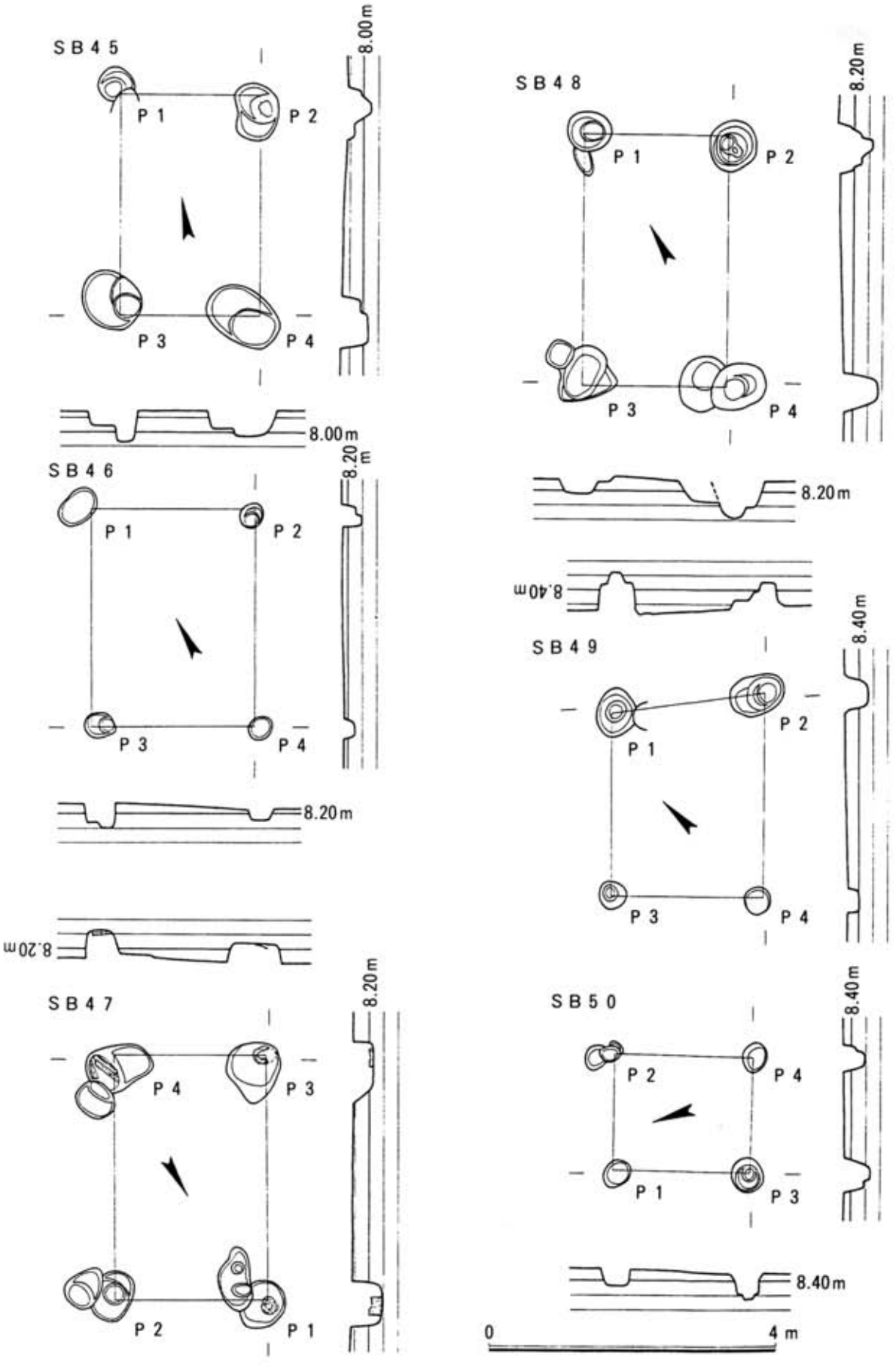


Fig. 35　SB45・46・47・48・49・50掘立柱建物跡（1/80）

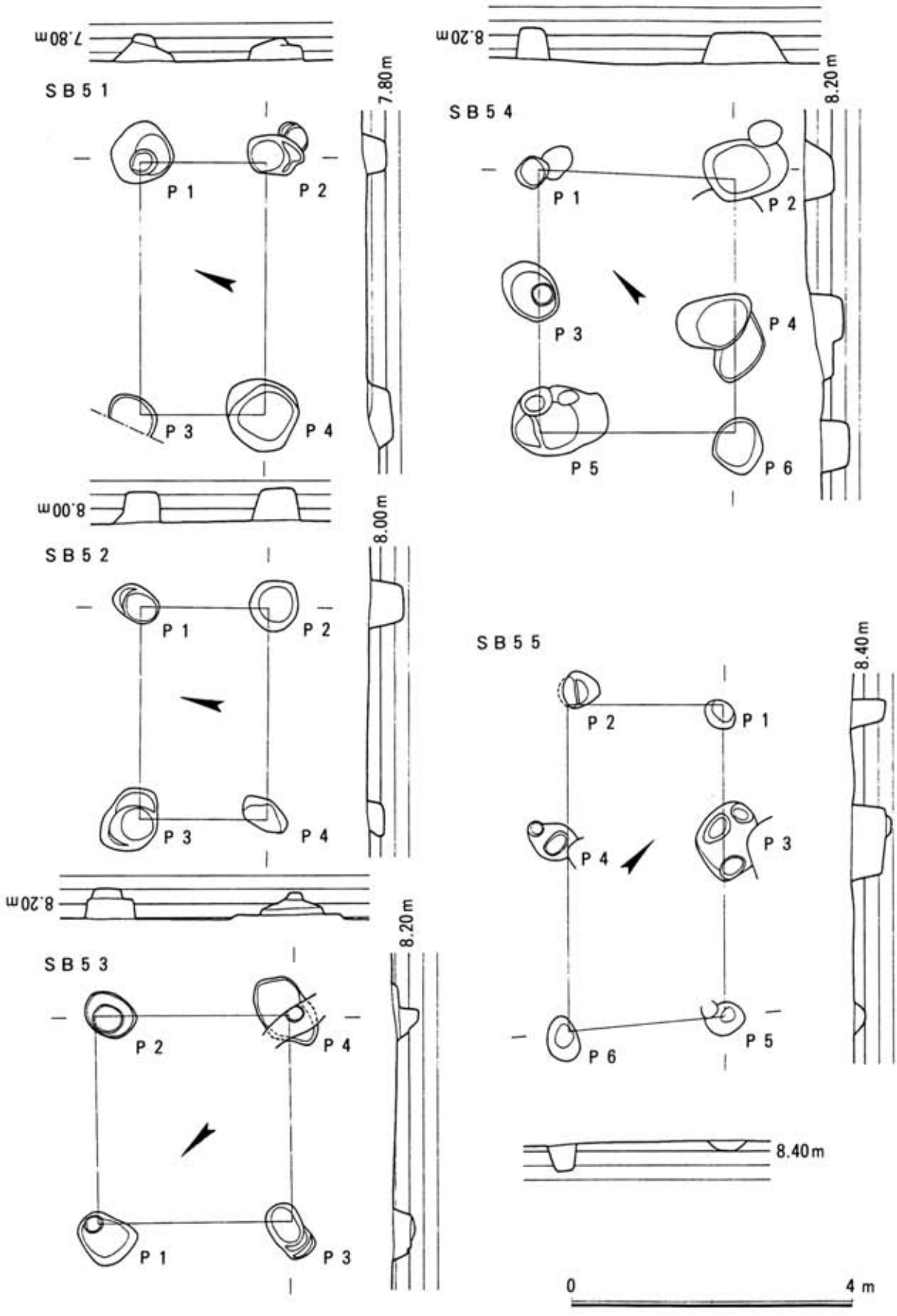


Fig. 36　SB51・52・53・54・55掘立柱建物跡（1/80）

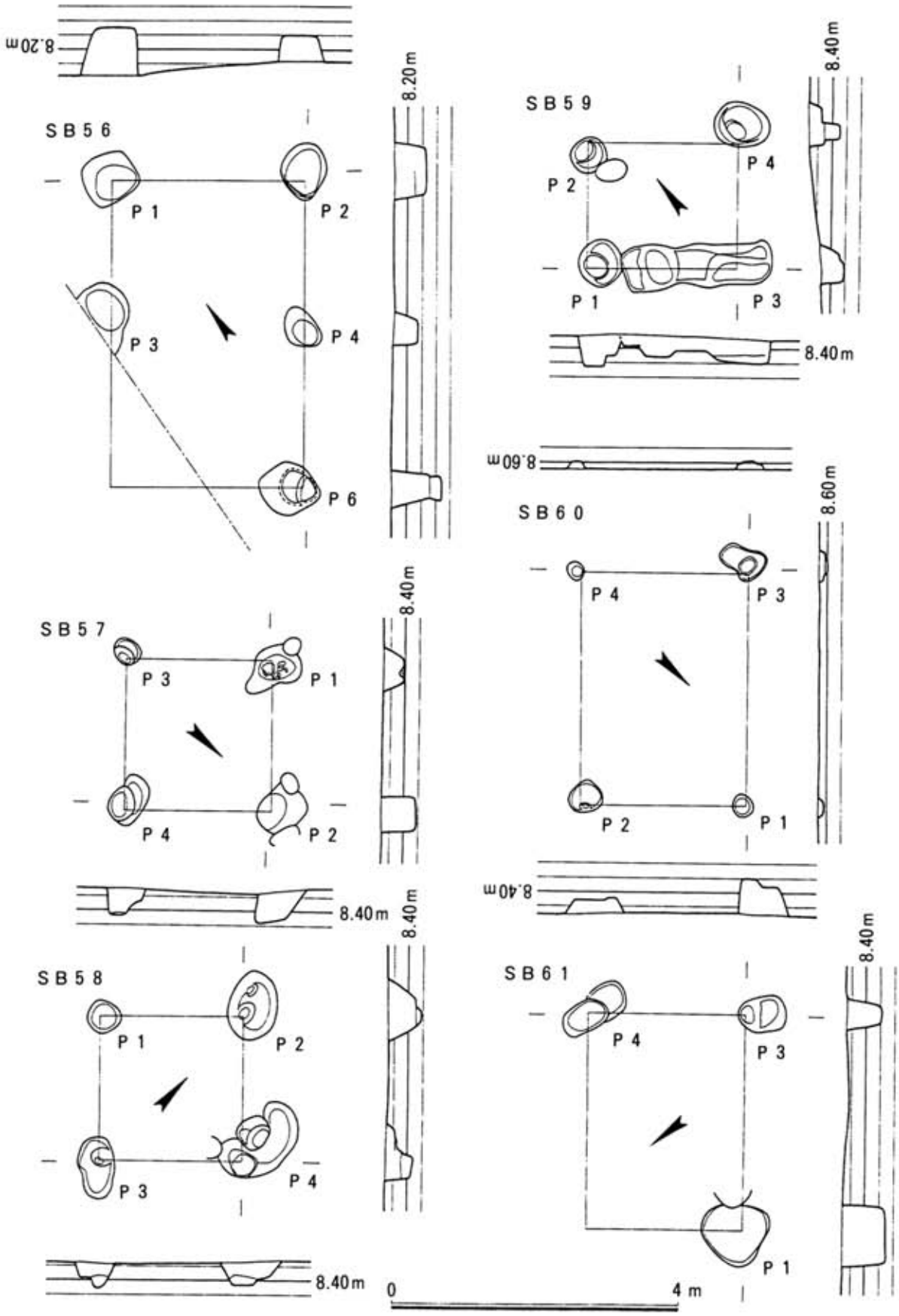


Fig. 37　SB56・57・58・59・60・61掘立柱建物跡（1/80）

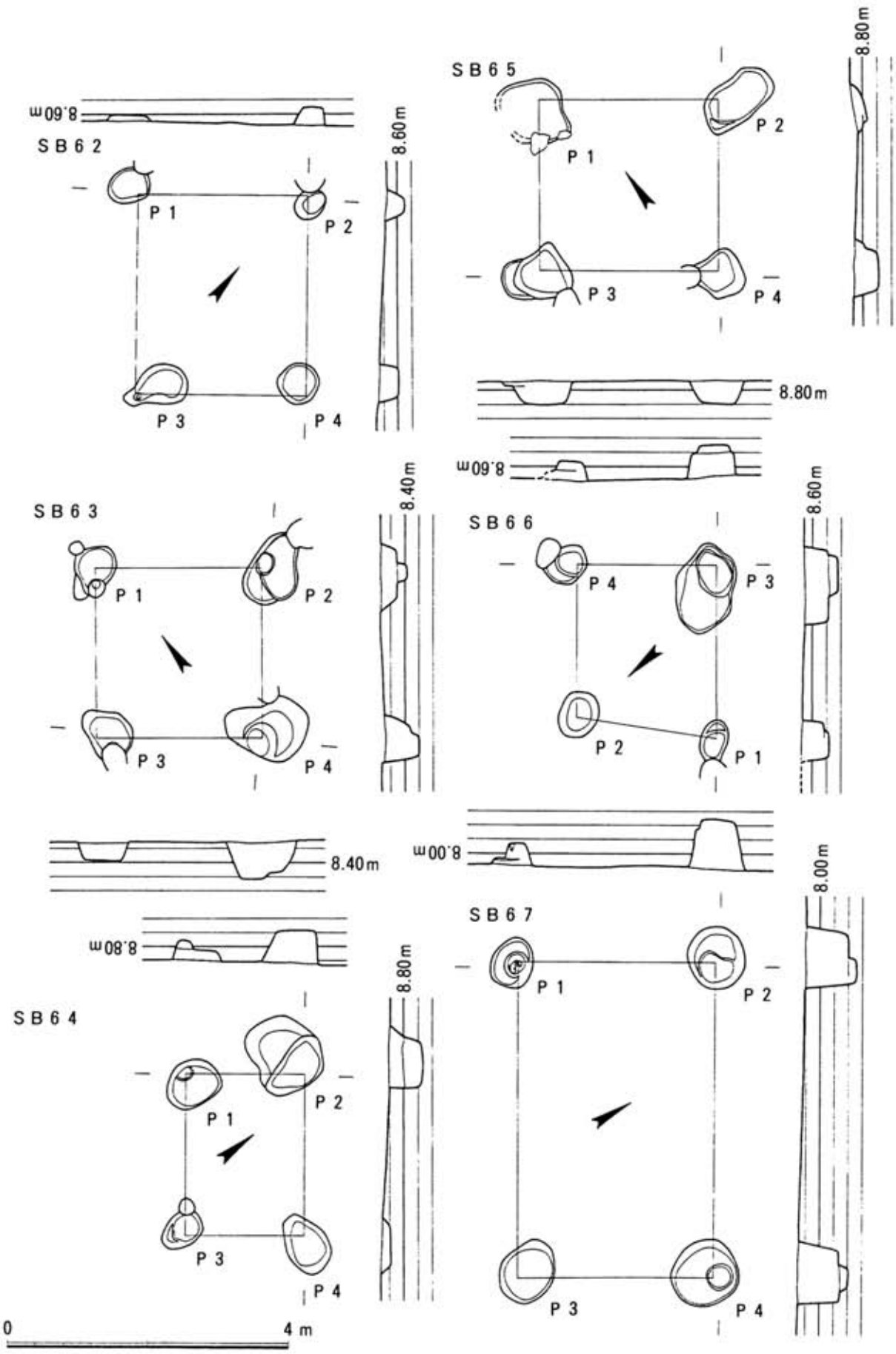


Fig. 38　SB62・63・64・65・66・67掘立柱建物跡（1/80）

(2) 土　坑

23基の土坑を確認し、うち15基について報告する。形態的には、不整な隅丸長方形・不整な円形・不整な楕円形の3形態に分類できるが、それぞれの形態の差異による性格は不明。しかし、Ⅱ区北側に集中する隅丸長方形の土坑については、甕棺墓が近接することや土坑内の出土遺物等から考察して、甕棺墓より古い時期の土壙墓の可能性もある。調査区は北側から南側に向かってゆるやかに下る斜面上に位置し、土坑はⅡ区の標高の高い北側に集中する。

SK01

Ⅰ区の北西側に位置する。西側は調査区外であるために明確ではないが、平面プランは隅丸長方形または不整な楕円形であったと考えられる。長さ約190cm、深さ約40～66cm。南側は斜面のため、遺構上部をわずかに削平される。埋土中より、中期初頭から中期前半にかけての甕の口縁部・底部、壺の口縁部・胴部等（57～65）、および砂岩製の石剣（164･165）が出土した。

SK02

Ⅱ区の北側に集中するうちの1基。平面プランは不整な円形で、長径約230cm、短径200cm、深さ約55cmである。床面から20cm程度の深さで2段掘り状の掘りこみがある。埋土は9層に分層でき、レンズ状に堆積する。1～4層は砂層で、4層は暗灰黒色の灰が混じる。5層から下位は粘土質で、5・7層は炭化物を含み、6・8層は灰を多く含んで、9層に至っては極めて多くの灰を含む。埋土中より、前期末から中期前半にかけての甕の口縁部・底部、壺の口縁部、支脚等（66～75）が出土した。

SK04

Ⅱ区の北側に集中するうちの1基。平面プランは、不整な楕円形で、長さ約230cm、幅約110cm、深さ約25cmである。埋土は3層に分層できる。1・2層は灰褐色の粘性砂質土で、1層はカナケを多く含み極小さい炭化物をブロック状に多く含むが、2層は1層のカナケを含まない。3層は黒色の粘性の強い粘質土で、炭化物を層状に多く含む。埋土中より、中期前半の蓋（76）、甕の口縁部（77）、支脚（78）が出土した。

SK05

Ⅱ区の北側に集中するうちの1基。平面プランは不整な隅丸長方形で、長さ約350cm、幅110cm、深さ約15～20cmである。床面は、南東側に向かってゆるやかに浅くなる。長軸は西へ54.5°ふれる。埋土は2層に分層できる。1層は暗灰色の砂層で炭化物を含み、2層は黒灰色の砂層で1層より多くの炭化物を含んでいるが、SK02・SK04のような炭化層ではない。埋土中より、前期末から中期初頭の甕の口縁部や底部（81～87）、中期前半の蓋（88）が出土した。甕棺墓に近接することから、甕棺墓より古い時期の土壙墓の可能性も考えられる。

SK06

Ⅱ区の北側に集中するうちの1基。平面プランは楕円形で、長さ約145cm、幅約95cm、深さ約25cmである。埋土はレンズ状に堆積し、2層に分層できる。1層は暗灰色の粘質土で炭化物を若干含む。2層については不明。埋土中より、中期前半の甕の口縁部（79）や突帯部分（80）が出土した。

SK11

Ⅱ区の北側に集中するうちの1基。平面プランは隅丸長方形ないしは不整な楕円形で、長さ約230cm、幅約66～80cm、深さ約20cmである。埋土は3層に分層でき、レンズ状に堆積する。1層は暗灰色の砂層で炭化物を少量含む。2・3層は不明瞭であった。埋土中から遺物は確認できなかった。

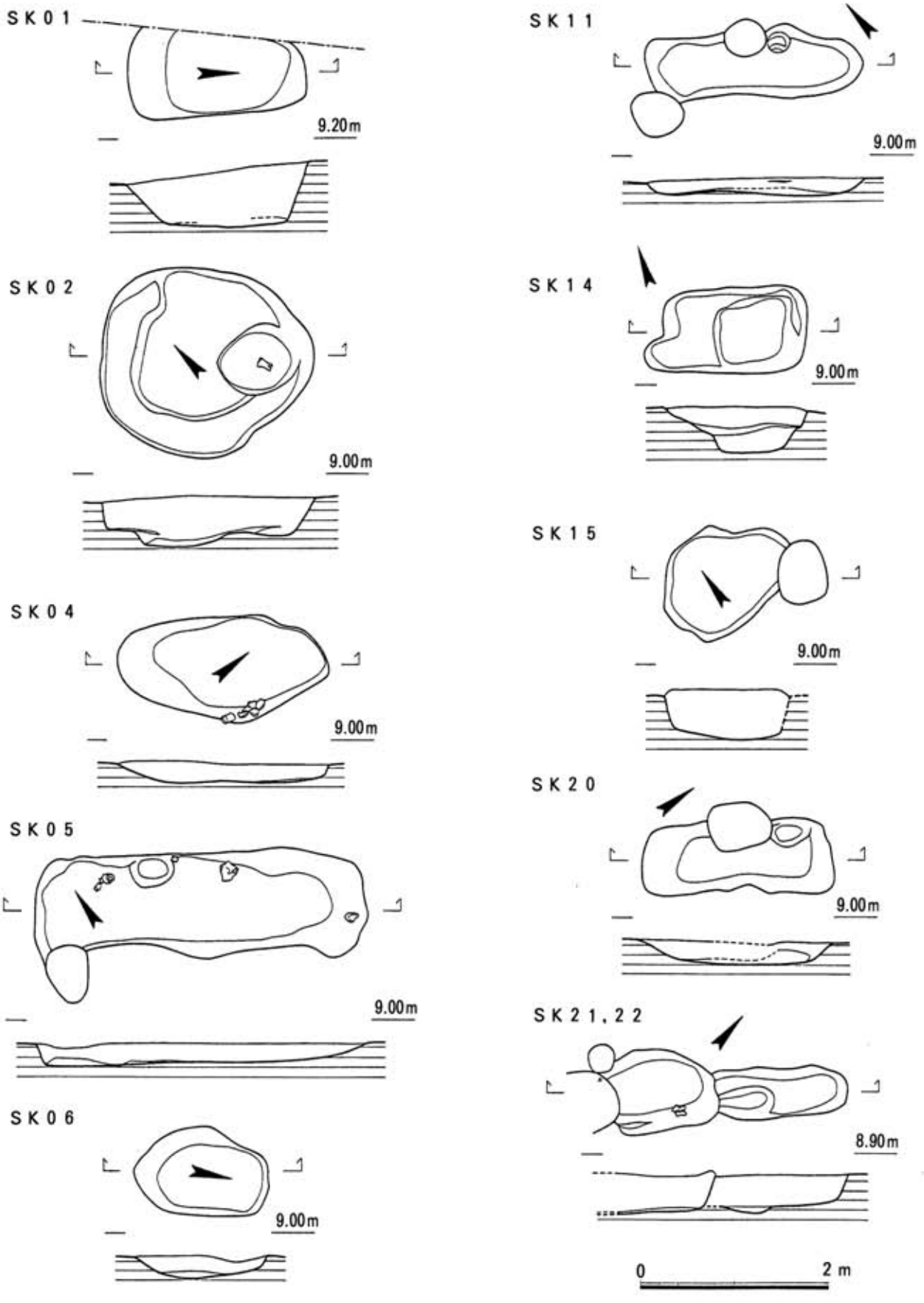


Fig. 39　SK01・02・04・05・06・11・14・15・20・21・22土坑（1/60）

SK14

Ⅱ区の北側に集中するうちの１基。平面プランは不整な隅丸長方形で、長さ約150～170cm、幅約90cm、深さ約50cmである。床面には、不整な隅丸方形で二段掘り状の掘りこみがある。埋土は３層に分層でき、レンズ状に堆積する。１層は暗灰色の砂層、２層は黒灰色の砂層で炭化物を若干含み、３層は黒灰色の粘質土で２層より炭化物が少ない。埋土中から遺物は確認できなかった。

SK15

Ⅱ区の北側に集中するうちの１基。東側をSB61の柱穴に切られる。平面プランは、不整な楕円形である。残存部分の長径約120cm、短径100～120cm、深さ約55cmで、断面形態は逆台形である。埋土中より遺物は確認できなかった。

SK20

Ⅱ区の北側に集中するうちの１基。平面プランは不整な隅丸長方形で、長さ約200cm、幅約80cm、深さ約25cmである。一部、小穴に切られる。埋土中から遺物は確認できなかった。

SK21

Ⅱ区北側に集中する土坑の一群とは、分布を異にする。SK22に切られるために不明瞭ではあるが、平面プランは隅丸長方形ないしは楕円形と思われる。残存部分の長さ約140cm、幅約55cm、深さ約40cmで、床面から深さ７～８cmの二段堀り状の掘りこみがある。埋土は２層に分層でき、レンズ状に堆積する。１層は暗黒色砂質土で、炭化物をSK22の１層よりは若干少ないが多量に含む。２層は暗黒色土で、炭化物を若干含む。埋土中より中期前半の甕の口縁部（89・90）が出土した。

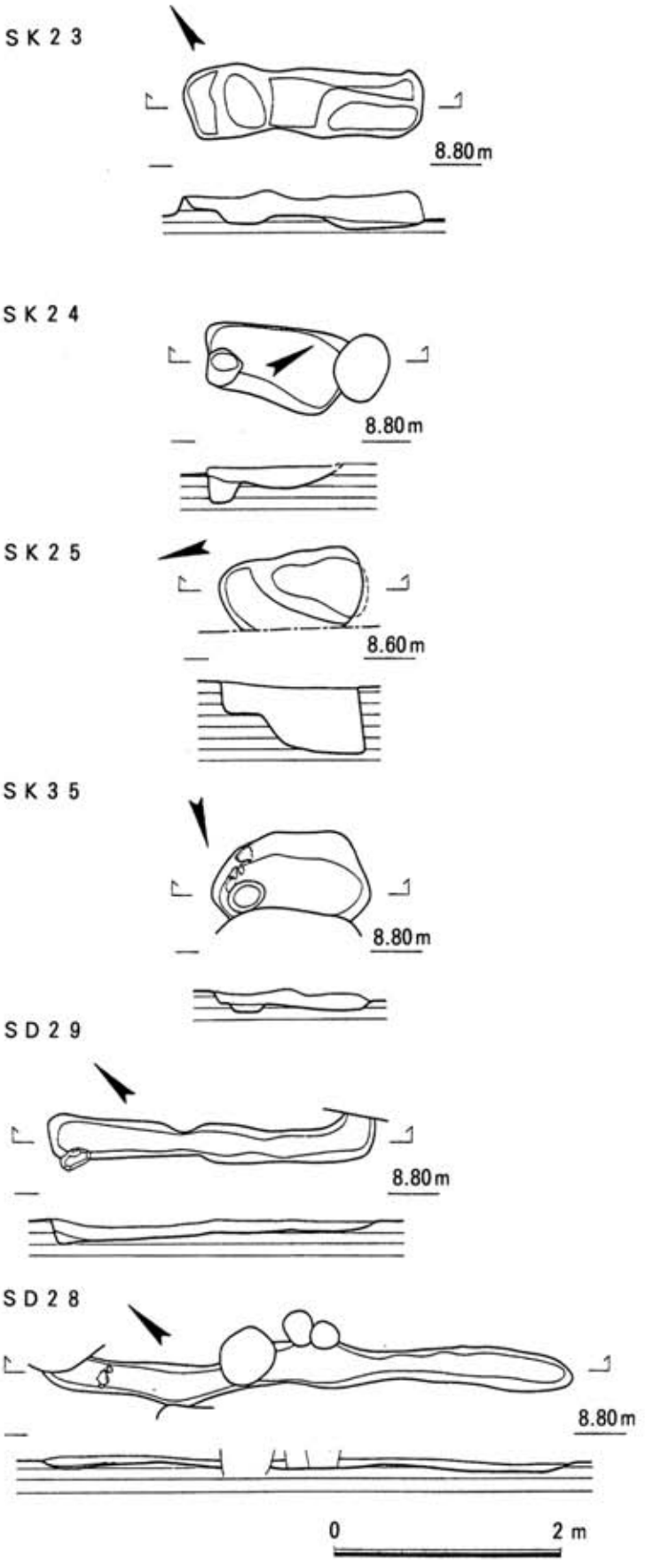


Fig. 40　SK23・24・25・35・土坑、SD28・29溝状遺構（1/60）

SK22

SK21を切る。平面プランは不整形で、残存部分の長さ約107cm、幅約90cm、深さ約45cmである。断面形態は逆台形である。埋土は2層に分層でき、ほぼ水平な堆積をしている。1層は暗黒色の砂質土で、焼土が多く、炭化物も多量に含む。2層は暗黒色土で、炭化物を若干含む。埋土中より中期前半の甕の口縁部（91～95）や甕の底部（96・97）、壷の底部（98）が出土した。

SK23

Ⅱ区北側に集中する土坑群から、南西へ7m程離れて位置する。平面プランは不整な隅丸長方形で、長さ約210cm、幅約65cm、深さ約10～30cmである。床面から深さ10cm程の二段掘りが2ケ所あり、北東側の掘りこみは、SB59の柱穴の可能性がある。埋土中より中期初頭の甕の口縁部（99）や甕の底部（100）が出土した。

SK24

SK23の南側に位置する。平面プランは不整な隅丸長方形で、小穴に切られる。残存部分の長さ約113cm、幅約60～70cm、深さ約20cmである。埋土中より遺物は確認できなかった。

SK25

Ⅱ区西側で1基のみ確認した。一部調査区外のため明確ではないが、平面プランは隅丸長方形であろう。長さ約130cm、深さ約60cmで、床面から深さ35cm程の掘りこみがある。埋土中より中期初頭から前半にかけての甕の口縁部（101・102）や底部（103）が出土した。

SK35

SB18の柱穴に切られる。平面プランは不整な楕円形で、床面から深さ5cm程度の小穴がある。長径約140cm、深さ約15cmである。埋土中より中期初頭の甕の口縁部（104）が出土した。

(3) 溝状遺構

Ⅱ区から4条の溝状遺構を確認した。SD28・SD29は、斜面の傾斜と直交するようにのびる。また、SD37はSD69と長軸方向をともにしているため、もともとは1条でSB19掘立柱建物を区画するための、区画溝の可能性がある。

SD28

斜面の傾斜に直交するように、長軸は北西－南東方向にのびる。SD29を切り、わずかに蛇行する。長さ約470cm、幅約30～40cm、深さ約10cmで、壁面はゆるやかにたちあがる。北西側をSB55の柱穴に切られる。埋土中より、中期前半の甕の口縁部（105・106）が出土した。

SD29

L字状に曲がる可能性があるが、SD28に切られているために不明瞭である。長軸の方向はSD28と同様に、斜面と直交した北西－南東方向である。長さ約290cm、幅約20～40cm、深さ約15cm。埋土中より、中期前半の甕の口縁部（107～111）や底部（112）、高坏の脚部（113）が出土した。

(4) 甕　棺

6基の甕棺墓を確認した。Ⅱ区の北側中央部にSJ07, 08, 09, 10の4基からなるグループがあり、SJ07から勾玉1点、碧玉製管玉42点が出土した。これから南西4mにSJ13　1基がある。また、Ⅱ区の中央部にSJ68　1基がつくられる。

SJ07

2区北端に4基の甕棺墓が集中するうちの1基。西側にSJ08・09・10甕棺墓が埋置される。平面プ

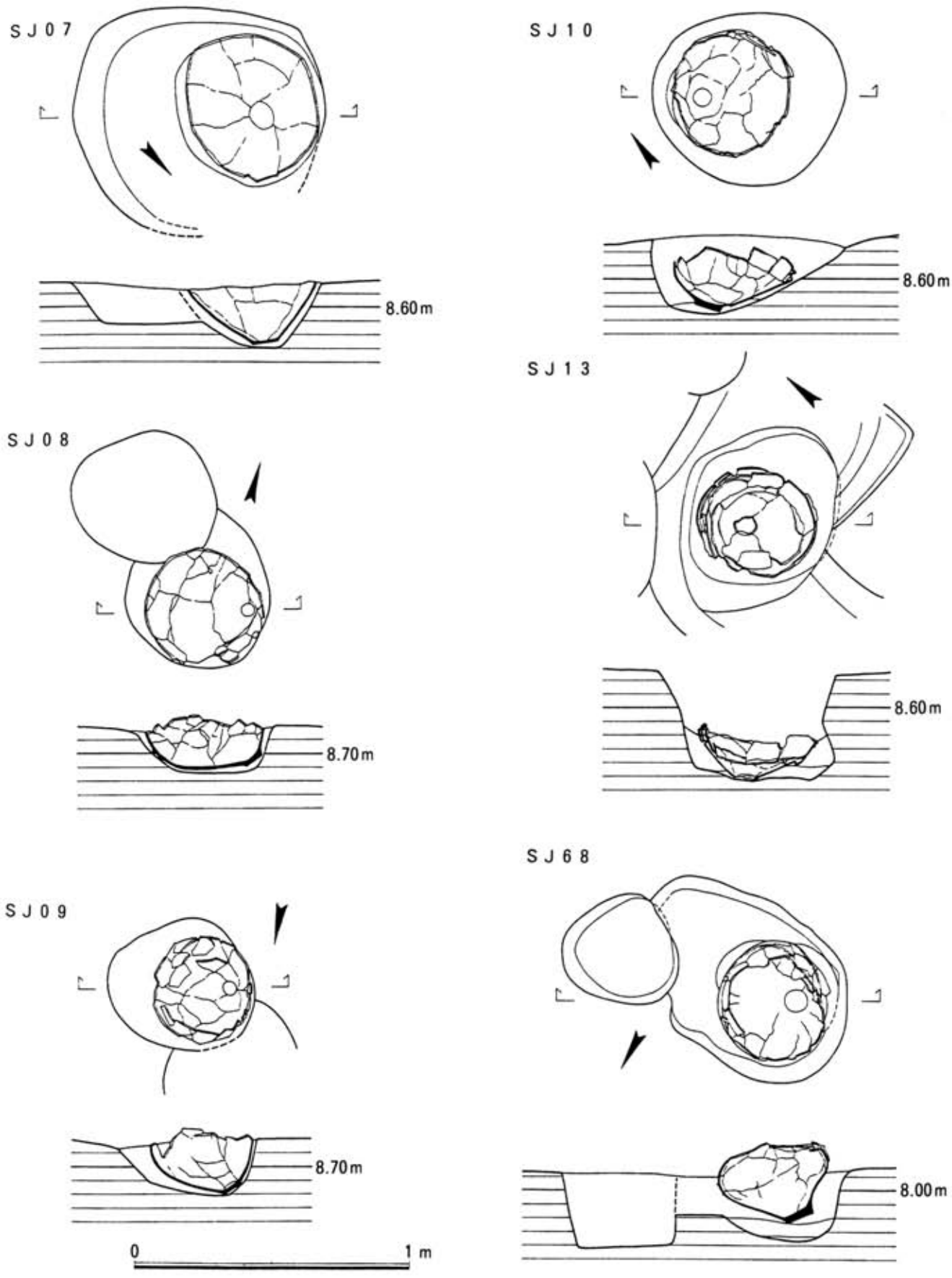


Fig. 41　SJ07・08・09・10・13・68甕棺墓（1/20）

ランは、直径55～58cmの不整な円形で、遺構上部を削平のため消失する。埋置角度は、81.5°。出土遺物の復元等により、壷（上）＋壷（下）の複式棺か。棺内埋土中より勾玉1点、碧玉製管玉42点が出土した。

SJ08

2区北端に4基の甕棺墓が集中するうちの1基。西側にSJ07甕棺墓、東側にSJ09甕棺墓、南側にSJ10甕棺墓がそれぞれ埋置される。北東壁をSJ09甕棺墓と切り合う。平面プランは、長径約60cm、短径52cmの不整な楕円形で、遺構上部を削平のため消失する。埋置角度は、53.5°。SJ09甕棺墓との新旧関係は、埋土の観察等より、SJ09甕棺墓の方が新しい。下甕のみ残存する。

SJ09

2区北端に4基の甕棺墓が集中するうちの1基。西側にSJ08甕棺墓、南西側にSJ09甕棺墓がそれぞれ埋置される。平面プランは、直径50～54cmの不整な楕円形で、遺構上部を削平のため消失する。埋置角度は、55.5°。SJ08甕棺墓を切って埋置する。下甕のみ残存する。

SJ10

2区北端に、4基の甕棺墓が集中するうちの1基。西側にSJ07甕棺墓、北側にSJ08甕棺墓、東側にSJ09甕棺墓がそれぞれ埋置される。平面プランは長径約72cm、短径約64cmの不整な楕円形で、遺構上部を削平のため消失する。埋置角度は、72.0°。下甕のみ残存する。

SJ13

2区北端に、4基の甕棺墓が集中する箇所から南西方向に約5mほど離れて埋置される。平面プランは、長径約73cm、短径約58cmの不整な楕円形で、遺構上半部を削平のため消失する。埋置角度は、80.0°壷（上）＋壷（下）の複式棺で、上壷は、口縁部を打ち欠く。

SJ68

3区の中央部に、他の5基と離れて、単独で埋置される。遺構上半部に削平を受けており、かろうじて上甕の一部が残存するものの、遺構自体は下部を若干残すのみであり、なおかつ、東側を他の遺構に壊されるため遺構の形態は不明瞭。また、遺構下部にごく浅い段掘りが認められ、上段部分の平面プランは長径約85cm、短径約58cmの楕円形をなし、下段部分の平面プランは長径約45cm、短径約33cmの卵形をなす。埋置角度は、66,0°。壷（上）＋壷（下）の複式棺。

4．遺　物

(1) 弥生土器

井ゲタ遺跡出土の土器は遺構一括出土のものはなく、その大部分は口縁部、底部片であり完形の土器もほとんど無い。遺構ごとに掲載した土器のうち甕の口縁部、底部は堂の前と同様の分類を行う。土器挿図はFig42,43は掘立柱建物跡出土土器、Fig44,45は土坑出土土器、Fig46は土坑・溝跡出土土器、Fig47,48は包含層出土土器である。器種としては甕、蓋、広口壺、袋状口縁壺、高杯、器台、支脚がある。以下、遺構ごと、遺物番号順に土器の説明を記述する。

①　掘立柱建物跡柱穴内出土土器

1～3はSB17出土。1は甕口縁部D-2-b類。2は口縁部内側の突出がなくC類。3は広口壺口縁部。鋤先状で口縁端部は窪む。

4～8はSB18出土。4の口縁部は外側に折り曲げてつくるが内側の粘土帯張り付けによる突出はなくC類とした。5はE-1類。内側の稜線は明瞭である。6，7は甕底部。6は底面周縁に粘土帯を張り付けて高台を思わせる。外面タテハケ。7の底面に粘土帯接合のための窪みがありC類。外面タテハケ。

8は壺の底部、底部の厚さは0.4cm。

9～17はSB19出土。9～11は甕口縁部。9はD-2-b類。口縁部内側に断面三角形の粘土帯を張り付けて突出させる。10はD-4類。11はD-2-a類。断面で粘土接合痕が観察できる。12はD-3-b類。上端面はわずかに窪む。外面タテハケ。13，14は甕底部。13はB類かC類である。底面中央部が全体的に窪む。外面粗いタテハケ。14はD類。外面緻密なタテハケ。15，16，17は器台。裾部にかけて外反気味に開くが端部の形態に違いがある。15は端部面取りされ、16は端部が肥厚し、17は端部がやや外方にのびる。

18はSB40出土。上端面が若干内傾するがC類とした。19はSB42出土。口縁部は外反し、端部は面取りされる。前期の土器である。

20～24はSB45出土。20～23は甕口縁部。20はD-2-b類、21はD-1-b類、22はD-2-b類、23はD-2-a類、23は口縁端部が欠損するがこれは粘土帯の接合面によるものだろう。外面タテハケのちヨコ方向の一条の沈線あり。24は壺底部、底部の厚さ0.3cm。

25，26はSB46出土。ともに甕口縁部D-2-b類。25は口縁部内側は欠損する。

27，28はSB47出土、29はSB48出土。すべて甕口縁部D-2-b類。

30，31はSB51出土。30は甕口縁部E-1類。内側に明瞭な稜線がつく。31は甕底部D類。底部の厚さ2.4cmで底面はわずかに窪む。外面タテハケ。

32～40はSB54出土。32～38は甕口縁部。34はD-1-b類、35，37，38はD-2-b類、36はD-2-a類である。38の端部は肥厚して丸くおさめる。39は甕底部E類。40は袋状口縁壺の口縁部片。

41～47はSB56出土。41～44は甕口縁部。41はC類、42はB類、43はD-2-b類、44はD-2-a類である。45，46は甕底部B類。46は底面中央はわずかに窪む。外面タテハケ。47は蓋口縁部。外面ナナメハケ。

48～49はSB58出土。48は甕口縁部B類で端部に連続刻みあり。49は甕口縁部E-1類。

50はSB61出土。広口壺口縁部片。上端面は平坦である。

51～56はSB65出土。51，52，53は甕口縁部D-2-b類。51の口縁部内側は打ち欠きか。53は上端面は湾曲する。54は甕底部C類、外面タテハケ。55は高坏口縁部片。鋤先状で上端面は外にむかって傾く。56は器台裾部。

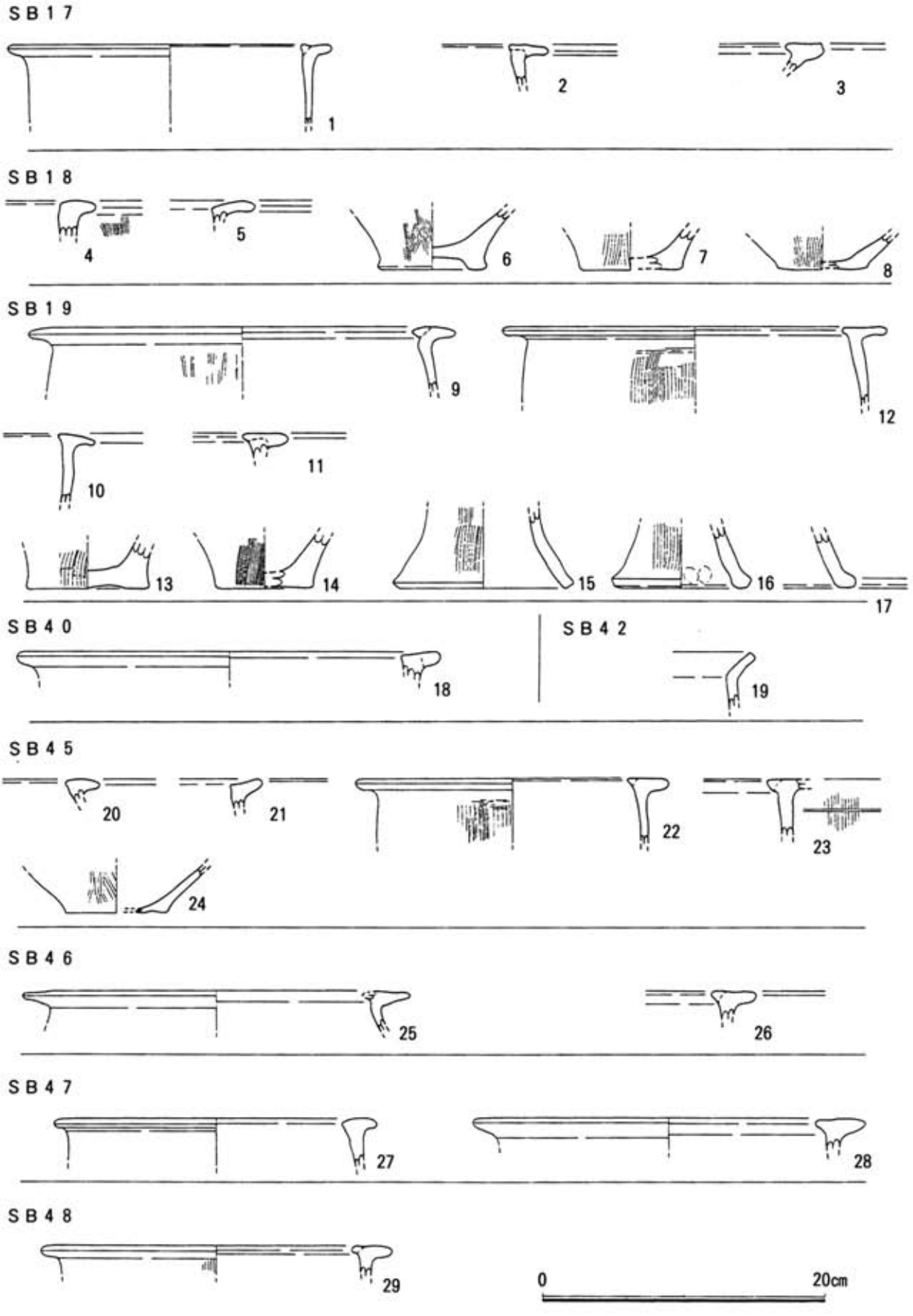


Fig. 42　掘立柱建物跡柱穴内出土土器 1 （1/4）

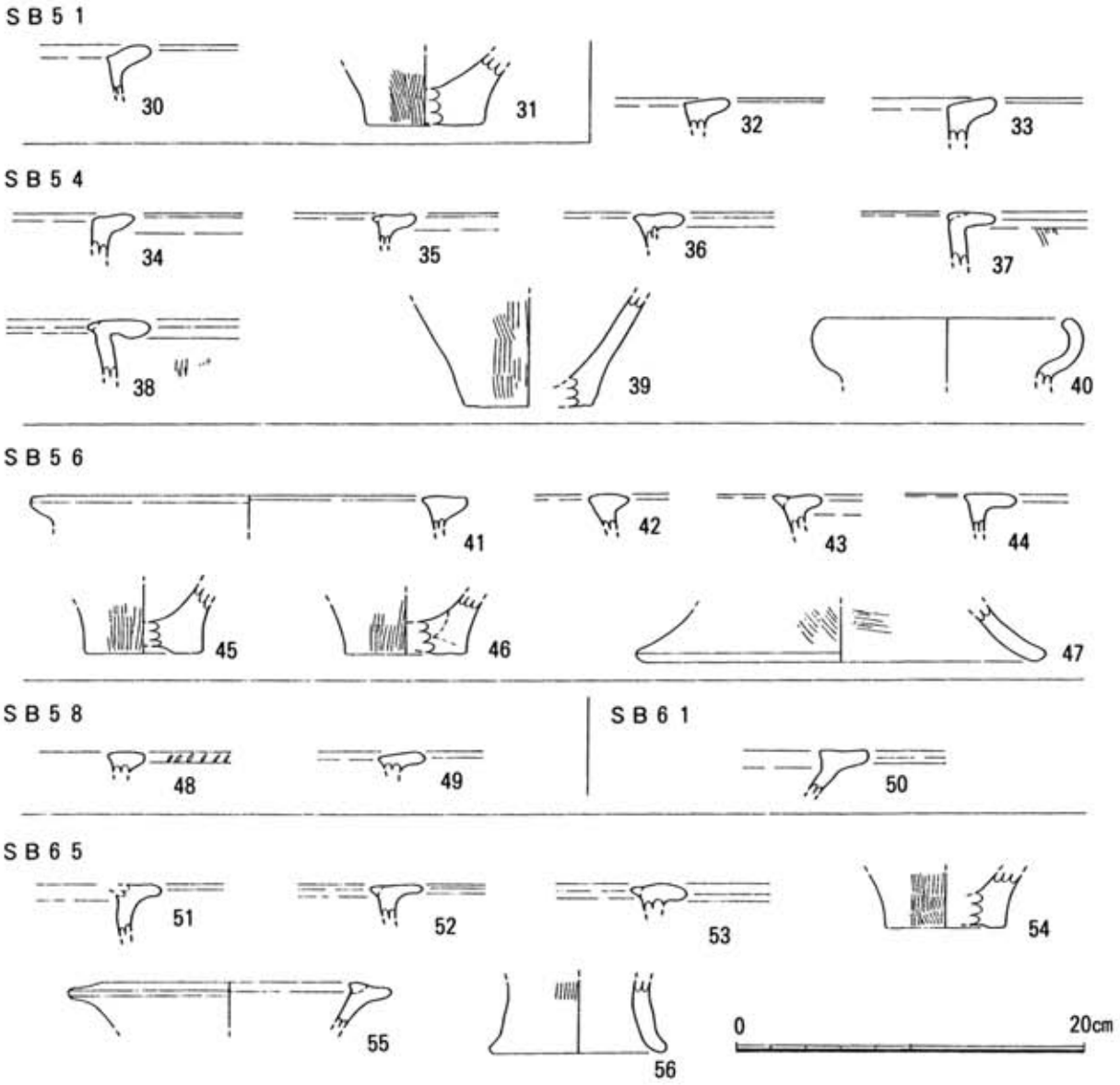


Fig. 43　掘立柱建物跡柱穴内出土土器 2 （1/4）

② 土坑出土土器

57～65はSK01出土。57, 58は甕口縁部。57はD-1-b類。口縁下外面に一条の沈線あり。58はD-2-a類、口縁下外面にナデによる三角突帯をつくりだす。59は蓋のつまみ部。つまみ上端面はわずかに窪む。外面タテハケ。60, 61は甕底部、60はA類、外面タテハケ。61はE類、外面粗いタテハケ。62, 63は壺底部。ともに底部の厚さは2.3～2.4cm。64は壺胴部片、最大径の位置に三角突帯を張り付ける。横方向ヘラミガキ。65は広口壺口縁部片。

66～75はSK02出土。66～70は甕口縁部。66はD-1-b類、口縁下外面に三角突帯を張り付ける。67, 68, 69, 70はD-2-a類。67の口縁直下外面はナデにより窪む。外面タテハケ。71は甕底部B類、72, 73, 74は広口壺口縁部。72は素口縁で73, 74は鋤先状口縁で74の頸部外面には連続した縦方向の暗文あり。75は支脚。断面円形の柱状で外面には指押圧痕がつく。

76～78はSK04出土。76は蓋でつまみ上端部中央はわずかに窪む。裾部かけて外反気味に開く。外面ハケ。77は甕口縁部D-2-a類。78は支脚。形態は75と類似し、断面円形の柱状である。上端面は窪む。外面に指押圧痕あり。

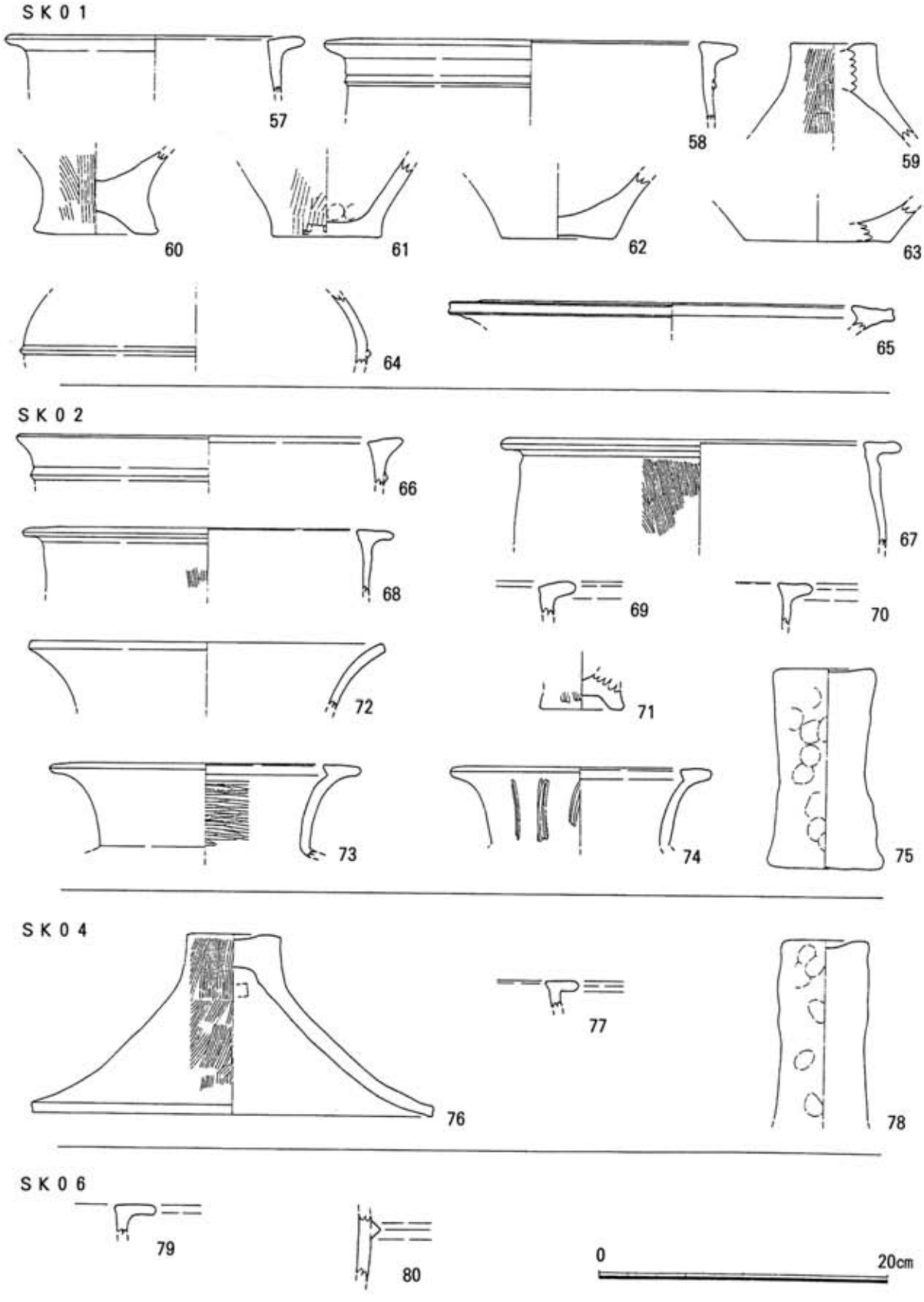


Fig. 44　土坑出土土器 1 （1/4）

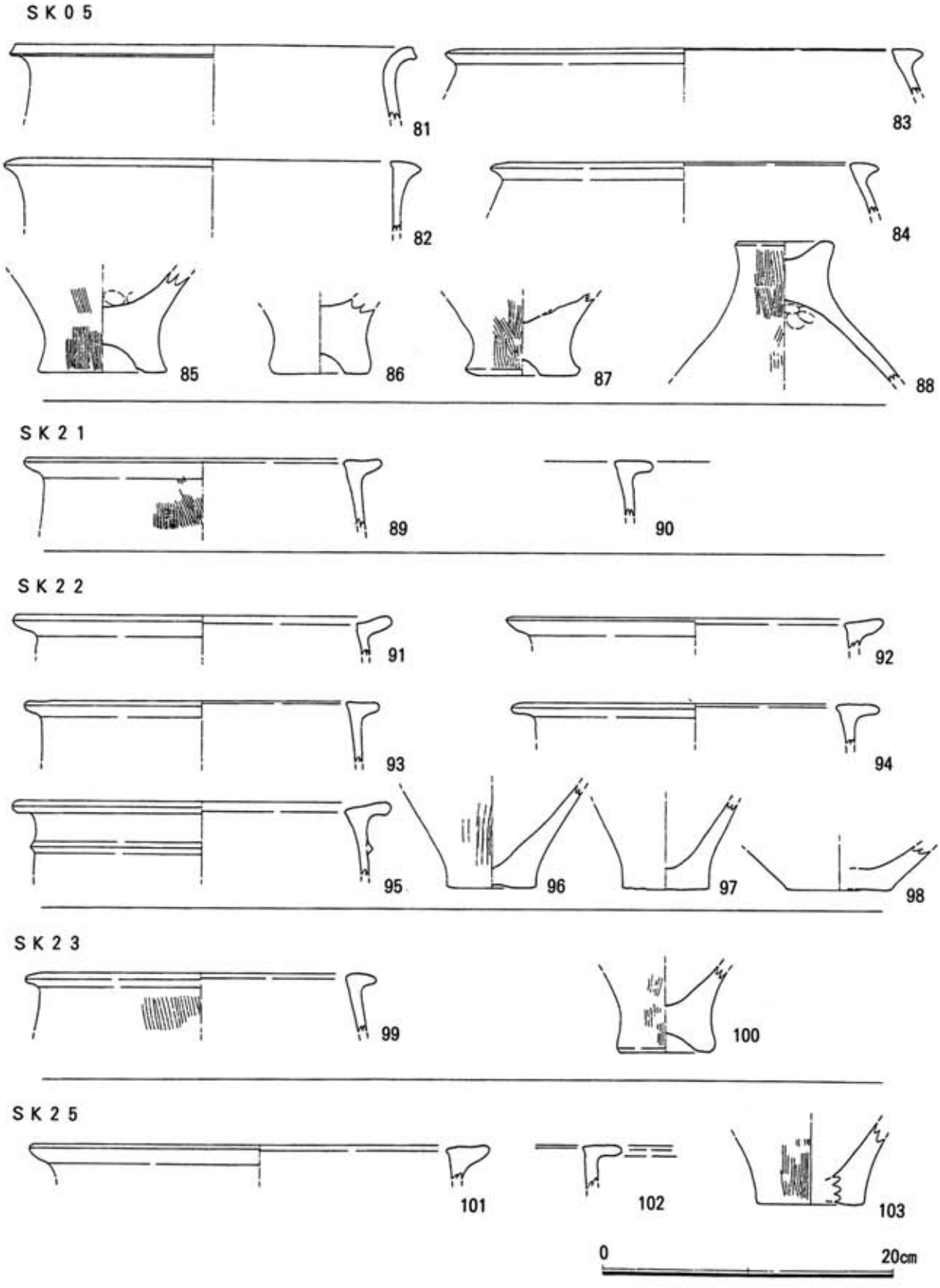


Fig. 45　土坑出土土器 2 （1/4）

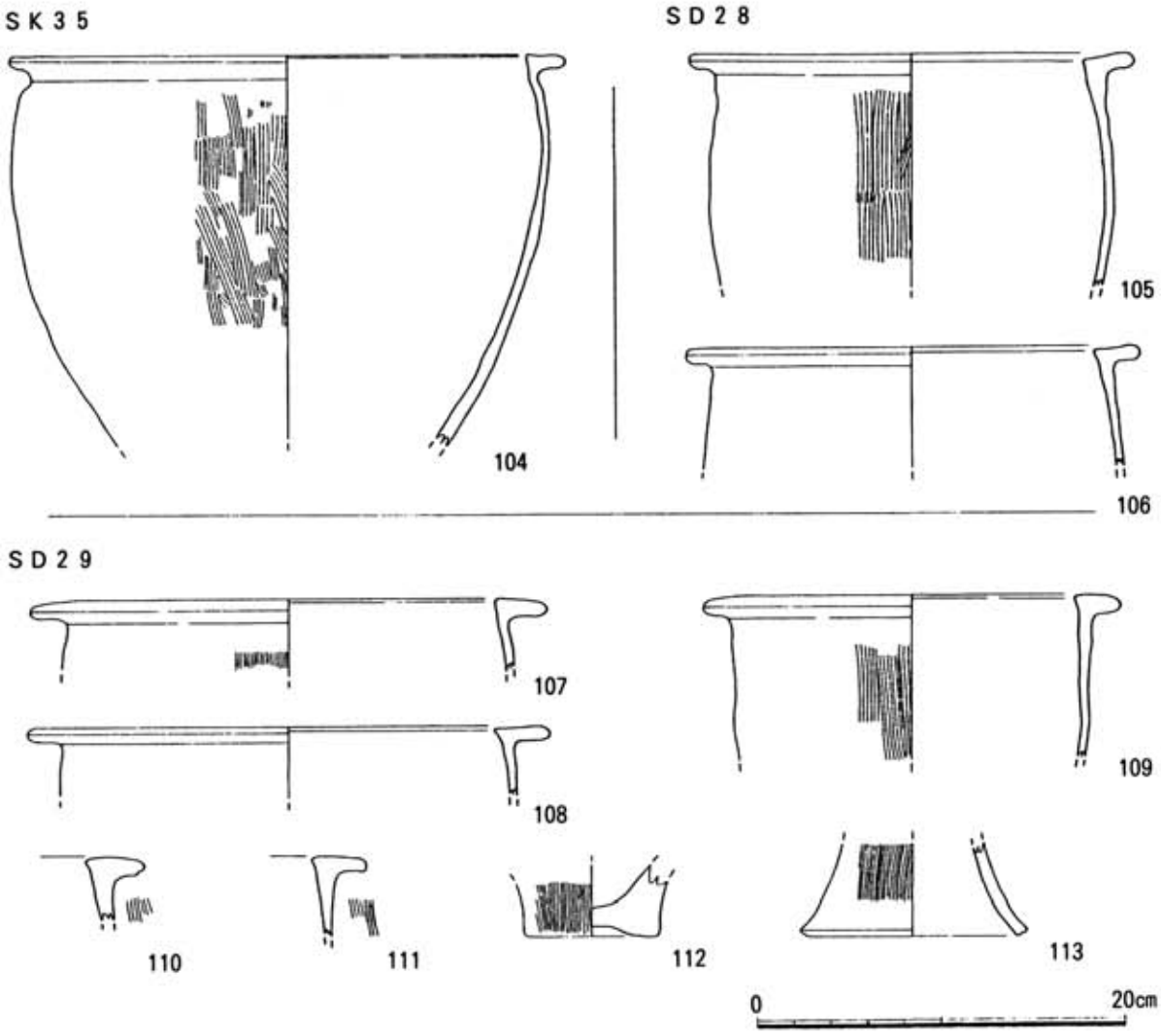


Fig. 46　土坑・溝状遺構出土土器（1/4）

79, 80はSK06出土。79は甕口縁部D-2-b類。80は壺の胴部片、三角突帯を張り付ける。

81～88はSK05出土。81～84は甕口縁部。81は外反して開き、端部は面取りされる。82, 83, 84はB類。85, 86, 87は甕底部B類。底部は厚く裾部にかけて開く。85, 86の底面は大きく窪み、87は指にて窪ませる。88は蓋。つまみ端部は大きく窪む。

89, 90はSK21出土。ともに甕口縁部D-2-a類。

91～98はSK22出土。91～95は甕口縁部。91, 92はD-1-a類。92は口縁下端面に稜がつく。93はD-2-a類。94, 95はD-2-b類、95は口縁下外面に三角突帯を張り付ける。96, 97は甕底部、96はB類、97はD類である。98は壺の底部。

99, 100はSK23出土。99は甕口縁部B類。100は甕底部A類、外面タテハケ。

101, 102, 103はSK25出土。101は甕口縁部D-2-b類、102はC類。103は底面の窪みがみられ、底部の厚さからいえばB類か。

104はSK35出土。甕で上半部が遺存する。口縁部D-2類。最大径は胴部上位にあり口縁部にかけて内傾する。口縁部直下外面はナデにより窪む。外面タテハケ。

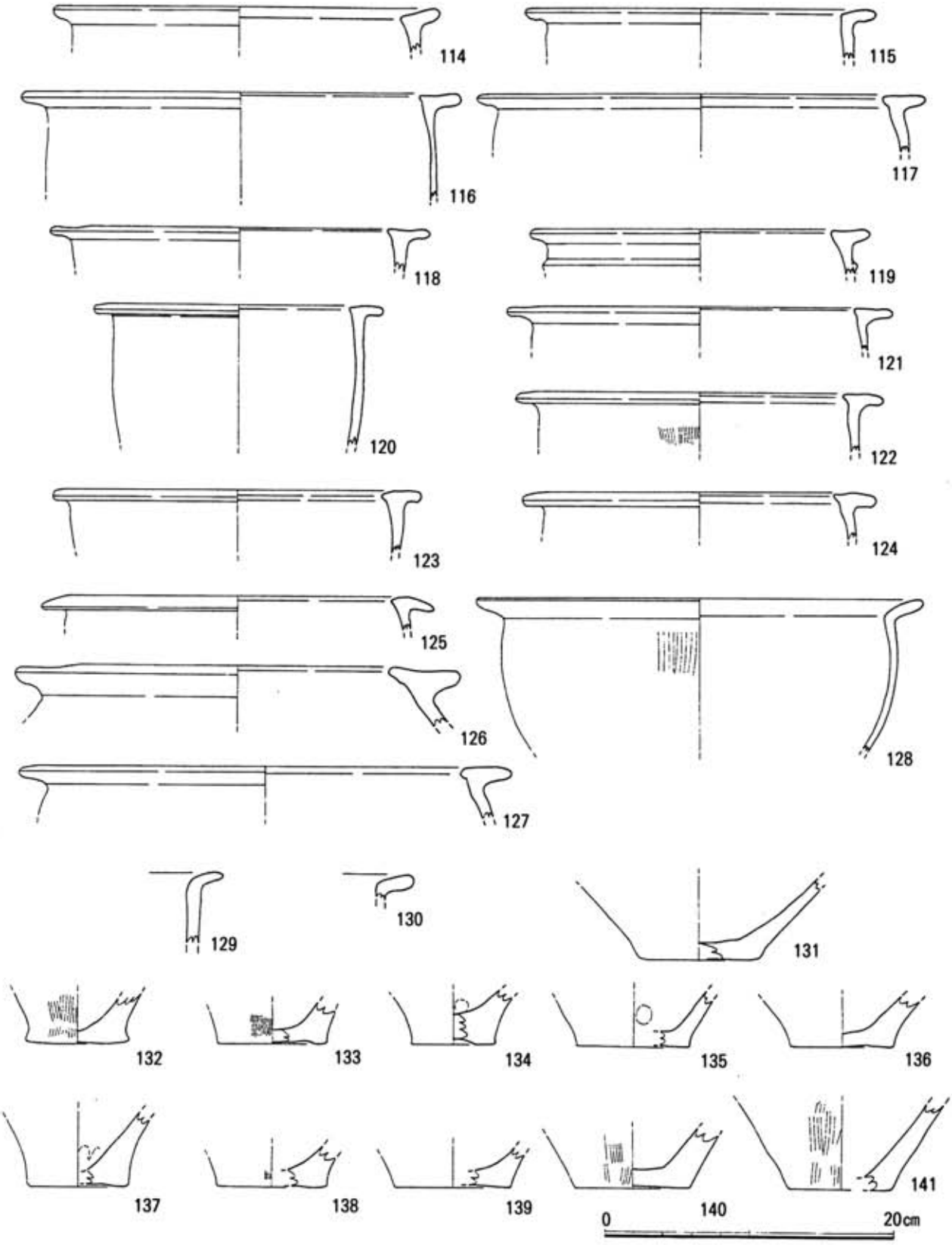


Fig. 47　包含層出土土器 1 （1/4）

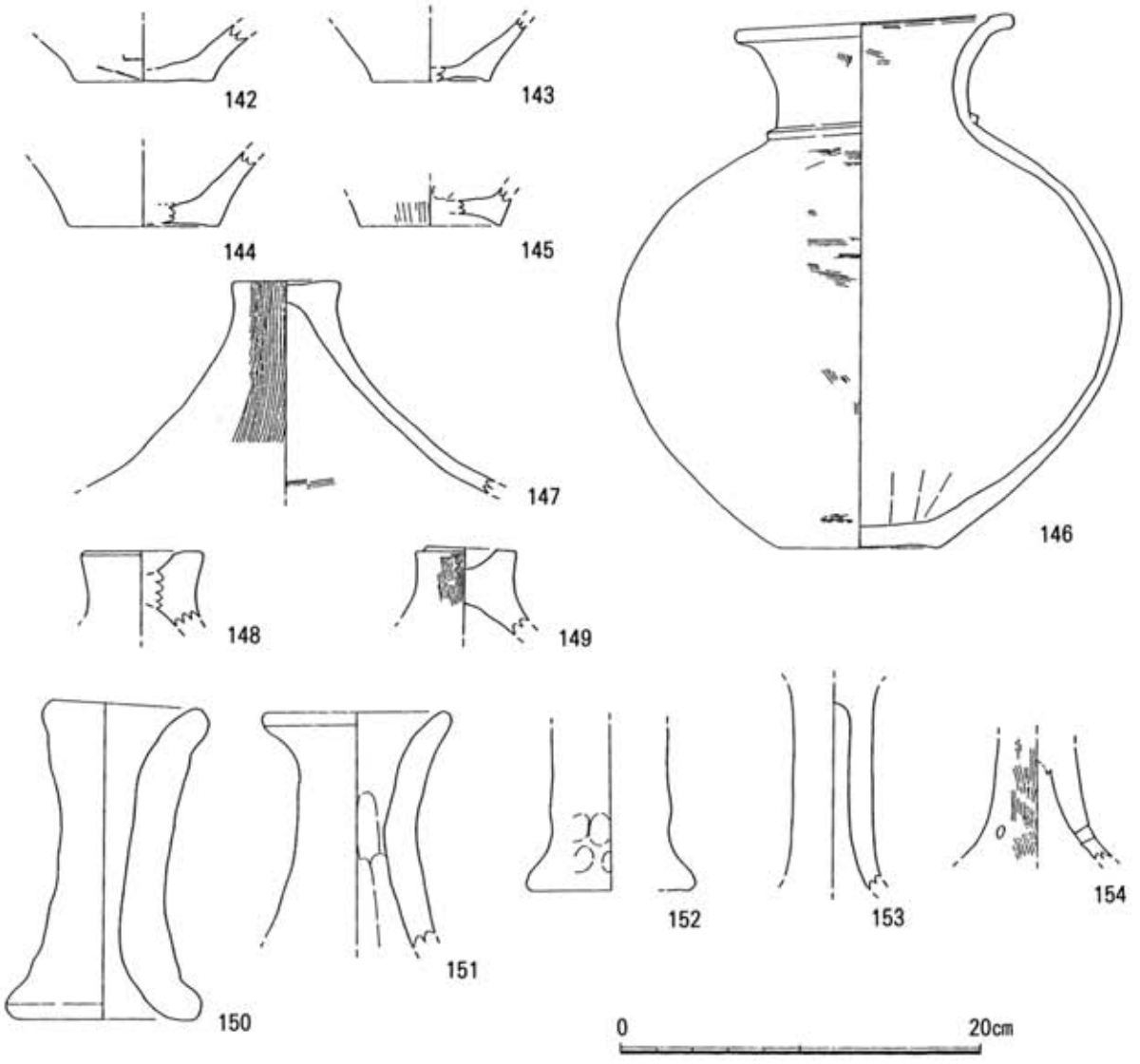


Fig. 48　包含層出土土器 2 （1/4）

③　溝跡出土土器

105, 106はSD28出土。105は甕口縁部D-1-a類、最大径は胴部上位にあり口縁部にかけて内傾する。外面粗いタテハケ。106は甕口縁部D-2-a類。

107～113はSD29出土。107～109は甕、107, 109, 110, 111は甕口縁部D-2-a類、108は甕口縁部D-3-a類。112は甕口縁部B類、外面タテハケ。113は器台、端部は面取りされる。外面タテハケ。

④　包含層出土土器

114～130は甕口縁部、A類、B類、C類はなく、D類、E類がみられる。D類が圧倒的に多い。114はD-1-a類、115はD-1-b類、上端面の内傾化は緩やかである。D類のうちでもD-2類が多く、117, 120, 123, 124はD-2-a類。116, 118, 119, 121, 122, 127はD-2-b類である。119は口縁下外面に三角突帯を張り付ける。122は口縁部内側が打ち欠きのためか欠損する。123の口縁部上端面は内傾化する。125はD-4類、端部にかけて下がる。130はE-1類、128, 129はE-2類である。128の最大径は胴部上位にあり口縁部内側に不明瞭ながらも稜がつく。129は前期の土器に類似するが、胎土や調整からE-2類とし

た。126は中形甕棺の口縁部、内側は上方をむく。

131～141, 144, 145は甕底部、A類は無く、B, C, D, E類がある。131, 135, 140, 141, 144はE類。131と128は同一個体である。131は大粒の砂粒混入、器壁は摩耗する。140, 141は外面粗いタテハケ。132, 139はD類、132の底部側面はわずかに外反し、外面タテハケ。133, 136, 138はC類、すべて底面に粘土帯接合のための窪みが回る。134, 138はB類。145は底面が上げ底になっており、成形方法的にはB類か、外面タテハケ。

142, 143は壺底部。ともに外面の仕上げ調整はみられない。142の底部側面はヘラ痕がつく。143の底面は凹凸になる。

146は広口壺、完形である。1区の南西隅から出土、掘り方は検出できず包含層出土とした。胴部最大径が中位にある球形の胴部に短い口頸部がつく。口縁部はわずかな鋤先状で、肩部に断面三角形の突帯を回す。胴部上半部にヨコ方向のハケが部分的に残る。

147, 148, 149は蓋、147のつまみ上端面はわずかに窪む。外面タテハケのち裾部はヨコナデを施す。148, 149は蓋つまみ部で149の上端面はより窪ませる。

150, 151は器台、150は完形、151は裾部を欠損する。ともに器壁は厚い。150は体部中位が、151は体部中位よりやや上で最もくびれる。150は外面に指頭圧痕あり。151は棒に粘土を巻きつけることで成形したと思われる。151は砂粒を多量に混入する。

152は支脚、断面円形で裾部が外方に開く。外面指頭圧痕がつく。

153, 154は高坏脚部、153は長脚高坏脚部。154は脚裾部に円形の孔をあける。

Tab. 12　井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（1）　※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
42－1（000603）	SB17 P2	甕（弥生土器）	口径（22.9）	口縁部は逆L字形で、内側にやや突出する。口縁上端面は、わずかに窪む。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面明褐色
42－2（000601）	SB17 P3	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、端部にかけて下がる。内外面ナデ。	大粒砂粒混入	内外面橙色
42－3（000602）	SB17 P2	広口壺（弥生土器）	――	口縁端部は沈線を施し、内側は断面三角形に突出する。	細砂粒混入	内外面褐色
42－4（970164）	SB18 P1	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形に折り返す。外面タテハケ。	細砂粒混入	内外面橙色
42－5（000604）	SB18 P4	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は湾曲する。	大粒砂粒混入	内外面茶褐色
42－6（970168）	SB18 P4	甕（弥生土器）	底径（7.7）	底部外周に粘土紐を貼付け上げ底をつくる。外面タテハケ。	大粒砂粒混入	外面明褐色 内面褐色
42－7（970166）	SB18 P4	甕（弥生土器）	底径（7.2）	平底で外面タテハケ。	大粒砂粒混入	外面橙色 内面黒褐色
42－8（970167）	SB18 P4	広口壺（弥生土器）	底径（6.3）	平底で胴部にかけて大きく開く。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	内外面橙色
42－9（000607）	SB19 P6	甕（弥生土器）	口径（30.1）	口縁部は内側に突出し、T字形に近い。上端面は湾曲する。	細砂粒混入	内外面橙色
42－10（970170）	SB19 P4	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、端部にかけて下がる。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面橙色
42－11（000606）	SB19 P3	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側にやや突出する。	中粒砂粒混入	内外面黒褐色
42－12（000605）	SB19 P1	甕（弥生土器）	口径（27.0）	口縁部は逆L字形で、内側にやや突出する。口縁上端面はわずかに窪む。外面タテハケ。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面橙色
42－13（000608）	SB19 P3	甕（弥生土器）	底径（8.6）	底部はやや上げ底気味。外面粗いタテハケ。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面橙色
42－14（970169）	SB19 P6	甕（弥生土器）	底径　6.8	平面で外面は微密なタテハケ。	中粒～大粒砂粒混入	外面明褐色 内面黒褐色
42－15（970172）	SB19 P4	器台（弥生土器）	底径（12.7）	裾端部にかけて外反気味に緩やかに開く。端部は面とりされる。外面タテハケ。	中粒砂粒少量混入	内外面明褐色
42－16（970173）	SB19 P6	器台（弥生土器）	底径（9.8）	裾端部にかけて八の字形に開く。内面に指頭圧痕あり。外面タテハケ。	金雲母混入 大粒砂粒少量混入	内外面明褐色
42－17（970174）	SB19 P6	器台（弥生土器）	――	裾端部にかけて八の字形に開く。端部は丸く仕上げる。内外面ヨコナデ。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面明褐色

Tab. 13　井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（2）

※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
42－18（000609）	SB40 P1	甕（弥生土器）	口径（30.0）	口縁部は逆L字形で、内側にかけてわずかに傾く。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
42－19（000610）	SB42 P2	甕（弥生土器）	――	口縁部はくの字形に外反する。外面ナナメハケ。端部は面取りされる。	細砂粒混入	内外面茶褐色
42－20（000613）	SB45 P1	甕（弥生土器）	――	口縁部は短い逆L字形である。上端面は湾曲する。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面明褐色
42－21（000614）	SB45 P2	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は内側に傾く。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面明褐色
42－22（000611）	SB45 P1	甕（弥生土器）	口径（22.0）	口縁部は逆L字形で、内側にやや突出する。外面タテハケのちヨコナデ。スス付着。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面明褐色
42－23（000612）	SB45 P1	甕（弥生土器）	――	口縁部は内側に突出し、T字形に近い。口縁直下外面に一条の沈線を施す。	大粒砂粒混入	外面褐色 内面明褐色
42－24（000615）	SB45 P1	壺（弥生土器）	底径（7.2）	平底で厚さ2～3mmと薄い。胴部にかけて大きく開く。外面タテハケ。	細砂粒混入	内外面明褐色
42－25（000616）	SB46 P2	甕（弥生土器）	口径（27.2）	口縁部は逆L字形で、内側にやや突出する。	中粒砂粒少量混入	外面橙色 内面褐色
42－26（000617）	SB46 P2	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側にやや突出する。	金雲母多量混入	内外面褐色
42－27（000618）	SB47 P1	甕（弥生土器）	口径（22.6）	口縁部は短い逆L字形で、上端面は湾曲する。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面明褐色
42－28（000619）	SB47 P1	甕（弥生土器）	口径（27.5）	口縁部は内側に突出し、T字形に近い。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
42－29（000620）	SB48 P3	甕（弥生土器）	口径（24.8）	口縁部は内側に突出し、T字形に近い。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	内外面橙色
43－30（000621）	SB51 P3	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側に傾く。端部は丸く仕上げる。	中粒砂粒混入	外面褐色 内面橙色
43－31（000622）	SB51 P3	甕（弥生土器）	底径（6.8）	平底で、外面は粗いタテハケ。	金雲母混入 大粒～中粒砂粒混入	外面　橙色 内面黒褐色
43－32（000624）	SB54 P4	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側に傾く。	細砂粒混入	内外面褐色
43－33（000631）	SB54 P2	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側に傾く。	中粒砂粒混入	内外面褐色
43－34（000628）	SB54 P3	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側に傾く。	金雲母混入 大粒～中粒砂粒混入	内外面橙色
43－35（000630）	SB54 P2	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側に突出する。上端面はわずかに窪む。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
43－36（000625）	SB54 P4	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面褐色
43－37（000626）	SB54 P4	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形。上端面はわずかに湾曲する。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	内外面橙色
43－38（000627）	SB54 P3	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、端部にかけて下がる。端部は肥厚する。	大粒砂粒少量混入	外面褐色 内面明褐色
43－39（000632）	SB54 P2	甕（弥生土器）	底径（7.4）	平底で胴部にかけて外反気味にたちあがる。外面タテハケ。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面褐色
43－40（000629）	SB54 P5	袋状口縁壺（弥生土器）	口径（13.9）	口縁部は袋状に内湾する。	細砂粒混入	内外面明褐色
43－41（000633）	SB56 P4	甕（弥生土器）	口径（24.6）	口縁部は短い逆L字形である。	金雲母混入 細粒～中粒砂粒混入	内外面明褐色
43－42（000635）	SB56 P2	甕（弥生土器）	――	口縁部は断面三角形で、端部にかけて下がる。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
43－43（000636）	SB56 P1	甕（弥生土器）	――	口縁部は内側に突出し、T字形に近い。	中粒砂粒少量混入	内外面褐色
43－44（000634）	SB56 P2	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	中粒砂粒多量混入	内外面橙色
43－45（000638）	SB56 P2	甕（弥生土器）	底径（6.8）	底部は上げ底で、外面は粗いタテハケ。	金雲母混入 細砂粒混入	外面　橙色 内面黒褐色
43－46（000637）	SB56 P2	甕（弥生土器）	底径（7.0）	平底で、外面は粗いタテハケ。	金雲母混入 大粒砂粒混入	外面明褐色 内面黒褐色
43－47（000639）	SB56 P2	蓋（弥生土器）	口径（23.5）	口縁端部にかけて八の字形に外反する。外面ナナメハケ。	中粒砂粒混入	外面　橙色 内面明褐色
43－48（000641）	SB58 P1	甕（弥生土器）	――	口縁部は断面三角形で、端部には斜め方向の連続刻みを施す。	細砂粒混入	内外面橙色

Tab. 14　井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（3）

※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
43－49（000640）	SB58 P1	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側にかけて傾く。	大粒砂粒少量混入	内外面明褐色
43－50（000642）	SB61 P4	広口壺（弥生土器）	――	口縁部は内側に突出し、上端面は平坦である。	細砂粒混入	内外面明褐色
43－51（000646）	SB65 P4	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形に近い。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面褐色
43－52（000645）	SB65 P4	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、内側に突出する。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
43－53（000644）	SB65 P4	甕（弥生土器）	――	口縁部は内側に突出し、T字形に近い。上端面は湾曲する。	金雲母多量混入	内外面褐色
43－54（000647）	SB65 P4	甕（弥生土器）	底径（6.8）	平底で外面は粗いタテハケ。	大粒砂粒多量混入	外面明褐色 内面黒褐色
43－55（000643）	SB65 P3	高杯（弥生土器）	口径（18.3）	口縁部は内側に突出し、端部にかけて下がる。	金雲母混入 中粒砂粒多量混入	内外面明褐色
43－56（000648）	SB65 P4	器台（弥生土器）	底径（10.0）	裾端部にかけて外反気味に開く。外面タテハケ。	細粒～中粒砂粒混入	内外面橙色
44－57（970732）	SK01	甕（弥生土器）	口径（20.7）	口縁部は逆L字形で、内側にかけて傾く。	細砂粒混入	外面褐色 内面橙色
44－58（970731）	SK01	甕（弥生土器）	口径（28.5）	口縁部は逆L字形で、端部にかけて下がる。口縁直下に断面三角突帯をナデにより作出する。	中粒砂粒少量混入	外面褐色 内面橙色
44－59（970730）	SK01	蓋（弥生土器）	つまみ径（6.0）	つまみ上端面は窪み、外面は粗いタテハケ。	金雲母混入 大粒砂粒混入	外面橙色 内面褐色
44－60（970729）	SK01	甕（弥生土器）	底径（8.5）	上げ底で、端部にかけて外反気味に開く。	大粒砂粒多量混入	外面橙色
44－61（970728）	SK01	甕（弥生土器）	底径（7.6）	平底で、外面は粗いタテハケ。	中粒～大粒砂粒混入	内外面褐色
44－62（970726）	SK01	壺（弥生土器）	底径（7.8）	平底で、胴部にかけて大きく開く。	中粒～大粒砂粒少量混入	外面　橙色 内面灰褐色
44－63（970727）	SK01	壺（弥生土器）	底径（10.2）	平底で、胴部にかけて大きく開く。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面灰褐色
44－64（970734）	SK01	壺（弥生土器）	――	胴部中央に断面三角突帯を貼付ける。外面ヘラミガキ。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面茶褐色
44－65（970733）	SK01	広口壺（弥生土器）	口径（30.5）	鋤先状口縁。口縁部は内側に突出し、上端面は窪み、端部は面とりされる。	中粒砂粒混入	内外面橙色
44－66（970741）	SK02	甕（弥生土器）	口径（26.6）	口縁部は内側にかけて傾く。口縁直下に断面三角突帯を貼付ける。	大粒砂粒混入	内外面橙色
44－67（970739）	SK02	甕（弥生土器）	口径（27.6）	口縁部は逆L字形で、外面タテハケ。	細砂粒混入	外面黒褐色 内面明褐色
44－68（970740）	SK02	甕（弥生土器）	口径（25.5）	口縁部は逆L字形で、胴部外面はタテハケ。	金雲母混入 中粒砂粒少量混入	内外面褐色
44－69（970737）	SK02	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は湾曲する。	中粒砂粒混入	外面黒褐色 内面橙色
44－70（970738）	SK02	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
44－71（970736）	SK02	甕（弥生土器）	底径（5.8）	上げ底で、外面はタテハケ。	金雲母少量混入 細砂粒混入	外面橙色
44－72（970742）	SK02	広口壺（弥生土器）	口径（24.4）	口縁端部にかけて、外反気味に開く。	細砂粒少量混入	内外面明褐色
44－73（970743）	SK02	広口壺（弥生土器）	口径（21.5）	鋤先状口縁。頸部内面ヘラミガキ。	細砂粒混入	内外面明褐色
44－74（970744）	SK02	広口壺（弥生土器）	口径（18.0）	鋤先状口縁。頸部外面ヨコナデのちタテ方向の暗文を連続して施す。	大粒砂粒少量混入	内外面橙色
44－75（970745）	SK02	支脚（弥生土器）	器高（14.0）	円柱状で上端および下端にかけて外反気味に開く。指頭圧痕あり。	中粒砂粒混入	外面橙色
44－76（970748）	SK04	蓋（弥生土器）	口径（27.5）	体部は裾端部にかけて外反気味に開く。外面タテハケ。	金雲母少量混入 中粒～大粒砂粒混入	外面橙色 内面褐色
44－77（970747）	SK04	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	細砂粒混入	内外面褐色
44－78（970749）	SK04	支脚（弥生土器）	――	円柱状で、外面に指頭圧痕あり。	大粒砂粒混入	外面橙色
44－79（970760）	SK06	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	細砂粒混入	内外面明褐色

Tab. 15　井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（4）

※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
44－80（970761）	SK06	壺（弥生土器）	――	胴部に断面三角突帯を貼付ける。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
45－81（970756）	SK05	甕（弥生土器）	口径（27.4）	口縁部は外反して外上方に開く。端部は面とりされる。	大粒砂粒混入	内外面橙色
45－82（970757）	SK05	甕（弥生土器）	口径（28.7）	口縁部は断面三角形に肥厚する。	大粒砂粒混入	外面褐色 内面明褐色
45－83（970758）	SK05	甕（弥生土器）	口径（32.9）	口縁部は断面三角形で、上端面は端部にかけて下がる。	金雲母少量混入 中粒砂粒混入	内外面褐色
45－84（970759）	SK05	甕（弥生土器）	口径（26.7）	口縁部は断面三角形で、上端面は端部にかけて下がる。	金雲母少量混入 中粒砂粒混入	内外面褐色
45－85（970752）	SK05	甕（弥生土器）	底径（8.9）	上げ底で、端部にかけて開く。外面タテハケ。	大粒砂粒混入	外面橙色
45－86（970753）	SK05	甕（弥生土器）	底径（6.6）	上げ底で、端部にかけて開く。	大粒砂粒混入	外面橙色 内面黒褐色
45－87（970751）	SK05	甕（弥生土器）	底径　7.9	厚底で平坦な底部中央に指で窪ませる。外面タテハケ。	大粒砂粒混入	外面橙色
45－88（970755）	SK05	蓋（弥生土器）	つまみ径　6.7	つまみ上端部は窪み、胴部にかけ外反気味に開く。外面タテハケ。	大粒砂粒混入	外面　橙色 内面黒褐色
45－89（970762）	SK21	甕（弥生土器）	口径（24.6）	口縁部は逆Ｌ字形で、上端面は平坦である。外面タテハケ。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面橙色
45－90（970763）	SK21	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆Ｌ字形で、上端面は平坦である。	細砂粒混入	外面黒褐色 内面明褐色
45－91（970771）	SK22	甕（弥生土器）	口径（26.1）	口縁部は逆Ｌ字形で、上端面は内側にかけて傾く。	細砂粒混入	内外面橙色
45－92（970770）	SK22	甕（弥生土器）	口径（25.9）	口縁部は逆Ｌ字形で、上端面は内側にかけて傾く。	大粒砂粒混入	内外面橙色
45－93（970768）	SK22	甕（弥生土器）	口径（24.4）	口縁部は逆Ｌ字形で、上端面は平坦である。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面明褐色
45－94（970769）	SK22	甕（弥生土器）	口径（25.2）	口縁部は逆Ｌ字形で、上端面は平坦である。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面明褐色
45－95（970767）	SK22	甕（弥生土器）	口径（26.0）	口縁部は逆Ｌ字形で、直下に断面三角突帯を貼付ける。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面橙色
45－96（970766）	SK22	甕（弥生土器）	底径（6.2）	底部中央は窪ませる。外面は粗いタテハケ。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面明褐色
45－97（970765）	SK22	甕（弥生土器）	底径（6.0）	底部は平坦で、胴部にかけて開く。	大粒砂粒多量混入	外面　橙色 内面黒褐色
45－98（970764）	SK22	壺（弥生土器）	底径（7.2）	底部は平坦で、胴部は大きく開く。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面明褐色
45－99（970772）	SK23	甕（弥生土器）	口径（24.1）	口縁部は短い逆Ｌ字形。外面タテハケ。	細砂粒混入	内外面黒褐色
45－100（970773）	SK23	甕（弥生土器）	底径（6.7）	上げ底で、端部にかけて開く。	中粒砂粒混入	外面橙色 内面褐色
45－101（970774）	SK25	甕（弥生土器）	口径（31.6）	口縁部は逆Ｌ字状。上端面は内側にかけて傾く。	中粒砂粒混入	内外面褐色
45－102（970775）	SK25	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆Ｌ字形で、上端面は平坦である。	細砂粒混入	内外面橙色
45－103（970776）	SK25	甕（弥生土器）	底径（7.4）	底部は若干上げ底気味。外面粗いタテハケ。	中粒砂粒混入	外面橙色 内面明褐色
46－104（970778）	SK35	甕（弥生土器）	口径　30.2	口縁部は逆Ｌ字形で、口縁直下外面にはヨコナデによる稜線がつく。胴部外面タテハケ。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
46－105（970179）	SD28	甕（弥生土器）	口径（24.2）	口縁部は逆Ｌ字形で、上端面は内側にかけて傾く。胴部外面タテハケ。	大粒砂粒多量混入	外面茶褐色 内面黒褐色
46－106（970178）	SD28	甕（弥生土器）	口径（24.4）	口縁部は逆Ｌ字形で、上端面はわずかに窪む。	中粒砂粒多量混入	内外面橙色
46－107（970185）	SD29	甕（弥生土器）	口径（28.1）	口縁部は逆Ｌ字形で、端部にかけて下がる。	大粒砂粒混入	内外面橙色
46－108（970186）	SD29	甕（弥生土器）	口径（28.4）	口縁部は逆Ｌ字形で、上端面は平坦である。	大粒砂粒混入	内外面橙色
46－109（970184）	SD29	甕（弥生土器）	口径（22.7）	口縁部は逆Ｌ字形で、胴部外面タテハケ。	金雲母混入 中粒砂粒混入	内外面橙色
46－110（970182）	SD29	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆Ｌ字形で、端部はナデにより面とりされる。	中粒砂粒混入	外面褐色 内面茶褐色

Tab. 16　井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（5）

※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
46－111（970183）	SD29	甕（弥生土器）	――	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	内外面橙色
46－112（970181）	SD29	甕（弥生土器）	底径（7.3）	上げ底で、外面はタテハケ。	大粒砂粒混入	外面橙色 内面褐色
46－113（970180）	SD29	器台（弥生土器）	底径（12.2）	裾端部にかけ外反気味に開く。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	内外面橙色
47－114（970901）	Q,R-18.19包含層	甕（弥生土器）	口径（26.8）	口縁部は逆L字形で、内側にかけて傾く。	中粒砂粒多量混入	内外面橙色
47－115（970887）	L-20包含層	甕（弥生土器）	口径（24.3）	口縁部は逆L字形で、内側にかけて若干傾く。	細砂粒混入	内外面橙色
47－116（970238）	M,N-19包含層	甕（弥生土器）	口径（20.1）	口縁部は逆L字形で、上端面はわずかに窪む。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
47－117（970897）	O-16,17包含層	甕（弥生土器）	口径（31.1）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	大粒砂粒混入	内外面橙色
47－118（970892）	M,N-19包含層	甕（弥生土器）	口径（26.3）	口縁部は逆L字形で、上端面は若干窪む。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面橙色
47－119（970904）	Q,R-20包含層	甕（弥生土器）	口径（23.6）	口縁部は逆L字形で、上端面は若干窪む。口縁直下に断面三角突帯を貼付ける。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面明褐色
47－120（970239）	M,N-19包含層	甕（弥生土器）	口径（20.1）	口縁部は逆L字形で、上端面はわずかに内湾する。	大粒砂粒混入	外面橙色 内面褐色
47－121（970910）	R,S-20,21包含層	甕（弥生土器）	口径（26.7）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦である。	細砂粒混入	外面明褐色 内面橙色
47－122（970885）	1区包含層	甕（弥生土器）	口径（25.5）	口縁部は逆L字形で、端部にかけて若干下がる。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	内外面橙色
47－123（970893）	N-17包含層	甕（弥生土器）	口径（25.5）	口縁部は逆L字形で、上端面外側は炭化する。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面褐色
47－124（970896）	O-16,17包含層	甕（弥生土器）	口径（24.5）	口縁部は逆L字形で、内側に突出する。	細砂粒混入	内外面褐色
47－125（970908）	R,S-20包含層	甕（弥生土器）	口径（27.1）	口縁部は逆L字形で、端部にかけて内湾気味に下がる。	中粒砂粒少量混入	内外面褐色
47－126（970240）	O-18包含層	甕（弥生土器）	口径（30.8）	口縁上端面は平坦で、胴部にかけて大きく開く。	大粒砂粒混入	外面明褐色 内面黒褐色
47－127（970906）	Q,R-21包含層	甕（弥生土器）	口径（34.1）	口縁部は逆L字形で、上端面は平坦。内側に突出する。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面明褐色
47－128（970241）	P295	甕（弥生土器）	口径（31.0）	口縁部は、外上方に折り返す。体部は丸味をもつ。	金雲母混入 大粒砂粒混入	内外面明褐色
47－129（970914）	RS-20,21包含層	甕（弥生土器）	――	口縁部は、外上方に折り返す。外面ヨコナデ。	中粒砂粒混入	内外面褐色
47－130（970243）	P295	甕（弥生土器）	――	口縁部は、外上方に折り返し、端部は肥厚し丸味をもつ。	細砂粒混入	内外面明褐色
47－131（970242）	P295	甕（弥生土器）	底径（8.5）	平底で胴部にかけて大きく開く。外面黒斑有り。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
47－132（970905）	Q,R-21包含層	甕（弥生土器）	底径（7.2）	平底で外面はタテハケ。	細砂粒混入	外面明橙色 内面黒褐色
47－133（9701757）	R,S-20,21包含層	甕（弥生土器）	底径（7.5）	底部は若干上げ底気味。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	外面橙色 内面褐色
47－134（970891）	M,N-19包含層	甕（弥生土器）	底径（5.8）	底部中央が窪む。	大粒砂粒混入	内外面褐色
47－135（970898）	O-16,17包含層	甕（弥生土器）	底径（7.8）	平底でわずかに指頭圧痕が残る。	細砂粒混入	内外面褐色
47－136（971761）	Q,R-21包含層	甕（弥生土器）	底径（7.2）	若干上げ底気味。外面に粗いタテハケ。	中粒砂粒混入	外面明橙色 内面黒褐色
47－137（971758）	R,S-20,21包含層	甕（弥生土器）	底径（7.0）	若干上げ底気味。	中粒砂粒多量混入	内外面褐色
47－138（970894）	N-19包含層	甕（弥生土器）	底径（7.6）	底部中央が窪む。外面タテハケ。	細砂粒混入	外面橙色 内面褐色
47－139（971756）	R,S-20,21包含層	甕（弥生土器）	底径（8.0）	平底で外面調整不明瞭。	中粒砂粒混入	内外面褐色
47－140（971753）	R,S-20,21包含層	甕（弥生土器）	底径（8.0）	平底で直線的にたちあがる。外面タテハケ。	中粒砂粒混入	内外面褐色
47－141（971752）	R,S-20,21包含層	甕（弥生土器）	底径（7.1）	平底で外面粗いタテハケ。	大粒砂粒混入	内外面褐色

Tab. 17　井ゲタ遺跡弥生土器一覧表（6）　　※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
48－142（971754）	R,S-20,21包含層	壺（弥生土器）	底径（7.7）	平底で胴部にかけて外反気味に開く。	大粒砂粒混入	内外面褐色
48－143（971755）	R,S-20,21包含層	壺（弥生土器）	底径（6.5）	平底であるが、器面は凸凹である。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面褐色
48－144（970900）	O-18包含層	甕（弥生土器）	底径（8.3）	平底で外反気味に開く。	大粒砂粒混入	外面橙色 内面明褐色
48－145（970895）	N-19包含層	甕（弥生土器）	底径（7.7）	上げ底で外面は粗いタテハケ。	細砂粒少量混入	外面橙色 内面黒褐色
48－146（963312）	1区南西隅青灰色層	広口壺（弥生土器）	口径（15.5） 器高　29.2	口縁部はわずかに鋤先状をなし、頸部と肩部の境に三角突帯を貼付ける。体部外面ヨコハケ。	細砂粒少量混入	内外面明褐色
48－147（970246）	M-23包含層	蓋（弥生土器）	つまみ径 5.9	つまみ部上端面は若干窪み、体部は裾にかけて外反して開く。タテハケ。	金雲母混入 中粒砂粒混入	外面橙色 内面明褐色
48－148（970903）	Q,R-18,19包含層	蓋（弥生土器）	つまみ径 （6.7）	つまみ部上端面は窪む。	中粒砂粒混入	外面橙色
48－149（970886）	O-21包含層	蓋（弥生土器）	つまみ径 5.5	つまみ部上端面は大きく窪む。	大粒砂粒少量混入	内外面明褐色
48－150（970248）	O-23包含層	器台（弥生土器）	受部径　8.0 器高　17.6	胴部中央が最小径となり、受部、裾部にかけ外反して開く。指頭圧痕あり。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
48－151（970247）	P-24包含層	器台（弥生土器）	受部径 （10.0）	胴部中央よりやや上位が最小径となり、受部、裾部にかけ外反して開く。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
48－152（970889）	L-20包含層	支脚（弥生土器）	底径（9.4）	胴部断面形は円形で裾部は指押えで成形する。	大粒砂粒混入	内外面明褐色
48－153（971759）	R,S-20,21包含層	高杯（弥生土器）	――	長脚の脚部断面円形。	中粒砂粒混入	内外面明褐色
48－154（971760）	R,S-20,21包含層	高杯（弥生土器）	――	脚裾部は外反して開き、円形の穿孔が3ヶ所に入る。	中粒砂粒混入	内外面橙色

⑤ 甕　棺

Fig49, 50の155～163は甕棺の実測図である。丸味を帯びた中形甕棺として157,158,159があり、断面M字形突帯や大きめの断面三角突帯を張り付ける。広口壺には155,156,160,161,162,163がある。155,156は口縁部を打ち欠く。

155はSJ07の上甕に用いた壺。上部および下部を欠損する。上部は打ち欠きか。胴部最大径は中位にあり、胴部中央および肩部に断面三角突帯を張り付ける。156はSJ07の下甕にもちいた壺。口縁部は打ち欠く。胴部最大径は中位にあり、胴部中央および肩部に断面三角の二条突帯を二列張り付ける。

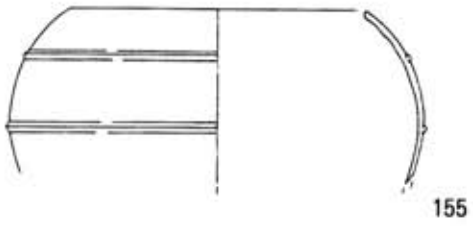
157はSJ08の下甕。胴部最大径は中位にある球形の体部である。胴部中央よりやや上位に、大きめの断面三角突帯を二条張り付ける。体部下半部タテハケ。

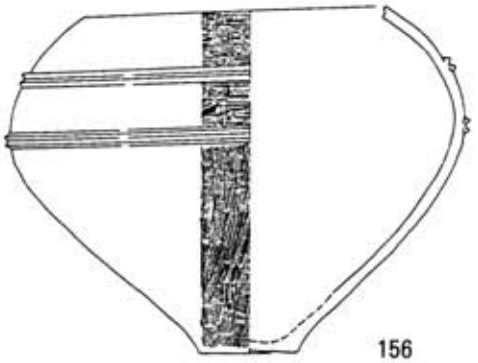
158はSJ09の下甕。胴部中央に断面M字形の突帯を二条張り付ける。

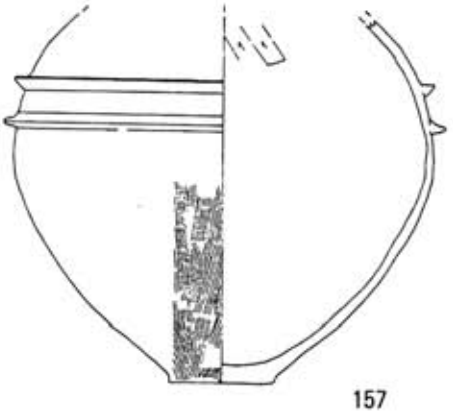
159はSJ10の甕。口縁部は打ち欠きか。胴部最大径は中位にあり、ややおおきめの断面三角突帯を張り付ける。

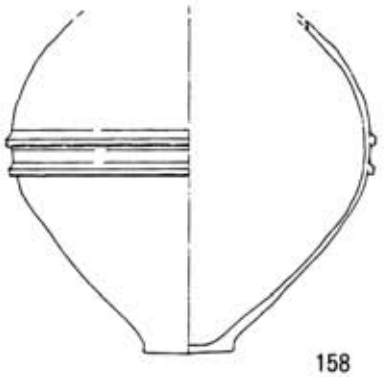
160はSJ13の上甕に用いた壺。胴部最大径は中位にあり断面三角突帯を張り付ける。外面肩部はナナメ方向、中位はヨコ方向、下半部はタテ方向のヘラミガキ。161はSJ13の下甕に用いた短頸広口壺。胴部最大径は中位にあり、そのやや上位に断面三角突帯を張り付ける。胴部の中位はヨコ方向の下半部はタテ方向のヘラミガキ。

162はSJ68の上甕に用いた短頸広口壺。胴部最大径は中位にあり大きく張る。胴部中央に断面三角突帯を張り付ける。口頸部は短く鋤先状の口縁部である。163はSJ68の下甕に用いた短頸広口壺。胴部最大径は中位にあり大きく張る。胴部中央および肩部に断面三角突帯を張り付ける。口頸部は短く鋤先状の口縁部である。









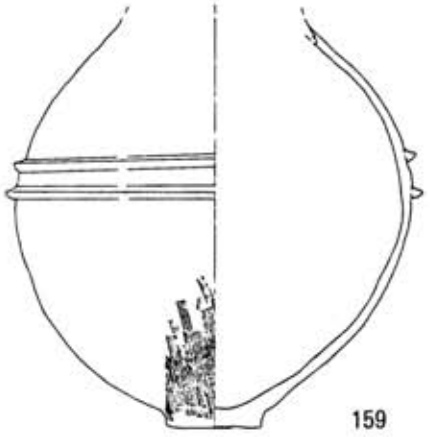


Fig. 49　SJ07・08・09・10甕棺実測図（1/8）

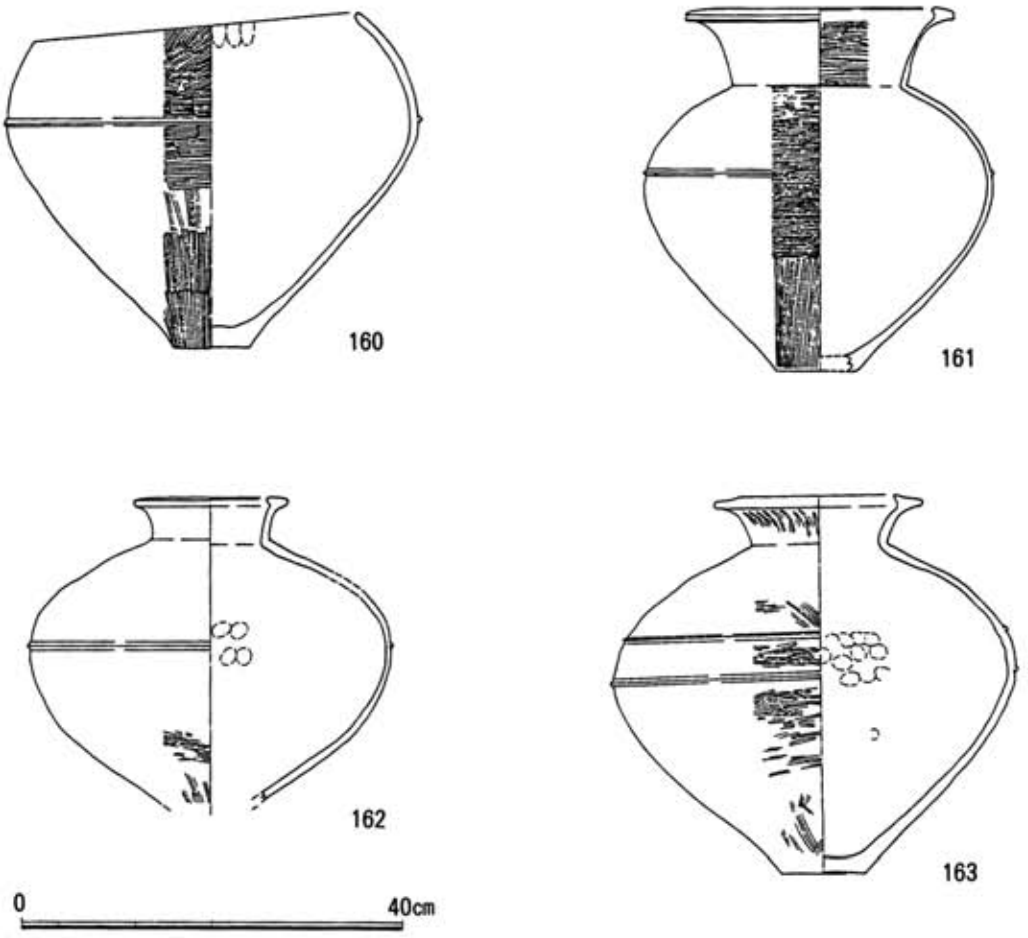


Fig. 50　SJ13・68甕棺実測図（1/8）

Tab. 18　井ゲタ遺跡甕棺一覧表

※（　）は復元口外径

Fig図番号（登録番号）	出土地点	器種種別	法量（cm）	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
49－155（963322）	SJ07上	壺（甕棺）	——	胴部中央および肩部の二列に断面三角突帯を貼付ける。外面黒斑あり。	細砂～中粒砂粒混入	内外面褐色
49－156（963325）	SJ07下	壺（甕棺）	底径　10.3	胴部中央および肩部に断面三角の二条突帯を二列貼付ける。口縁部打ち欠き。外面下半タテハケ。上半ヨコミガキ	中粒砂粒混入	内外面褐色
49－157（963324）	SJ08下	甕（甕棺）	底径　10.8	胴部中央よりやや上位にやや大きめの断面三角突帯を二条貼付ける。体部下半タテハケ。	中粒砂粒混入	内外面褐色
49－158（963323）	SJ09下	甕（甕棺）	底径　9.5	胴部中央に断面M字形突帯を二条貼付ける。外面に赤色顔料の痕跡あり。	細砂粒混入	内外面橙色
49－159（963315）	SJ10	甕（甕棺）	底径　9.7	胴部最大径は中位にあり、その上にやや大きめの断面三角突帯を二条貼付ける。	中粒砂粒混入	内外面橙色
49－160（963313）	SJ13上	壺（甕棺）	底径（8.1）	胴部最大径は中位にあり、最大径よりやや上に断面三角突帯を貼付ける。	細砂粒混入	内外面褐色
49－161（963314）	SJ13下	壺（甕棺）	口径（28.0）器高（38.2）	胴部最大径は中位にあり、やや上位に断面三角突帯を貼付ける。	細砂粒混入	外面黒褐色内面褐色
49－162（971764）	SJ68上	壺（甕棺）	口径（16.2）	胴部中央に断面三角突帯を貼付ける。口頸部は短く外反する。	細砂～中粒砂粒混入	内外面褐色
49－163（971763）	SJ68下	壺（甕棺）	口径　21.7器高（39.8）	胴部中央および肩部に断面三角突帯を貼付ける。胴部外面中央ヨコヘラミガキ。	細砂～中粒砂粒混入	内外面褐色

(2) 石　器

石器は総計524点で、そのほとんどが包含層より出土した。うち磨製石器が23点、定型の打製石器が72点、石核が19点、礫石器では石錘２点、砥石７点、磨石類６点、剥片が395点である。

磨製石器は一部の縄文系の石斧を除きほとんどが７ａ層に伴い、弥生時代前期末から中期前半のものである。磨製石器群の組成比をみると、加工斧が23点中８点と高い割合を占めるのに対し、伐採斧は１点のみで、磨製石鏃は出土していない。

打製石器は石鏃・石核の一部が７ａ層から出土した以外は、ほとんどが縄文時代の包含層である８ａ層に伴う。剥片を含め打製石器の石材別出土数を見ると、黒曜石が223点、安山岩系の石材が260点、その他が３点で、安山岩系の石材が黒曜石よりも若干多い。また石鏃では黒曜石を主に用い、それ以外の石匙・スクレイパーなどの器種では安山岩系の石材を用いるなど、石材の選別が行なわれている。

以下器種ごとに説明を加えていく。

石剣（164～166）　石剣は３点出土した。３点とも稜が刃縁に沿って通っている。164と165はSK01より出土した。接合はしないものの、同じ石材を用い、作りもよく似ていることから同一個体であった可能性が高い。166は表面が風化する。

石庖丁（167～171）　石庖丁は６点出土し、うち５点を図示した。完形品はなく破片のみである。168は片刃である。170・171は側面中央の最も張り出した部位より下に刃部を作り出す。平面形を復元すると、長方形または杏仁形となる。167・169はほかの石庖丁と比較して、若干薄い。

石斧（172～182）　14点出土し、11点図示した。このうち縄文系の石斧は６点出土している（178・180～182の４点を図示）。残りは、不明分・５ａ層出土のものも含め弥生時代の所産である。以下弥生時代・縄文時代の順に説明を加えていく。

172・176は小型柱状片刃石斧である。刃部先端、後主面ともに欠損し、前主面と側面の間の稜は両側とも面取りする。176は基端・後主面・左側面が欠損するが、厚さや、刃部の稜から刃端までの距離から、小型方柱状石斧とみられる。刃端は尖らずに面をなす。

173～175・177は偏平片刃石斧である。175は後主面が一部剥落するもののほぼ完形である。前主面から見た場合、左側面は中央よりやや上方の最も張り出した部位から基端に向かって幅を減じ、下位は石の目に沿って右側面と平行に剥離し、表面にはアスファルト状のものが薄く付着する。側面から見ると基端が窄まり、中央よりやや上から刃部に向って緩やかに厚みを減じる。177は大型の偏平片刃石斧の基部か。

179は抉入柱状片刃石斧である。前主面・基端には敲打痕が残る。前主面と右側面との境には稜が残るが、左側面との境は面取りされ、やや丸みを帯びている。後主面の抉り部の下方は、横方向に磨滅したように光沢を帯びている。また抉り部から左側面に移行する部位は、磨滅により、稜がはっきりと残らない。このほか未掲載分の弥生時代の遺物は、蛤刃石斧が１点出土している。

178・180～182は縄文系の石斧である。180は７ａ層から出土したが、形態より縄文時代の所産と考えられる。基端から両側縁中位付近にかけて敲打痕が残り、刃部付近には長軸からやや斜めにずれて擦痕が入る。181は玄武岩を用いる。基端付近には一部剥離痕が残り、刃部は表裏両面とも大きな剥離によって調整する。刃端が磨滅していることから、この状態で使用したと想定できる。182は基端から側縁部にかけて剥離痕が残る。刃部に擦痕は確認できなかった。このほか未掲載分の縄文系石斧で、厚さの薄い小型の石斧が２点出土している。

砥石（183・184）　７点出土したうち、２点掲載した。すべて砂岩製で、破片ばかりである。目の粗

さにより粗砥と細砥に大別でき、粗砥が5点、細砥が2点である。さらに全ての粗砥は復元すると幅5㎝以上厚さ3㎝以上のものになり、細砥の2点は幅2㎝以下厚さ1㎝以下である。

183は表裏両面とも折損部付近が使用減りしている。細砥に分類できる。184は粗砥に分類でき、裏面は剥落するが、表面中央部が使用減りしている。

磨石（185～187）　使用痕が確認できた6点のうち、3点掲載した。これ以外にも使用痕等が確認できなかった円礫が多数出土しており、可能性のあるものをすべて含めると倍以上の点数にのぼる。185は側面の一部の破損が激しく、この部位を使用面として敲石としても利用していた可能性がある。

打製石鏃（188～201）　22点出土し、14点を図示した。流れ込みなどの可能性もあり、必ずしも出土した層の時期に属するとは限らないが、層位別に説明を加えていく。

8a層から出土したものは14点で、石材はサヌカイトが4点、黒曜石が10点である。平面形態は、二等辺三角形状で基部の抉りが深いものが未掲載分も含めて11点と多く（188～195）、基部の抉りが浅いものが3点（198・200）である。

7a層に伴うものは4点あり、すべて基部の抉りが浅いか平基で、平面形は二等辺三角形を呈する（199）。石材は黒曜石とサヌカイトが2点ずつである。

そのほか5a層出土のもの、表採品など4点を一括資料とした。石材はすべて黒曜石である。196はいわゆる剥片鏃であり、表面・裏面の主要剥離面は直交する。

石錐（202～206）　7点出土し、5点図示した。8a層出土のもの、7a層出土のものがそれぞれ2点で、残り3点は一括遺物である。石材は黒曜石が1点で残り6点はすべてサヌカイトである。形態から、

Ⅰ：平面形は二等辺三角形または菱形を呈し、先端に急角度調整を入れ明瞭な錐部を作り出し、錐部の付け根が縊れるもの3点（202～204）、

Ⅱ：剥片の一端に調整を加え錐部とし、錐部以外はほとんど加工を施さないもの1点（206）、

Ⅲ：縁辺全周に調整を加え、平面形では明瞭に錐部を作り出さず、ティア・ドロップ形に仕上げたもの2点（205）、

Ⅳ：錐部のつくりはⅠと同じだが、基部幅が広く平面形が五角形を呈するもの1点

に分類できる。

203・204は錐部裏面に平坦剥離を施し、表面のみ急角度の調整を入れる。ともに錐部の断面は三角形になる。205は先端部を欠損するが、周縁に緩角度の調整を施す。206は先端がわずかに磨滅する。8a層からはⅠのみ、7a層からはⅠとⅡが1点ずつ、一括資料はⅢが2点、Ⅳが1点出土している。

不明石器（207～210）　一見石鏃のように見えるが、石鏃の完成品とするには、形態・調整等を考慮すると無理があるものを不明石器とした。石材はすべて黒曜石である。

207は裏面を平坦剥離により仕上げた後に、表面右側縁に裏面より急角度の調整を施す。表面左側縁上位には縁辺調整が施されず、主要剥離面を残す。208・210は両者ともヒンジフラクチャーが著しく、右側縁の一部が折損する。表面・裏面とも周縁に平坦剥離が施されていることを考慮すると、製作途中で折損し廃棄された石鏃と考えられる。このような石鏃未製品とみられる不明石器が図示した以外に2点出土している。

272は平坦剥離を施すものの、縁辺調整はほとんど見られない。なお左側縁に残る連続した剥離は新しいものである。また、平面形も先端部が丸く収まり、石鏃として機能したとは考えられない。縁辺を刃部とし、スクレイパーとして使ったものだろうか。

石匙（211～216）　横形7点、縦形3点、未製品2点の計12点が出土したうち、図示したのが6点で

ある。すべて安山岩系の石材を用いる。素材となる剥片は横長・または不整形で、打点をつまみ側に持ってくるもの、刃部・側縁側に持ってくるものがある。

211はつまみ部を折損するが、肉厚で素材面をほとんど残さず精緻な作りである。211以外は主要剥離面を大きく残し、抉り部と刃部を中心に大きめの剥離で調整を行なう。また未掲載分で特徴的なものとして、横形で5㎝以下の小型品が2点、未製品と思われるものが2点出土している。未製品の2点は両者とも刃部と抉り部を意識して調整を行なうが、粗調整の段階で抉りも浅い。

スクレイパー（217～220）　20点出土したうち、掲載したのは4点である。うち7a層に伴うものが1点、8a層に伴うものが14点、一括資料が5点（うち1点は遺構出土）であった。石材は黒曜石が1点のみで、残り19点は安山岩系である。刃部形態をみると、緩やかな弧を描く曲刃（217・219）と直刃（218・220）が約3：2の割合で出土している。

217は表面より右側縁裏面に調整を施し、刃部とする。218は、左側縁に裏面から急角度の調整を施し、刃部を作り出す。なお下端は自然面を残す。219は大きめの剥離によって、表面に粗調整を行ない剥片の厚みを減らしたのち、右側縁全域に調整を施す。裏面は主要剥離面をそのまま用い、右側縁には使用に伴う微細な剥離痕が残る。220は裏面・表面の順で右側縁を中心に平坦剥離を施したのち、表面にのみ裏面から調整を施し、刃部を作り出す。

剥片（221・222）　総計395点出土し、約9割が8a層から出土した。このうち8a層から使用痕とみられる連続した微細剥離を伴うものが15点、二次加工のあるものが23点出土している。石材は黒曜石と安山岩系のものがほぼ同量出土している。注目できるものとして、サヌカイト製の不整形の大型剥片がある（231～233）。これらは集中した状態で出土しており、デポの可能性があるが、検出時には周囲に明確な遺構のラインは確認できなかった。

221は左側縁部背面側に使用痕が残る。222は石刃状の縦長剥片であるが背面と腹面とでは主要剥離面の打点がほぼ180度回転する。周縁の剥離痕は新しいものである。

剥片尖頭器（223）　7a層出土だが旧石器時代の流れ込みの遺物である。確実に旧石器時代に伴うものはこの1点だけである。サヌカイト製の縦長剥片を利用し、表面は風化する。打面は自然面。左側縁刃端は連続した急角度の剥離を施し刃部を形成する。右側縁上半は剥片本来の面で調整痕はない。右側縁下半は新しい剥離。抉り部は急角度の剥離により調整する。

分銅形石製品（224）　表面が風化する。周縁を平坦剥離によって調整し、上端にいくに従い厚みを減じる。両側縁中央に抉りを入れるが、使用痕は確認できない。

石核（225・226）　7a層より3点、8a層より10点、一括資料が6点出土した。石材は黒曜石が12点、安山岩系7点である。技法より、

A：打面単設のもの7点、
B：打面両設のもの2点、
C：礫の周縁から求心的に剥片を剥ぎ取るもの5点、
D：一定の打面を設けずにランダムに剥片を剥ぎ取るもの5点

に大別できる。AとBの打面は、調整を加えたものと自然面とがほぼ半々の割合で観察できる。また技法別に石材をみてみると、A・Bでは黒曜石を多く用い、C・Dでは黒曜石と安山岩系の石材がほぼ同数である。

Tab. 19 井ゲタ遺跡石核一覧表（単位:個）

	8a		7a		一括	
	黒曜石	安山岩	黒曜石	安山岩	黒曜石	安山岩
A	1	2	2	0	2	0
B	0	0	0	0	2	0
C	2	3	0	0	0	0
D	1	1	1	0	1	1

225はCに相当し、裏面及び上面には自然面が残る。表面側縁部から剥片を剥ぎ取る。226はAに相当し、片面のみ剥片を剥ぎ取る。打面は自然面である。

抉り入り石器（227）　8a層よりサヌカイト製でノッチ状の調整を施した石器が2点出土した。図示したのは227の1点のみである。227は不定形の剥片を横位に用い、両側縁上位2ヶ所に表・裏両面からノッチ状の調整をいれる。下位は折損する。

石錘（228・229）　8a層より打ち欠き石錘1点（228）、5a層より石錘未製品1点（229）が出土している。229は 結晶片岩系の石材を用い、穿孔しようとした痕跡が表・裏3ヶ所にあるが、いずれも孔は貫通していない。

偏平打製石斧（230）　8a層より1点出土した。安山岩系の石材を用い、基端・側縁に調整を施し形態を整える。刃部は表裏両面とも著しく磨滅し、斜方向に擦痕がはいる。縄文晩期か。

Tab. 20　井ゲタ遺跡石器一覧表（1）　（単位：cm）

図番号	登録番号	器　種	遺構名	層位	グリッド	全長	全幅	厚	重量	石　材
fig51-164	98000323	石剣	SK01		L-15	(7.20)	3.60	0.60	19.4	砂岩
165	98000265	石剣	SK01		L-15	(5.00)	4.60	0.50	13.3	砂岩
166	98000266	石剣	包含層	7a	不明	(3.30)	4.00	0.70	13.7	砂岩
167	98000261	石庖丁	P81		M-13	(4.00)	(3.90)	0.35	6.8	砂岩
168	98000263	石庖丁	包含層	7a	O-17・18	(4.40)	(4.50)	0.50	17.2	安山岩
169	98000262	石庖丁	包含層	7a	P-18・19	6.10	(5.05)	0.35	16.4	砂岩
170	98000324	石庖丁	包含層	7a	Q-17	5.50	(6.10)	0.75	44.6	安山岩
171	98000325	石庖丁	包含層	7a	N-17	(5.05)	(4.85)	0.70	24.0	安山岩
fig52-172	98000268	小型柱状石斧	包含層	5a	I区南	(3.25)	1.10	(0.60)	3.4	珪質層灰岩
173	98000269	偏平片刃石斧	包含層	5a	O・P-25	(2.95)	2.50	0.90	9.2	珪質層灰岩
174	98000327	偏平片刃石斧	包含層	7a	N-18	6.70	(2.40)	1.15	30.4	珪質層灰岩
175	98000326	偏平片刃石斧	P67		M-14	6.75	18.5	1.20	24.4	砂岩
176	98000270	小型柱状石斧	廃土中			(6.20)	(1.75)	0.75	5.2	珪質層灰岩
177	98000271	偏平片刃石斧	包含層	7a	N-17	(6.00)	(1.90)	(19.5)	28.5	珪質層灰岩
178	98000328	偏平両刃石斧	包含層	8a	O-25	(7.00)	(4.40)	1.15	62.6	砂岩
179	97000256	柱状片刃石斧	P151		L-17	15.65	3.40	3.80	370.3	細粒砂岩
fig53-180	98000329	伐採斧	包含層	7a	N-24	(10.50)	4.85	3.30	222.4	砂岩
181	97000253	伐採斧	包含層	8a	O-25	12.55	6.90	4.30	557.5	玄武岩
182	97000257	伐採斧	包含層	8a	O-24	17.40	7.50	3.30	530.5	細粒砂岩
fig54-183	98000267	砥石	包含層	7a	O-16・17	(3.90)	1.65	1.00	10.3	細粒砂岩
184	97000254	砥石	包含層	7a	P-24	(7.75)	(5.90)	2.00	141.0	砂岩
185	97000251	磨石	包含層	8a	O-23	8.70	8.15	2.65	318.0	安山岩
186	97000252	磨石	包含層	7a	P-21	9.70	9.00	4.10	630.0	安山岩
187	97000250	磨石	包含層	8a	N-24	10.05	7.00	4.00	468.5	安山岩
fig55-188	98000303	打製石鏃	包含層	8a	O-25	3.00	1.30	0.45	1.3	サヌカイト
189	98000307	打製石鏃	包含層	8a	O-24	2.05	1.50	0.40	0.8	黒曜石
190	98000308	打製石鏃	包含層	8a	O-24	1.95	1.35	0.40	0.6	黒曜石
191	98000309	打製石鏃	包含層	8a	O-24	2.55	1.30	0.30	0.6	黒曜石
192	98000304	打製石鏃	包含層	8a	O-24	3.90	1.00	0.75	3.6	サヌカイト

Tab. 21　井ゲタ遺跡石器一覧表（2）

（単位：cm）

図番号	登録番号	器　種	遺構名	層位	グリッド	全長	全幅	厚	重量	石　材
fig55-193	98000305	打製石鏃	包含層	8a	Q-25	2.35	1.35	0.40	1.0	黒曜石
194	98000302	打製石鏃	包含層	8a	O-24	1.75	1.25	0.55	0.7	黒曜石
195	98000306	打製石鏃	包含層	8a	O-24	(2.90)	(1.70)	0.40	1.3	黒曜石
196	98000275	打製石鏃	包含層	5a	Q-24	1.90	1.30	0.20	0.5	黒曜石
197	98000301	打製石鏃	包含層	7a	N-17	(2.25)	2.05	0.55	2.0	サヌカイト
198	98000300	打製石鏃	包含層	8a	P-23	(1.80)	1.90	0.45	1.1	黒曜石
199	98000296	打製石鏃	表採			1.80	1.50	0.30	0.5	黒曜石
200	98000298	打製石鏃	包含層	8a	M•N-29	2.95	(1.65)	0.45	1.7	黒曜石
201	98000273	打製石鏃	包含層	5a		2.40	3.10	0.40	1.4	黒曜石
202	98000310	石錐	包含層	8a	N-24	2.40	1.55	0.50	1.8	サヌカイト
203	98000297	石錐	包含層	7a	O-25	2.60	1.20	(0.55)	1.6	サヌカイト
204	98000312	石錐	包含層	8a	O-17•18	3.10	1.55	0.85	2.7	黒曜石
205	98000313	石錐	廃土中			3.40	1.35	0.50	2.0	サヌカイト
206	98000289	石錐	包含層	7a	Q•R-18•19	5.50	2.00	0.60	9.3	サヌカイト
207	98000314	不明	P458		R-18	2.80	1.55	0.60	2.0	黒曜石
208	98000311	不明	包含層	8a	O-24	2.55	1.50	0.85	2.6	黒曜石
209	98000272	不明	攪乱		M•N-23	2.40	2.40	0.50	2.7	黒曜石
210	98000299	不明	包含層	6•7	H-23	3.10	1.85	0.65	2.9	黒曜石
fig56-211	98000291	石匙	包含層	7a	P-25	2.80	8.20	1.10	20.5	サヌカイト
212	98000290	石匙	包含層	8a	O-24	3.80	6.50	0.60	13.1	サヌカイト
213	98000292	石匙	包含層	8a	N-24	4.05	6.40	1.15	18.2	サヌカイト
214	00000801	石匙	廃土中			6.90	4.60	0.90	30.4	サヌカイト
215	98000294	石匙	P557		O-24	9.75	5.75	2.05	78.3	サヌカイト
216	98000293	石匙	包含層	8a	O-23•24	4.65	2.40	0.80	6.5	サヌカイト
fig57-217	98000287	スクレイパー	包含層	8a	N-23•24	3.30	4.40	1.00	15.9	サヌカイト
218	98000288	スクレイパー	包含層	7a	N•O-24	4.10	4.00	0.55	12.5	サヌカイト
219	98000316	スクレイパー	包含層	8a	P-23	6.00	4.15	1.15	19.0	サヌカイト
220	98000318	スクレイパー	P259		M-17	5.75	4.00	1.05	23.1	サヌカイト
221	98000286	剥片	包含層	8a	O-24	6.60	3.80	1.00	21.5	サヌカイト
222	98000317	剥片	包含層	8a	L-20	2.85	1.55	0.60	2.4	黒曜石
223	98000315	剥片尖頭器	包含層	7a	N-23	6.75	2.90	1.15	17.6	サヌカイト
224	98000255	分銅形石製品	不明			8.10	5.60	1.80	101.2	凝灰岩
fig58-225	00000802	石核	包含層	8a	O-25	8.70	7.50	2.80	162.0	サヌカイト
226	00000803	石核	包含層	5a	D-23	5.75	2.20	3.20	28.2	黒曜石
227	00000804	抉り入り石器	包含層	8a	N-24	4.30	2.45	0.60	5.5	サヌカイト
228	00000805	石錘	包含層	8a	O-24	3.90	5.60	1.00	48.0	玄武岩
229	00000806	石錘	包含層	5a	P-25	8.45	4.15	2.70	146.0	結晶片岩
fig59-230	00000807	偏平打製石斧	包含層	8a	O-24	11.85	6.20	1.45	109.0	サヌカイト
fig60-231	00000808	剥片	包含層	8a	O-23	11.90	6.20	1.70	144.0	サヌカイト
232	00000809	剥片	包含層	8a	O-23	9.70	6.10	1.50	62.0	サヌカイト
233	00000810	剥片	包含層	8a	O-23	9.80	10.10	1.25	142.0	サヌカイト

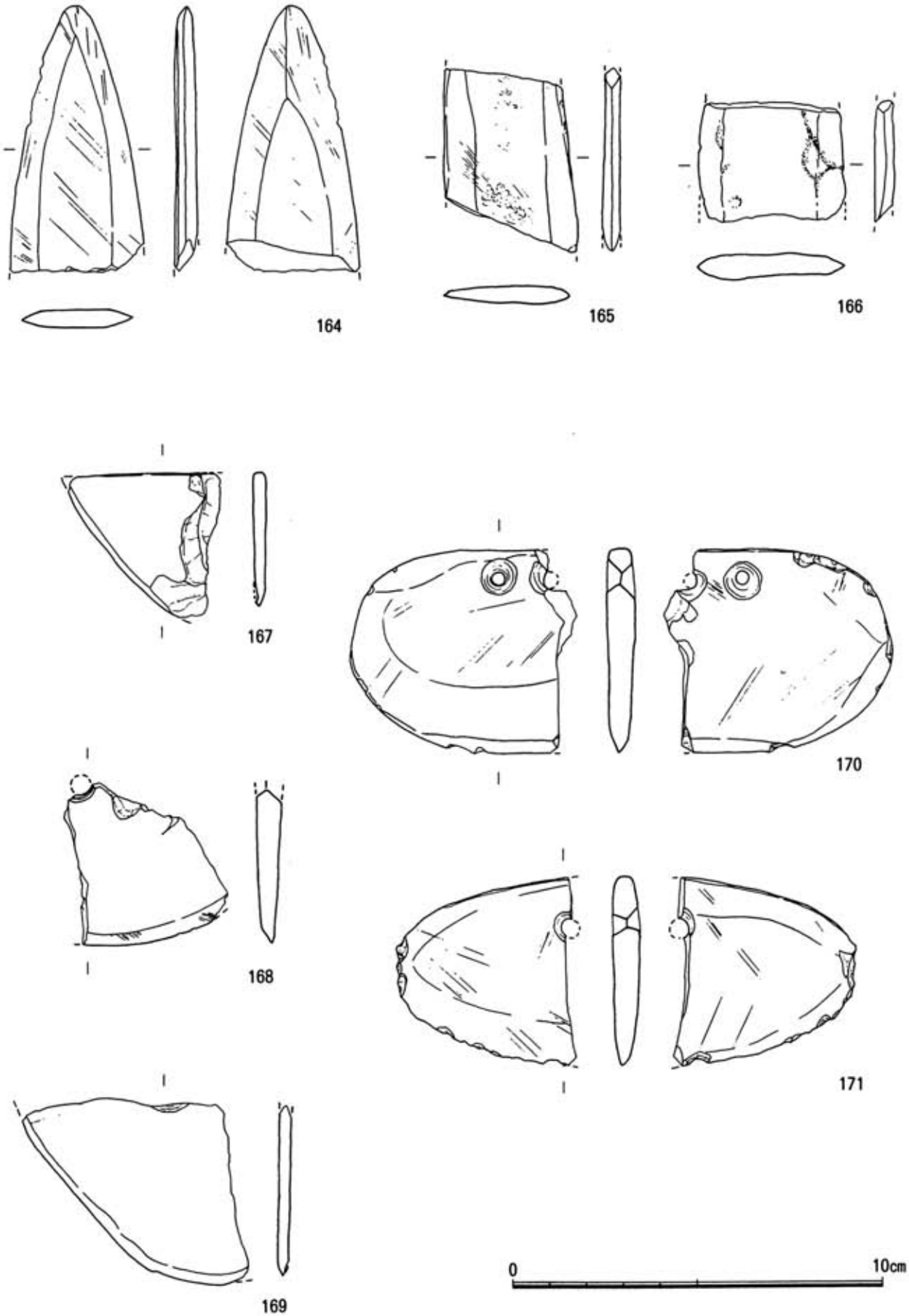


Fig. 51　磨製石器 1 (2/3)

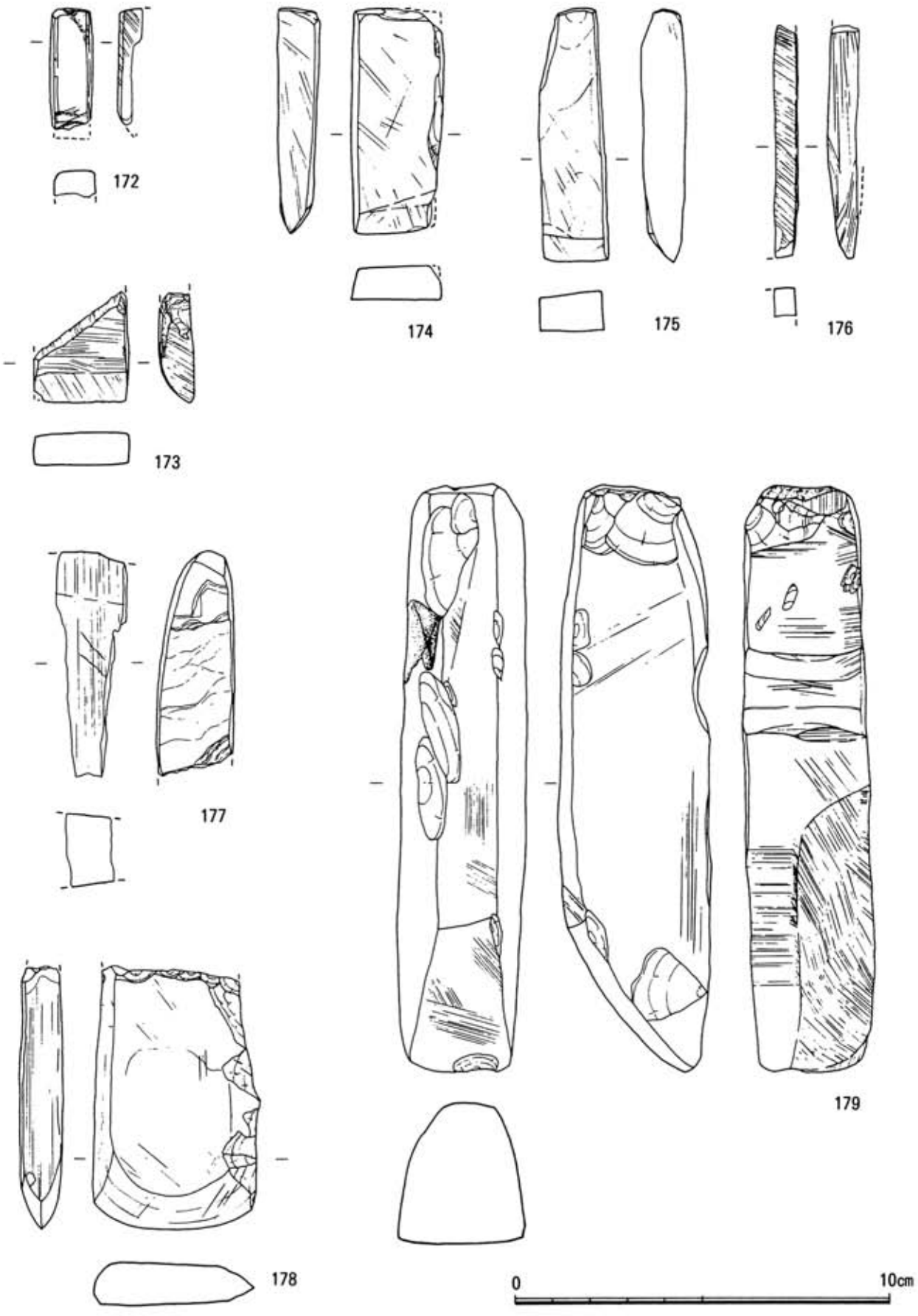


Fig. 52　磨製石器 2 （2/3）

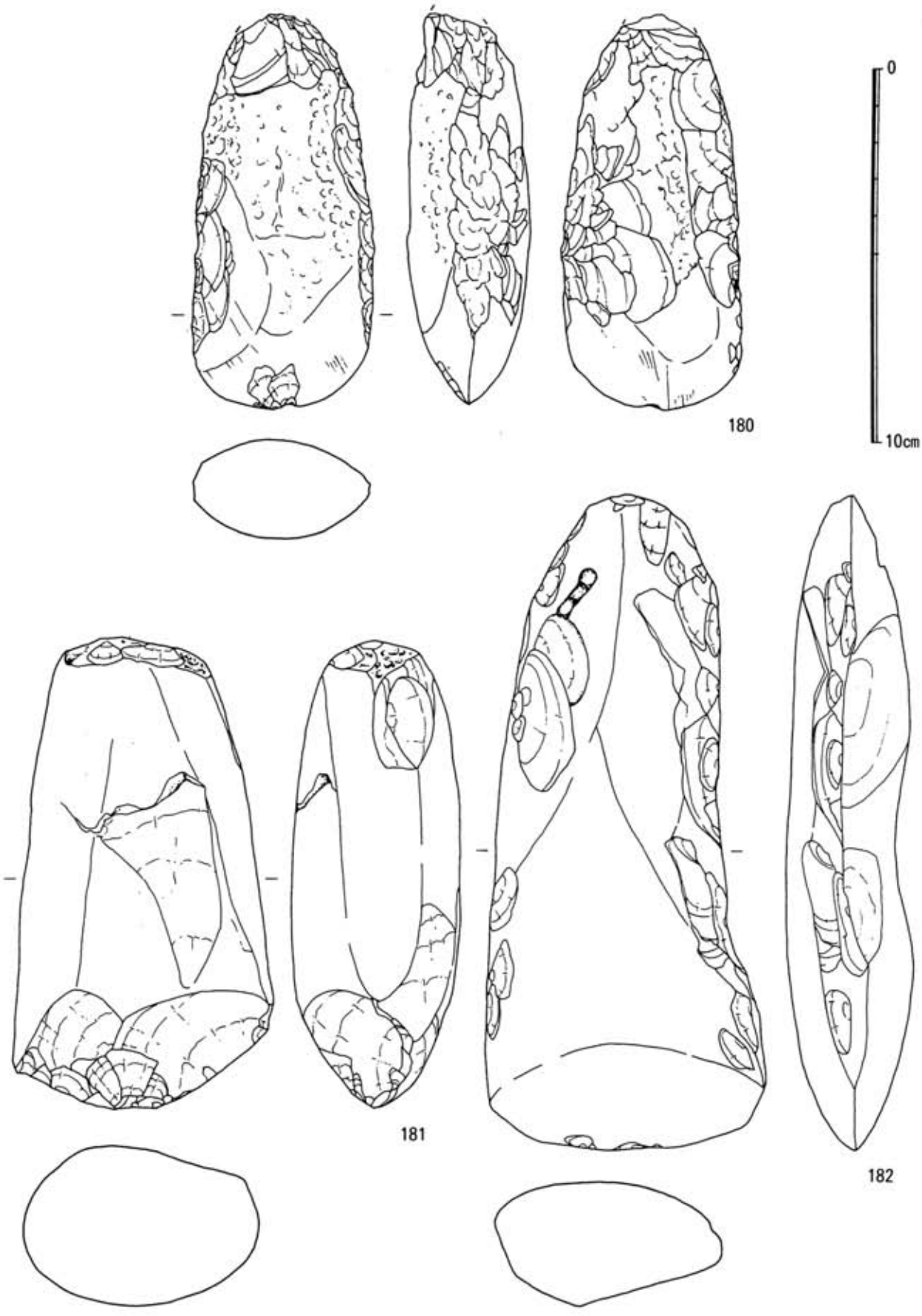


Fig. 53　磨製石器 3 （2/3）

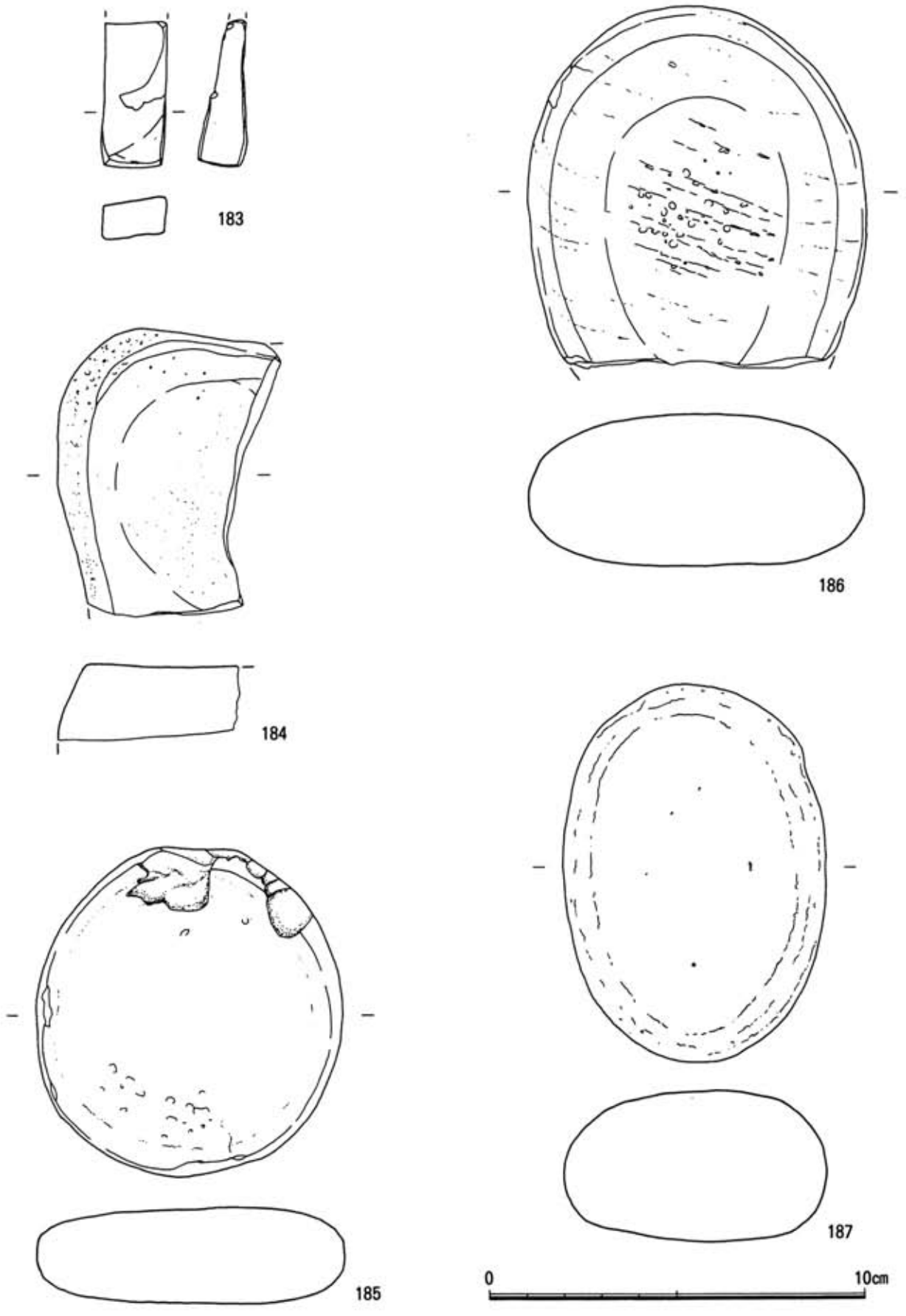


Fig. 54　磨製石器 4 （2/3）

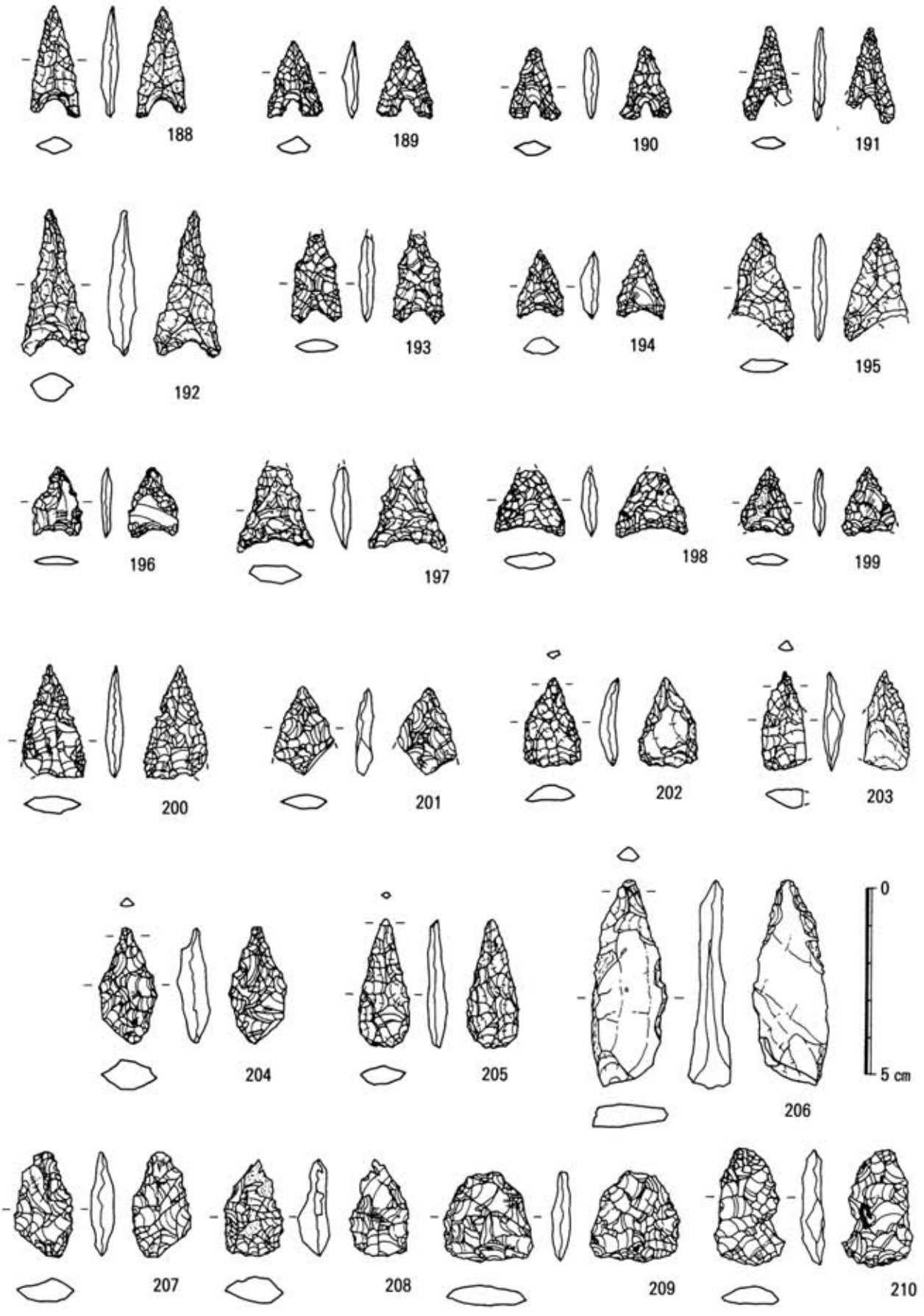
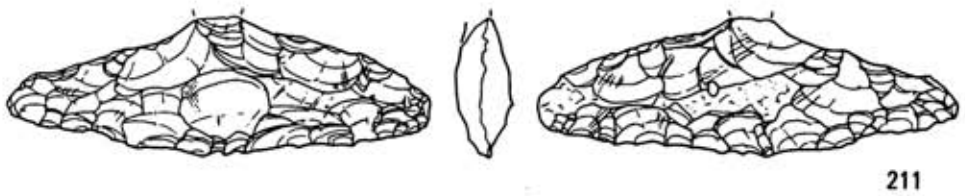
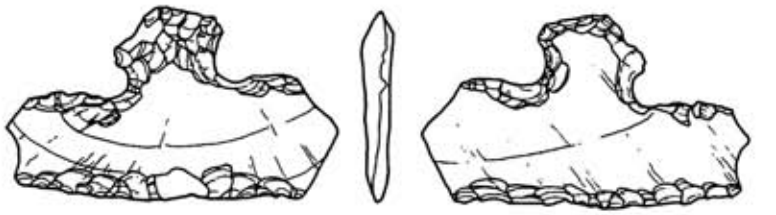
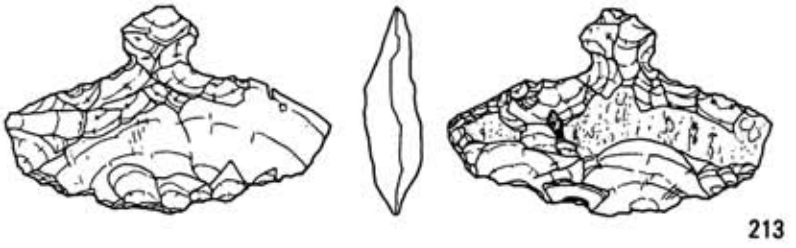
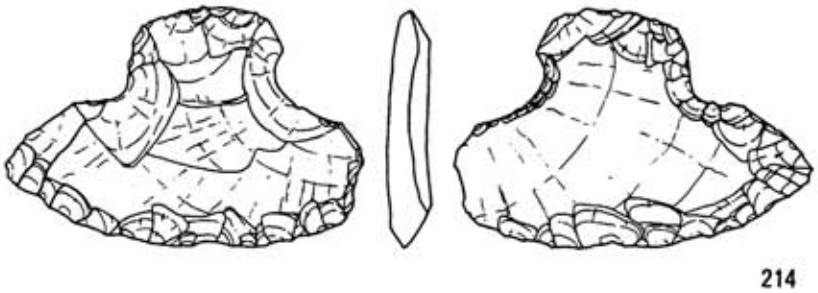


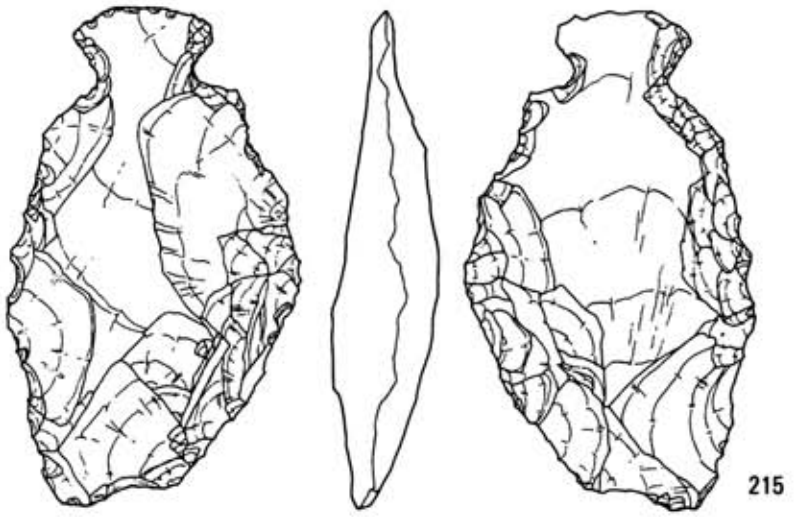
Fig. 55　打製石器 1 (2/3)











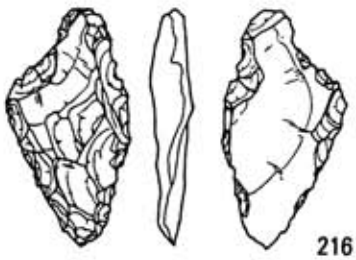


Fig. 56　打製石器 2 (2/3)

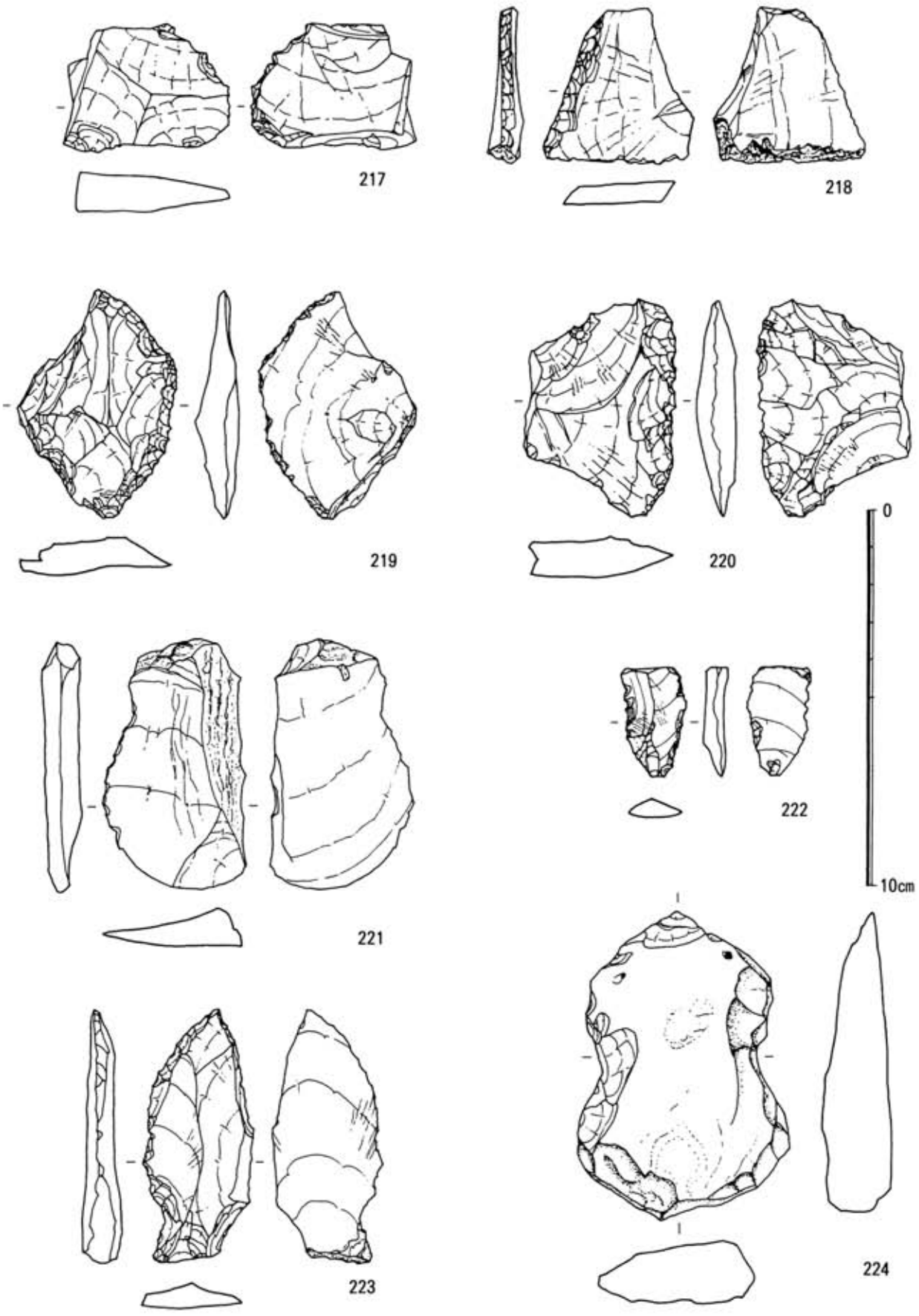


Fig. 57　打製石器 3 （2/3）

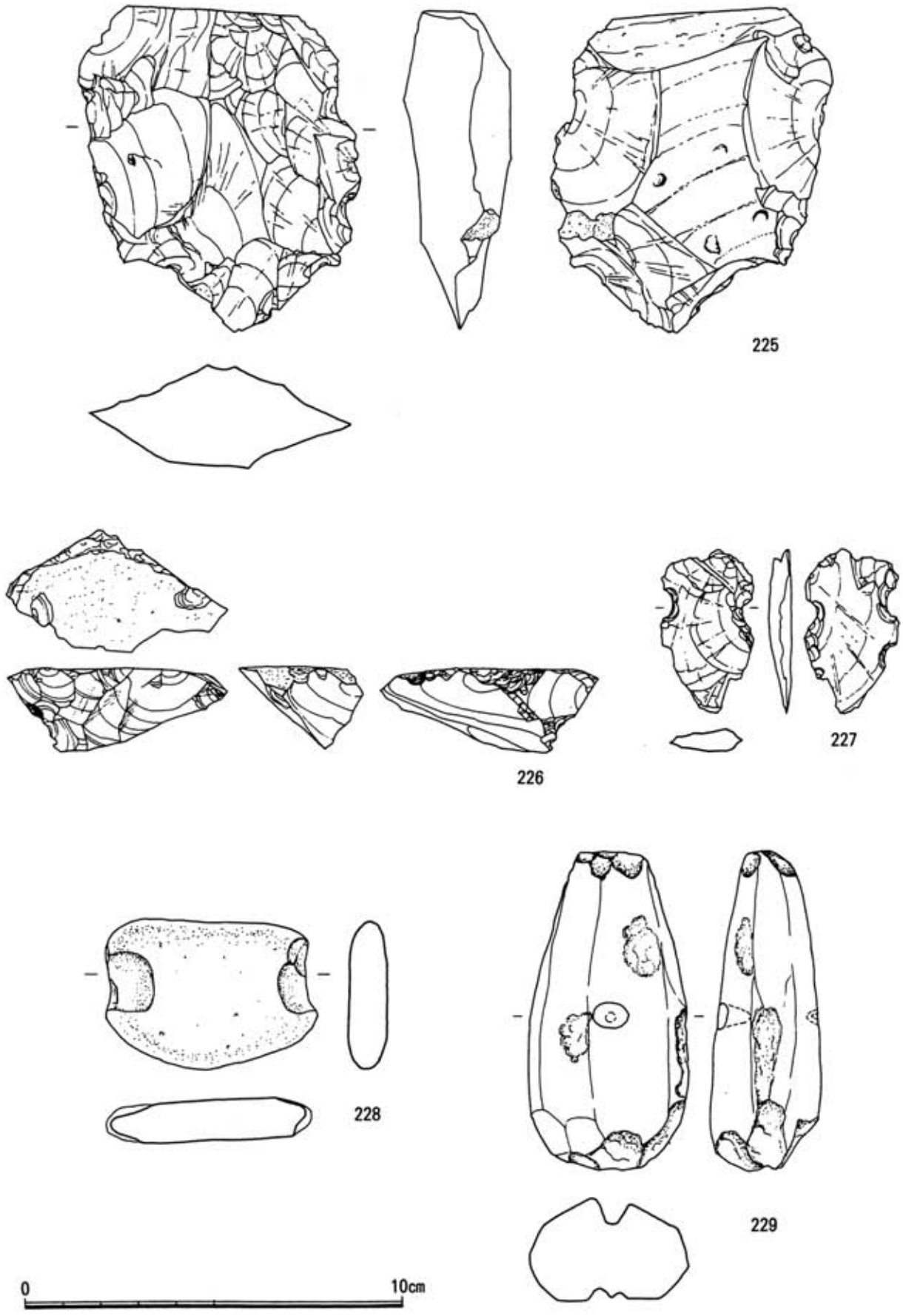


Fig. 58　打製石器 4 （2/3）

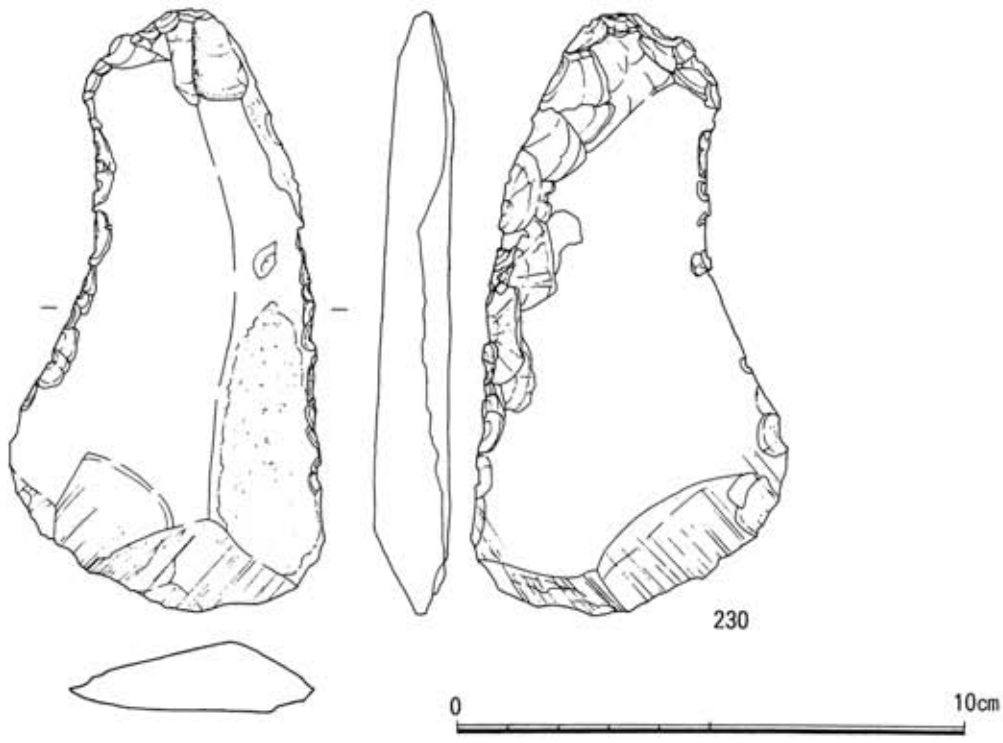


Fig. 59　打製石器 5 （2/3）

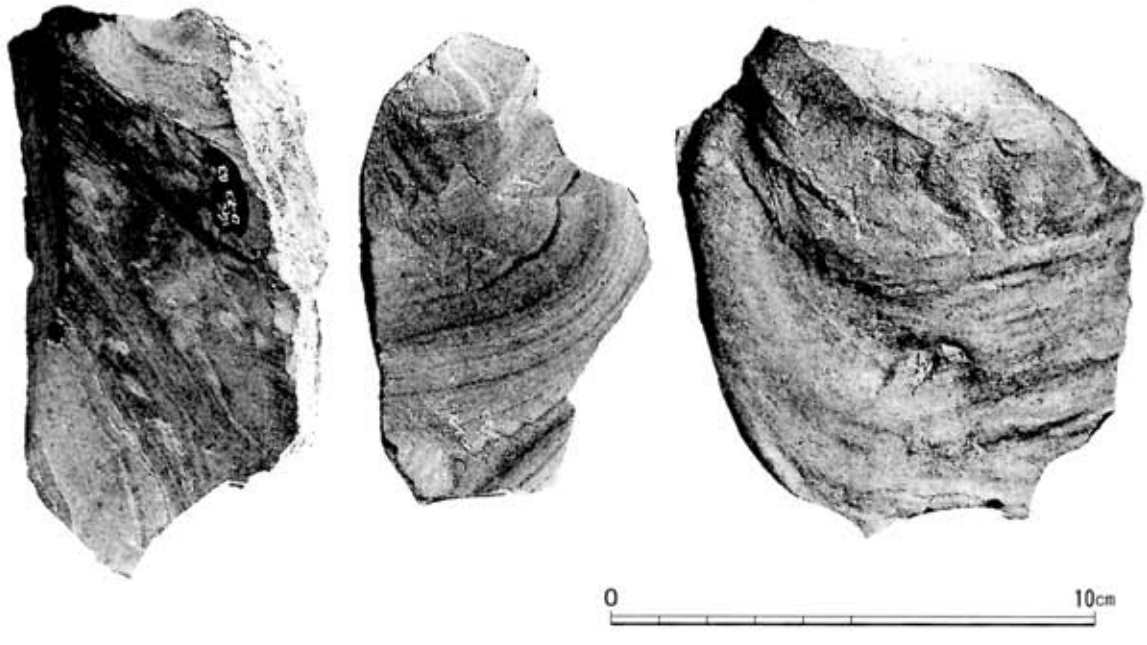


Fig. 60　剥　片

(3) 玉　類

勾玉１と管玉44がある。SJ07から勾玉１、管玉42がSK05より管玉１、包含層より管玉１が出土した。その一覧表をTab. 22に掲載する。234は勾玉で硬玉製で両側から穿孔する。背面は研ぎ分けられる。

235～278はすべて碧玉製の管玉である。形態は円筒形であり穿孔は両面あるいは片面からなされる。色調は類似するものの若干の違いが認められ243, 277が濃青緑色で他は濃緑色である。径は4.5㎜～3.0㎜で長さは9.8㎜～5.0㎜である。

ひとつの甕棺墓の副葬数としては宇木汲田遺跡45号甕棺墓の83個、38号甕棺墓の45個につづくものである。Fig62のとおり管玉は直径６㎜前後を境として大型品と小型品の２群にわかれることが判っている（大坪志子2000）。井ゲタ遺跡SJ07出土の管玉はすべて小型品に相当し、唐津湾沿岸地域管玉法量分布の枠内にはいる。

参考文献

大坪志子2000「九州における縄文－弥生時代管玉集成」『環東中国海沿岸地域の先史文化』

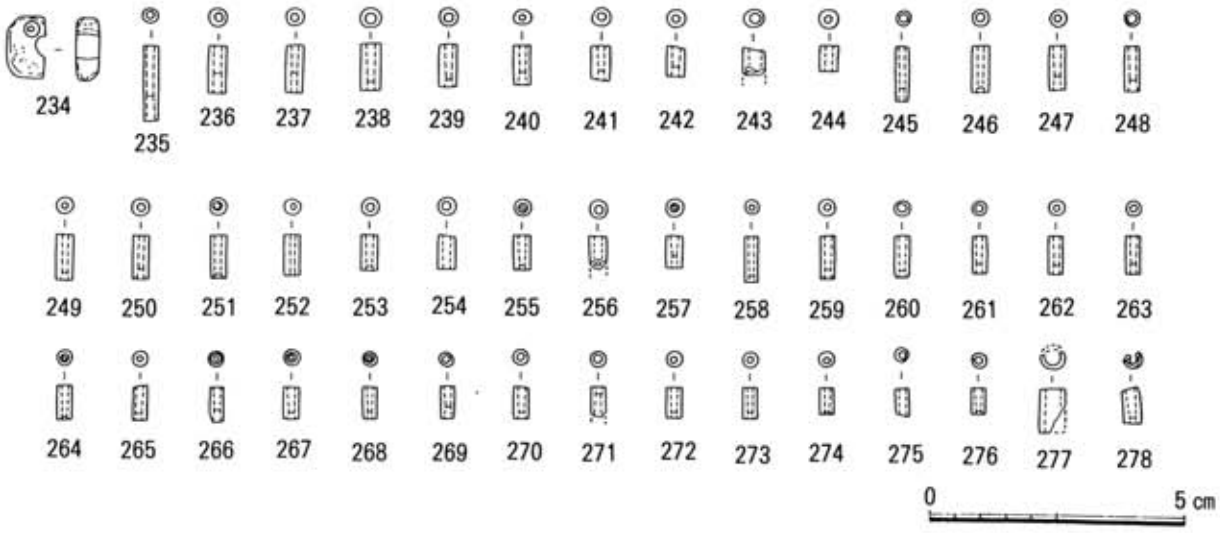


Fig. 61　玉　類（2/3）

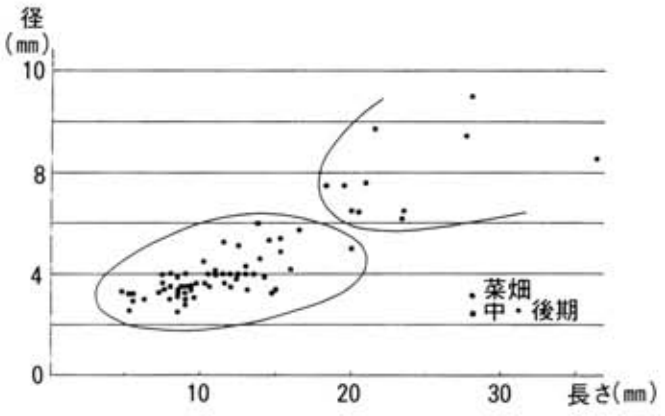


Fig. 62　唐津湾沿岸地域出土管玉計測図
（大坪2000より引用）

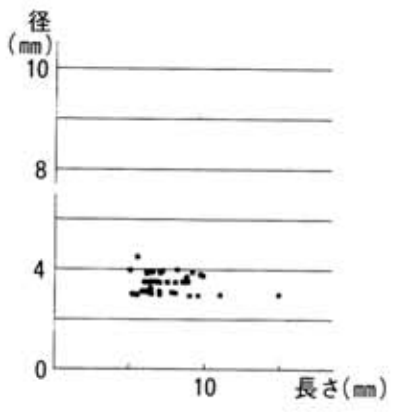


Fig. 63　SJ07出土管玉計測図

Tab. 22　井ゲタ遺跡玉類一覧表

Fig図番号	登録番号	出土地点	種別	長さ(mm)	径(mm)	色調	Fig図番号	登録番号	出土地点	種別	長さ(mm)	径(mm)	色調
61-234	00682	SJ07	勾玉	12	5.0	緑色	61-257	00656	SJ07	管玉	6.5	3.5	濃緑色
61-235	00683	SJ07	管玉	15	3.0	濃緑色	61-258	00671	SJ07	管玉	9.0	3.0	濃緑色
61-236	00672	SJ07	管玉	9.5	3.8	濃緑色	61-259	00667	SJ07	管玉	8.5	3.5	濃緑色
61-237	00657	SJ07	管玉	9.8	3.5	濃緑色	61-260	00661	SJ07	管玉	8.0	3.5	濃緑色
61-238	00655	SJ07	管玉	8.2	4.0	濃緑色	61-261	00649	SJ07	管玉	7.5	3.5	濃緑色
61-239	00653	SJ07	管玉	8.5	3.5	濃緑色	61-262	00679	SJ07	管玉	7.8	3.2	濃緑色
61-240	00687	SJ07	管玉	8.0	3.5	濃緑色	61-263	00668	SJ07	管玉	7.8	3.2	濃緑色
61-241	00686	SJ07	管玉	7.0	3.0	濃緑色	61-264	00666	SJ07	管玉	7.0	3.5	濃緑色
61-242	00663	SJ07	管玉	6.2	3.8	濃緑色	61-265	00678	SJ07	管玉	7.0	3.2	濃緑色
61-243	00691	SJ07	管玉	5.5	4.5	濃青緑色	61-266	00650	SJ07	管玉	7.0	3.0	濃緑色
61-244	00664	SJ07	管玉	5.0	4.0	濃緑色	61-267	00651	SJ07	管玉	6.8	3.5	濃緑色
61-245	00684	SJ07	管玉	11.0	3.0	濃緑色	61-268	00665	SJ07	管玉	6.5	3.0	濃緑色
61-246	00659	SJ07	管玉	9.2	3.8	濃緑色	61-269	00688	SJ07	管玉	6.5	3.3	濃緑色
61-247	00658	SJ07	管玉	9.0	3.0	濃緑色	61-270	00674	SJ07	管玉	6.5	3.5	濃緑色
61-248	00685	SJ07	管玉	9.5	3.0	濃緑色	61-271	00669	SJ07	管玉	6.0	3.5	濃緑色
61-249	00677	SJ07	管玉	8.8	3.5	濃緑色	61-272	00660	SJ07	管玉	6.0	3.5	濃緑色
61-250	00670	SJ07	管玉	8.8	3.7	濃緑色	61-273	00680	SJ07	管玉	6.2	3.2	濃緑色
61-251	00676	SJ07	管玉	8.5	3.5	濃緑色	61-274	00673	SJ07	管玉	5.5	3.0	濃緑色
61-252	00689	SJ07	管玉	8.0	3.2	濃緑色	61-275	00692	SJ07	管玉	5.8	3.2	濃緑色
61-253	00675	SJ07	管玉	7.0	3.8	濃緑色	61-276	00654	SJ07	管玉	5.2	3.0	濃緑色
61-254	00662	SJ07	管玉	7.0	3.8	濃緑色	61-277	00693	包含層	管玉	15	3.0	濃青緑色
61-255	00652	SJ07	管玉	7.0	3.5	濃緑色	61-278	00681	SK05	管玉	7.2	3.8	濃緑色
61-256	00690	SJ07	管玉	6.5	3.8	濃緑色							

(4)　木製品・建築部材

儀器1点とSB17,18,19掘立柱建物の柱、横木などの建築部材がある。

279,280はⅢ区のQ－23グリッド包含層にて279を上にして280が直交した状態で出土した。279は鳥形のような儀器、280は棒状木製品である。279は長軸方向に弓なりにそるが出土時は水平であった。一側辺が直線的で対する一側辺が曲線を描く木の葉の形をなす。最大幅29.4cm、刃部幅26.1cm、厚さ9㎜で中央やや上よりに長方形の柄穴を穿つ。柄穴幅3.1cm、柄穴長1.3cmである。280は長さ28.0cm、幅1.9cm、厚さ1.8cmの断面長方形の角材で小口および各面は比較的丁寧に仕上げられ、折れた状況ではない。2ヶ所に幅約1.5cmほどの微妙な窪みがある。出土状況は前述のとおりであるが279の柄穴形態や280の形態などから280が柄と考えるには疑問があり、組み合わせて使用したと考えられる。

281～296は掘立柱建物の建築部材で柱、横木がある。これらの樹種同定分析結果をN,1に掲載する。281～284は柱で281はSB18, P4、282はSB19, P2、283はSB17, P2、284はSB19, P3である。281,284にはそれぞれエツリ穴が施され、281, 282, 283の基部は斜めに加工されるなどの共通した特徴がみられる。図示した4本の柱の樹種はすべてクリである。

281は柱の中では最も遺存状態が良い。柱の最大直径は30.4cm、遺存長49cmで底面は平坦に仕上げる。底面より上方8.8cmの位置にエツリ穴を穿つ。エツリ穴の断面形態は長方形で縦5.4cm、横4.0cmである。柱の背面基部は約1/3周ほど斜めに加工される。加工痕の幅は4～6cmである。282は部分的に欠失するものの遺存状態は比較的良好である。柱の最大直径は31.6cm、遺存長52cmで底面は平坦に仕上げる。底面より上方15cmの位置にエツリ穴を穿つ。エツリ穴の断面形態は長方形で縦6.4cm、横4.0cm

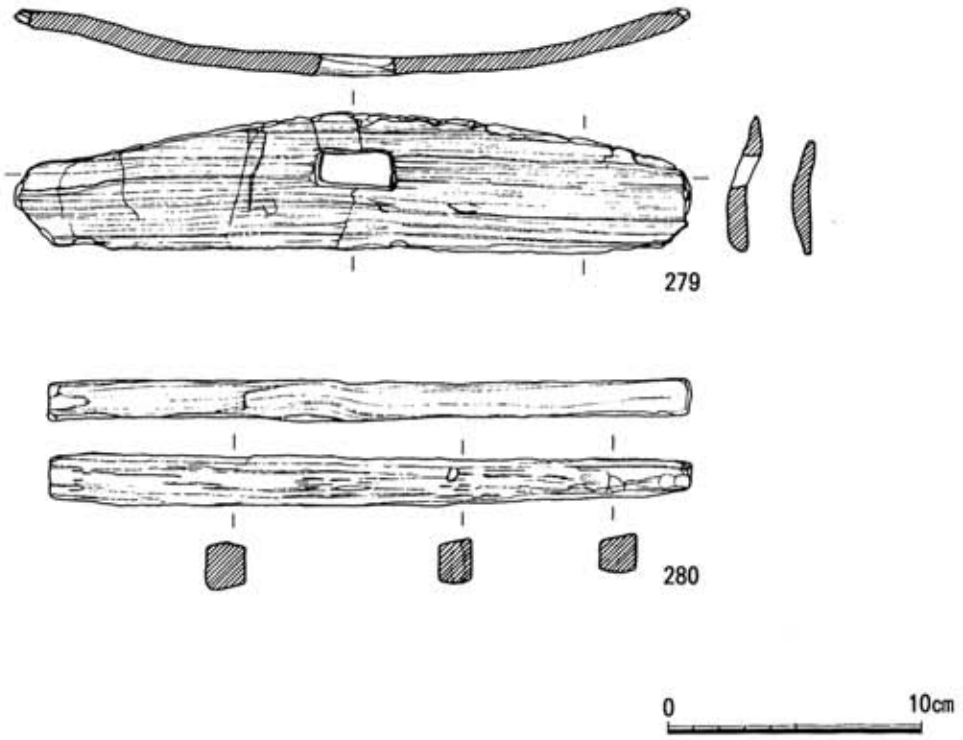


Fig. 64　包含層出土儀器（1/3）

である。柱の基部はエツリ穴の右半分下から約1/2周ほど斜めに加工される。また、側面は多角形に面取りされておりわずかな稜線がはいる。283は柱の中心から約1/2を欠失する。最大直径は22cm、遺存長33cmで底面は平坦に仕上げる。柱の基部は約1/3周ほど斜めに加工される。刃先の幅がわかるような加工痕は観察できない。側面に部分的に炭化した痕跡が認められる。284は柱の中心から約1/3を欠失する。最大直径は26.6cm、遺存長38cmで底面は平坦に仕上げる。基部はわずかに斜めに加工されるが、281, 282, 283のような基部の加工痕ではない。側面は部分的に面取りされており、わずかな稜線がつく。

285～299は横木である。定型化して加工されたものではなく、全体的に雑な造りである。

しかし、形態的に分類も可能である。1つは断面蒲鉾形の板状に加工したものとして289,290,291があり、礎板に類似する。また、片方の小口面を斜めに加工するものとして296,297,298,299がある。また、285,287は特に加工も施さず自然木に近いものもある。

285～287はSB19、P5の横木である。285は全長27.5cm、最大幅3.8cm、最大厚3.0cmの棒状で特に加工痕はない。296は全長26.4cm、最大幅5.5cm、最大厚2.6cmで断面円形の自然木を蒲鉾形に半裁している。287は全長22cm、最大幅5.4cm、最大厚2.9cmで特に加工痕はない。289,290,291,292はSB18、P6内出土の横木で柱穴底に礎石を配してその上にこれらの横木をおいて柱を立てる構造であった。289は全長33.5cm、最大幅19.5cm、最大厚6.0cmで、断面蒲鉾形の板状を呈する。径30cmほどの丸木を縦割りにしており表面には加工痕が残る。290は全長29.5cm、最大幅12cm、最大厚2.8cmで289をひとまわり小さくしたような木取り及び形態である。291は全長28cm、最大幅11.3cm、最大厚3.9cmで木取りは289と同じであるがさらに片方の側辺を垂直に割り、えぐり込む加工を施す。292は全長21.7cm、最大幅8cm、最大厚2.1cmで不定形で加工痕も曖昧である。293,294,295,296はSB18,P3出土の横木で礎石の下にこれらを配している。293は全長15.7cm、最大幅10cm、最大厚6.2cmで断面台形をなし、片側の小口

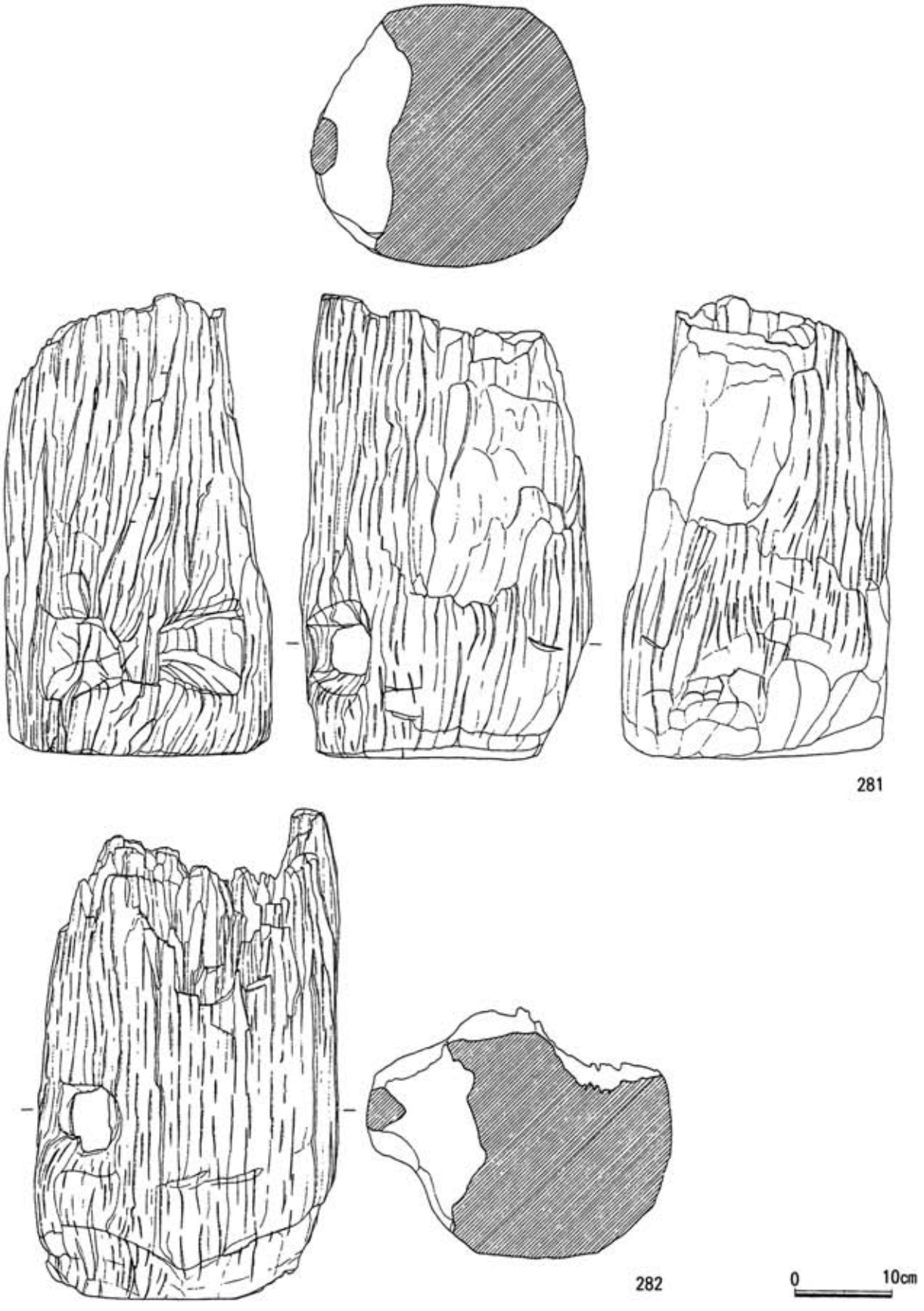


Fig. 65　SB18・19掘立柱建物柱根（1/6）

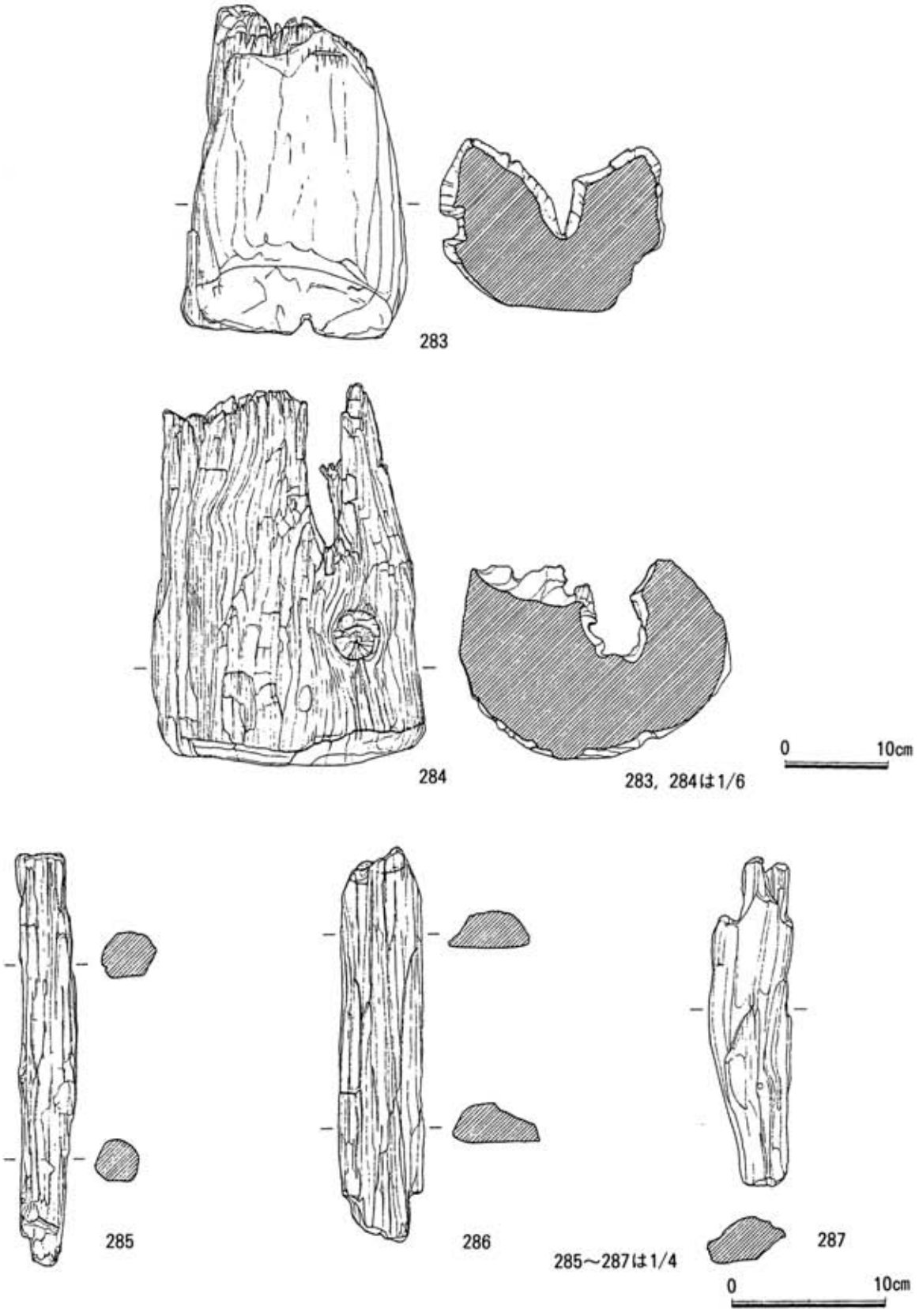


Fig. 66　SB17・19掘立柱建物建築部材（1/6)・(1/4)

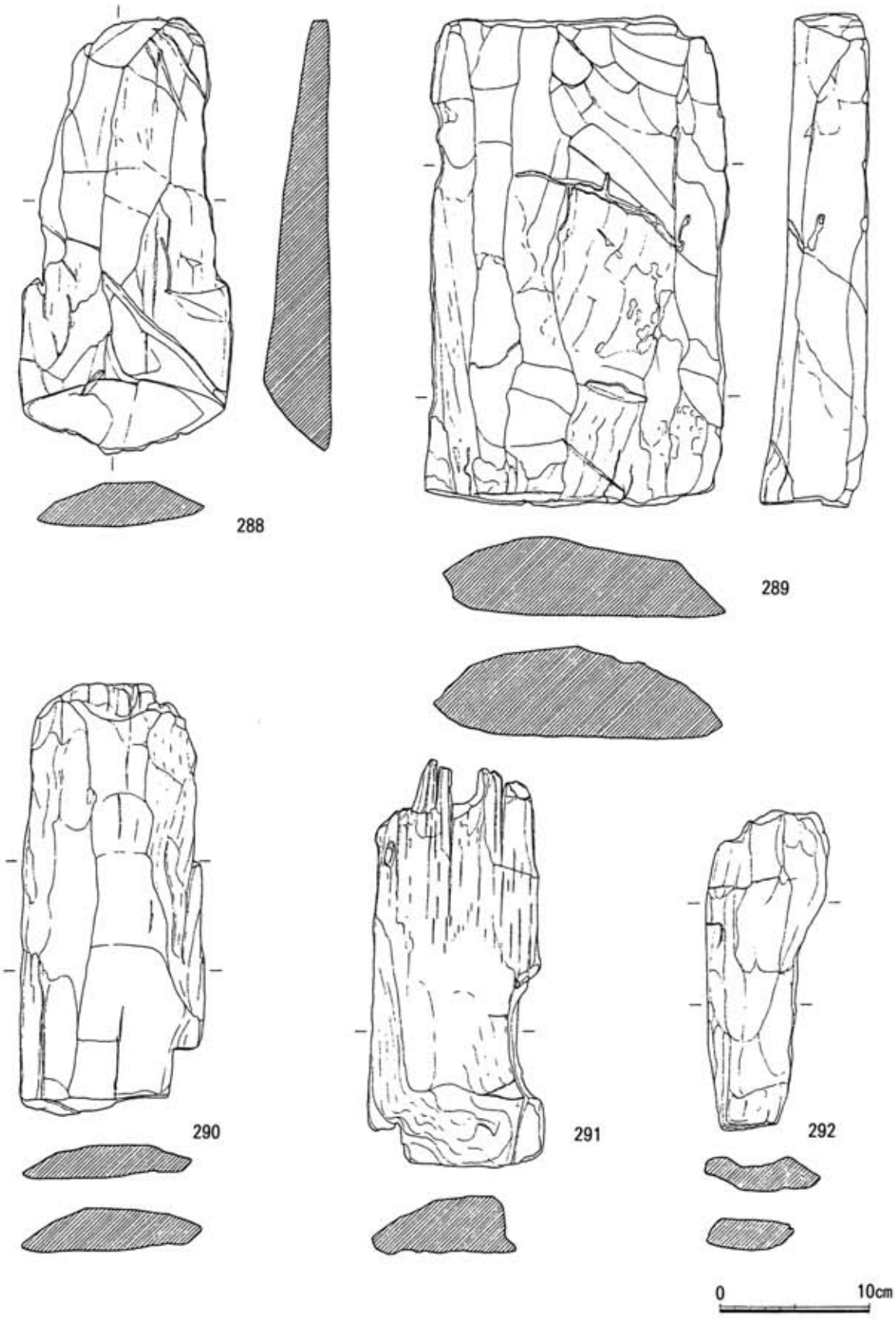


Fig. 67　SB18掘立柱建物建築部材 1 （1/4）

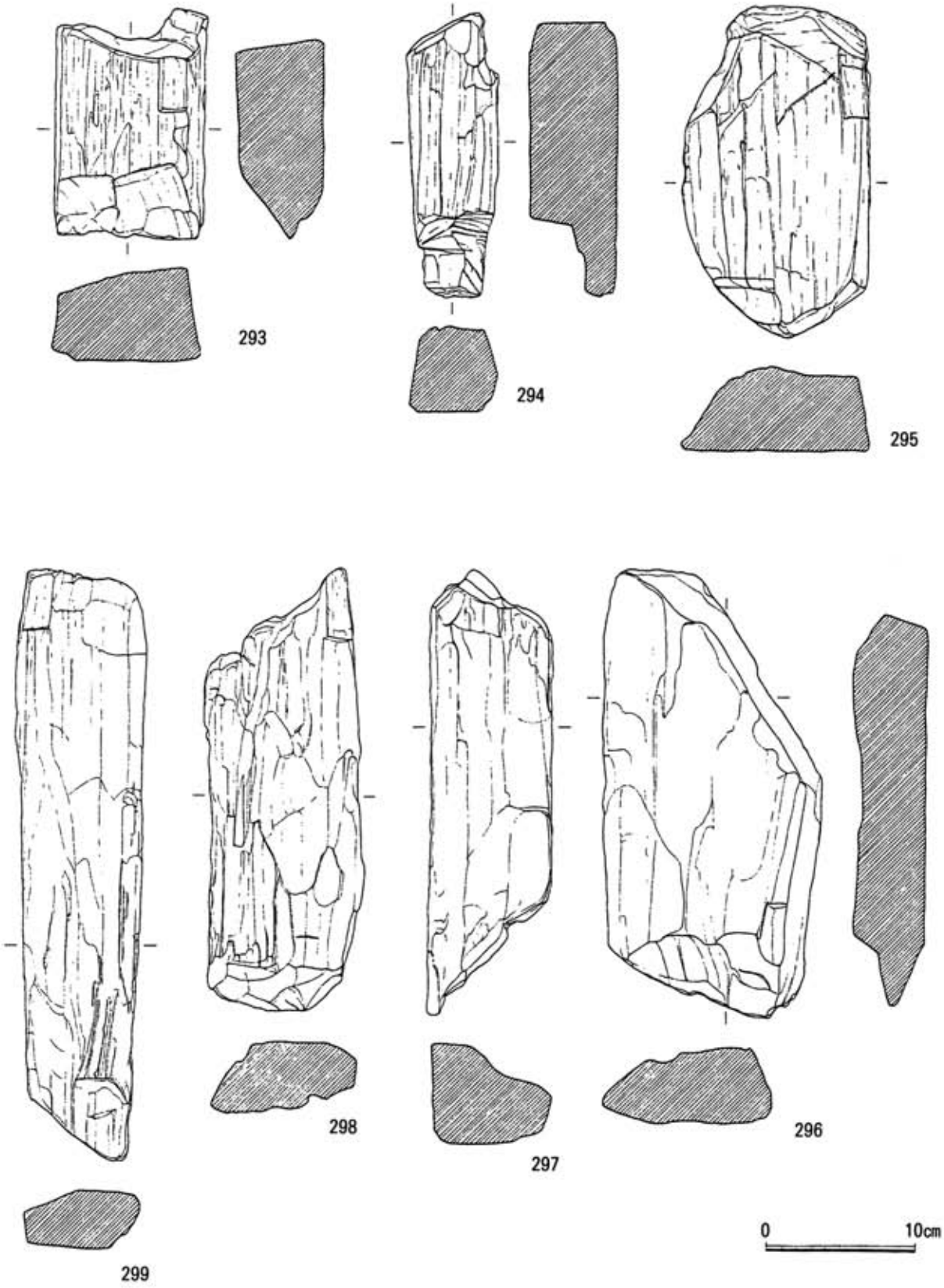


Fig. 68　SB18掘立柱建物建築部材 2 （1/4）

面は楔形に両側から加工する。294は全長19.2cm、最大幅6.0cm、最大厚5.7cmで両側小口面には加工痕が残る。295は全長22.2cm、最大幅12.6cm、最大厚5.7cmで断面は不整な台形で両小口面も加工する。296は全長30.2cm、最大幅14.7cm、最大厚5cmで断面は不整な台形で一方の小口面は楔形に両側から加工し、あと一方の小口面は斜めに加工する。288,297,298,299はSB18、P4出土の横木で礎石の下にこれらを配している。288は全長29.9cm、最大幅14.2cm、最大厚4.5cmで片側面および両小口面には加工痕が明瞭に残る。加工痕幅は約4cmである。297は全長30cm、最大幅8.1cm、最大厚6.8cmで断面は不整な台形で両小口面は雑に加工される。298は全長29.8cm、最大幅10.2cm、最大厚4.6cmで一方の小口面は楔形に両側から、あと一方の小口面は斜めに加工する。加工痕は雑である。299は全長39.1cm、最大幅8.6cm、最大厚4.0cmで一方の小口面は斜めに加工される。

Tab. 23　井ゲタ遺跡木製品一覧表

Fig図番号	登録番号	出土地点	種別	法量	備考	樹種
64-279	991526	Q-23	儀器	最大幅29.4cm、刃部幅26.1cm、厚さ9mm		
64-280	991527	Q-23	棒状木製品	全長28cm、最大幅1.9cm、最大厚1.8cm		
65-281	991529	SB18, P4	柱	最大直径30.4cm、遺存長49cm	エツリ穴	クリ
65-282	991530	SB19, P2	柱	最大直径31.6cm、遺存長52cm	エツリ穴	クリ
66-283	991528	SB17, P2	柱	最大直径22cm、遺存長33cm		クリ
66-284	991531	SB19, P3	柱	最大直径26.6cm、遺存長38cm		クリ
66-285	991546	SB19, P5	横木	全長27.5cm、最大幅3.8cm、最大厚3.0cm		クリ
66-286	991545	SB19, P5	横木	全長26.4cm、最大幅5.5cm、最大厚2.6cm		クリ
66-287	991547	SB19, P5	横木	全長22cm、最大幅5.4cm、最大厚2.9cm		クリ
67-288	991537	SB18, P4	横木	全長29.9cm、最大幅14.2cm、最大厚4.5cm		クリ
67-289	991543	SB18, P6	横木	全長33.5cm、最大幅19.5cm、最大厚6.0cm		
67-290	991542	SB18, P6	横木	全長29.5cm、最大幅12cm、最大厚2.8cm		タブノキ
67-291	991544	SB18, P6	横木	全長28cm、最大幅11.3cm、最大厚3.9cm		クリ
67-292	991541	SB18, P6	横木	全長21.7cm、最大幅8cm、最大厚2.1cm		タブノキ
68-293	991533	SB18, P3	横木	全長15.7cm、最大幅10cm、最大厚6.2cm		クリ
68-294	991536	SB18, P3	横木	全長19.2cm、最大幅6.0cm、最大厚5.7cm		クリ
68-295	991534	SB18, P3	横木	全長22.2cm、最大幅12.6cm、最大厚5.7cm		クリ
68-296	991535	SB18, P3	横木	全長30.2cm、最大幅14.7cm、最大厚5cm		クリ
68-297	991538	SB18, P4	横木	全長30cm、最大幅8.1cm、最大厚6.8cm		クリ
68-298	991540	SB18, P4	横木	全長29.8cm、最大幅10.2cm、最大厚4.6cm		クリ
68-299	991539	SB18, P4	横木	全長39.1cm、最大幅8.6cm、最大厚4.0cm		クリ

(5) 土師器

調査区内の地形は南西側が低くなる緩斜面である。土師器は低地にあたる2区・3区の南西部の包含層から出土している。遺構出土の土師器はなく、すべて包含層出土で基本土層の5層にあたる。Tab. 24に土師器一覧表を掲載する。

300は甕の口縁部片である。器壁は厚く外上方に直線的に開く。端部は面取りされる。301は直口壺の頸部から胴部中央にかけての破片である。内面ヨコナデ、胴部外面タテハケ。302,303は高杯。いずれも杯部のみの残存で脚部は欠失する。302はわずかに内湾して外上方に開く。杯部内面ヨコハケ。303は杯底部の接合面で円形に割れる。本来、杯口縁部との境に稜線がつく。成形技法的には303が古式である。304は広口壺。口頸部は短く外反する。肩部ははらず胴部へとつづく。肩部内面に粘土帯の接合面が残る。

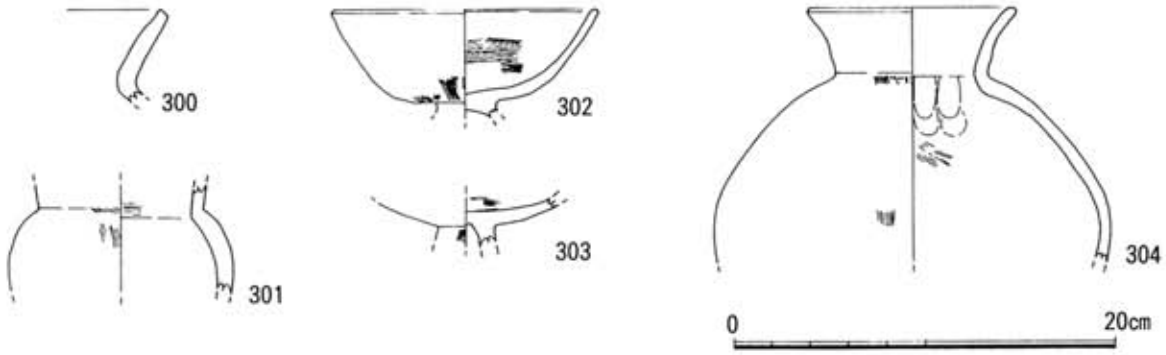


Fig. 69 土 師 器 (1/4)

Tab. 24 井ゲタ遺跡土師器一覧表

※( )は復元口外径

Fig図番号 (登録番号)	出土地点	器種 種別	法量 (cm)	形態・成形・調整の特徴	胎土	色調
69－300 (971751)	R・S-20・21 包含層	甕 (土師器)	――	口縁部は、直線的に外上方に開く。内外ヨコナデ。	細砂粒混入	内外面褐色
69－301 (970909)	R・S-20 包含層	直口壺 (土師器)	――	口縁部は直口し、体部は球形である。体部タテハケ。	細砂粒混入	内外面褐色
69－302 (970244)	P-25 包含層	高杯 (土師器)	口径(13.8)	杯部はわずかに内湾して、外上方に開く。内面ヨコハケ。	中粒砂粒混入	内外面褐色
69－303 (970245)	P-25 包含層	高杯 (土師器)	――	杯底部で、接合面で割れる。	細砂粒混入	内外面褐色
69－304 (970237)	Q-25 包含層	広口壺 (土師器)	口径(10.8)	口縁部は外反し、肩部ははらない。肩部内面ヘラケズリ。	金雲母混入 細砂粒混入	内外面明褐色

(6) 縄文土器

今回調査区内では縄文時代の遺構は検出されておらず、出土した土器はすべて包含層からの出土である。このうち縄文土器の多くが出土している3区（Fig.70）の8層は、流木や転石を含む黒色の粘質土である。この層は3区内でしか見つかっておらず、隣接する2区には分布していない。遺物は北東から南西へ地形の傾斜に沿って流れこんでいる。標高7.8m付近から地形の傾斜が大きくなり、標高の低い部分では縄文土器の出土が見られなくなる。

土器群毎の遺物の出土傾向は点数が少ないためははっきりしないが、本文中で第6群土器とした阿高式系の土器は3区からまんべんなく出土しているが、それ以外の型式の土器群はP-24グリッドを中心に出土していることが挙げられる。

出土した土器は破片資料がほとんどで、器形を推定できるものは少ない。このうち63点を図示した。文様形態により7群に分けることができ、その主体となるのは胎土に多量の滑石粉を混入した第6群の阿高式系の土器である[1]。

第1群土器（Fig.71　305）

本類は305の一点だけであり、口縁端部に上からヘラ状工具による刻目を施し、口縁部に横位、弧状の浅い沈線文を施す。器面調整は丁寧であり、内外面共にナデ調整を施す。胎土には滑石を含まない。

第2群土器（Fig.71　306～309）

306は内外面に文様もあり、外器面には口縁端部に刻目を入れ、下部に横方向の沈線文を施す。内器面の文様も外器面と同じく、口縁端部に刻目、下部に横方向の沈線文を施す。307～309は粗製土器の胴部片であり、307,308は外器面に縦方向、内器面には横方向の条痕を残し、内外器面の原体が異なる。309は底部付近の破片である。

第3群土器（Fig.71　310～312）

地文に縄文を施すもので、胎土や焼成が他類とは明らかに異なる。311はキャリパー形口縁の括れ部に突帯を貼り付け、棒状の工具で刺突を施したもの。310は波状口縁の先端部であり、そこに長さ4cm、幅1.5cm、深さ5mmほどの窪みをつくる。口縁端部からハの字状に開く突帯にヘラ状工具により刻目が施されている。左右で刻目が異なる。地文として単節縄文RLを斜位回転押捺している。312は撚りの緩い単節縄文RLを斜位回転押捺している胴部片である。内器面はヘナタリ貝による横方向の条痕が残る。

第4群土器（Fig71,72　313～324）

本類はいくつかに分類することができるが、時期的に近いと考えられ、また、それぞれの点数が少ないことから一括して第4群土器とした。313は口縁端部が断面カマボコ形に肥厚し、口唇部に上から浅く小さい刻目を施し、肥厚部中央の横位の刺突文との間に三本の横位の細沈線、肥厚部下の刺突文との間に二本の細沈線を施す。314は半裁竹管状工具による羽状文が斜位に施された胴部片である。318は断面凸形の高い突帯の中央と突帯の基部に沿って針状工具による小さい連続刺突文を施し、その上部に棒状工具による大きめの円形刺突文を施す。突帯の下部は貼りつける際のものと思われる縦方向の櫛状の調整痕が残る。315～317は口縁部内側に粘土を貼りつけT字状口縁をつくる。317は口縁端部外面に刻目、その下部に幅広で浅い横位の沈線文、口縁端部上面に二列の小さな三日月形の竹管文を施す。器壁が薄く、浅鉢もしくは小さな鉢と思われる。315,316は口縁端部の他は文様を持たず、内外面には条痕を明瞭に残す。316は器壁が薄く、口径約20cmで底部を除き大凡の器形が復元できる。口縁端部に太い刻目が施され、口縁端部上面にも条痕調整の後に、小さい針状工具による押引

文が施される。315は口縁端部外面にヘラ状工具による刻目、上面に連続刺突文が施される。319は胎土中に砂粒を多く含むが、内外面にナデ調整を施す。口縁部は一度外反させて垂直に立ち上がっており、屈曲部の下部を丁寧になでているので口縁部が肥厚しているように見える。口縁端部に外面から浅く大きめの凹点文を施しているため、小さな波状口縁を呈する。肥厚部の下に二条の浅い凹線文を施し、そこに補修孔を穿つ。間隔をあけてその下部にも凹線文を施す。320～323は粗い横方向の条痕調整と黒褐色の色調、胎土中に多く含まれる長石粒に特徴がある。320,322,323は二列の平行した押し引き文を一単位として斜位に巡らす。323は口縁端部に貝殻腹縁部による刻目、縦位の押し引き文を施す。322は平行する二列の押し引き文の単位と斜交する押し引き文の単位がある。321は褐色の色調で胎土中に雲母片を多く含み、低い突帯に二枚貝腹縁による刻目を施す。324は直線的に立ち上がり、口縁端部上面をなでて面取りしているので内面に突出している。内器面の口縁部付近は横方向のナデ調整を行なうが、外器面は条痕調整を残す。

第5群土器（Fig.72　325～327）

本類は今回出土した土器の中で胎土中に最も多くの滑石粉を含み、内外器面ともに横方向の条痕調整を明瞭に残す。口縁部片と胴部片が出土しており、接合はしないが同一個体と考えられる。325は口縁部から胴部にかけての部位で、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり胴部に向けて直線的にすぼまる。小さく連続した波状口縁に沿って、ヘラ状工具による平行した2本の深い山形の沈線文が施され、その下部に2列の押引文が施される。326は押引文が斜め下から施されている。327は底部付近と思われ、条痕が粗い。

第6群土器（Fig.72～74　328～357）

本類は最も多く出土し、胎土中に滑石粉を混入するもので、口縁部から底部外面にかけて凹点文、凹線文、連点文などが施される、阿高式系土器である。小破片がほとんどであるため、口縁部を中心として文様構成により細分を行った。

6－a類（Fig.72,73　328～333）

口縁部に数段にわたり凹点文を施すもので、滑石が混入されるが、つくりは比較的粗雑なものが多い。口唇部にも凹点文が施されるため、小さい波状口縁となるものが多い。凹点文が縦長の楕円形で中央に爪痕状の段差が残るもの、残らないものがあり、器形には口縁部が内湾気味に立ち上がるもの、外反するものがある。330は6-a類のうち器形の復元が出来る個体で、口縁部が直線的に外反し、文様は横位の凹線文により区画された上部に5段の凹点文を施す。331はa類中ではつくりが丁寧で、凹点文も深く、爪痕状の段差を持たない。焼成も良く、滑石も多量に混入している。333は凹点文と凹線文の下部にまだ文様が続いているがa類に分類しておく。

6－b類（Fig.73　334）

334の1点だけで、口縁部が肥厚し、口縁端部に凹点文、幅広で深めの斜位の凹線文を施し、口縁部内面から粘土を張りつけ口唇部上面に平坦面をつくり連点文を施す。

6－c類（Fig.73　335～340）

口縁部から胴部にかけて数段の凹点文と数条の凹線文により平行線や曲線、渦巻文を施文するもの。凹線文はb類に比べて浅い。つくりは比較的丁寧なものが多い。339は横位の凹線文によって区画された上部に、凹点文と浅い曲線の凹線文を施す。340は口縁端部は不明だが、横位の凹線文によって区画された上部に山形の凹線文を施し、縦位の凹線文から左右対称になると思われる。

6－d類（Fig.73　341）

突帯を二重に円形に巡らせ、内側の突帯だけに針状工具による連続刺突文を施す。また浅い縦位の

凹線文間にも針状工具による連続刺突を施す。胎土中に多くの滑石粉を含む。

6－e類（Fig.73　342，343）

胎土中に砂粒を多く含み、滑石紛は少ない。口縁端部片は出土していない。342は竹管状工具を器壁に対して垂直に当て凹点文を施し、凹点文の間から横方向の凹線文を施す。凹線文は幅が狭く浅い。

6－f類（Fig.74　344，345）

滑石の混入が少なく、外面が無文で口縁端部に凹点文を施す。そのため小さい波状の口縁を呈する。

6－g類（Fig.74　355～357）

滑石の混入が少ないか全く混入せず、つくりが粗雑で焼成も悪い。胴部に浅い凹点文や凹線文を施す。

第6群土器胴部（Fig.74　346～354）

分類できなかった第1群土器を一括した。滑石粉を含み、凹線文や凹点文が施されている。器壁は厚いものが多いが、348は器壁が薄手で、滑石の粒を多く含む。

第7群土器（Fig.75　358，359）

第7群土器は他群とは出土地区が違い、2区のQ-18グリッドから出土している。器壁が厚く内湾気味に立ち上がり、口縁端部上面を面取りし、太目の刻目を施す。口縁部の横位二本の突帯にも刻目を施す。また口縁端部と突帯の間、突帯間に幅広の連続山形文を施す。図示していないが、突帯間に幅広めの横位の沈線と山形文を施すものもあり、これが同一個体かどうかは不明である。

土器底部（Fig.75　360～365）

底部で第6群の底部に対応すると思われるものは360～363である。360,363は底部付近まで凹線文を施し、360は大型の深鉢の底部であり指頭圧痕を残す。362は底面に土器製作台に用いられた鯨骨椎体圧痕が見られる。364は第3群の底部であり、胴下半部の地文に縄文が用いられている。また底面と内器面の調整には二枚貝条痕調整を用い、上げ底気味になっている。365は器壁が薄い小型の鉢であり、第3群もしくは4群土器の底部と思われる。

土製品（Fig.75　366，367）

縄文時代の土製品は少数しか出土しておらず、2点を図示した。367は細い沈線文が幾何学的に施された土器片を利用し、両端に刻目をいれた切目土錘である。366は第6群土器の胴部片を利用し、円盤型に加工整形した有孔土製品である。

ま と め

井ゲタ遺跡では点数はさほど多くないが、縄文時代前期～後期にかけての土器が出土している。最も古いものは第1群土器である。口縁端部の刻目が気になるが、曽畑式土器以前の土器である深堀式土器～野口式土器（プロト曽畑土器群）と思われる。切目土錘366は滑石を含み、器壁も薄いので、曽畑式土器の中では古いタイプのものである。第2群土器も胎土中に滑石を含まない新しい要素を持つ曽畑式土器である。第3群土器は船元式系の土器であり、20点ほど出土している。地文に粗密で粗い縄文を施す。第4群土器は中期の並木式土器以前の時期に属する土器と考えている。この時期には北部九州にも南九州の春日式土器の影響が強くなることがわかっており[2]、第4群土器も春日式土器の影響を受けた土器群と思われる。粗い条痕を残すものや貝殻腹縁による刻目などがそれを示すものではないだろうか。第5群土器は滑石を含み、押引文を施すため並木式土器と考えられるが、小さく連続する波状口縁やヘラ描きの沈線文は並木式には見られない。今回は並木式に類似する土器として捉えておき、類例の増加を待ちたい。

今回出土した土器群で中心をなすのは第6群土器の阿高式系土器である。中でも坂の下式土器の半精製土器である第6-a類土器の凹点文土器が最も多く出土している。精製土器の出土は少なく、複雑な蕨手文を持つような古い阿高式土器は出土していない。

第7群土器は後期の土器群と考えており、またこの他図示していないが、後期に属するものでは福田KⅡ式土器も出土している。この第7群土器は2区からの出土であり、この他出土している後期の土器もごく少量であるが3区からは見つからず1、2区から出土している。後期になると3区以外にも生活の場を広げたことをしめす。

縄文時代の遺構は調査区内では見つかっていない。この理由については調査区外にあるのか弥生時代以降の開発により削平されたことが考えられる。1、2区からほとんど遺物が出土しないことや包含層の広がりを考えると前者の可能性が高い。後期の遺構については削平を受けたことも考えられる。

それぞれの土器群に系譜関係はなく、また土器が少量であることから、井ゲタ遺跡の遺物包含層は小集団による移動が、長期間にわたり断続的に行われることにより形成されたことが考えられる。

現在までに見つかっている縄文時代の遺跡は唐津平野の西部と上場台地上に偏っており、宇木・半田川流域で縄文時代の遺物がまとまって見つかったのは初めてである。このことは唐津平野における縄文時代研究にも大きく貢献すると思われる。井ゲタ遺跡のほかには中期～後期にかけての遺物を少量出土する遺跡が知られており、鏡地区を含めて小規模な遺跡が点在するのが縄文時代の宇木・半田川流域の特徴と考えられる。

註

(1) 土器の分類については田島龍太氏に多くのご教授を頂いた。

(2) 徳永1994論文より

参考文献

田島　龍太（1994年）『徳蔵谷遺跡（1）』　唐津市教育委員会　唐津市文化財調査報告書第57集

（1995年）『徳蔵谷遺跡（2）』　唐津市教育委員会　唐津市文化財調査報告書第63集

（1996年）『徳蔵谷遺跡（3）』　唐津市教育委員会　唐津市文化財調査報告書第68集

田中　良之（1979年）「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』第6集

徳永　貞昭（1993年）『平原遺跡Ⅱ』　佐賀県教育委員会　佐賀県文化財調査報告書第120集

（1994年）「並木式土器の成立とその前夜」『牟田裕二君追悼論集』

中島　直幸・田島　龍太（1982年）『菜畑』唐津市教育委員会　唐津市文化財調査報告書第5集

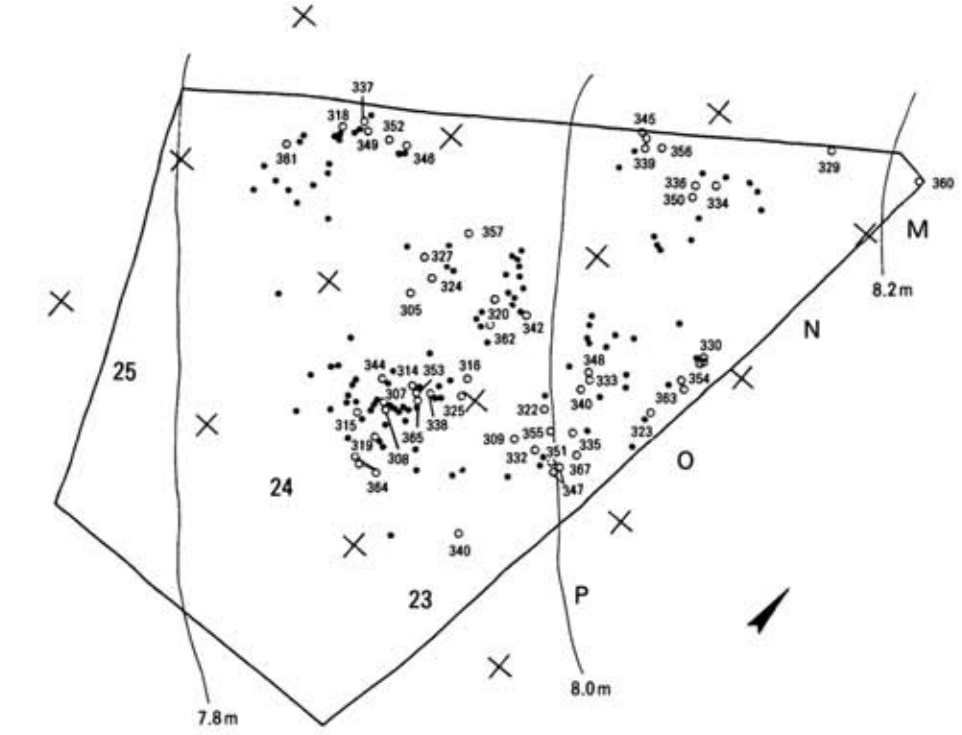
東　　和幸（1994年）「春日式土器と並木式土器・阿高式土器」『南九州縄文通信』No.8

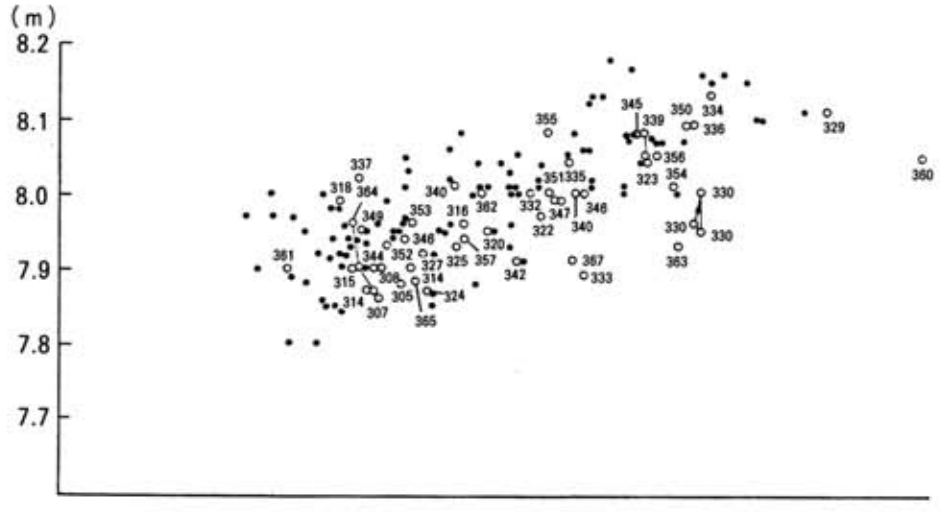
前川　威洋（1969年）「九州における縄文時代中期研究の現状」『古代文化』21-3・4

松藤　和人（1990年）『伊木力遺跡』　多良見町教育委員会　多良見町文化財調査報告書第7集

水之江和同（1988年）「曽畑式土器の出現－東アジアにおける先史時代の交流」『古代学研究』117

矢野　健一（1993年）「縄文時代中期後葉の瀬戸内地方」　宮本　一夫『江口貝塚Ⅰ』
愛媛大学法文学部考古学研究報告第2冊





○ 図化したもの
• 図化しなかったもの

Fig. 70　縄文土器出土分布図（1/70）

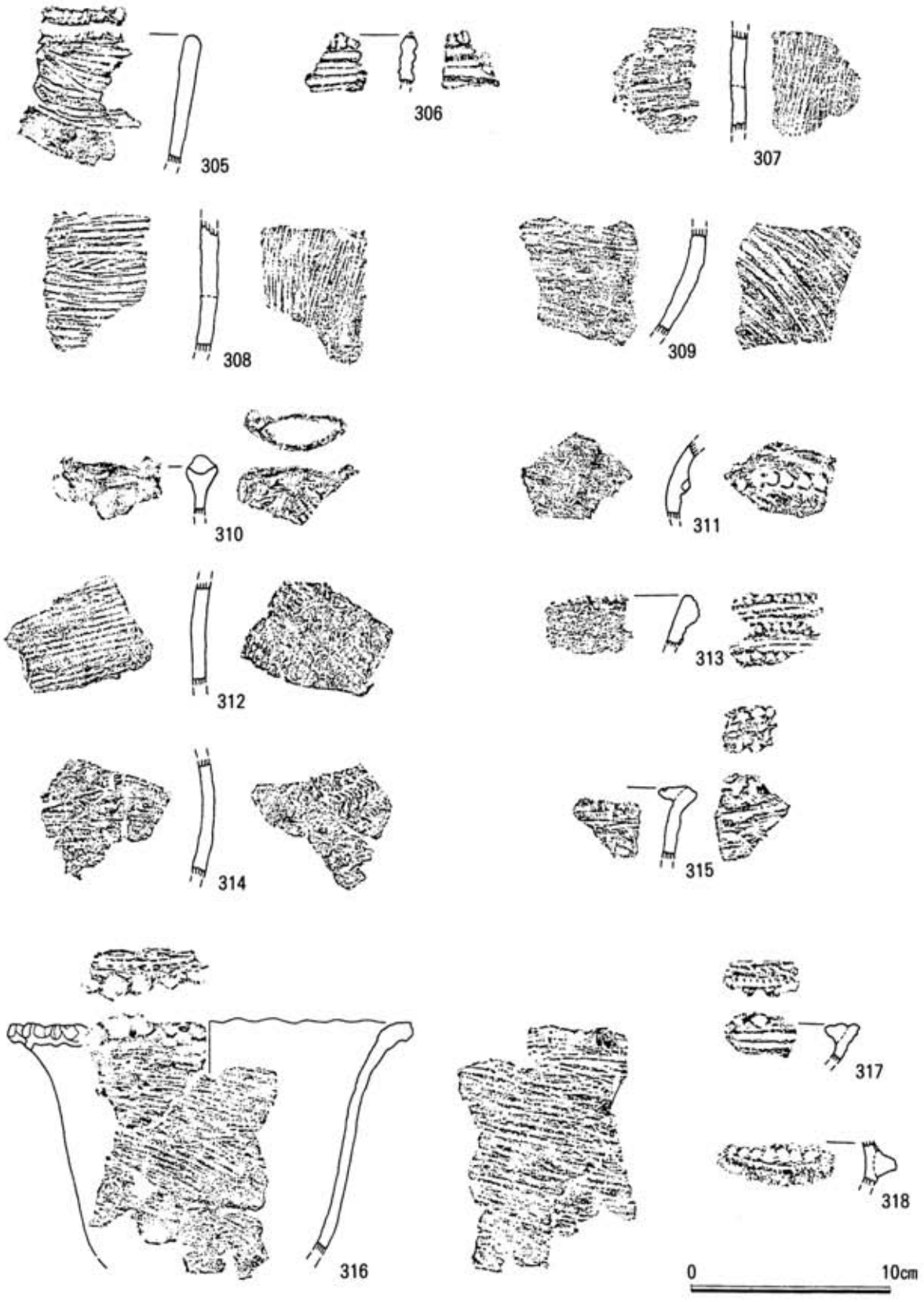


Fig. 71　第1群～第4群土器（1/3）

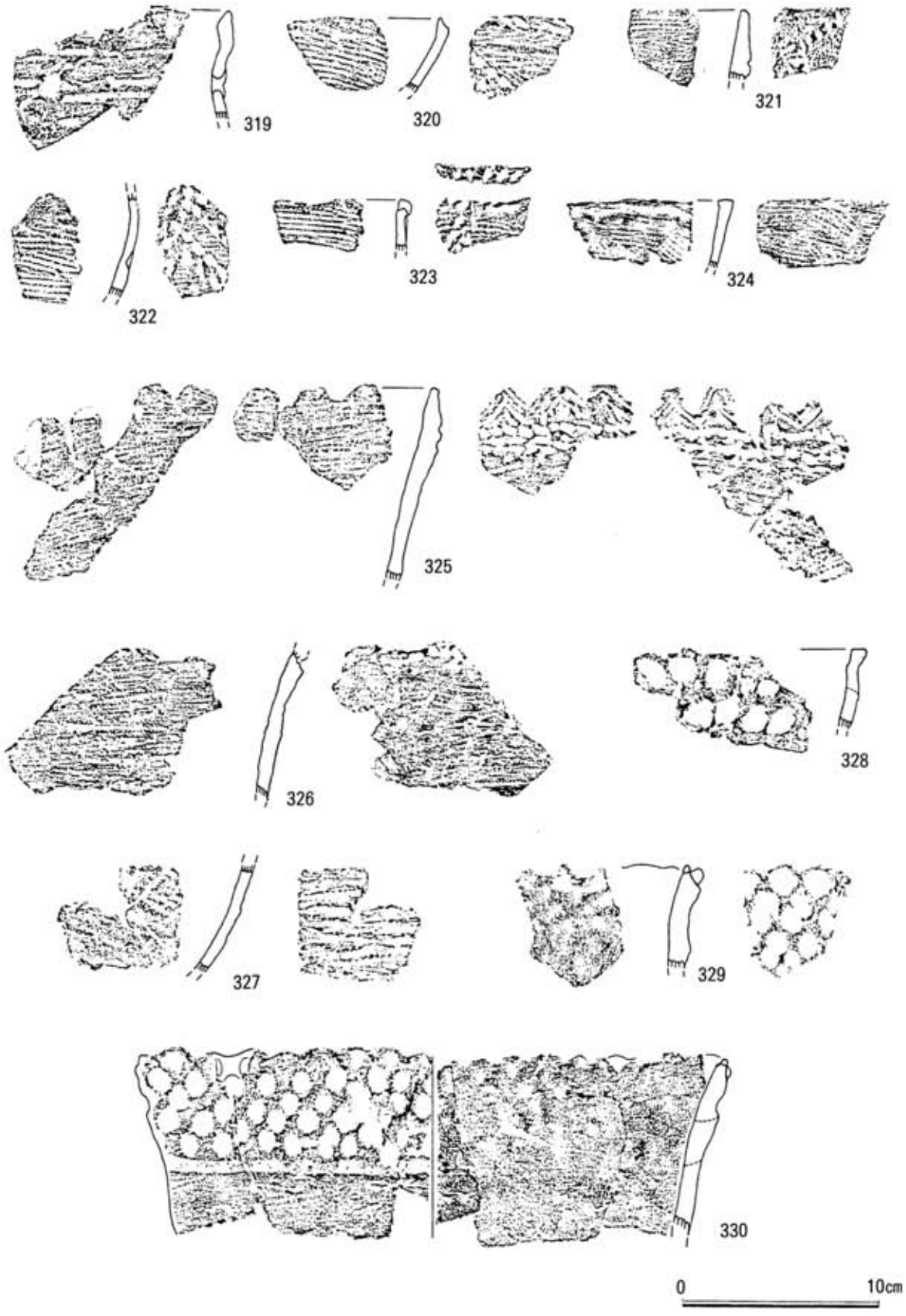


Fig. 72　第4群～第6群土器（1/3）

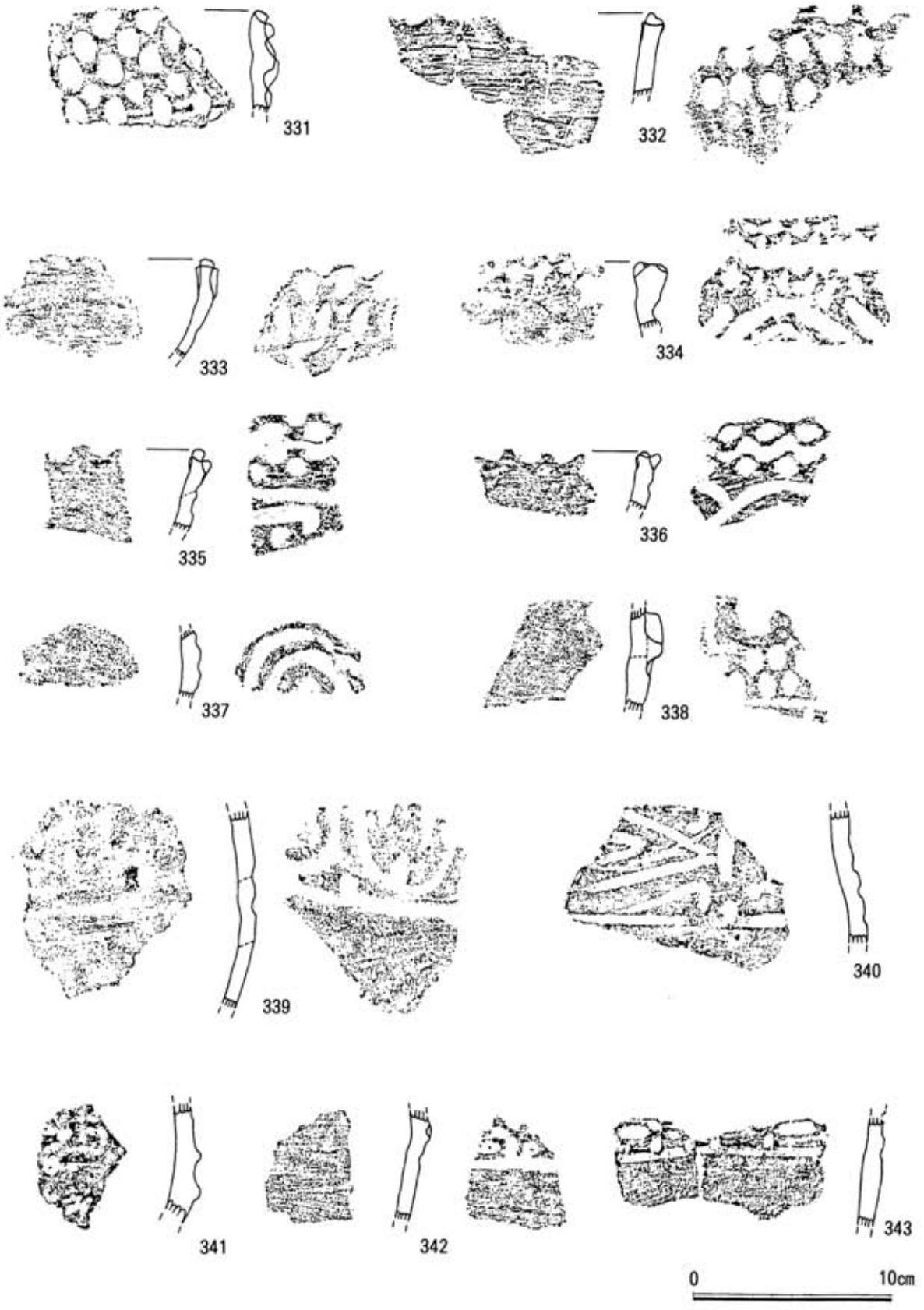


Fig. 73　第6群土器1（1/3）

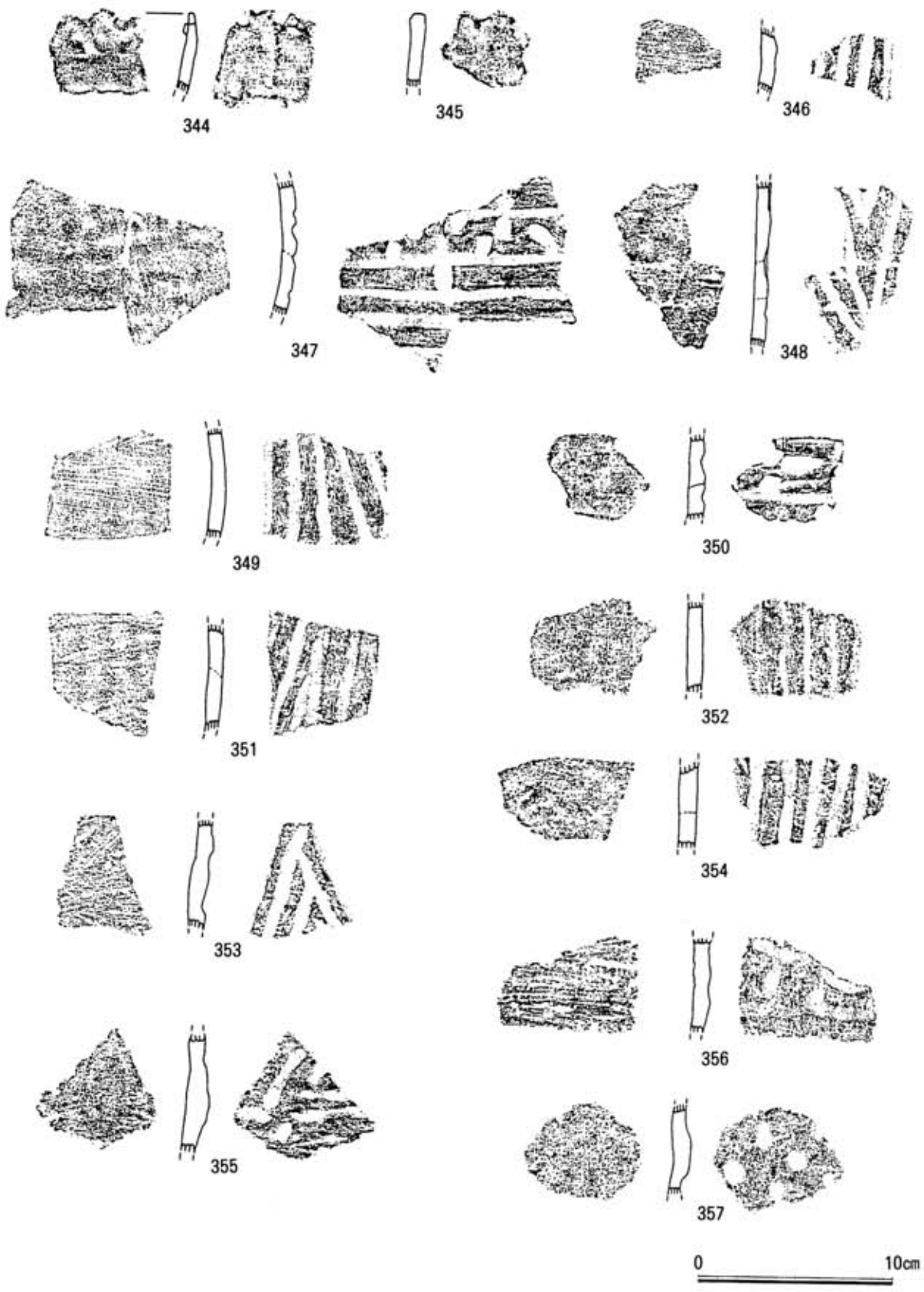


Fig. 74　第6群土器2（1/3）

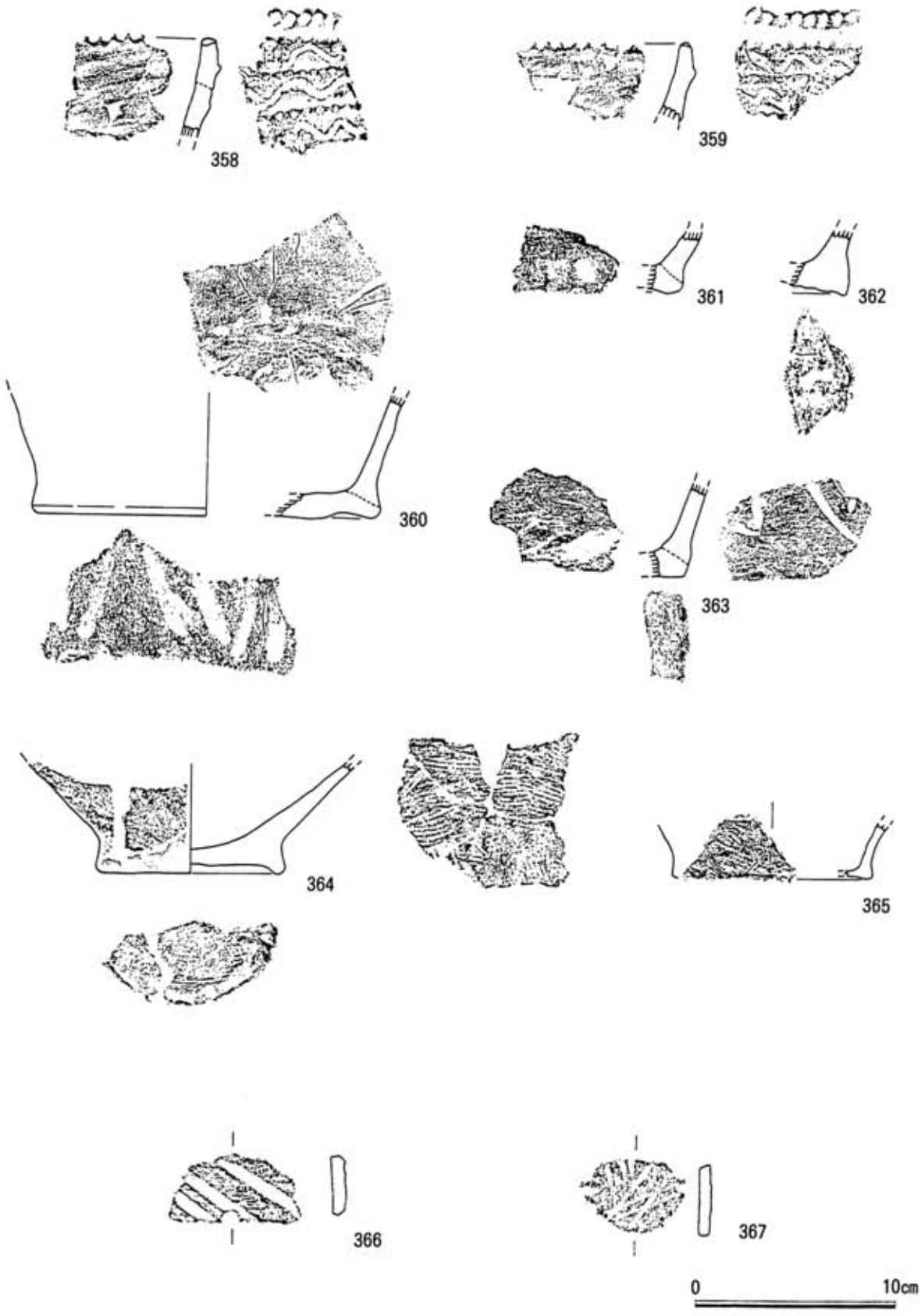


Fig. 75　第７群土器、土器底部、土製品(1/3)

Tab. 25　井ゲタ遺跡縄文土器一覧表（1）

No.	登録番号	出土地点	取り上げNo.	層位	径（cm）	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外器面	内器面			外器面	内器面	
305	000815	O-24	93			灰褐色	灰褐色	約0.5㎜～3㎜の砂粒を含む。	良好	ヨコナデ	ヨコナデ	
306	000816	O-24		8a		赤褐色	明赤褐色	約0.5㎜～2㎜の砂粒を含む。	良好	ナデ	ナデ	
307	980485	P-24	148			にぶい黄橙色	黒褐色	約0.5㎜～3㎜の砂粒を多く含む。	良好	粗い条痕	粗い条痕	
308	980484	P-24	146			褐灰色	黒褐色	約0.5㎜～3㎜の砂粒を多く含む。	良好	粗い条痕	粗い条痕	
309	980483	P-23	130			にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	約0.5㎜～1㎜の砂粒を含む。滑石無し。	良好	粗い条痕	条痕後ナデ	
310	000817	P-24		8a		明黄褐色	明黄褐色	約0.5㎜～2㎜の砂粒を含む。	良好	口縁の突帯下部から縄文	小巻貝条痕か?	
311	980470	O-23.24		8a		暗灰黄褐色	灰黄色	約0.5㎜～1㎜の砂粒を含む。	良好	縄文	ヘナタリ巻貝による調整	
312	000818	3区				灰褐色	灰黄褐色	約0.5㎜～1㎜の砂粒を含む。	良好	縄文	小巻貝による条痕	
313	980456	N-23･24		8a		橙色	褐色	約0.5㎜～1㎜の砂粒を含む。	良好	ナデ	ナデ	
314	000819	P-24	132			橙色	褐灰色	約0.5㎜～2㎜の砂粒を含む。	良好	ナデ	ナデ	
315	000820	P-24	142			黒褐色	褐色	約1㎜～3㎜の砂粒を含む。	良好	条痕	条痕	
316	000821	O-24	143		（口径）20	褐色	灰褐色	約0.5㎜～1㎜の砂粒を含む。	良好	粗い条痕	粗い条痕	
317	000822	O-23.24		8a		橙色	灰褐色	約0.5㎜～2㎜の砂粒を含む。	良好	ナデ	ナデ	
318	000823	O-25	119			にぶい褐色	にぶい褐色	約2㎜～3㎜の砂粒を多く含む。	良好	ナデ	ナデ	
319	000824	P-24	140			にぶい褐色	にぶい褐色	約2㎜～3㎜の砂粒を多く含む。	良好	ナデ	ナデ	補修痕あり
320	000825	O-24	68			褐灰色	灰黄褐色	約0.5㎜の砂粒を含む。	良好	粗い条痕	粗い条痕	
321	000826	3区				黄褐色	にぶい黄色	0.5㎜以下の砂粒を含む。	良好	ナデ	条痕	
322	000827	O-23	54			褐灰色	灰黄褐色	約1㎜の砂粒を含む。	良好	条痕	条痕	
323	000828	O-23	34			黒褐色	黒褐色	約1㎜の砂粒を含む。	良好	粗い条痕	粗い条痕	
324	000829	O-24	141			灰黄色	灰白色	約1㎜～3㎜の砂粒を含む。	良好	条痕	条痕後ナデ	
325	980469	O-23･24, Q-18, P-24	275	8a		灰褐色	明灰褐色	約0.5㎜～1㎜の砂粒を含む。滑石多。	良好	粗い条痕	粗い条痕	
326	000830	P-24		8a		灰褐色	灰褐色	約0.5㎜～1㎜の砂粒を含む。滑石多。	良好	粗い条痕	粗い条痕	
327	000831	O-24	140			灰褐色	灰褐色	約0.5㎜～1㎜の砂粒を含む。滑石多。	良好	粗い条痕	粗い条痕	
328	000832	O.P-23		8a		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	約0.5㎜～3㎜の砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ケズリ	
329	980451	M-23	6			にぶい黄褐色	灰黄褐色	約0.5㎜～2㎜の砂粒を含む。滑石少量。	良好	ナデ・指頭圧痕	ナデ	

Tab. 26　井ゲタ遺跡縄文土器一覧表（2）

No.	登録番号	出土地点	取り上げNo.	層位	径（cm）	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外器面	内器面			外器面	内器面	
330	000833	O-23	59,62,60		（口径）30	暗褐色	暗褐色	約0.5mm～1mmの砂粒を含む。滑石少量。	良好	ナデ・ケズリ	ナデ	
331	000834	O-20.21				黒褐色	黒褐色	滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
332	980477	P-23	129			にぶい褐色	にぶい黄橙色	約0.5mm～2mmの砂粒を含む。	良好	ナデ・ケズリ	ハケメ	
333	980468	O-23	72			赤褐色	暗赤褐色	約0.5mm～1mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
334	980453	N-23	41			暗赤褐色	にぶい褐色	約0.5mmの砂粒を含む。滑石多。	不良	ナデ	ナデ	
335	980460	O-23	55			にぶい赤褐色	にぶい褐色	約0.5mm～2mmの砂粒を含む。滑石多。	不良	ナデ	ナデ	
336	980454	N-23	68			にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	約0.5mm～1mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
337	980476	O-25	133			にぶい褐色	橙色	約0.5mm～2mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
338	980482	P-24	128			暗赤褐色	にぶい赤褐色	約0.5mm～1mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
339	980457	N-24	8.29			橙色	にぶい赤褐色	約0.5mm～2mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
340	000835	P-23	51			赤褐色	にぶい橙色	約0.5mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
341	000836	1区				橙色	橙色	約0.5mm～1mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
342	980471	O-24	70			褐色	にぶい褐色	約0.5mm～1mmの砂粒を含む。滑石少量。	良好	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	
343	000837	O-23		8a		赤褐色	赤褐色	約1mm～3mmの砂粒を含む。滑石少量。	良好	ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	
344	000838	P-24	152			にぶい橙色	明褐灰色	約0.5mmの砂粒を含む。滑石少量。	良好	ナデ	ナデ	
345	000839	N-24	9			にぶい褐色	明赤褐色	約1mm～3mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
346	980474	O-25	120			暗赤褐色	にぶい赤褐色	約0.5mm～1mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
347	980479	P-23	132.133			黒褐色	黒褐色・暗褐色	約0.5mm～3mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
348	980467	O-23	71			赤褐色	赤褐色・黒褐色	約0.5mm～2mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
349	980473	O-25	113			暗赤褐色	にぶい赤褐色	約0.5mm～1mmの砂粒を含む。	良好	ナデ	ハケメ	
350	980455	N-23	69			にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	約0.5mm～1mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
351	980478	P-23	131			暗褐色	黒褐色	約0.5mm～3mmの砂粒を含む。	良好	ナデ	ナデ	
352	980475	O-25	121			橙色	にぶい橙色	約0.5mm～2mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
353	980481	P-24	122			暗赤褐色	灰褐色	約0.5mm～1mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	
354	980463	O-23	64			にぶい黄褐色・赤褐色	赤褐色	約0.5mm～2mmの砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ	ナデ	

Tab. 27　井ゲタ遺跡縄文土器一覧表（3）

No.	登録番号	出土地点	取り上げNo.	層位	径（cm）	色調		胎土	焼成	調整		備考
						外器面	内器面			外器面	内器面	
355	980465	O-23	69			にぶい黄橙色	にぶい橙色	約0.5㎜～2㎜の砂粒を含む。	良好	ナデ	ハケメ	
356	980458	N-24	30			褐色	灰黄褐色	約0.5㎜～2㎜の砂粒を含む。	良好	ナデ	ナデ	
357	980472	O-24	135			灰黄色	灰黄色	約0.5㎜～2㎜の砂粒を含む。	不良	ナデ	ナデ	
358	000840	Q-18		9		にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	約0.5㎜～3㎜の砂粒を含む。	良好	ナデ	ナデ	
359	000841	Q-18		9		にぶい黄橙色	灰黄褐色	約0.5㎜～3㎜の砂粒を含む。	良好	ナデ	ナデ	
360	980452	M-23	9		（底径）17.4	にぶい黄褐色	灰黄褐色	約0.5㎜～2㎜の砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ・指頭圧痕	ナデ	
361	000842	O-25	102			赤褐色	赤褐色	約0.5㎜の砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ・指頭圧痕	ナデ	
362	000843	O-24	31			橙色	橙色	約0.5㎜～3㎜の砂粒を含む。滑石多。	良好	ナデ・指頭圧痕	ナデ	底面に鯨椎骨の痕あり。
363	980464	O-23	65			褐色	灰黄褐色	約0.5㎜～1㎜の砂粒を含む。滑石少量。	良好	ナデ	ナデ	
364	000844	P-24	112,245,111		（底径）9.4	橙色	にぶい黄褐色	約0.5㎜～1㎜の砂粒を含む。	良好	縄文・（底面）条痕	条痕	
365	000845	P-24	248		（底径）10	橙色	にぶい黄橙色	約0.5㎜～3㎜の砂粒を含む。	良好	条痕後ナデ	ナデ	
366	000846	N-23		8a		にぶい赤褐色	明赤褐色	約2㎜～3㎜の砂粒を含む。	良好	ナデ	ナデ	胴部片を再利用
367	000847	O-23	15			にぶい橙色	灰褐色	滑石多。	良好	ナデ	ナデ	胴部片を再利用

Ⅳ. 考　　察

1．弥生時代の掘立柱建物を主とする集落について

小　松　　譲

(1) はじめに

弥生時代の集落を構成する遺構として居住施設には竪穴式住居、高床式住居、平地式住居が、貯蔵施設には貯蔵穴、高床式倉庫がありこの他に井戸や柵列、用途不明の土坑などがある。この集落構成要素の中でも居住施設と貯蔵施設の変化や遺構の組み合わせの変化は弥生社会の発達や変遷を考える上での有効な方法となり、この遺構要素の組み合わせで集落類型が決定される。

例えば貯蔵施設を主とした集落類型としては北部九州で前期末頃にみられる袋状竪穴の多数群集があり、その代表的遺跡として福岡県行橋市下稗田遺跡や小郡市津古内畑遺跡などがある。稲作の開始により余剰生産物の管理が一層明確化することによって貯蔵施設の役割が重要になっていく。前述の袋状竪穴の多数群集は生産物の共同管理であり、この他の類型として単位集団ごとの個別管理などもある。また、貯蔵施設の変化として貯蔵穴から高床式倉庫への変遷が中期段階にみられることもすでにいわれており、後期には吉野ヶ里遺跡でみられるような高床式倉庫群が顕著にみられるようになる。

集落研究は近藤義郎（1959）の単位集団の抽出によりその分析方法が確立された。弥生社会に①５棟前後の住居からなる経営・消費を共同にする「一つの経営体＝単位集団」から②水利を軸とした共同体的上部機構として常に各作業単位（経営単位）に一定の規制を加える「より大きな生産集団＝集落」③水系や地形環境に規制され各生産単位を相互に結合する「地域的統一集団＝農業共同体」の３段階のまとまりを見い出した。

高倉洋彰（1975）も弥生社会の集落単位として①家族集団、②地域集団、③地域的統一集団を考え各時期における集団組成の変遷を論じた。

居住施設である竪穴式住居、高床式住居、平地式住居などの遺構分析はこれら単位集団の抽出に欠くことのできないものであり集落研究において重要な役割をもつ。この居住施設のうち竪穴式住居は発掘調査でも比較的容易に確認できるが、高床式住居、平地式住居、高床式住居は掘立柱建物として認識するためその機能まで論じることが困難である。従って掘立柱建物を含む弥生集落や掘立柱建物のみの集落の場合、単位集団の抽出、居住施設と貯蔵施設の関連等集落論を論じることが困難になる。ところが近年の発掘調査によって、掘立柱建物や大型掘立柱建物を含む弥生集落例が増加してきているのが現状である。

ところで後述するとおり、佐賀県は全国の中でも弥生時代の掘立柱建物の検出が多い県である。建物構成を地域的にみると、北海道、東北、関東で竪穴住居のみの集落が多いのに対して 中国、四国地方では竪穴住居と掘立柱建物が混在する集落が多い。また、わずかではあるものの掘立柱建物単一の集落遺跡が中部、中国、四国、九州地方でみられる。単一の集落遺跡は九州地方に最もその例が多く約半数をしめる。その中でも佐賀県は掘立柱建物単一集落遺跡の多い県である（建設省九州地方建設局国営吉野ケ里歴史公園事務所1996）。

佐賀県の掘立柱建物単一集落は全国的視野にたってもその典型例にあたるのであり、掘立柱建物が弥生時代中期以降全国的に普及していく中で佐賀県はその中核的地域となっている。ところで、本報告書掲載の井ゲタ遺跡の調査では32棟もの掘立柱建物跡が検出され、弥生時代中期の掘立柱建物群のみからなる集落であることが判明した。これは全国的な視野にたっても一般的集落とは様相を異にしている。そこで小論では全国でも掘立柱建物単一集落の最も多い佐賀県内を対象地域とし、その出現時期、分布、規模の比率などの分析を通して集落類型を設定し、性格や意義を考えていく。

(2) 掘立柱建物跡研究史

弥生集落の掘立柱建物跡の研究はこれまでさほどさかんといえる状況ではなかった。その中、掘立柱建物跡に関する研究会として1978年の第4回埋蔵文化財研究集会があり「竪穴住居から掘立柱建物移行期における諸問題」をテーマとして討論された。この段階で弥生時代の掘立柱建物が知られていなかったわけではなかったものの弥生遺跡の調査例は高床式倉庫と考えられるものばかりで、住居としての掘立柱建物の存在は念頭にない状態であった。弥生の掘立柱建物を主眼においたのは1991年の第29回埋蔵文化財研究集会の「弥生時代の掘立柱建物」であり、これにより全国の弥生時代の掘立柱建物跡の集成ができあがり研究の基礎資料となっている。

ところで掘立柱建物研究の方向性として①建物群を対象として弥生集落論の中で論じるものや②出土建築部材、絵画土器、銅鐸絵画、家形埴輪、家屋文鏡などの資料を対象として古代建築学的手法で掘立柱建物の構造を論じたり、遺跡にて検出した柱穴内の基礎構造の研究などもある。さらには③民族事例の調査から掘立柱建物集落の空間構成や社会組織、生活習慣、居住形態、建物構造などを研究対象にするものもみられる。(註1)

県内の掘立柱建物に関する研究として基礎構造を対象としたものがある。木島(1994)は佐賀平野検出の掘立柱建物の基礎構造を立柱技法という観点からⅠ類～Ⅲ類に分類した。また、山本(1993)も掘立柱建物の立柱技法の報告を行っており、低地の発掘調査にて検出された掘立柱建物の基礎構造には関心がよせられている。

古代建築学的方法には宮本長二郎氏の一連の研究がある。それによると高床式建物は稲作にともなって日本に移入されたものとされ、初期稲作時代には谷あいの水源地や河川流域の後背湿地などの水田可耕地に接して高床式住居の集落が営まれ、やがて竪穴式住居や掘立柱建物の住居とともに併存して倉として全国的に普及する。1979年段階の最古の掘立柱建物として弥生時代前期前葉の岡山市津島遺跡の例をあげ、中期の高床・掘立柱建物の集落例として岡山市百間川遺跡をあげている。これらの集落立地はいずれも沖積微高地であることもこの段階で着目している(宮本1979)。

掘立柱建物は縄文時代の東日本にすでに存在しており、前期の例として長野県阿久遺跡の4間×4間の掘立柱建物があり、後期には神奈川県池辺・荏田遺跡群、新潟県長岡市岩野原遺跡の建物跡がある。このように東日本では稲作移入以前に掘立柱建物があり、安志敏の提示する高床式建物縄文時代伝播説ともかかわっている。弥生時代の住居形式には竪穴住居、掘立柱建物、高床式建物の3種類があるが、弥生時代の掘立柱建物は東日本の縄文文化のそれとは全く別系統の形式をもち、高床式建物とともに弥生時代以降の住宅建築のひとつになる(宮本1986)。さらに宮本は弥生・古墳時代の高床建築を梁間1間型と総柱型の2種類に分け、構造的に前者は3形式6類型に、後者は4形式に分類した。(宮本1991)

木下(1985)は絵画土器や銅鐸絵画と漢代の陶製明器を中心に弥生時代と古代中国の高床倉庫の構造や特徴を検討し高床倉庫の系譜を考えようとしている。

武末(1991)は掘立柱建物を①梁間1間型と②梁間2間以上型に分けそれぞれを平地建物と高床建物に分類した。梁間1間型の多くは高床建物であり、1間×2間が多くその大部分は高床式倉庫とした。

板付遺跡でみられるような貯蔵穴を集落全体で管理するような形態は、貯蔵施設が中期になって高床式倉庫になっても拠点集落では福岡県甘木市下原遺跡のように同様の管理形態がつづいている。吉野ヶ里遺跡の高床式倉庫群も同様でこのような集落形態を全体型と呼称している。これに対して単位集団毎に平地建物と高床建物をもつものを単位集団型と呼称している。このような集落形態に変化がおきるのは円形環溝の中に特定集団のための方形環溝が出現して以降であり、集落の一角に有力集団のための高床式倉庫や平地建物が集中してつくられるとした。

以上、弥生集落の中の掘立柱建物に関する研究を概略した。弥生時代の掘立柱建物は縄文時代のそれとは別系譜であり、稲作にともなって高床式建物は日本に移入されるが、その集落立地は初期の段階で沖積微高地である。また、貯蔵施設は中期に貯蔵穴から高床式倉庫へと変化するがその管理形態は類似する。また、円形環濠の中に特定集団のための方形環濠が出現する後期後半には高床式倉庫や掘立柱建物などが集中してつくられ、竪穴住居などを主とする一般集落とは階層差が認められるなどの変遷がこれまでの研究で論じられてきた。

(3) 掘立柱建物の普及と時期別規模比率

全国の掘立柱建物の集成が1991年の第29回埋蔵文化財研究集会でできあがり、さらにそれを基礎にした弥生時代掘立柱建物地名表が1995年刊行の『吉武遺跡群』の中に掲載されている。1991年の資料集では対象時期を縄文時代前期～弥生時代とし九州は沖縄県から東北は山形県まで各都府県別、遺跡毎に集成を行っている。地域別の遺跡数は九州91、四国25、中国40、山陰34、近畿58、東海100、中部20、北陸20、関東42、東北１の合計431遺跡である。遺跡の多い都府県は１位静岡県45遺跡、２位佐賀県37遺跡、３位滋賀県36遺跡であり、佐賀県は掘立柱建物の多い地域であることはこの集成からもわかる。

1995年の地名表は横山邦継編「吉武遺跡群Ⅶ」福岡市教育委員会に掲載されているもので沖縄県から

Tab. 28　時期別掘立柱建物棟数表

前　期	67
中　期	189
後　期	561

Tab. 29　時期別掘立柱建物規模形式棟数表

	1×1	1×2	1×3	1×4	1×5	1×7	2×2	2×3	2×4	2×5	
前期	8	8	5	2	0	0	1	3	1	0	
中期	38	54	21	19	3	1	6	4	1	0	
後期	159	166	71	25	5	0	22	16	6	3	
	2×6	2×7	3×3	3×4	3×5	3×6	4×5	4×6	5×5	5×8	計
前期	0	0	0	5	3	2	0	1	0	0	39
中期	1	0	3	3	2	0	4	0	0	2	162
後期	2	1	2	4	0	0	0	1	2	0	485

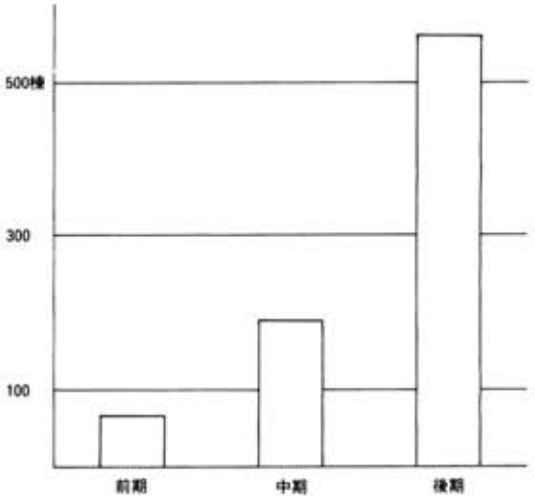


Fig. 76　時期別掘立柱建物棟数図

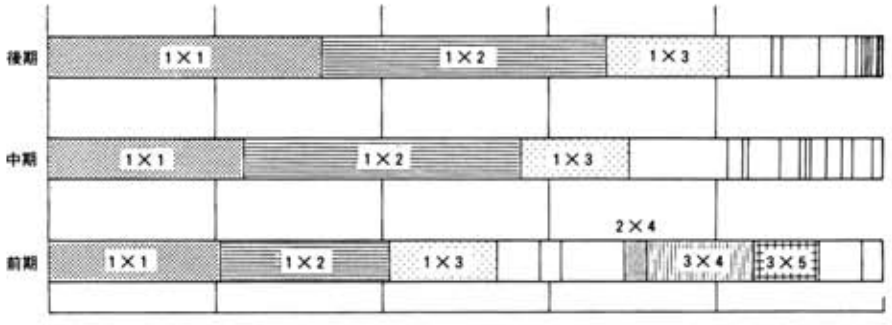


Fig. 77　時期別掘立柱建物規模比率

滋賀県までを対象地域とし弥生時代の掘立柱建物について遺構ごとに建物規模と時期までその項目にいれてある。遺跡数は269遺跡で掘立柱建物944棟を地名表に掲載している。この地名表をもとに掘立柱建物の時期別比率を示したのがFig76で、さらに時期別掘立柱建物形式比率を示したのがFig77である。

時期別比率では弥生時代を前期、中期、後期の三時期にわけ時期別の掘立柱建物の増加比率をみようとしたものである。時期の明確な掘立柱建物は817棟で、前期67棟・中期189棟・後期561棟である。前期から中期にかけて約2.8倍、中期から後期にかけて約2.9倍と増加していることが判る。数量的には中期から後期にかけての伸びが極端であり、このことは中期段階で貯蔵施設が穴倉から高床式建物に変化するという見解を検証した結果といえる。

次ぎに掘立柱建物の規模をもとにした形式の時期別比率であるが、その対象となる掘立柱建物数は686棟である。規模をもとにした形式には梁行1間×桁行1間から梁行5間×桁行8間までの20類がある。前期段階では1×1，1×2，1×3などの梁間1間型は全体の約54%で、中期、後期と時期が下るにつれ梁間1間型の比率は高くなってくる。後期ではその占める割合は約80%にもなる。また、前期では梁行3間×桁行4間、梁行3間×桁行5間などの比率が中期、後期に比べ高い。このように建物形式の時期ごとの変遷もこの比率から概観することは可能である。前期に3×4，3×5の比率が高いのは縄文時代の掘立柱建物の系譜の残存と考えてもよいだろう。梁間1間の掘立柱建物の比率が圧倒的に多く、また時期をへて増加していくことがこの表からわかり、これは宮本、武末氏の形式分類である梁間1間型の設定が有効であることを物語っている。宮本（1995）は梁間1間型や梁行2間～5間の総柱型は高床建物と考えており、武末（1991）も梁間1間型の多くは高床建物でさらにその大部分が高床倉庫であるとの考えを示している。

弥生時代の掘立柱建物を全国的視野でみるために、既存の集成や地名表をもとに若干の分析を行った。その結果、佐賀県は掘立柱建物の多い地域であり、建物の棟数的には中期から後期にかけて極端な増加を示している。また、梁間1間型の占める割合も時期毎に増えていき、前期から後期をとおして梁間1間型は50%以上を占めている。これは貯蔵施設としての高床倉庫の普及と連動していると考えられよう。また、形式の比率でいえば、前期では梁行3間×桁行4間、梁行3間×桁行5間などの比率が高いなど前期と中・後期では形式比率の違いがみられることなどが判った。

(4) 掘立柱建物群を主とする集落事例

佐賀県は全国的にみても掘立柱建物の多い地域であり、掘立柱建物単一集落遺跡の最も多い県であることは前述してきた。本報告の井ゲタ遺跡・堂の前遺跡は掘立柱建物からなる集落であり、その性格や意義を知るためにも県内の同様の弥生集落についてみていきたい。特に近年の調査により掘立柱建物単一の集落が発見されており、これらの事例を紹介していく。

① 石木中高遺跡（永田1996）

遺跡は佐賀平野西部を南流する祇園川と晴気川によって形成された緩やかな扇状地の扇端部が沖積平野にもぐり込む付近の標高4～5mの水田部に立地する。縄文時代晩期の集落であり調査区内を蛇行する幅約7mの河川跡から縄文時代晩期の遺物包含層が確認された。

集落を構成する遺構としては掘立柱建物1棟、土坑11基、柱穴10がある。掘立柱建物は河川跡の西方2mにあり、棟持ち柱を有する1間×2間で床面積は8.88㎡である。著しい削平を受け遺存状態が悪く遺物が出土しておらず時期は特定できないものの、遺跡内における出土遺物の時期幅から考えて縄文時代晩期として差し支えないだろう。この他に柱根をもつ柱穴が10基ほど確認されており建物の存

在が考えられる。

本遺跡出土の土器群は突帯文様式最古段階にあたり、壺や石包丁も出土しており佐賀平野の初期農耕集落といえる。

② 川寄吉原遺跡（天本1981）

遺跡は城原川が形成した扇状地の扇央部にあたり、標高8ｍを測る。遺跡の広がりは東西80ｍ、南北50mの約4000㎡である。調査は幅8ｍの水路掘削に伴うもので、遺跡の全容は不明である。弥生時代後期の掘立柱建物を主とする集落跡で掘立柱建物跡19棟、井戸跡8基、円形周溝1、溝跡3条を検出した。掘立柱建物跡の規模は1間×1間が15棟、1間×2間が3棟で2間×3間が1棟である。この2間×3間の建物は1間×2間の並び倉という指摘もある。建物の方向は一定せず、統一性は見られないが桁行方向をほぼ南北に向ける建物が16棟、東西に向ける建物が3棟である。建物配置は1間×1間の建物が調査区の両端に多く、2間×3間、1間×2間の建物は中央に位置しており、1間×1間と1間×2間のそれぞれの建物群の分布域が異なる。

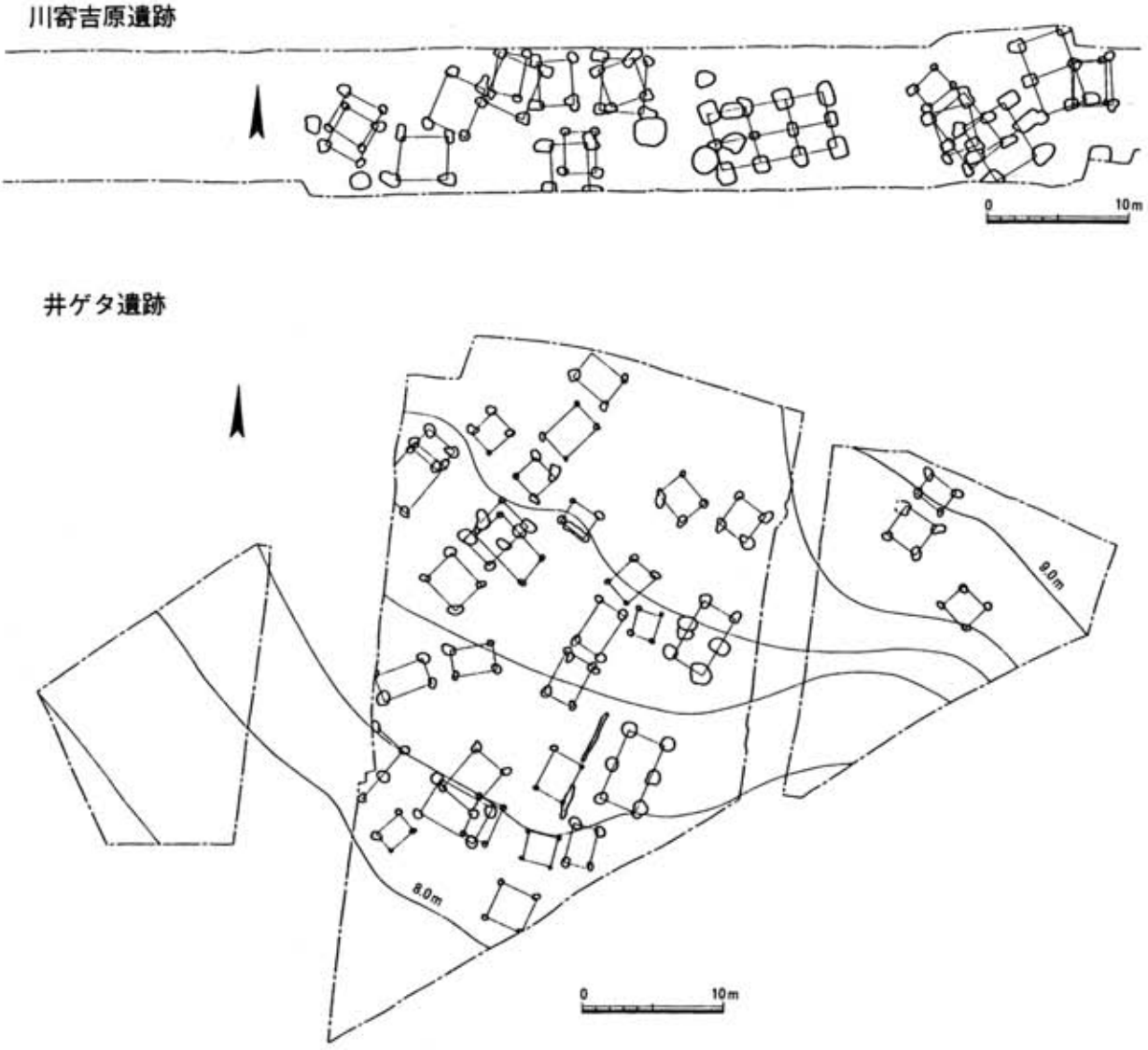


Fig. 78　川寄吉原・井ゲタ遺跡遺構配置図（1/500）　掘立柱建物と井戸のみ図示

柱穴の約7割には柱根や横木が残存している。柱根は丸太のままのもの、面取りされたものがあり、下面にくり込みをつくり横木を渡し支えるものもある。特筆される遺物としてP86から武人像の線刻をもつ鐸型土製品が出土している。

③ 井ゲタ・堂の前遺跡

遺跡は鏡山南麓裾部の八手状にのびる丘陵の先端部にあたり、標高8～13ｍの南西向きの緩斜面である。南方には宇木川・半田川が形成した低地がひろがる。井ゲタ・堂の前遺跡では弥生時代中期の集落と墓地、縄文時代および古墳時代中期の遺物包含層を確認した。

弥生時代中期の集落には掘立柱建物34棟、竪穴住居1軒があり、墳墓として甕棺18基、土壙墓1基がある。掘立柱建物には1間×1間、1間×2間が32棟あり、これらは遺跡内でもより低い位置につくられる。掘立柱建物規模の内訳は1間×1間が26棟、1間×2間が6棟であり、このうちの1間×2間の2棟のみに横木や礎石を置くなど基礎構造が他とは異なる建物があった。

また、集落内でこれらの掘立柱建物群と分布を異にした平面円形の掘立柱建物2棟があるがこれの性格は不明である。甕棺墓群は最大でも9基ほどが群集する程度で中には1基のみ離れて存在するものもある。掘立柱建物群と時期をほぼ同じにし、このうちの1基から玉類45点が出土している。

④ 牟田寄遺跡15区（西田1998）

遺跡は標高3ｍ前後の沖積低地に立地する。平成元年度から発掘調査がなされ弥生時代後期から中世の集落跡が確認されている。15区では弥生時代後期から中世前期におよぶ遺構群を検出した。なかでも弥生時代後期から古墳時代前期の集落が主体を占め、掘立柱建物29棟、井戸33基、土坑17基、周溝状遺構1基、埋納遺構1基を確認した。掘立柱建物の規模は1間×1間が17棟、1間×2間が12棟で、ほとんどの柱穴には沈下防止のための樹皮敷きと横木が置かれていた。SB15160掘立柱建物の柱穴埋土中からは鏡背面に赤色顔料を塗布した小形倣製鏡が出土している。

報告者は当該期であるⅠ期をⅠａ期、Ⅰｂ期、Ⅰｃ期の3時期に分け集落変遷を論じている。Ⅰａ期の建物は2群に分かれ、土坑が多く井戸が少ない。Ⅰｂ、Ⅰｃ期は調査区全体に掘立柱建物が存在し、グループの抽出はできない。Ⅰｂ期になると掘立柱建物と井戸が急増し、集落形成の安定と拡大が推測される。Ⅰｃ期には1間×2間の大型の建物や1間×1間ではこれまでより柱穴掘方の小さい規格の画一化された建物が出現する。調査区の西側には3時期を通して建て替えられた1間×2間の建物がある。報告者はこの掘立柱建物は低湿地という立地のための居住施設と考えている。

⑤ 天建寺南島遺跡（天本1989）

遺跡の立地は筑後川右岸で標高4ｍの自然堤防上で遺構検出面は標高3ｍを測る。弥生時代中期～鎌倉時代の集落で、全体の7割程度が弥生時代の遺構で占められる。弥生時代の遺構としては掘立柱建物跡10棟、井戸跡4基、土壙31基がある。掘立柱建物跡は1間×2間4棟、1間×1間6棟で床面積は1間×1間が3～12㎡、1間×2間が11～14㎡で目だった階層差はみられない。掘立柱建物は調査区中央と北側の2つの群に分かれる。土壙の形態には長方形、隅丸長方形、楕円形があり多量の土器が出土しておりある程度の深さがあるものは貯蔵穴の可能性がある。ちなみに1ｍ以上の深さがある土坑は4基である。これらの遺構の時期は中期中頃を盛期とし後期初頭で終わる。遺構の時期別内訳は中期の遺構として掘立柱建物7棟、井戸3基と土坑30基、後期の掘立柱建物3棟、井戸1基、土坑1基である。

⑥ 吉野ヶ里遺跡Ⅴ（註２）

吉野ヶ里遺跡は脊振山麓から南方に細長く延びる洪積段丘上に立地する弥生時代の拠点的集落である。遺跡内は吉野ヶ里地区、田手二本黒木地区、志波屋三の坪地区、志波屋四の坪地区など複数の地区に分かれるが、この掘立柱建物群が確認されたのは弥生時代後期の突出部をもつ環濠集落や物見櫓などもある吉野ヶ里地区Ⅴ区にあたる。環壕集落は段丘頂部に立地するのに対して、掘立柱建物群は段丘の西斜面側で段丘裾部にあたり掘立柱建物群集中部の標高は14ｍ～15ｍである。これらの掘立柱建物群が外環濠の外側にあることは従来から話題を呼んでいた。その後の調査で外環濠のさらにそとに濠があることがわかり、平成11年度の調査でさらに掘立柱建物や竪穴住居が広がっていることが判

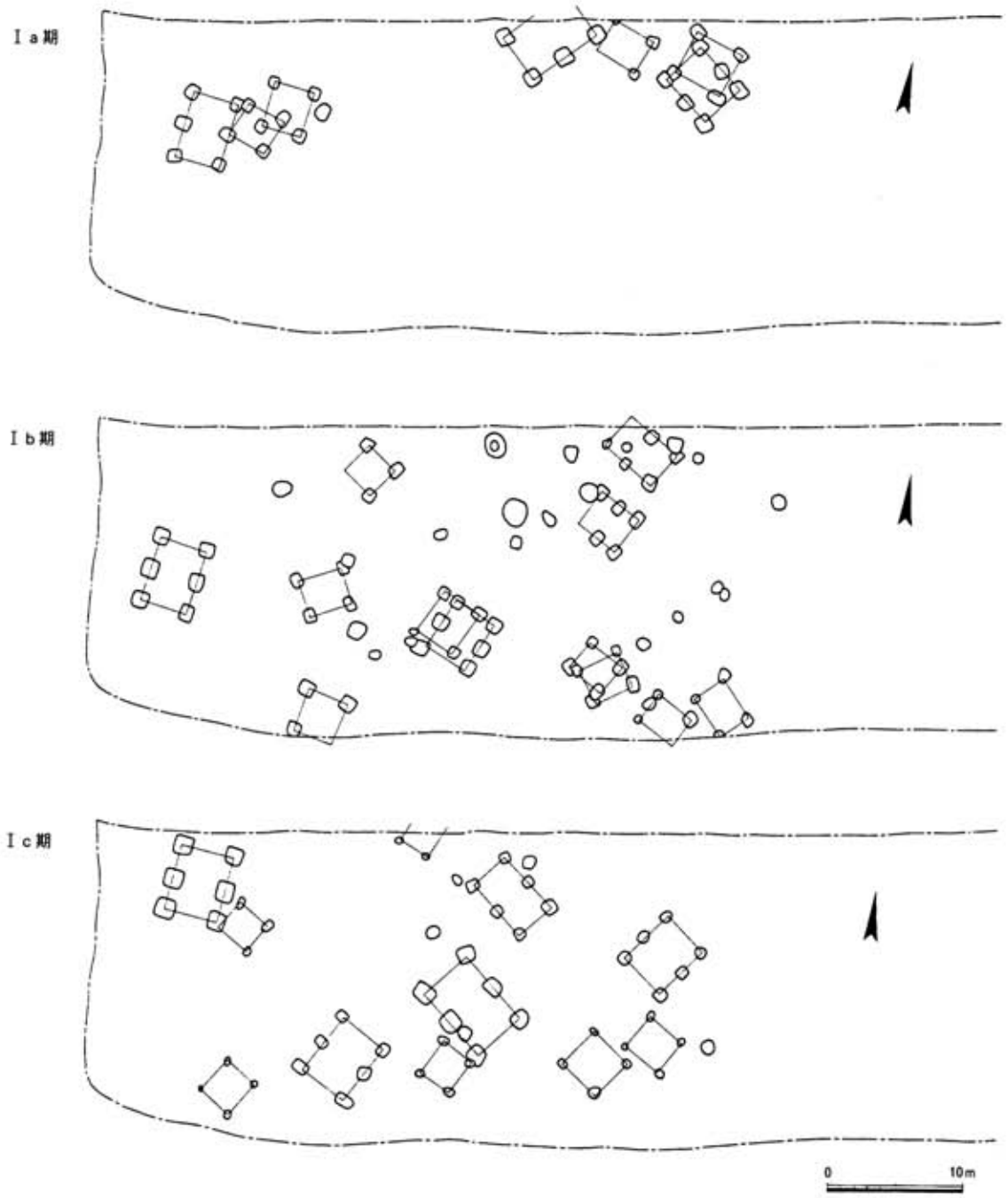
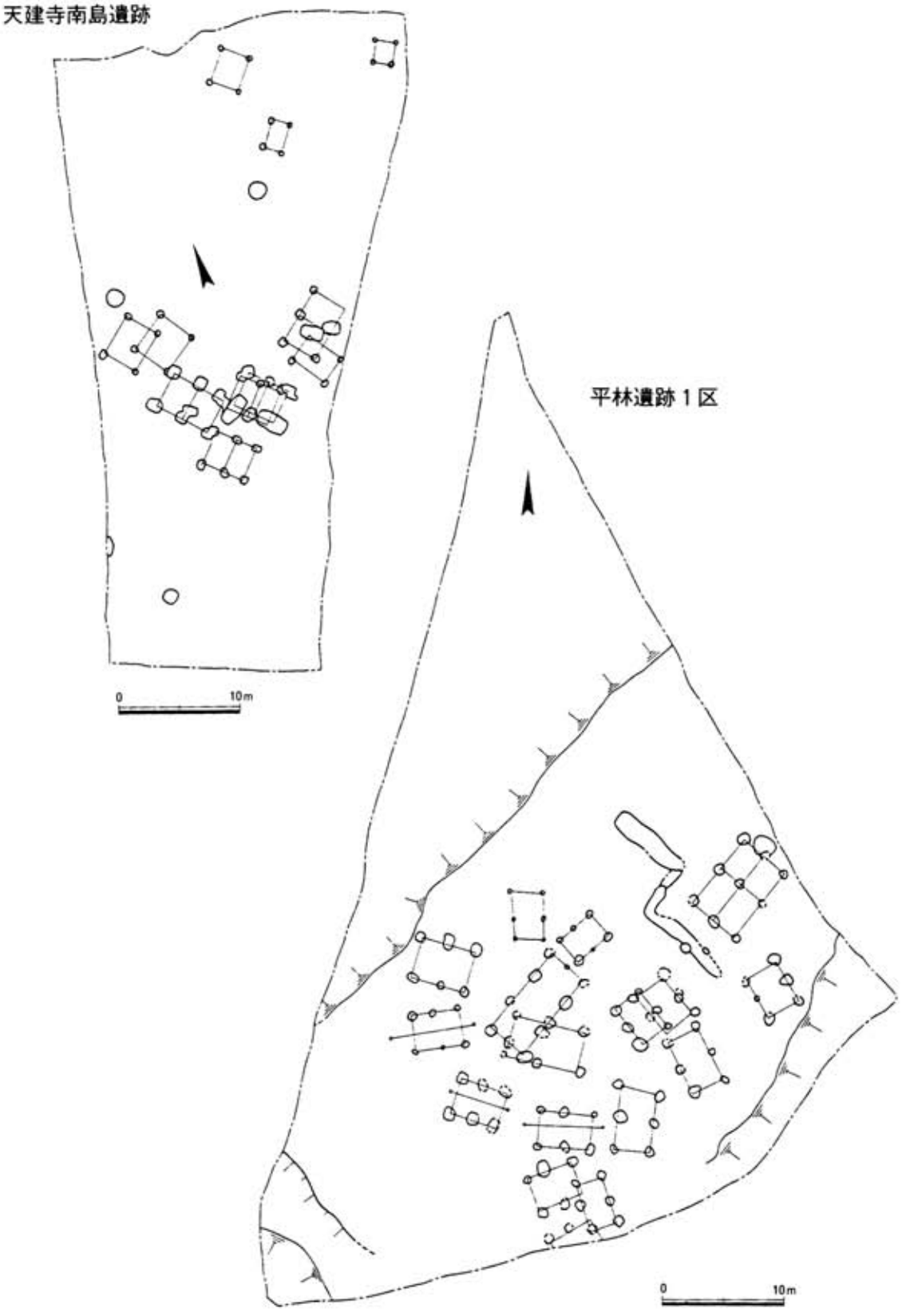


Fig. 79　牟田寄遺跡15区遺構配置図（1/500）　　掘立柱建物と井戸のみ図示

掘立柱建物と井戸のみ図示

Fig. 80　吉野ヶ里遺跡遺構配置図（1/800）



掘立柱建物と井戸のみ図示

Fig. 81　天建寺南島・平林遺跡１区遺構配置図（1/500）

明した。

掘立柱建物群は外環壕とさらにその外側である西側にまわる壕によって囲まれた約5ヘクタールの区画内につくられる。これまでの調査では弥生時代後期の掘立柱建物51棟を確認しているが、未調査地も加えると約100棟の掘立柱建物と40軒の竪穴住居があったと予想される。

掘立柱建物群は①外環壕とその西の20ｍの間隔をもって存在する溝跡の間、②北部、③中部、④南部の4ヶ所に分かれる。特に外環壕と溝跡の間の掘立柱建物は大型のものが多く、外環壕と棟方向を揃える。北部と中部の掘立柱建物群の間と中部と南部の掘立柱建物群の間には広い空間が存在し、後者には竪穴住居21軒が存在している。竪穴住居群は2つの群に分かれる。掘立柱建物群は柱穴同士の切り合いが多くみられ、数時期の建物群が想定できる。

⑦　平林遺跡1区（岡毅・武谷1999）

遺跡の立地は標高5～5.5ｍの丘陵の先端部で遺構検出面は洪積段丘面で標高4.2～4.5ｍである。筑後川の旧本流と考えられる古川の右岸で古墳時代以降は河川の氾濫などの影響をうける。弥生時代中期～後期と中世を主体とする集落で弥生時代の遺構は中期中頃半～後期前半を中心に溝13条、掘立柱建物跡18軒、井戸1基、土壙12基、周溝状遺構3条を検出している。

掘立柱建物は18棟中1間×2間が15棟で大半を占める。このうち3棟が棟持柱をもつ。集落の中心に主軸をそろえるのが2間×2間1棟（床面積32.2㎡）と2間×3間1棟（29.2㎡）である。掘立柱建物は3棟の切り合いが2群で認められ2～3時期が想定でき1時期6棟～9棟の建物が存在したことが推定される。また、区画状の溝もあるが掘立柱建物との関係は不明瞭である。土壙には平面長方形で規模が約2ｍ×約1ｍのものが4基あり貯蔵穴の可能性がある。調査担当者は掘立柱建物を居住

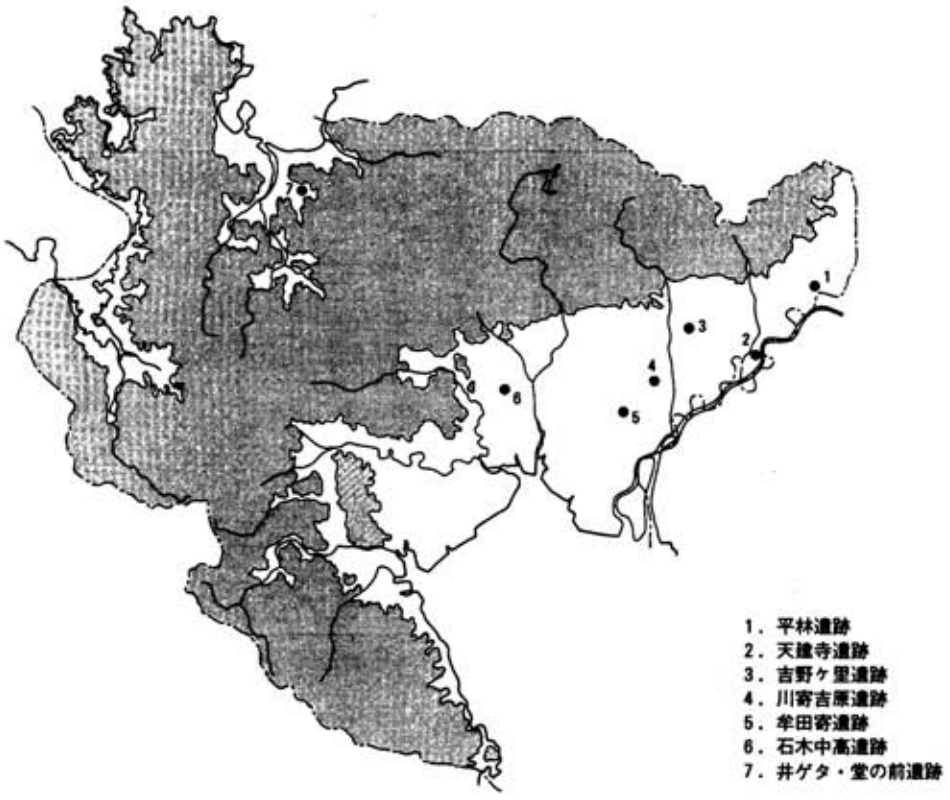


Fig. 82　掘立柱建物単一集落分布図

Tab. 30　集落構成遺構一覧表

遺跡名	竪穴掘立	掘立柱建物跡					貯蔵穴	井戸	立地	標高	時期
		1×1	1×2	2×2	その他	計					
石木中高			1			1		0	沖積地	4 m	縄文晩期？
井ゲタ・堂の前	1	26	6			32		0	扇状地端部	8～9 m	中期前半
天建寺南島	0	6	4			10	4？	4	自然堤防上	4 m	中期前半～後期初
平林1区	0	0	15	1	1(2×3)	18	0	1	丘陵先端	5.5m	中期後半～後期前
詫田西分	0	0	1			1		1	沖積平野・微高地	3～4 m	中期中葉
黒井1区	0	0	1			1	30？	4	沖積平野・微高地	3～4 m	中期中葉
小野原	0	4				4	0	1？	沖積地	6～7 m	中期中葉
みやこ	0	3				3	9？	0	沖積地	7～8 m	中期前半～中葉
湯崎東	0	0	3			3		0	沖積地	3～4 m	後期
川寄吉原	0	15	3		1	19		8	扇状地	8 m	後期前半
吉野ヶ里V	21	24	26		1(1×3)	51		0	段丘斜面	14m	後期
牟田寄15	0	17	12			29		66	沖積地	3 m	後期後半～古墳前期
村徳永F	1	21	9	1	6	37		9	埋没段丘上	5～7 m	後期前半
計	23	116	81	2	10	209	43	94		5.8m	

の建物と考えている。掘立柱建物単一の集落の中で1間×2間の比率が極端に高くそのうち3棟に棟持ち柱をもつという特色をもつ。さらに建物規模も床面積約30㎡の2間×3間や2間×2間の建物があることなどの特徴をもつ。

(5) 分　析

①　掘立柱建物集落の立地・出現時期

Tab. 30は前項で紹介した集落を含めて佐賀県内の掘立柱建物を主とする集落を構成する遺構の一覧表である。これらの調査例のうち半数は圃場整備の水路掘削に伴う調査であるため集落の全容はわからない。また、詫田西分遺跡、黒井遺跡1区、小野原遺跡、みやこ遺跡、湯崎東遺跡では竪穴住居がなく、掘立柱建物が1棟～4棟確認されているため同例として取り上げた。

掘立柱建物単一からなる集落で共通することはその立地がすべて低地であることである。地形的には沖積地、自然堤防上、扇状地などがあるが、そのほとんどが標高10ｍ以下であり、吉野ヶ里遺跡のみが標高14ｍを測る。平均標高は5.8ｍである。このことは岡山市津島遺跡や百間川遺跡の立地も同様の沖積低地であり、集落立地のあり方と関係する。低地に集落が出現するということは稲作に伴う低地の開発を意味するものであろう。

次にその出現時期をみていく。佐賀県内の最古の掘立柱建物は縄文時代晩期後半の石木中高遺跡SB16であろう。これは1間×2間で梁行2.4ｍ、桁行3.7ｍ、床面積8.88ｍを測り棟持柱をもつ。同集落内での建物はこの1棟のみであるがこの他にも柱穴が検出されている。県内の弥生時代前期集落の調査が少ないこともあって晩期後半から前期の掘立柱建物をもつ集落の実態はつかめていないのが現状である。

掘立柱建物が群集する集落の初現時期は県内においては中期前半である。井ゲタ遺跡や天建寺南島遺跡がそれにあたる。以降、集落内において序々に掘立柱建物が採用されていくのであろう。このことは貯蔵施設が穴倉から高床式倉庫へと変化することと関連する。

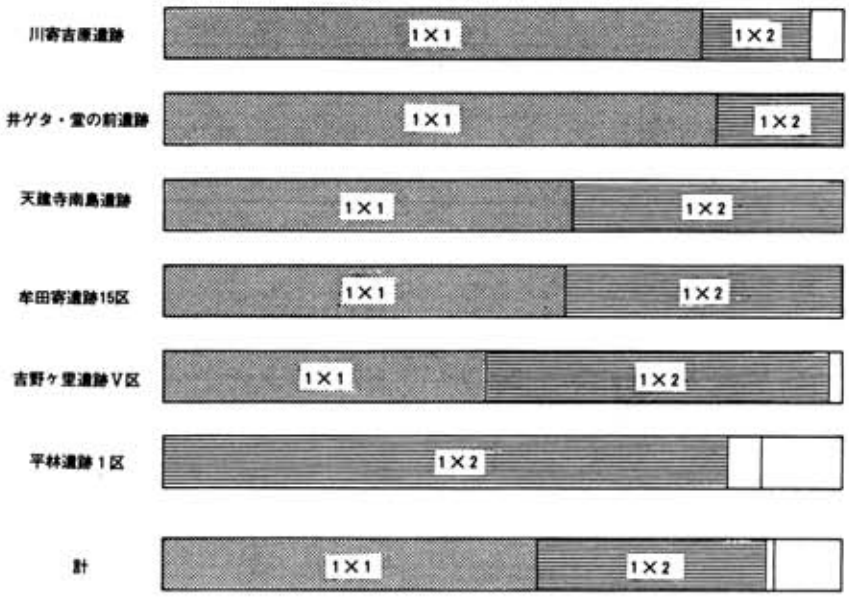


Fig. 83　集落別掘立柱建物規模比率

② 掘立柱建物規模と形式、集落類型

Tab. 30に掲載した集落の掘立柱建物規模の比率を遺跡ごとに示したのがFig. 83である。最下段が13遺跡の合計比率である。1間×1間が55%、1間×2間が38%で1間×1間、1間×2間で93%をしめる。Fig. 77の西日本の弥生時代掘立柱建物の時期別比率では中期が1間×1間23%、1間×2間33%で、後期が1間×1間33%、1間×2間34%である。中期、後期を合わせた比率では1間×1間が30%、1間×2間が34%で1間×1間、1間×2間の合計で64%をしめる。Fig. 83の佐賀県の場合は単一集落であり、一方Fig. 77は単一型、混在型を含めた比率という違いはあるものの掘立柱建物全体の中での1間×1間、1間×2間の合計比率が過半数を占めるということは全国的傾向である。

県内の単一集落で1間×1間が55%、1間×2間を合わせて93%をしめるということは、単一集落内の掘立柱建物のほとんどが1間×1間かあるいは1間×2間ということになる。

次ぎに各遺跡毎の掘立柱建物規模の比率についてみてみる。単一集落でも1間×1間、1間×2間の比率にⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類の3つのタイプがあることがわかる。Ⅰ類は1間×1間の建物が約80%を占める類型で井ゲタ・堂の前遺跡、川寄吉原遺跡がそれにあたる。Ⅱ類は1間×1間が50%～60%、1間×2間が40%～50%を占めそれぞれが約半数でなる集落類型である。これには天建寺南島遺跡、吉野ケ里遺跡V区、牟田寄遺跡15区がある。Ⅲ類は1間×2間が約80%を占める類型で平林遺跡1区がある。

このように、単一集落では1間×1間と1間×2間の建物で約90%を占めるものの、各遺跡によって各々の建物の占める比率が異なり、3つのタイプがあることが判った。この3つの類型がどのような集落の性格を反映しているのかさらに考えていく。

③ 掘立柱建物の分布と井戸の有無

掘立柱建物の性格や機能を知る手がかりとするため、単一集落内における1間×1間、1間×2間の建物の分布や生活遺構である井戸の有無をみてみる。

集落を構成する遺構には居住施設として竪穴住居や掘立柱建物、貯蔵施設として貯蔵穴や高床倉庫（掘立柱建物）の他井戸、屋外炉、墳墓などがあろうが集落としての空間が居住空間かあるいは貯蔵

空間かを判断する遺構として井戸を選択した。貯蔵穴は袋状竪穴は貯蔵穴として認定しやすいが、他の土坑は貯蔵穴か否か調査担当者も判断に迷う場合が多いからである。ちなみに、ここに掲げた遺跡はすべて低地に立地する集落であり、水を得るため井戸を掘削すれば比較的容易にできる遺跡ばかりである。

井戸の有無について各類型のそれぞれの遺跡についてみてみる。Ⅰ類の井ゲタ・堂の前遺跡では井戸はなく、川寄吉原遺跡で8基確認されている。Ⅱ類の吉野ケ里遺跡Ⅴ区では井戸は無く、天建寺南島遺跡では4基、牟田寄遺跡15区では66基の井戸が確認されている。Ⅲ類の平林遺跡1区では井戸はない。このように井戸と建物規模の比率からみた集落類型では明確な関係は見いだせない。

次ぎに各遺跡の1間×1間および1間×2間の建物群の分布をみてみる。川寄吉原遺跡、天建寺南島遺跡では1間×2間の建物と1間×1間の建物の分布域は異なり、これぞれ1間×2間は集中して分布する。天建寺南島遺跡は1間×2間の建物は中期から後期を通して場所や主軸を同じにしており、集落内において1間×2間の建物をつくる場所が踏襲されている。

牟田寄遺跡15区はⅠａ期～Ⅰｃ期の3つの小期に分けられるが、1間×1間、1間×2間の建物はそれぞれの時期を通してつくられる場所が踏襲される。1間×2間ではａ～ｃ期を通してSB15055、SB15051、SB15060はほぼ同じ場所に主軸を同じにしてつくられ建て替えと思われる。また、Ⅰａ期のSB15160、SB15165とⅠｂ期のSB15064、SB15164は主軸はことなるものの同じ場所を占地している。Ⅰｂ期のSB15162とⅠｃ期のSB15161も同様である。1間×1間の建物群や井戸も各時期をみてみるとその場所を踏襲しており、集落内において空間利用には意識が働いていたと考えてよいと思う。

吉野ヶ里遺跡Ⅴ区では1間×2間でも比較的大型の建物は溝状遺構に区画された空間を占地している。同様の例は井ゲタ・堂の前遺跡でもみられる。32棟の掘立柱建物のうちでもSB18とSB19は大型で基礎構造も横木、礎石の使用など明らかに他の建物と異なる。このうちSB19の西側桁行に平行して溝状遺構がはしり吉野ヶ里遺跡と同様区画溝と考えられる。

以上のように各遺跡とも集落内において1間×1間、1間×2間の各建物群はそれぞれ群集してつくられ、継続する集落の場合それぞれの形式の建物あるいは井戸などがつくられる場所が踏襲されることが判った。さらにこの傾向はすべての集落についてみられ、Ⅰ類～Ⅲ類の集落類型すべてに共通していえることである。

④　掘立柱建物集落類型

1間×1間、1間×2間の掘立柱建物は居住施設として平地式住居、高床式住居あるいは貯蔵施設としての高床倉庫のいずれかであり、これらを包括して掘立柱建物と呼称している。この両形式の掘立柱建物について上部構造がどのようになっているのか、その機能や性格について先学も明確な答えをだしていない。武末氏は梁間1間型の建物の大部分は高床建物で一部に平地建物も含むとし、高床建物の大部分は高床倉庫であると考えている。ただし、吉野ケ里遺跡で明らかになった施設として1間×2間の物見櫓があり、小郡市一ノ口遺跡の1間×1間の建物も物見櫓と考えられる。

宮本氏は梁間1間の掘立柱建物が高床建物であった可能性は極めて高いものの、倉庫と住居の区別は平面規模から判断できるかどうかはさらなる考察が必要と考えている。武末、宮本氏とも梁間1間の建物の大半は高床建物と考えており、その大部分は高床倉庫と考えている。

1間×1間、1間×2間の建物は梁間1間型であり、県内の単一集落の立地がすべて低湿地であることも考えるならば高床式倉庫、高床式住居いずれの可能性もある。 掘立柱建物が居住施設か貯蔵施設かを特定することは集落の単位集団抽出の作業には不可欠になろう。

集落内の掘立柱建物群は、A高床住居、平地住居＋高床式倉庫、B高床式倉庫群、C高床住居、平地住居の3つの類型が想定できよう。しかし、鼠返しなどの建築部材の出土例や絵画土器などの資料、西日本における縄文時代、弥生時代の居住施設の多くが竪穴住居であったことなどから考えても、C高床住居、平地住居の類型の可能性は低いと考えられる。単一集落がA類型かB類型であるかを判断する材料として、建物群がある空間が居住空間であるのか貯蔵空間であるのかを考える必要があろう。井戸は居住空間に必要な施設であり井戸のある集落はA類型、無い集落はB類型とする。

そのために集落内の井戸の有無をみてみるとⅠ類型でも井ゲタ・堂の前遺跡は井戸が無く、川寄吉原遺跡では井戸が8基ある。Ⅱ類型の吉野ケ里遺跡V区では井戸が無く、天建寺南島遺跡で4基、牟田寄遺跡15区では33基の井戸がある。そこで、これらの類型の組み合わせでさらに類型を設定するとⅠA類に川寄吉原遺跡、ⅠB類に井ゲタ・堂の前遺跡、ⅡA類に天建寺南島遺跡、牟田寄遺跡15区、ⅡB類に吉野ケ里遺跡V区、の分類が可能になる。ⅢA類の平林遺跡1区は建物群の中央に溝で区画された2間×2間の総柱建物があり、これを高床倉庫と考えた方が自然であろう。また、屋外棟持ち柱をもつ1間×2間の建物も絵画土器資料などから高床建物と考えられる。

諸類型と建物の分布をみるとⅠA類、ⅡA類の1間×2間は集落内でもかたまってつくられており、低地という立地条件からみても高床住居と考えられ、1間×1間は高床倉庫と考えられよう。ⅡB類の吉野ケ里遺跡V区は掘立柱建物群の南方に竪穴住居群が2群、計21軒があり1間×1間、1間×2間の掘立柱建物群は高床倉庫と考えられよう。ⅠB類の井ゲタ・堂の前遺跡でも同様であるが、高床倉庫に1間×1間あるいは1間×2間といった規模の差、あるいは基礎構造の差があるのは高床倉庫の中の階層差と考えたい。

⑤ 諸類型の意義

集落は数軒の居住施設からなる単位集団を基礎として、この単位集団の集合形態で小規模、中規模あるいは大規模集落であるかが決定される。この単位集団が貯蔵施設や井戸を所有するか否かはその集団の自立度を示すものとなろう。

ⅡB類の井ゲタ・堂の前遺跡やⅡB類の吉野ケ里遺跡は高床倉庫の群集であり、複数の単位集団全体での余剰生産物の共同管理と考えられよう。建物群の棟数や遺跡の内容から考えても吉野ヶ里遺跡の建物群は4群からなることなどからも複数の単位集団の共同管理による高床倉庫であり大規模集落においてみられる形態であろう。井ゲタ・堂の前遺跡の高床倉庫群も複数集団の共同管理でありその棟数や同時期の墳墓である甕棺墓の基数などから考えても中規模集落においてみられる形態であろう。

ⅠA類の川寄吉原遺跡、ⅡA類の天建寺南島遺跡、牟田寄遺跡15区は低地における小規模集落であり1～2からなる単位集団とその貯蔵施設と考えられよう。その単位集団は貯蔵施設として高床倉庫と井戸まで保有する自立したものであろう。

(6) ま と め

掘立柱建物の集成が90年代にはいり全国規模で実施され、その実態がわかるようになった。掘立柱建物は弥生時代をとおして増加していくが、数量的には中期から後期にかけての伸びが極端である。また弥生時代前期、中期、後期の三時期の建物規模比率をみてみると、前期では1間×1間，1間×2間，1間×3間などの梁間1間型が全体の約54%で、この他に3間×4間，3間×5間の比率が中期、後期に比べて高い。中期、後期では圧倒的に梁間1間型の比率が高く、後期では約80%を占める。このように、建物増加や建物規模比率から掘立柱建物の画期として中期があげられよう。掘立柱建物は東日本で

はすでに縄文時代からあり、西日本において弥生時代以降普及、増加していく。前期段階の掘立柱建物は縄文時代の影響を色濃く残す。中期になると半島あるいは大陸などから別系譜の掘立柱建物が導入され、普及していくものの考える。

さて、全国の中でも佐賀県は弥生時代の掘立柱建物が多い県であり、弥生集落における掘立柱建物の普及を考える場合、中核的地域として位置づけられよう。このような特質をもつ佐賀県内の掘立柱建物単一集落について事例を紹介し、各集落について立地、出現時期、建物規模比率、井戸の有無などを検討した。

集落立地はすべて低地で標高10ｍ以下、平均5.8ｍである。建物が群集する集落の初現時期は中期前半で井ゲタ遺跡や天建寺南島遺跡がそれにあたる。単一集落の掘立柱建物は１間×１間、１間×２間で約90％を占め、これらの比率によりⅠ類からⅢ類の３つの類型を設定した。集落内の１間×１間、１間×２間の建物の分布をみると、１間×２間は群集し、集落が継続する場合もつくられる場所が踏襲されることが判った。集落内が居住空間かあるいは貯蔵空間として選地されたかを考えるために井戸の有無をみてみた。そして、建物規模比率との組み合わせで集落類型を設定し、各遺跡の意義を考えた。

まず単一集落には高床倉庫の群集があり、これは生産物の共同管理と考えられる。建物群の群数や棟数から大規模集落の倉庫群や中規模集落のものなどがある。また、単位集団の高床住居と高床倉庫からなる集落もありこの場合、小規模集落となる。

佐賀県の掘立柱建物単一集落の出現は中期前半であり他の地域よりやや早い。稲作受容期では谷水田や丘陵谷地を開墾してきたが中期にはいり集落やその生産基盤である水田の拡大が低地にまでおよんできた。低地進出がさかんな中期に半島あるいは大陸から高床建物が導入され、低地ではいち早く高床建物を採用し高床建物の単一集落を形成していったと思われる。高床建物はその後の時期を得て拡散、普及していったと思われる。居住施設としての高床住居の採用はその集団にとってライフスタイルの変化を意味する。中期以前の集落において高床住居の検出例はきわめて少なく、ライフスタイルの変化を促すような高床住居や高床倉庫の採用は自然発生的なものとは考えられない。半島あるいは大陸文化は稲作、青銅器など数回にわたって導入されており、高床建物もこのような過程で採用されたのだろう。それは、集落の低地進出という社会現象と相乗してさらに高床建物の普及を促したのだろう。

県内には縄文晩期から弥生前期の掘立柱建物をもつ集落例がないため、福岡県粕屋町江辻遺跡（縄文晩期）や高知県南国市田村遺跡（前期）をみてみると、ともに掘立柱建物は１間×３間や１間×４間の平面長方形の建物が目立つ。この形式のほかには梁間が３間から５間あるような大型建物もある。このような建物は縄文時代の建物にもみられ、その系譜にあると考えられる。とすれば弥生集落における建物群変化の画期は中期にもとめられるのだろう。

謝辞

小論作成にあたって七田忠昭氏には資料を提供していただき、ご助言いただきました。記して感謝します。

註

1．建設省九州地方建設局国営吉野ケ里歴史公園事務所1996『国営吉野ケ里歴史公園建物等復元検討調査報告書』で包括的な資料集成がなされている。

2．吉野ヶ里遺跡現地説明会資料・平成１１年１１月６日（土）

参考文献・報告書

天本　洋一　1981　「川原吉原遺跡」　佐賀県教育委員会

天本　洋一　1989　「天建寺南島遺跡」　三根町教育委員会

岡毅・武谷和彦　1999　「平林遺跡１区」　北茂安町教育委員会

木島　慎治　1994　「弥生時代の掘立柱建物における立柱技法」『牟田祐二君追悼論集』

木下　正史　1985　「高床倉庫の系譜をめぐって」『日本史の黎明・八幡一郎先生　寿記念考古論集』

建設省九州地方建設局国営吉野ケ里歴史公園事務所

1996　『国営吉野ケ里歴史公園建物等復元検討調査報告書』

近藤　義郎　1959　「共同体と単位集団」『考古学研究』21

高倉　洋彰　1975　「弥生時代の集団組成」『九州考古学の諸問題』

武末　純一　1991　「九州の掘立柱建物Ⅰ」『弥生時代の掘立柱建物』　埋蔵文化財研究会

武末　純一　1998　「日本の環溝集落」『環濠集落と農耕社会の形成』　九州考古学会・嶺南考古学会

堤安　信　1987　「黒井遺跡」　千代田町教育委員会

徳富　則久　1983　「詫田西分貝塚・高志神社遺跡」　千代田町教育委員会

永田　稲男　1996　「石木中高遺跡」　三日月町教育委員会

西田　巌　1998　「牟田寄遺跡Ⅵ」　佐賀市教育委員会

原田　保則　1987　「小野原遺跡」　武雄市教育委員会

宮本長二郎　1979　「住生活」『日本考古学を学ぶ２』　有斐閣

宮本長二郎　1986　「住居」『岩波講座日本考古学４』　岩波書店

宮本長二郎　1991　「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』　埋蔵文化財研究会

宮本長二郎　1995　「弥生時代建築の現状と課題」『登呂遺跡をみつめて・登呂遺跡発見50周年記念報告』

静岡市教育委員会

山本　輝雄　1993　「弥生時代における原始家屋の立柱技法の歴史的展開」『低平地研究２』

佐賀大学低平地防災研究センター

横山　邦継　1995　「吉武遺跡群Ⅶ」　福岡市教育委員会

渡辺　俊哉　1990　「湯崎東遺跡」『佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書８』

佐賀県教育委員会

井原　恵三　1987　「初期農耕集落の構造」『考古学研究』34-3

高倉　洋彰　1973　「墳墓を通してみた弥生時代社会の発展過程」『考古学研究』87

2．井ゲタ遺跡から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

井ゲタ遺跡は、唐津市東部の鏡山東南部に広がる土石流扇状地上に位置する。発掘調査により弥生時代の集落跡が検出されている。

本報告では、井ゲタ遺跡の掘立柱建物跡から出土した木柱や建築部材などについて樹種同定を行い、用材に関する資料を得る。

(2) 試　料

試料は、井ゲタ遺跡から出土した木柱や建築部材36点（試料番号１～36）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表１に記した。

(3) 方　法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(4) 結　果

樹種同定結果をTab.１に記す。試料は広葉樹３種類に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

①　クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

②　クスノキ（Cinnamomum camphora（L.）Presi）　クスノキ科クスノキ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または２～３個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ型、１～３細胞幅、１～20細胞高。

柔組織は周囲状～翼状。大型の油細胞が認められる。

③　タブノキ（Persea thunbergii）　クスノキ科タブノキ属

散孔材で管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および２～３個が放射方向に複合する。道管は単穿孔または階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、１～３細胞幅、１～20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。大型の油細胞が認められる。

(5) 考　察

井ゲタ遺跡の掘立柱建物跡から出土した木柱および建築部材には３種類が認められた。各遺構別に見ると、SB18にタブノキが集中するが、いずれの掘立柱建物跡も基本的にはクリが多く、とくに部位による違いも認められない。最も多く確認されたクリは、耐朽性および強度に優れた材質を有しており（平井，1980）、掘立柱建物の柱材などには適材といえる。また、クスノキやタブノキも樟脳を多く含み、比較的耐水性が高い。これらのことから、建築部材は耐水性・耐朽性などを考慮して選択されたものと考えられる。

これらのうち、クリは東日本を中心とした縄文時代の住居跡でも構築材として多数確認されており

（千野，1983,1991;高橋・植木，1994）、建築部材としての用材選択が古くから行われていたことがうかがえる。また、このような大量のクリ材利用の背景には、栽培による可能性も指摘されている（千野，1983;辻，1997）。本遺跡周辺の古植生については、詳細は不明である。しかし、タブノキやクスノキが確認されていることや現在の植生など（宮脇，1981）を考慮すると、スダジイやタブノキなどを主構成種とする暖温帯常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）が見られた可能性がある。そのような中で、クリが大量に利用されている結果は、クリの栽培による食糧の確保と木材の有効利用が行われていた可能性を示唆するが、現時点では詳細は不明である。今後、古植生に関する分析調査を行い、本遺跡周辺の森林植生に関する情報も含めて再検討しなければならない課題と考える。

参考文献

千野　裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生　－南関東地方を中心に－．
東京都埋蔵文化財センター研究論集，Ⅱ，p.25-42.

千野　裕道（1991）縄文時代に二次林はあったか　－遺跡出土の植物性遺跡からの検討－．
東京都埋蔵文化財センター研究論集，X，p.215-249.

平井　信二（1980）木の事典　第4巻．かなえ書房．

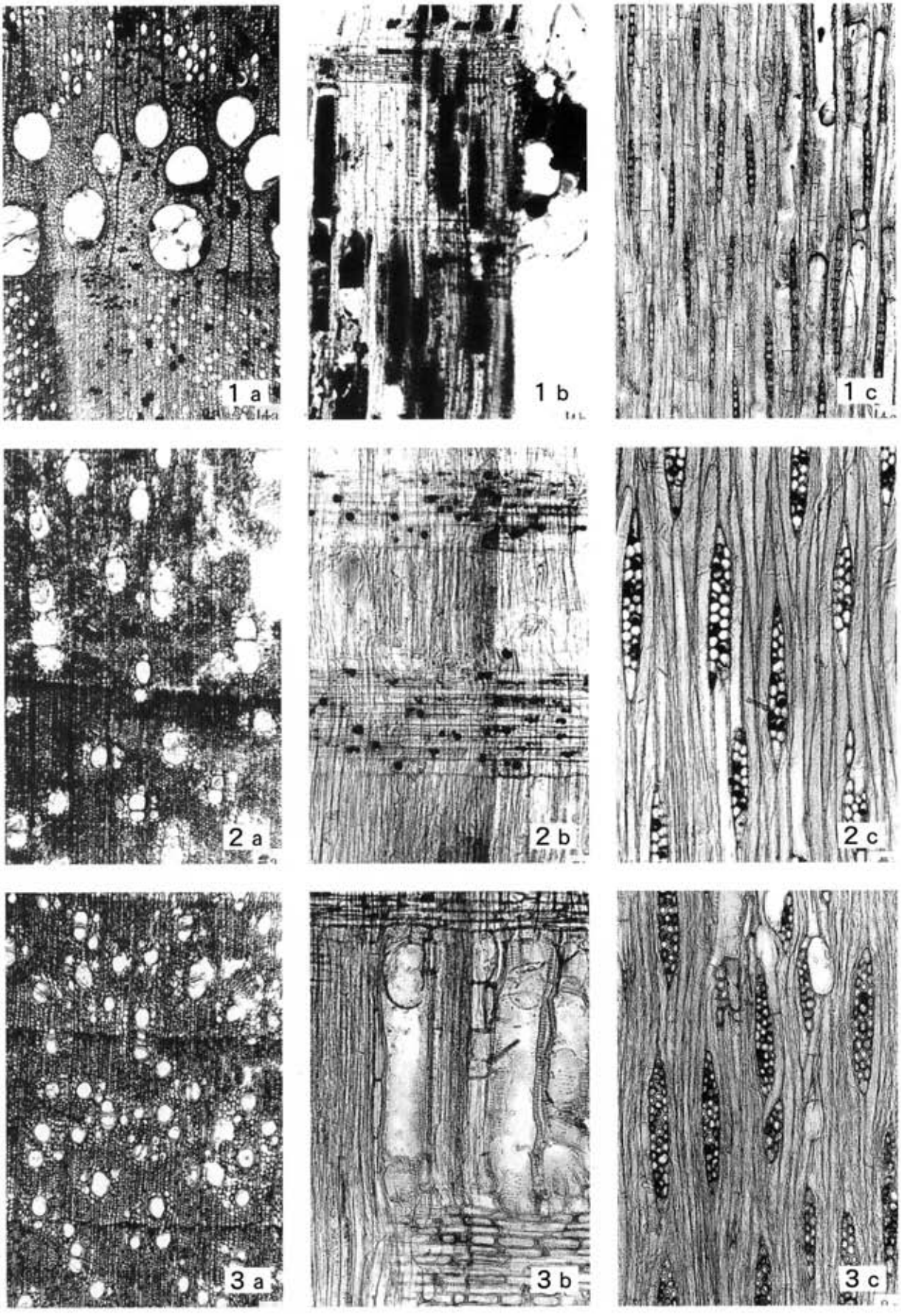
宮脇　昭編（1981）日本植生誌　九州．484p.，至文堂．

高橋　敦・植木真吾（1994）樹種同定からみた住居構築材の用材選択．PALYNO，2，p.5-18.

辻　誠一郎（1997）三内丸山を支えた生態系．岡田康博・NHK青森放送局編
「縄文都市を掘る三内丸山から原日本が見える」，p.174-188，NHK出版．

Tab. 31　樹種同定結果

番号	遺跡名	調査区	遺構名	種類	樹種
1	井ゲタ遺跡	2　区	SB17 P1	木柱	クスノキ
2	井ゲタ遺跡	2　区	SB17 P2	木柱	クリ
3	井ゲタ遺跡	2　区	SB17 P3	木柱	クリ
4	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P1	木柱	タブノキ
5	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P2	木柱	タブノキ
6	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P3	木柱	クリ
7	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P3	建築部材	クリ
8	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P3	建築部材	クリ
9	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P3	建築部材	クリ
10	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P3	建築部材	クリ
11	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P3	建築部材	クリ
12	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P3	建築部材	クリ
13	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P4	木柱	クリ
14	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P4	建築部材	クリ
15	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P4	建築部材	クリ
16	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P4	建築部材	クリ
17	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P4	建築部材	クリ
18	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P6	建築部材	クリ
19	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P6	建築部材	タブノキ
20	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P6	建築部材	タブノキ
21	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P6	建築部材	タブノキ
22	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P6	建築部材	タブノキ
23	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P6	建築部材	タブノキ
24	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P6	建築部材	タブノキ
25	井ゲタ遺跡	2　区	SB18 P6	建築部材	クリ
26	井ゲタ遺跡	2　区	SB19 P2	木柱	クリ
27	井ゲタ遺跡	2　区	SB19 P3	木柱	クリ
28	井ゲタ遺跡	2　区	SB19 P5	木柱	クリ
29	井ゲタ遺跡	2　区	SB19 P5	建築部材(横木)	クリ
30	井ゲタ遺跡	2　区	SB19 P5	建築部材(横木)	クリ
31	井ゲタ遺跡	2　区	SB19 P5	建築部材(横木)	クリ
32	井ゲタ遺跡	2　区	SB19 P5	建築部材(横木)	クリ
33	井ゲタ遺跡	2　区	SB19 P6	木柱	クリ
34	井ゲタ遺跡	2　区	SB47 P1	木柱	クリ
35	井ゲタ遺跡	2　区	SB47 P3	木柱	クリ
36	井ゲタ遺跡	2　区	SB63 P2	木柱	タブノキ



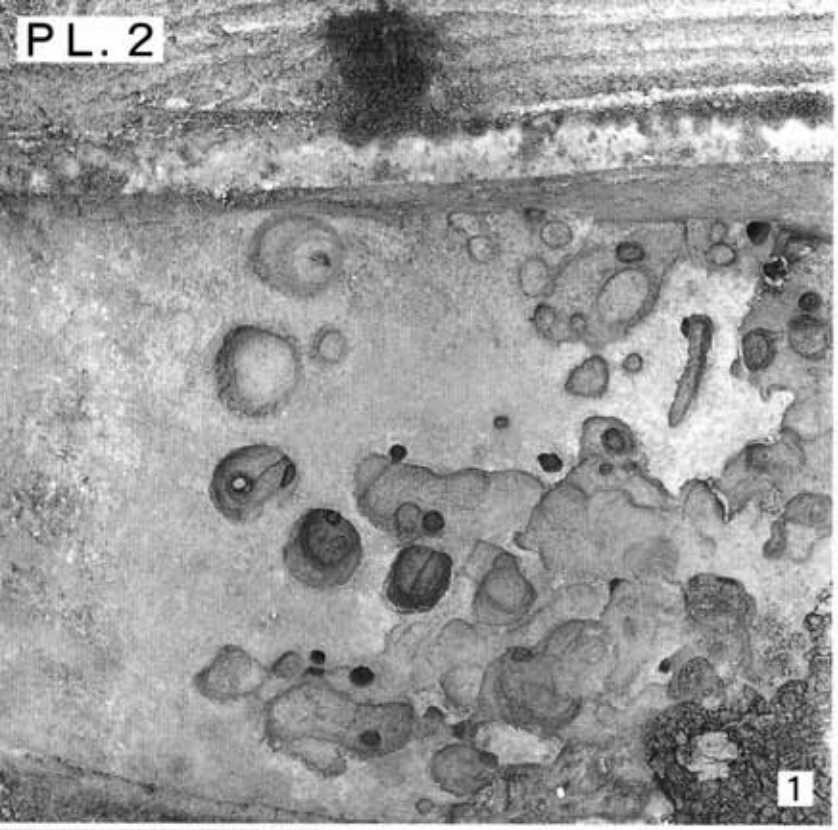
1．ク　リ　（試料番号6）
2．クスノキ（試料番号1）
3．タブノキ（試料番号19）
　a:木口，b:柾目，c:板目

200μm：a
200μm：b，c

堂の前遺跡　1. 遺跡全景空中写真（南西から）

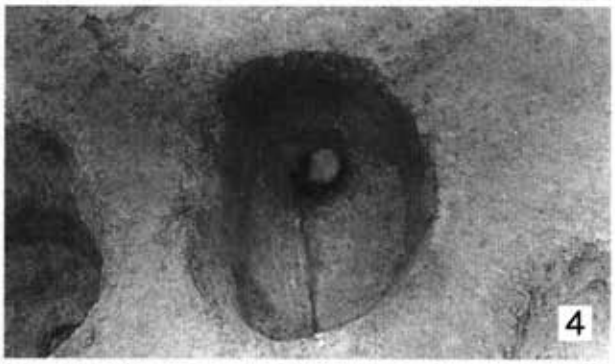
2. 遺跡全景空中写真（南から）

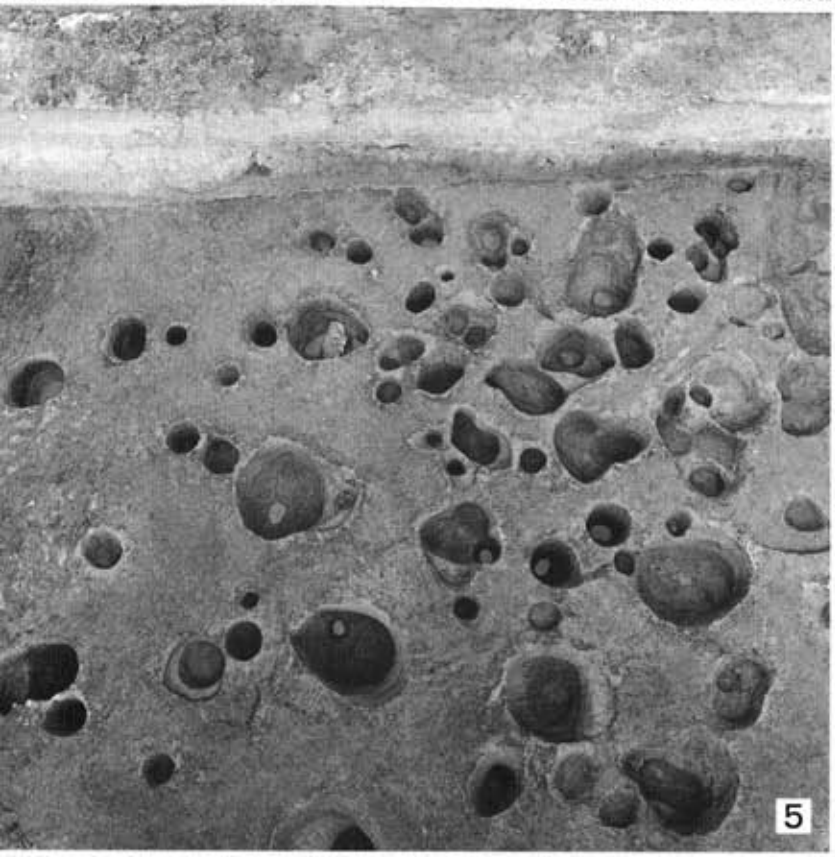
PL. 2


1

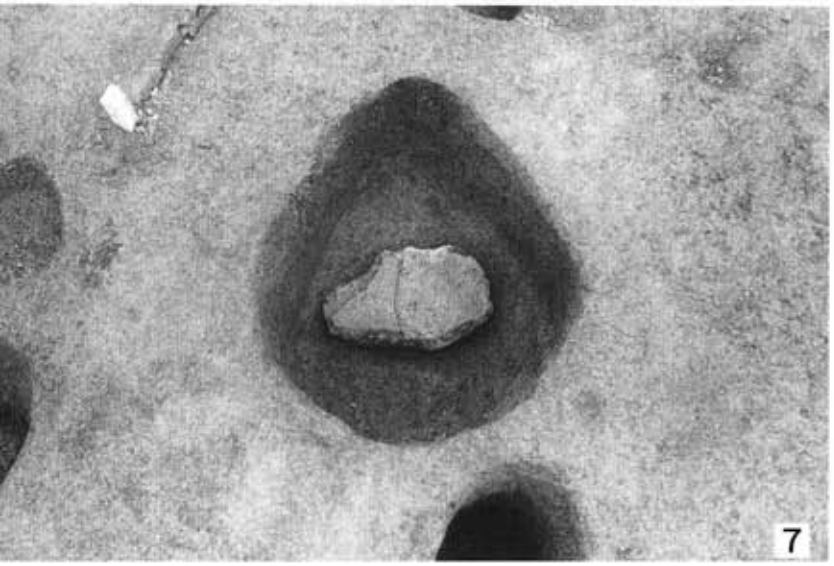
2

3


4

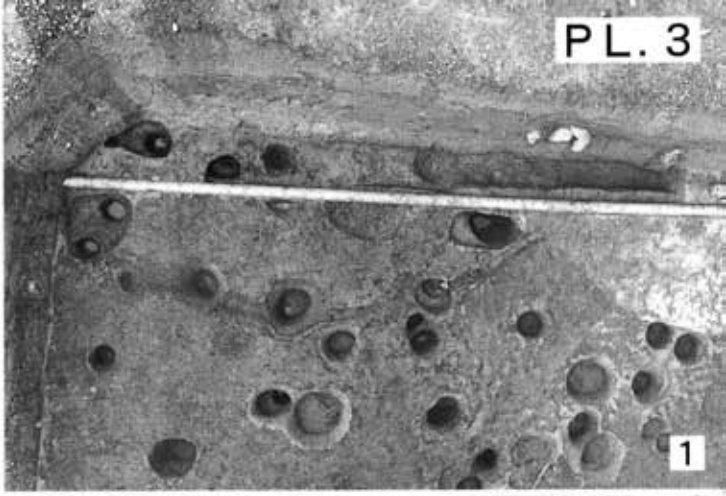

5

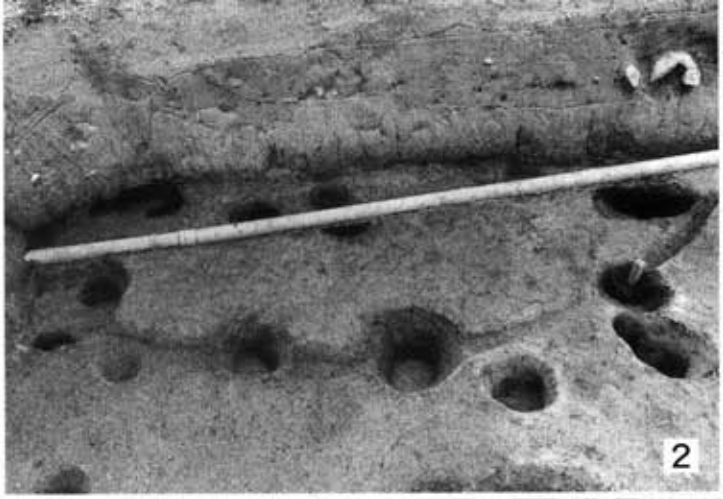
6


7

堂の前遺跡

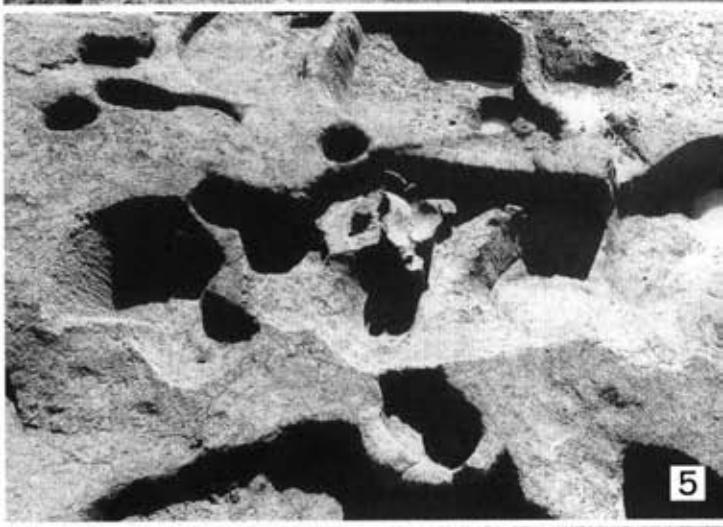
1. SB 45 掘立柱建物（真上から）
2. SB 45 掘立柱建物（北から）
3. SB 45. P 4（真上から）
4. SB 45. P 5（真上から）
5. SB 46 掘立柱建物（真上から）
6. SB 46 掘立柱建物周辺（真上から）
7. SB 46. P 7（真上から）

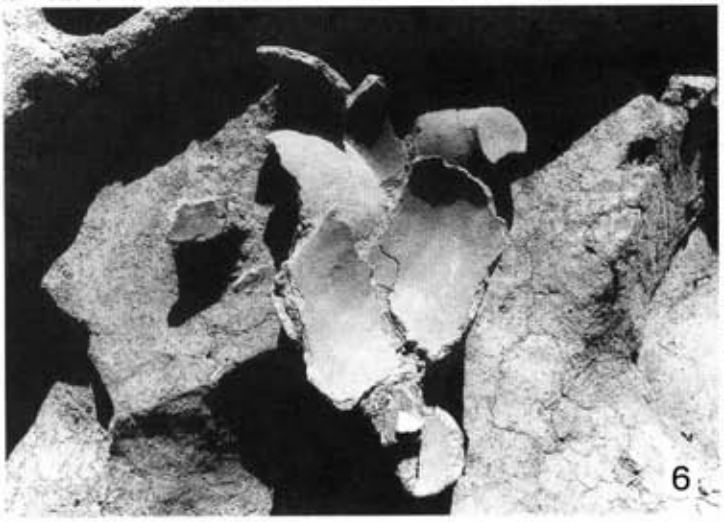

1

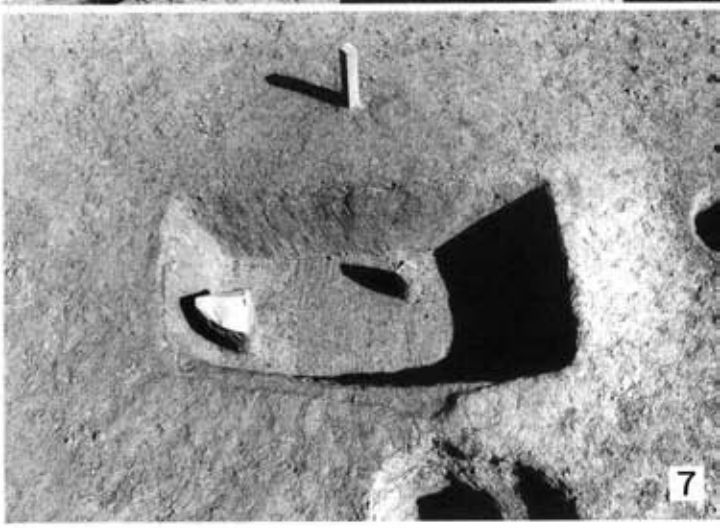

2

3

4


5

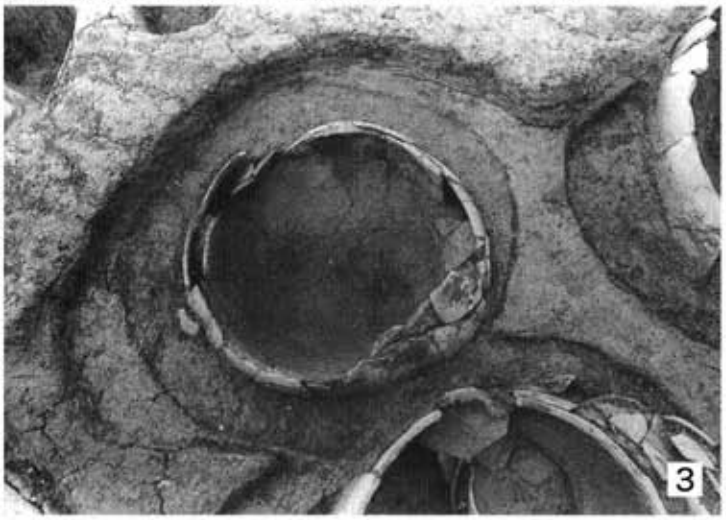

6

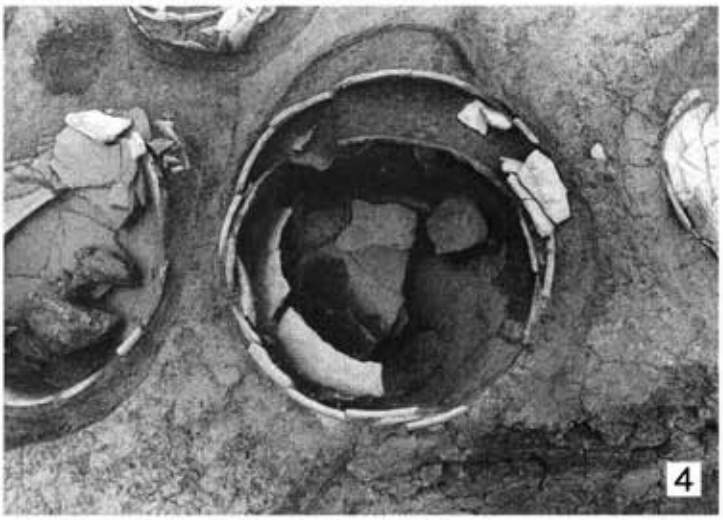

7

堂の前遺跡

1. SB 47 竪穴住居（真上から）
2. SB 47 竪穴住居（北から）
3. SD 35 溝状遺構（東から）
4. SK 02 土　　坑（北から）
5. SJ 04 甕 棺 墓（北から）
6. SJ 04 甕 棺 墓（北から）
7. SK 04 土 壙 墓（南から）

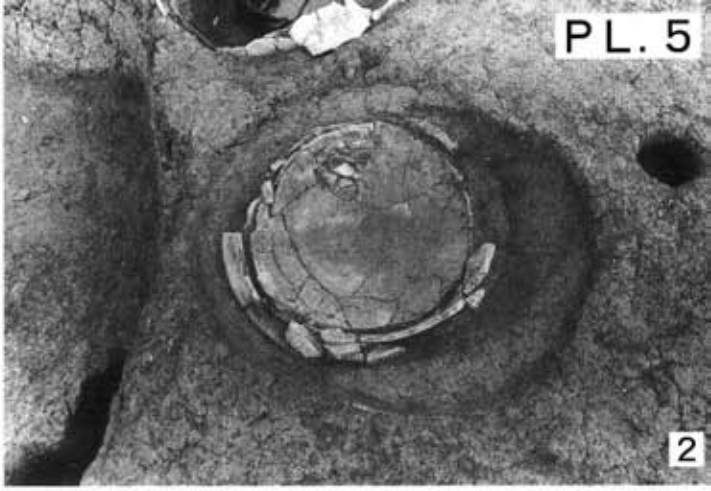
PL. 4

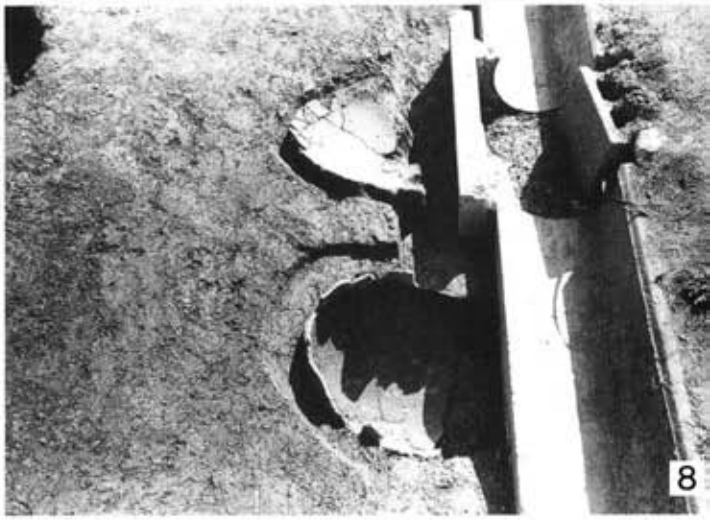




堂の前遺跡

1. 甕棺墓周辺作業風景（北から）
2. SJ24～29 甕棺墓（北から）
3. SJ 24 甕棺墓（北から）
4. SJ 25 甕棺墓（北から）

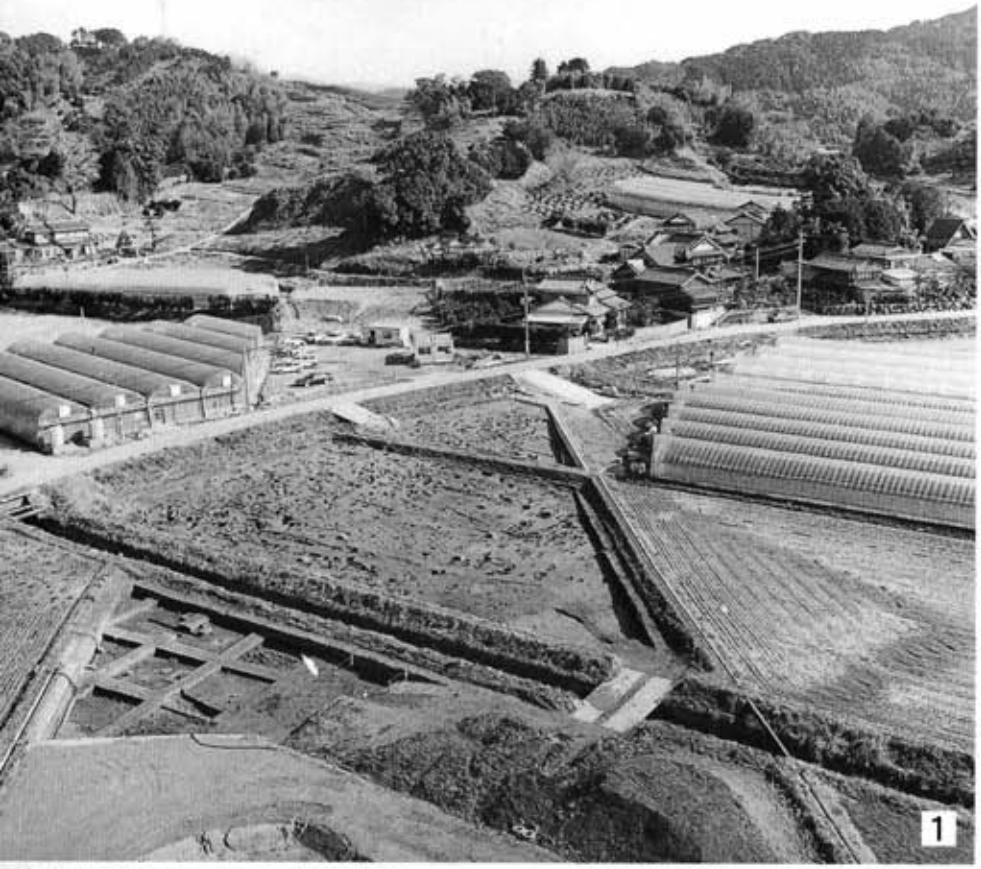


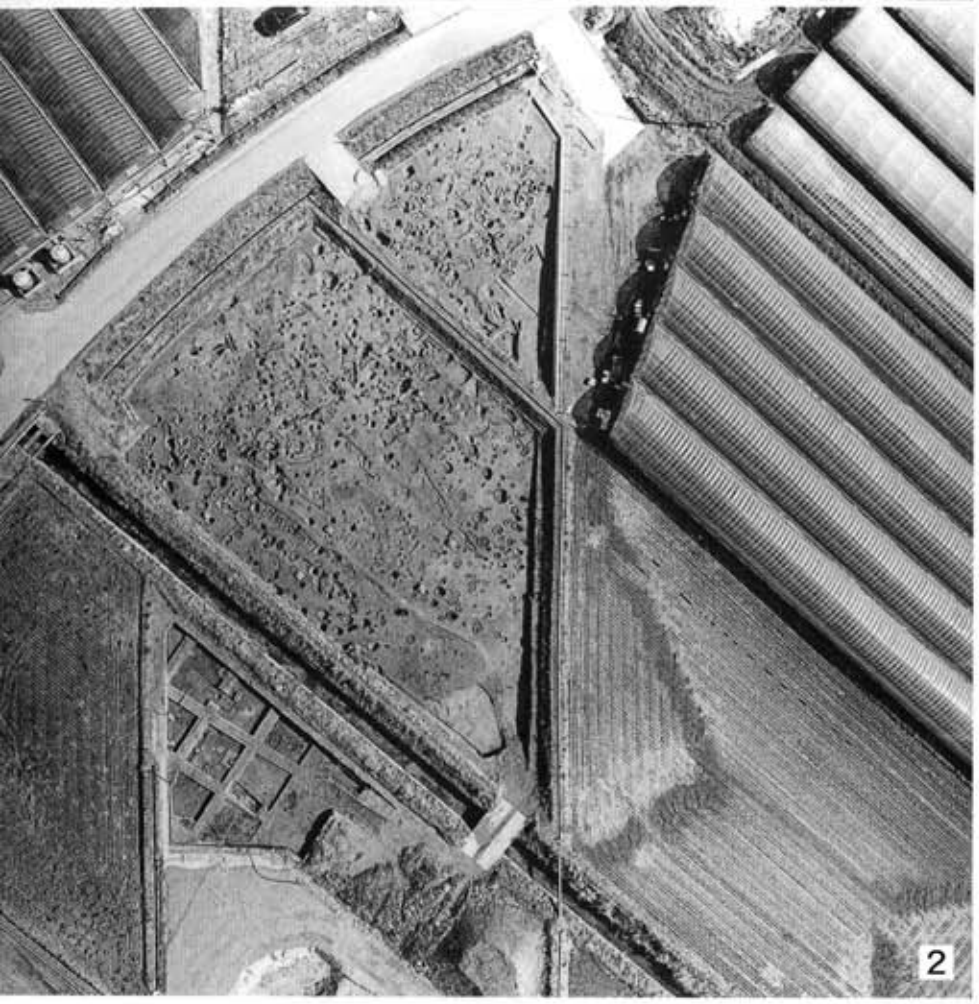


堂の前遺跡

1. SJ 26 甕棺墓（真上から）
2. SJ 28 甕棺墓（真上から）
3. SJ 29 甕棺墓（北から）
4. SJ 30 甕棺墓（北から）
5. SJ 40, 41 甕棺墓（東から）
6. SJ 40 甕棺墓（真上から）
7. SJ 41 甕棺墓（真上から）
8. SJ 42, 43 甕棺墓（北から）

PL. 6





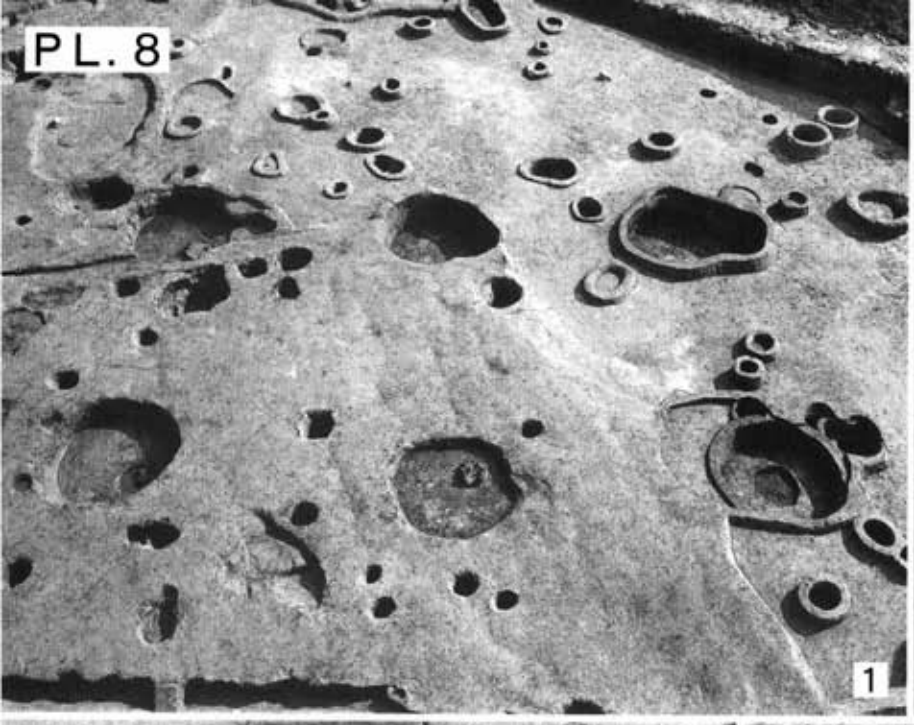
井ゲタ遺跡

1. 遺跡全景空中写真（西から）
2. 遺跡全景空中写真（真上から）

井ゲタ遺跡

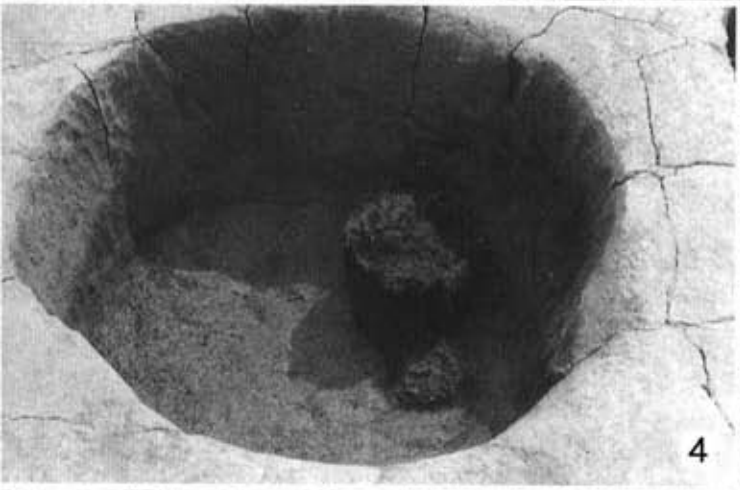
1. SB18 掘立柱建物（南西から）
2. SB18 P6柱根　（真上から）
3. SB18 横　　木　（真上から）
4. SB18. P3柱　　根　（真上から）
5. SB18. P3横木, 礎石（真上から）
6. SB18. P4根固石, 礎石（真上から）
7. SB18. P4横　　木　（真上から）

PL. 8


1

2

3


4

5

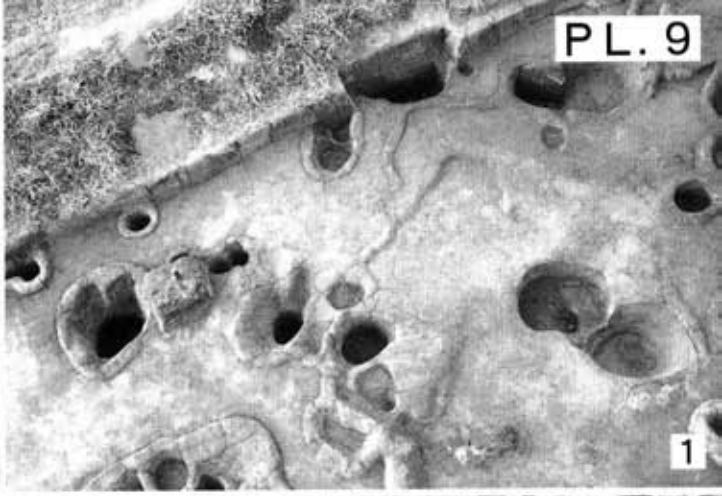
6

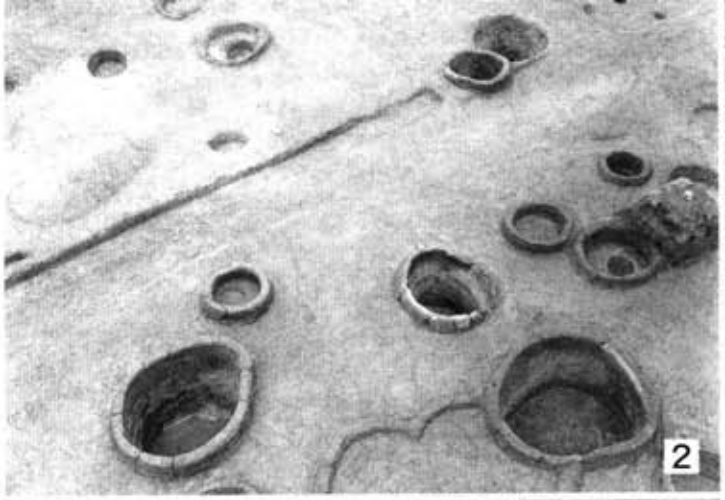
7

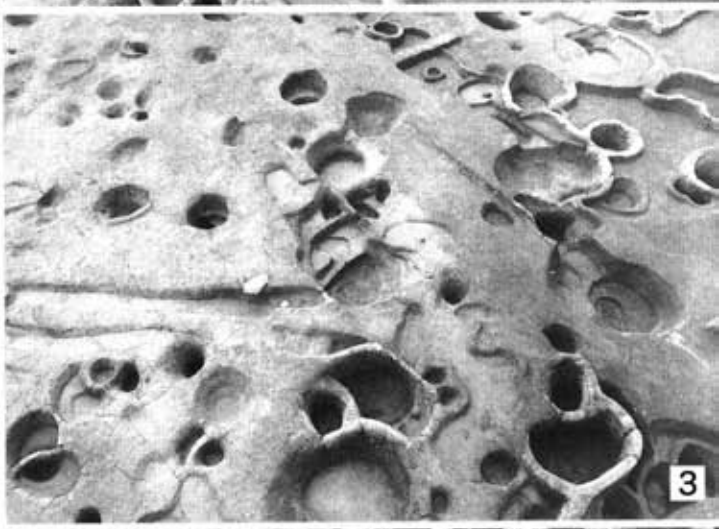
8

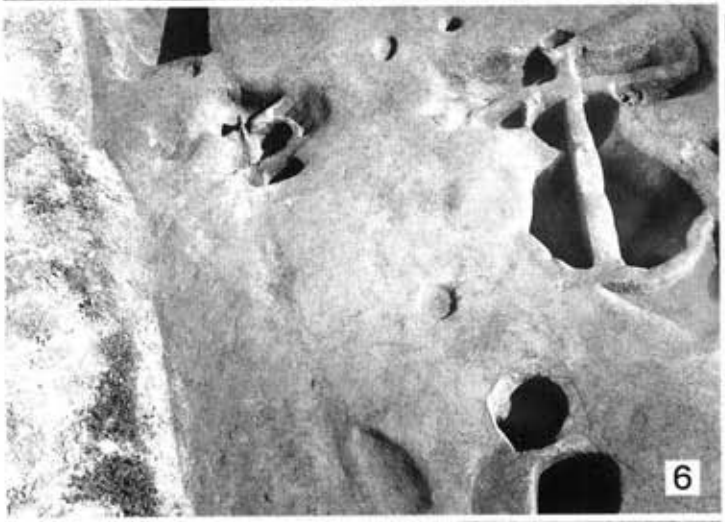
井ゲタ遺跡

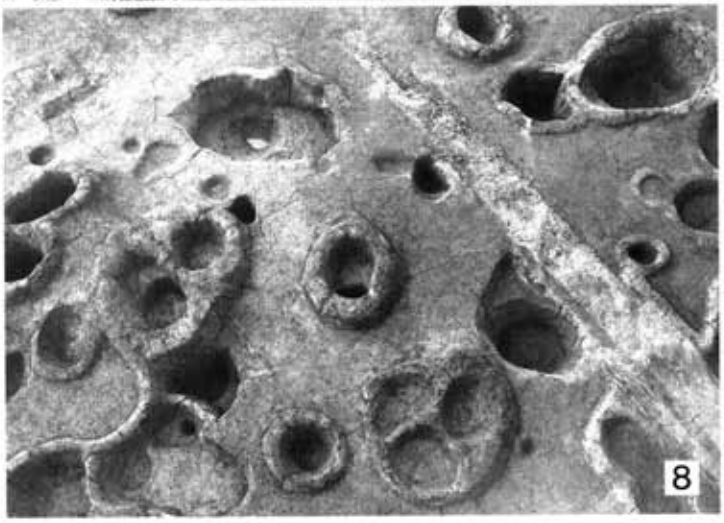
1. SB19 掘立柱建物（西から）
2. SB19. P3（北から）
3. SB19. P2（東から）
4. SB19. P1（西から）
5. SB19. P6（北東から）
6. SB19. P5. 横木（真上から）
7. SB47. P3（東から）
8. SB47. P4. 横木（真上から）







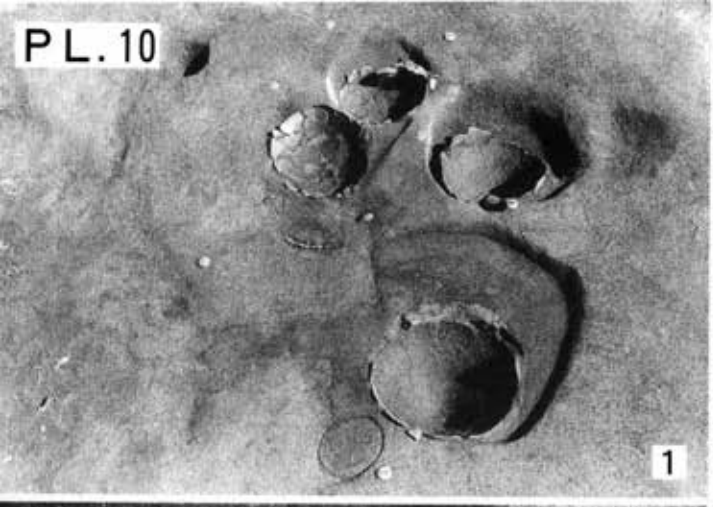




井ゲタ遺跡

1. SB 17, 56 掘立柱建物（東から）
2. SB 30 掘立柱建物（北から）
3. SB 53 掘立柱建物（南東から）
4. SB 55 掘立柱建物（南西から）
5. SB 60 掘立柱建物（北西から）
6. SB 61 掘立柱建物（北西から）
7. SB 64 掘立柱建物（南から）
8. SB 66 掘立柱建物（北東から）

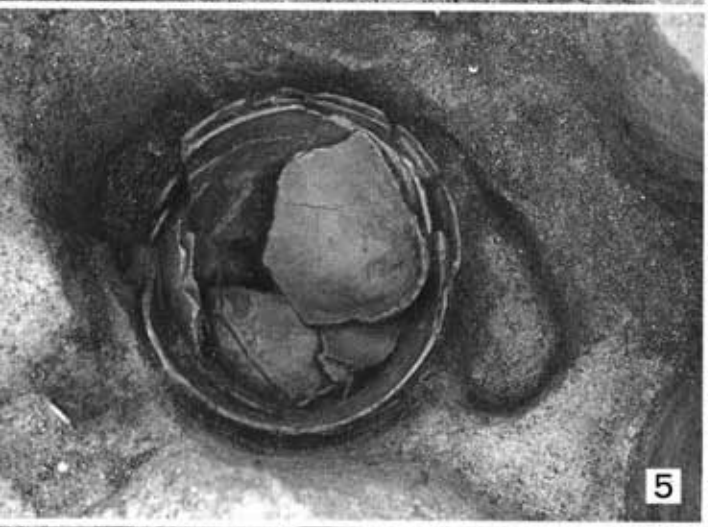
PL.10

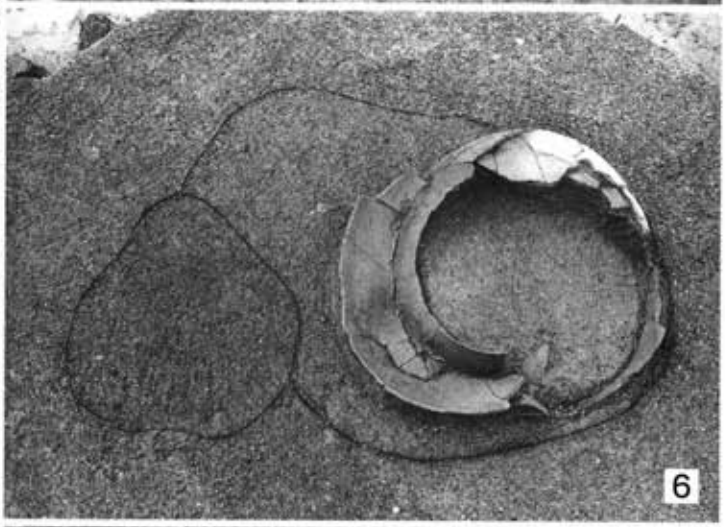

1

2

3

4


5

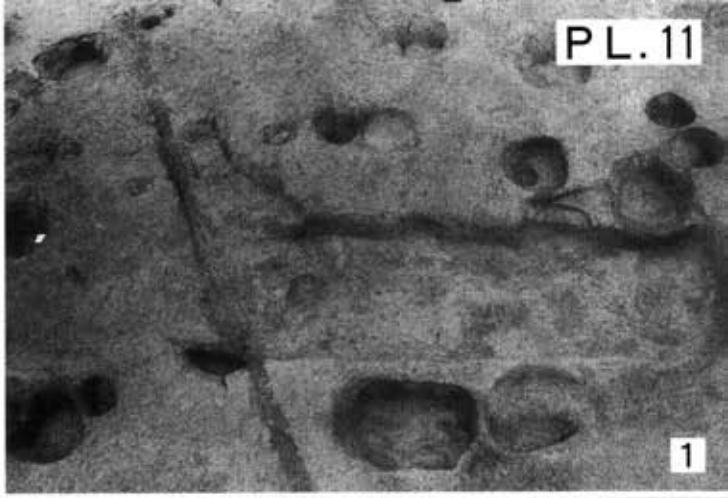

6

7

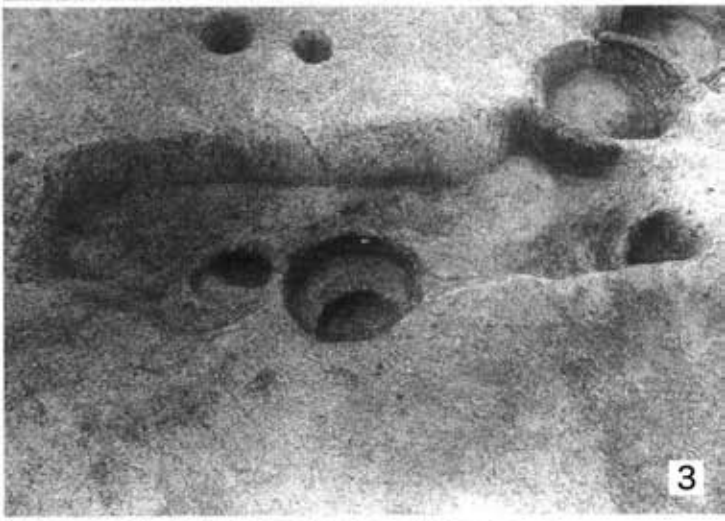
8

井ゲタ遺跡

1. SJ 7, 8, 9, 10 甕棺墓（西から）
2. SJ 8, 9 甕棺墓（北から）
3. SJ 07 甕棺墓（北西から）
4. SJ 07 管玉出土状況（真上から）
5. SJ 13 甕棺墓（真上から）
6. SJ 68 甕棺墓（真上から）
7. SK 02 土　坑（南から）
8. SK 04 土　坑（南東から）


1

2

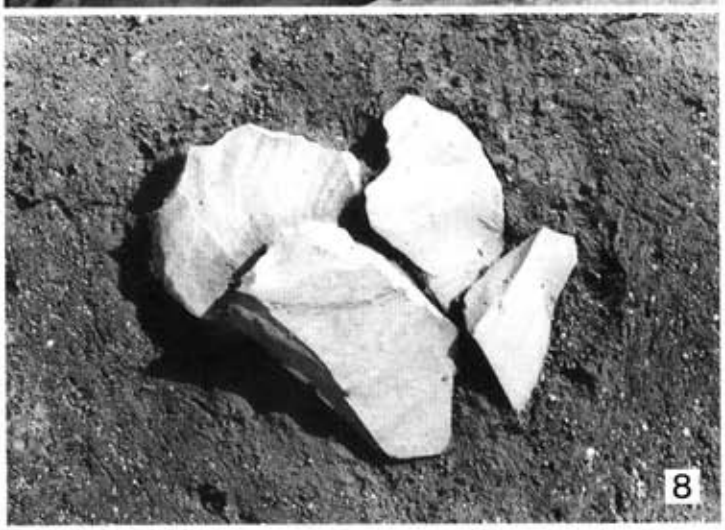

3

4

5

6

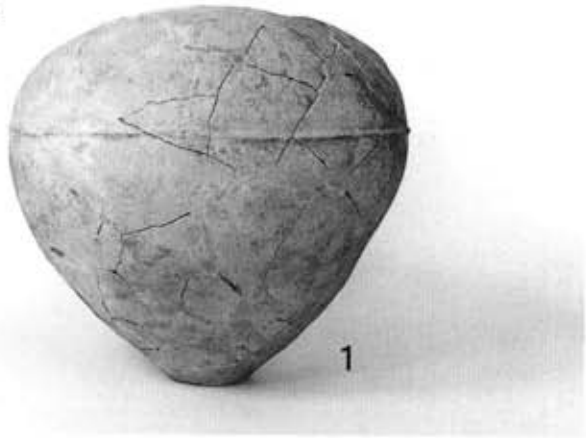
7

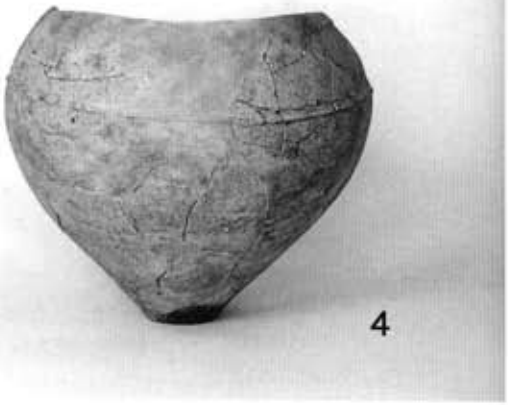

8

井ゲタ遺跡

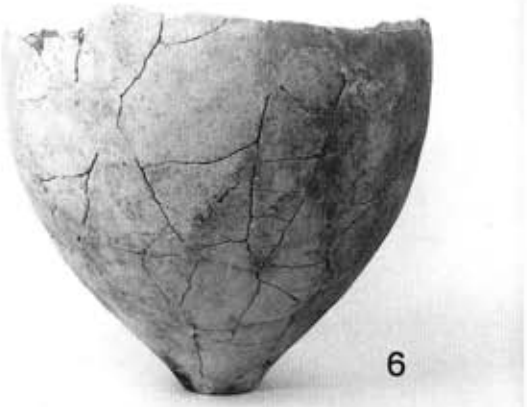
1. SK05 土　坑（南から）
2. SK06 土　坑（東から）
3. SK11 土　坑（北東から）
4. Ⅲ区全景（南から）
5. Ⅲ区近景（南から）
6. Ⅲ区遺物出土状況
7. 木製品出土状況（真上から）
8. 剥片出土状況（真上から）

PL.12

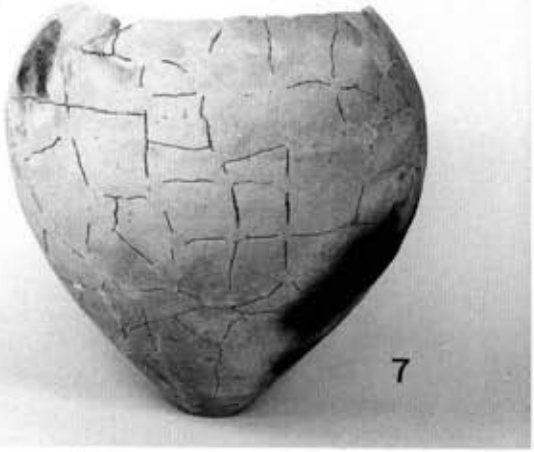

1


4

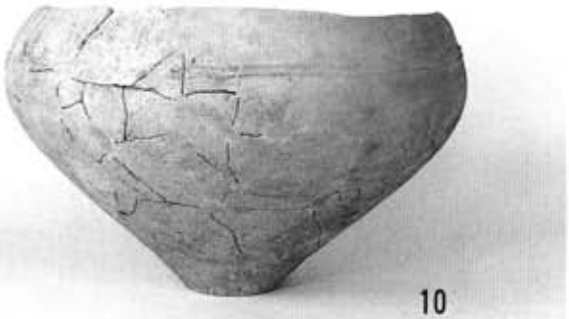
5


6

9

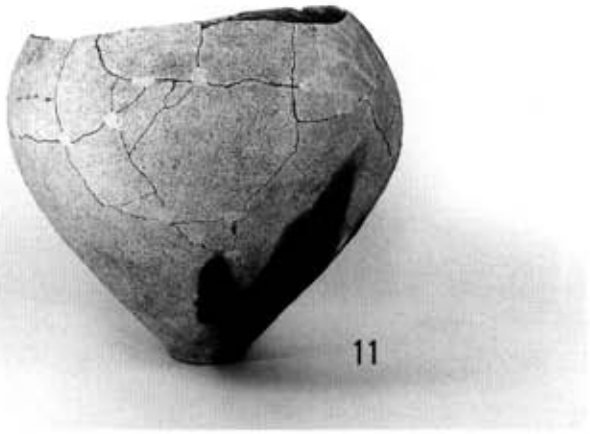

7

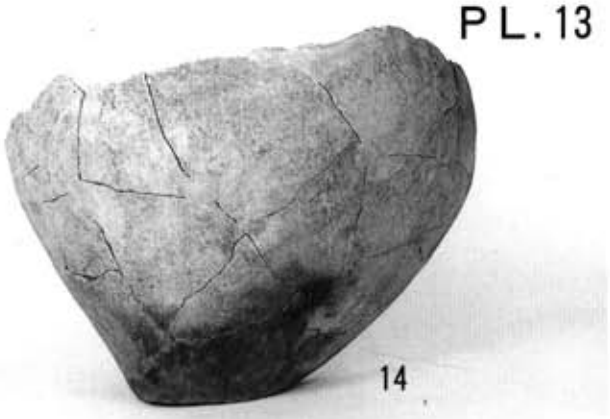
12


10

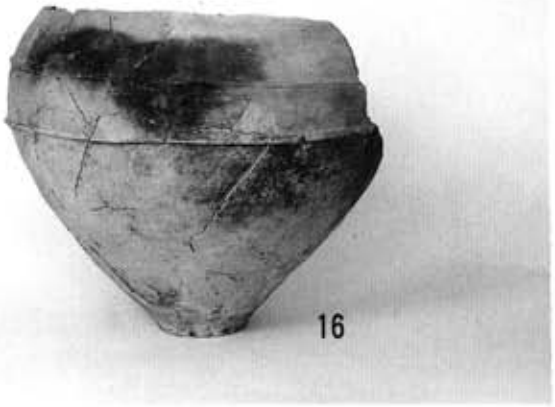
堂の前遺跡・甕棺

1. SJ24 上甕, 4. SJ25 下甕, 5. SJ26 上甕, 6. SJ26 下甕
7. SJ27 下甕, 9. SJ28 上甕, 10. SJ28 下甕, 12. SJ29 上甕

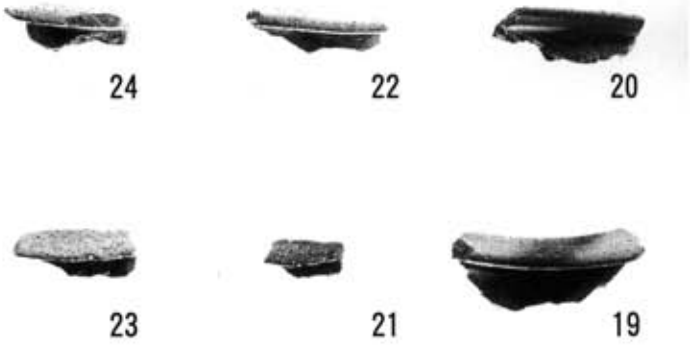

11


14

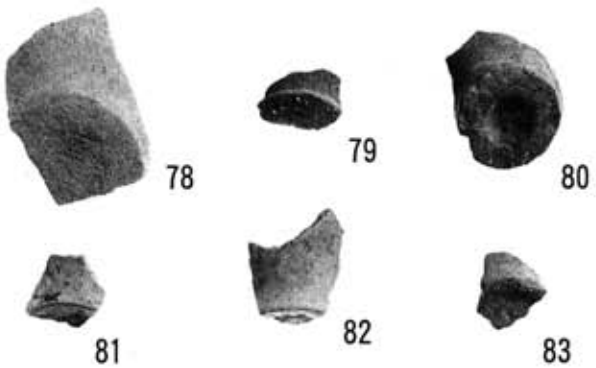
15


16

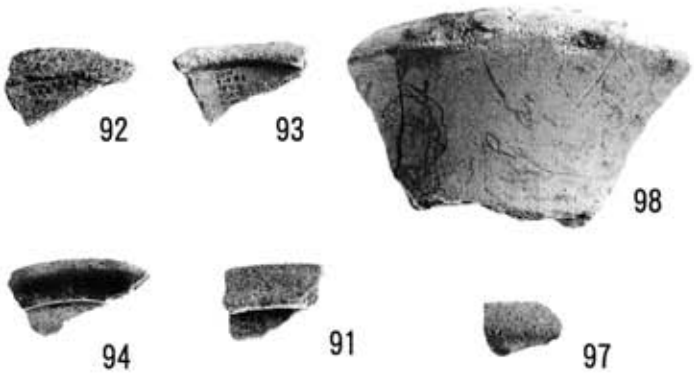
18


24 22 20

23 21 19


78 79 80

81 82 83


92 93 98

94 91 97

堂の前遺跡・甕棺，弥生土器

11. SJ29 下甕，　14. SJ40，　15. SJ41，　16. SJ42

18. SJ04

PL.14

72

73

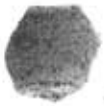
74

84

85

86

87


75

76

77

88

89

90

101

102

104

108

121

126

127

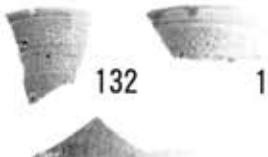
128

125

118

123

124


132

133

134

137

131

136

138

143

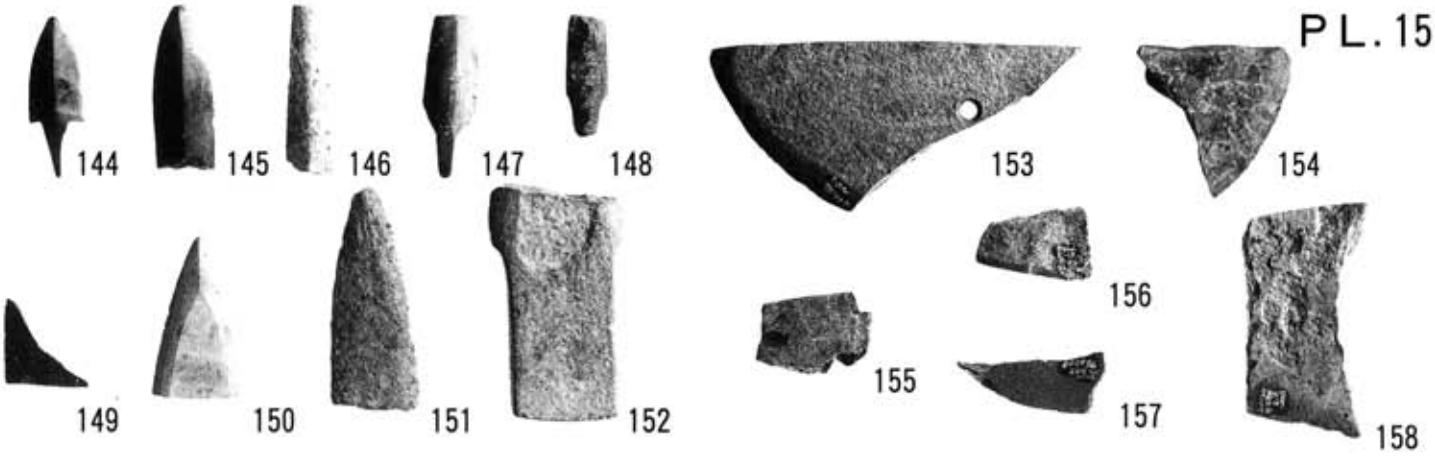
141

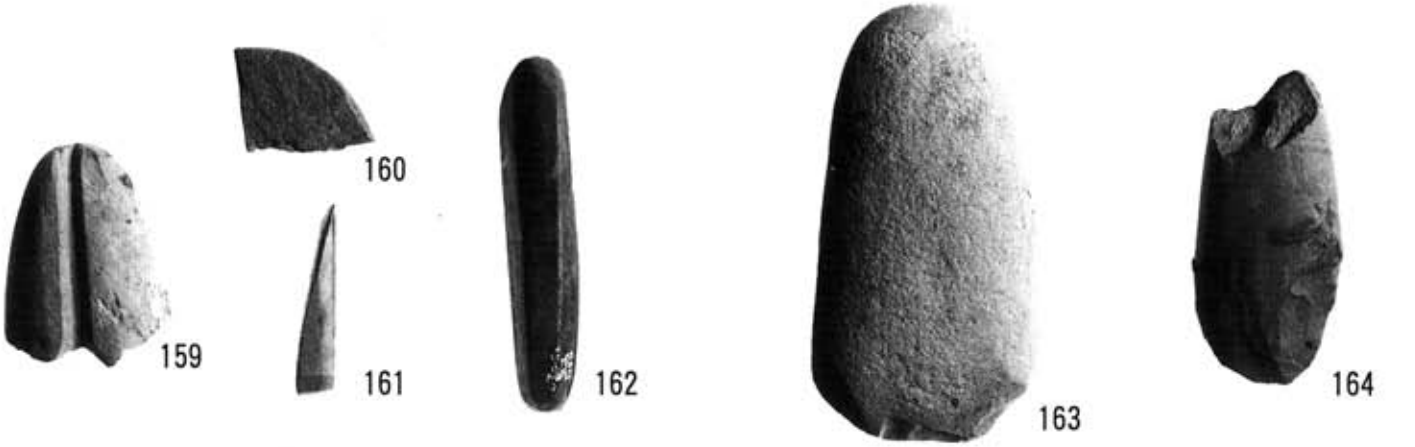
140

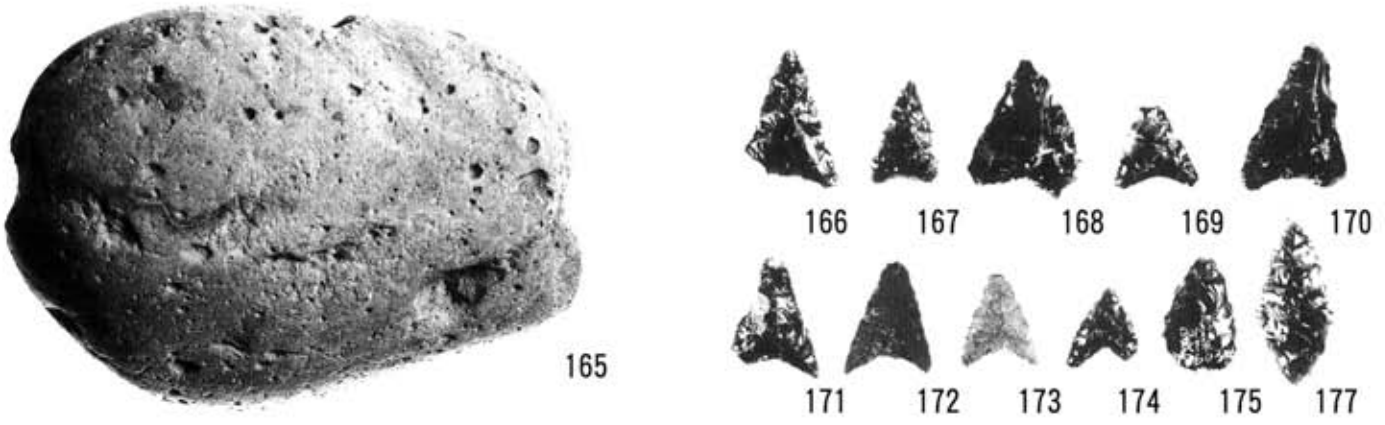
139

堂の前遺跡

72～102. 弥生土器
108～121. 土 師 器
123～128. 須 恵 器
132～143. 中近世陶磁器類


144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158

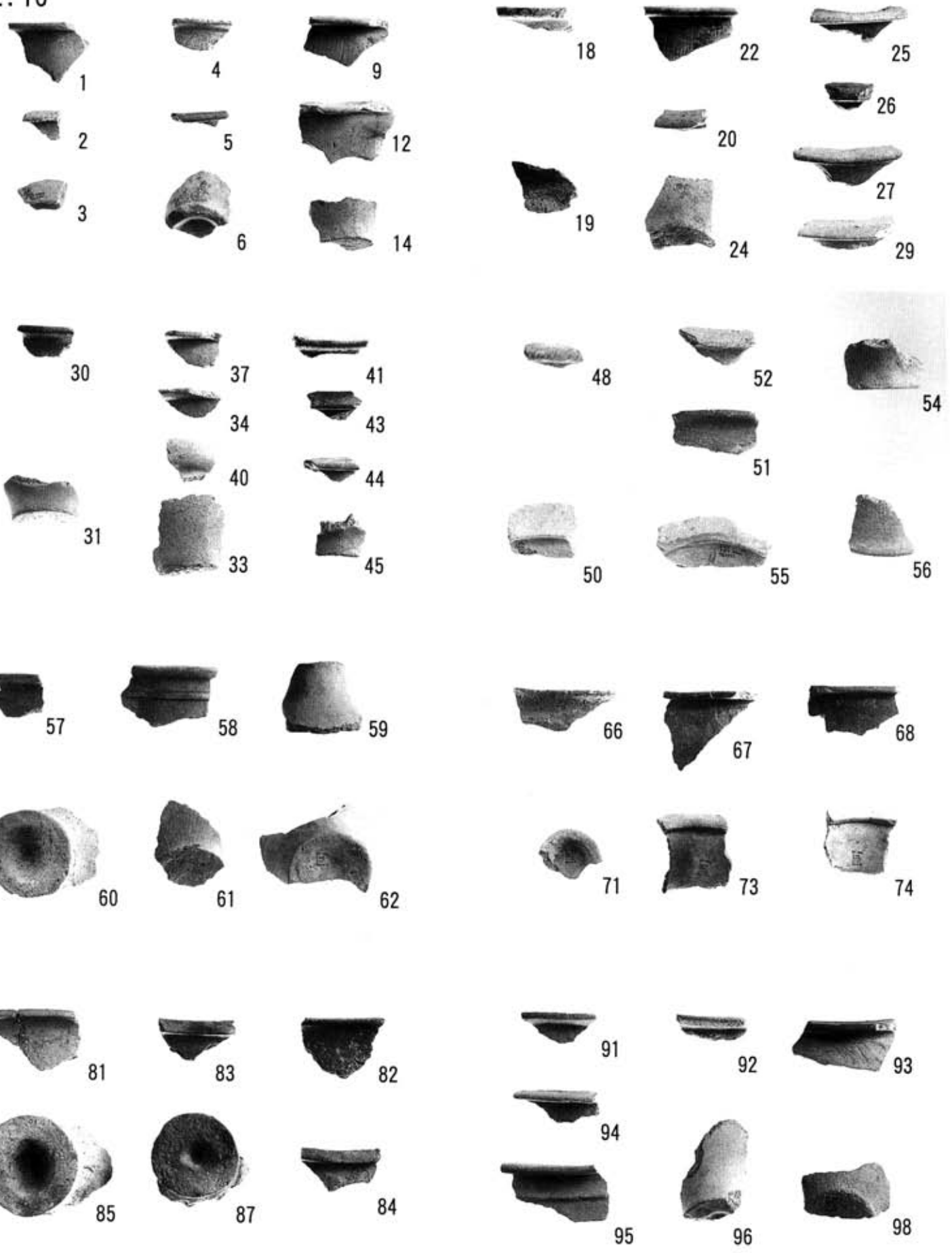

159
160
161
162
163
164


165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
177

179
180
182
189

堂の前遺跡　石器

PL.16



井ゲタ遺跡

遺構出土弥生土器

89

90

99

100

101

102

103

107

108

112

109

113

114

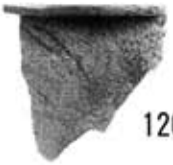
115

116

117

118

119


120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

76

104

146

78

150

151

井ゲタ遺跡　遺構，包含層出土　弥生土器

PL. 18

155

156

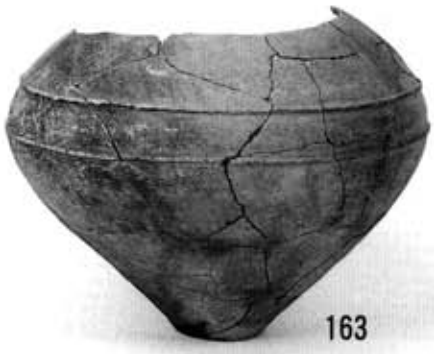
157

158

159

160

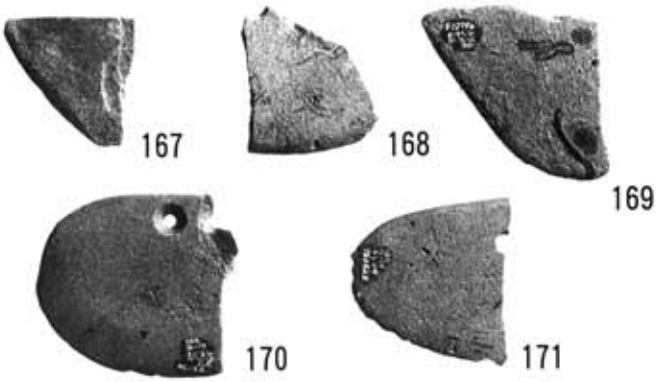
161

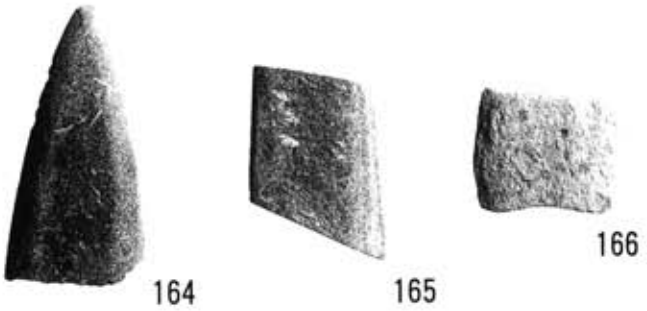


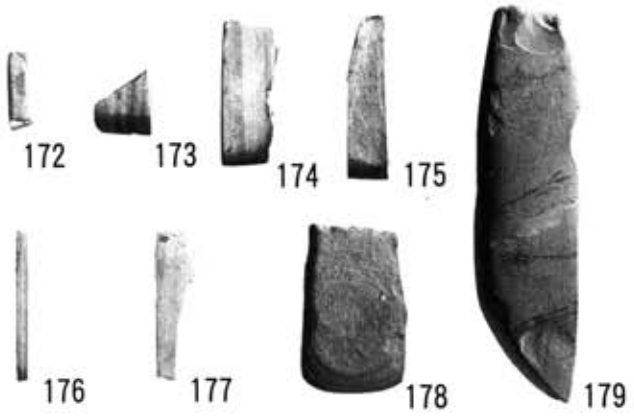
163

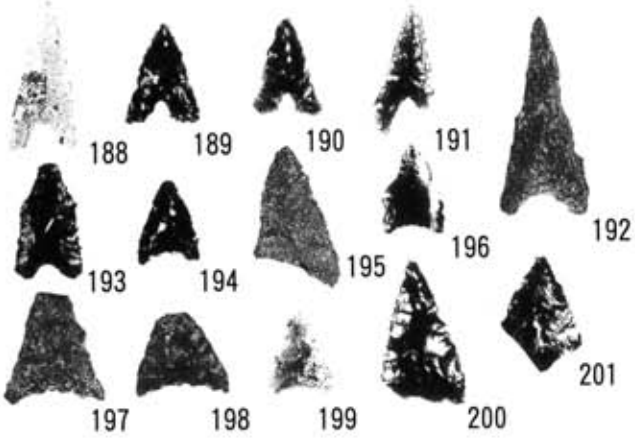
井ゲタ遺跡・甕棺

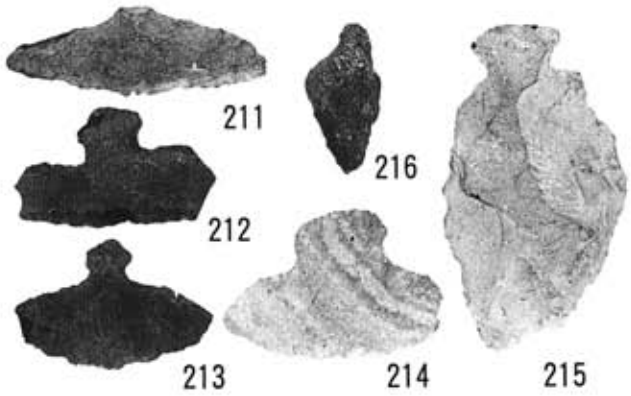
155. SJ07 上甕, 156. SJ07 下甕, 157. SJ08 下甕, 158. SJ09 下甕
159. SJ10 , 160. SJ13 上甕, 161. SJ13 下甕, 163. SJ68 下甕

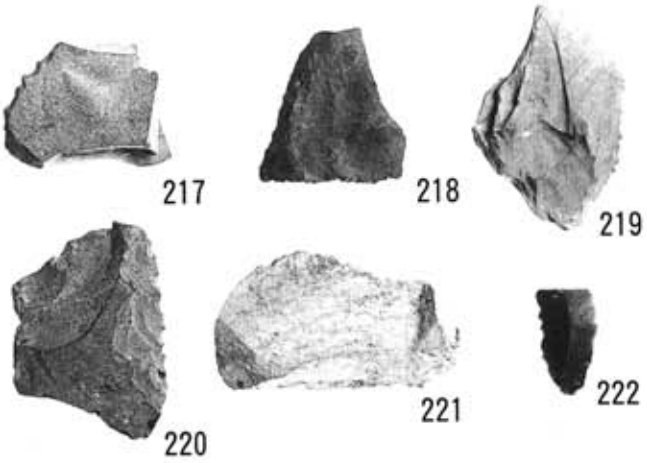

167
168
169
170
171

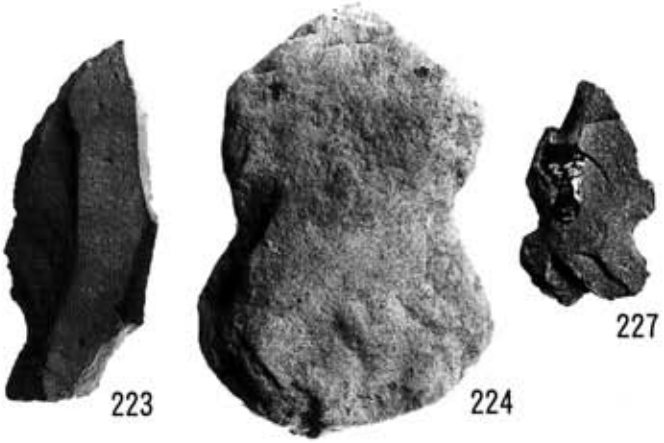

164
165
166


172
173
174
175
176
177
178
179


188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
201


211
212
213
214
215
216


217
218
219
220
221
222


223
224
227

230

井ゲタ遺跡　石器

281

282

284

288 290 296

289

285 286 287

300

303

301

304

302

井ゲタ遺跡

281～296. 建築部材

300～304. 土 師 器

338

334

331

330

305

310

306

308

311

367

312

366

317

313

321

323

318

316

324

319

325

325

326

327

358

340

363

339

364

井ゲタ遺跡　縄文土器

佐賀県文化財調査報告書第144集

堂の前・井ゲ夕遺跡

平成12年3月31日　印　刷
平成12年3月31日　発　行

編集・発行者　佐賀県教育委員会
佐賀市城内1－1－59
印刷所　㈱古川総合印刷
佐賀市鍋島町大字森田881番地